

---

# 万剣の王 / 幻想の王

j.s

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

万剣の王／幻想の王

### 【Nコード】

N5780J

### 【作者名】

j.s

### 【あらすじ】

何て事のないクロスオーバー。

文章の変わり目と季節の変わり目は同じだと思っ（って、ララーが言ってた）

一つの世界が正義の味方を追放した・・・己の理想を無くした彼は、新たな世界で幻想を紡ぐ。

## 世界の意思（前書き）

何よりも先に、はじめまして。

いきなりですが、どっかのエミヤさんが記憶喪失でユオリとかユオカリンとかコオリン（？）とかを育てたら面白いと・・・思ったんです。

色々と無理が出るけど、そこはまあオリジナル設定ぶっこんで捏造すれば良いんじゃないかね？とか・・・ナメた事を思っちゃったんです。この小説を簡潔に言い表すならば、色々な作者様方々から受けた影響の汚物（間違えた意味で）

## 世界の意思

/

世界は彼の者を笑う

とある世界のとある剣・・・

己が理想に敗れ、世界の奴隷へと成り下がる。

世界は彼の者を利用する

守護者とは則ち掃除家。

剣はかつての輝きを失い、輝きと共に自身の存在の意味をも失ってしまふ。

その時、世界は彼の者を完全に手にした

だが、世界の意思は彼の者を見誤っていた・・・

彼の者は世界の意思を裏切り、再び己が存在の意味と理想を胸に掲げる。

そして、彼の者は世界の望まぬ在り方へと形を変えた

錬鉄の英霊・エミヤ

朽ちた剣が再び輝きを取り戻し、世界の意図から外れた時・・・世界は彼の者を己の世界から追放する。

その存在を歪め・・・

その技術を忘却させ・・・

その生涯に唯一存在した意味、『己の理想（正義の味方）』を記憶から抹消したのであった・・・



結末から始まりへ / 始まりは旅立ちへ(前書き)

改訂中

結末から始まりへ / 始まりは旅立ちへ

/

戦いの果てに・・・

霞む景色の中、懐かしい者達と未熟な自分自身。

ここに来て、運命の一幕は一時の終わりを迎えようとしていた・・・

皮肉なものだな・・・



過去の未熟な自分と戦い、そして敗れ、己を誇示していた信念までも粉々に碎かれ、私はやっと気付かされた・・・この身に掲げていた理想は、何も間違つてはいなかったのだと。

例えどんなに、どんなにも救いの無い結果だろうとも、自らに絶望する必要はなかった・・・

そう、どんなにも己の無力さに嘆いたとしても、立ち止まらなければ次があつた。

救えた何かが、その先には確かにあつた。

例えその理想が叶わなくとも、その意思をただひたすらに貫くだけで、それだけで・・・それは確かに尊かつたのだ。

．  
．  
．  
思い返してみれば、全てが報われなかつた訳ではなかつたな．

ああ・・・だからまた、この身に理想を掲げようではないか。

彼の者・・・英霊・エミヤは消え行くその最中にて、己の目指した理想（正義）を、再びこの胸に刻み付けるのであつた・・・

そして、彼の者は己の世界から追放された

苦しい・・・

まるで、水の中に居るかのような息苦しさを。

何も聞こえない・・・

何も見えない・・・

一切の光と音を奪われ、五感が何も捉えることが出来ない。

ここはいつたい、何処なのだ？

何も見えず、何も聞こえない空間。

この無音の空間で、私の意識が覚醒してからずいぶんと時間が経過した。

唯一分かるのは覚醒と共に感じる息苦しさと共に襲った、突然と胸を深くえぐる喪失感だけ。

この胸の痛みは、いったい何なのだろうか？

何度となく自身の心に問い掛け続けたのだが、私の心はなんの欠落も告げることはなかった。

そして何よりも・・・

私はいつたい・・・誰なのだ・・・

私は己の名を、己の存在すらも思い出せずにいる。

自分が誰であって、いったい何者なのか・・・

分からない・・・私は、僕は、俺は、自分が分からない・・・

暗闇に抱かれ、己に関する記憶は何も存在せず、ただただ自問自答を繰り返したその時、

ッ！！？

まるで、暗闇を引き裂くかのように、まばゆい光が射した。

その光に当てられると同時に、何かに体を引き寄せられる感覚。

その感覚に抵抗する術もなく、なすがままに引かれて行く。

これ・・・は？

光に近づくにつれ、思考に霧が掛かる。

だが、一切の苦痛は感じず、次第に唯一感じていた息苦しさから解放されていく・・・

温かい・・・

程なくして、体を温かさが包む。

それはまるで、母胎に包まれながら誕生を待つ赤子のような感覚。

なんと温かく、そして優しい光なのだろうか・・・

光に近付くにつれて朦朧とする意識の中、私は願った。

それは意図しない、無意識での願望。

この身の根源たる望み。

いつの日か私も、大切な何かにもこの温もりを・・・

瞬間、全てを覆う程の強い輝きに包まれ、私の朦朧とする意識はス  
イツチを切った

/ 始まりは旅立ちへ

「・・・ここは？」

謎の光に導かれ、一瞬のフラッシュバックと共に瞼を開けると、見渡す限りの樹木。

空には葉のカーテンが敷かれ、葉と葉の微かな隙間から陽光が射し、この身を照らしていた。

ここは、森・・・なのか？

「いったい何が起こったのだ？何故こんな場所に・・・」

私が発した声に答えるかのように鳴り響く鳥達の囀りと、柔らかく吹く風にサワサワと揺れる木々の演奏を耳に捉えながら、鈍く痛む頭を手で押さえた。

何故、私はここにいるのだろうか？

そして、私は・・・自分はいったい誰なのか？

「グウッ！？」

疑問を抱いた瞬間、頭に激痛が走った。

「クソ、頭が・・・い、いったい何だと言うのだ・・・」

ズキズキと痛む頭を手の平で強く押さえながら、私はゆっくりと立ち上がる。

思い出せ・・・何でもいい、とにかく思い出せ・・・

しばらくのあいだ、自分に関するありとあらゆる記憶を探すが、自らに關係する事柄は何も見つからない。

一般的な常識や歴史、社会等の構造はいくらでも思い出せる。

だが、自分に関する事柄は何一つとして思い出すことが出来ない。

より深く記憶を探ろうとしてみるが、考えれば考えるほどに頭の奥深くからはズキズキと痛みが増して、思考に集中することが叶わない。

「グウ・・・こ、このような場所に投げ出された身で、簡単にわかるはずもないか・・・」

現在この身に起きていることが何なのか、それは追いつき追いつき探るとしよう。

何よりも今は、これからどうするか・・・

さて、どうするか？

「ふむ……」

腕を組み辺りを見回せば、見渡す限りに生い茂る木々達。

木と木の合間を射抜くかの如く目を細め遠くまで見据えるが……  
見えてくるの景色は何一つも変わらず、木と木と木。

「……まさに森だな」

そう、これ以上はないほどに森の中。

他に言いようのないほどに、ここは森林であった。

「さて……」

考えるまでもなく、方針が決まる。

本来ならこの様な状況下では、遭難や野生動物（主立って熊等の  
猛獣）との遭遇による二次災害の危険性があるために、下手に動か  
ないことが鉄則ではあるのだが、

「この場に居ても、危険性はなんら変わらん……それに、待つ  
ていたところで状況が良くなる訳でも無い……」

現状は既に遭遇に限り無く近いもの……いや、もはやこれは全く



も以って同じ様なもの。

その上に、救助の期待も出来なければ、自分が誰かもわからない身元不明者。

つまり私には、当てなどはなからないのだ。

ならば簡単な話した。

現状を打開する術を探すしかあるまい。

「さて、この選択が吉と出るか、または凶と出るか……」

「結局は迷ってしまったか……いや、最初から迷っていたのだから」

ら、この場合は藪蛇だな」

木々の生い茂る中を歩き続け、あれからずいぶんと時間が経った。歩き出してからそれなりに進んだつもりなのだが、今だ景色には何の変化も訪れない。

「いや、むしろ悪化したと言っべきか・・・」

最初よりも視界を覆う木々が高く生い茂り、伸びたい放題に伸びた弦や細枝がそこらじゅうの樹木や背の高い草等に、その身を何十にも巻き付けていた。

いかに相手が草木とは言えど、一歩足を運ぶ度に進行を妨げられては、歩行に掛かる労力が倍増どころではすまない。

もしすると、出口を探すつもりで歩いて来たが意図するところとは逆に、より最奥の方に進んでしまったのかもしれない。

ああ、これは困ったな・・・

「何故かな・・・記憶が無い上に遭遇までしている現状。それなのに冷静な自分の精神の具合が、激しく物悲しいではないか・・・」

そんな心境とは裏腹に、自分でも不思議なほど口調は軽かった。

修羅場を多く潜った身なのか、はたまは理不尽に対する耐久性が付いているのかは良くわからないが、私の心は静かな水面の様に揺らぎがない。

まあ、単純に私の神経が図太いのかもしいないが、普通なら簡単に陥る状況ではないだろう。

「何故かな・・・不思議と後者なのだと、絶対の自信を持って言える気がするの・・・」

記憶が無いにもかかわらず、何故かこれにかんしては絶対の自信が持てた。

「ああ、本当に不思議だ・・・そして何よりも不思議なのが、実は否定する気になれないことに不思議を感じられない自分自身だったりするのだから、たまたまなく不思議だ・・・ハア」

意図せずにこぼれた溜め息と同時に、目尻が少しだけ湿った気がした。

「さて、感傷に浸るのはここまでにしておこうか・・・」

私は振り返り、並ぶ木々の中へ視線を向けた。

ソコには何かが潜んでいる・・・

あまりにも漠然としているが、私の直感がそこには何かがあると言っている。

根拠など微塵も無い、ただの直感だが・・・

ッ!!!?

突然、木々の隙間から影が飛び出した。

その影は恐ろしい程の速さで、私に向かって一直線に突進して来る。

「チィッ」

舌打ちとを打つのとほぼ同時に、私の体は無意識に横へと跳び退いた。

次の瞬間・・・

ドゴオオオオーーーーーッ!!!

周辺の木々を揺らしながら鳴り響く、大きな破壊音。

「なんともまあ・・・」

先程まで私が立って居た場所は土埃を昇らせ、微かに覗く地面からは黒ずんだ焦げ跡が見えた。

まるでそう、手榴弾でも投げ込まれた後の様な有様になっていた。

もし、後少しでも跳び退くのが遅れていたとしたら・・・

「・・・考えたただけだと言うのに、生きた心地がしないな」

正直に言えば、血の気が引いた。

つと、

「ほお・・・今の爆破から逃れたと言う事は、君はアレが見えたのか？いや、大したもんだ・・・」

変わらず昇り続ける土埃の奥から、氷の様な冷さを感じさせる女の声が発せられた。

「君は、誰だね？」

首筋にうすら寒いもの感じながら問う。

この時、私の体は自然と重心を前方に置き、臨戦体制をとっていた。

「オツと、そんなに警戒しないでくれないか？」

土埃を抜けて姿を現した者は、全身を緑のローブ覆い隠し告げる。

「先ずは友好的に・・・私はこの再生の森に住む一族の者でね。ち  
よつと、暇潰しがてらに散歩をしいたのだよ、健康に良いからね・・・」

「ほう・・・」

再生の森・・・始めて耳にした名だ。

「それではこの私に、こつも阿保らしいまでにド派手な演出をして  
出迎えてくれるほどの用事でも？もしくは、ただの暇潰しであんな  
物を吹っ掛けてたのかね？」

「イヤイヤ、誤解だよそれは。コレは私ではないから間違ないよー  
にッ」

タップリの皮肉を込めるが、両手をヒラヒラさせながら返された。

「では、改めて聞くが・・・君は誰で何者だね？」

ほんの数秒程度の短い会話であったが、強く思った事がある。

私はきつと、コイツが苦手だ・・・

「そんなに睨まないでくれないかね？」

「クツ・・・すまない。この人相は生れつきでね・・・」

言って、私は唇の端を上げる。

「・・・分かったよ、それで納得しとこう・・・」

「多少の間があつたが、腑に落ちなかつたかね？」

「そーでもないさ。人相は人それぞれな物だからね・・・だから君が生れつき悪人面でも仕方のない話しさ。それも一重に、神から授かつた運命だからねえ」

「・・・」

随分と酷い言われ様だ。

「さて・・・では、いい加減本題に戻るとして・・・君の名は？」

何故だかドツと疲れを感じた私は、臨戦体制をとりて頭をかいた。

「やっと信じてくれたのかい・・・」

ヤレヤレと肩を揺らし、被ったローブを勢いよく脱ぎ捨て、

「私はこの素晴らしい緑の自然が生み出した、もう筆舌にしがたい程に素晴らしい美人のエルフだッ！！ここ再生の森の看板娘と思っ  
てくれても・・・私はいっこうに構わないよ？」

そう、得意げにのたまったのだった・・・

「・・・成る程な、そうきたか。いやはや、大した者だな君は」

そう言いながらも私は「おい君、結局名乗ってないではないかね？」  
と、胸のうちでばやいた。

「ふう・・・取り敢えず、なんでさ・・・」

物凄く、頭痛がした・・・





結末から始まりへ / 始まりは旅立ちへ（後書き）

多分、改訂中。

旅立ちの前日記の名入(前書き)

改訂の第二(完了?)

## 旅立ちの前に己の名へ

/

高々と宙に舞う深緑色のロープ。

頭上を覆う木々の隙間から射す僅かな日にの下に晒されたのは、雪の様な白い肌と、腰元まで下された長い銀の髪。

そして何よりも特徴的なのは、銀の美しい髪から覗かせる長く尖った両の耳。

その容姿たるは、例えようがないほどにエルフ。

・・・そう、確かにエルフだ。

間違い様など皆無なほど、完璧にエルフだ。

だが、その容姿から繰り出される発言が、かなりいただけない。

これは私の個人的な考えだが、エルフとはもっとうとう……知的かつクールでなくてはならないと思う。

まあ、こちらの勝手な理想像ではあるが、この場にて私のエルフに対する幻想は物の見事にブロークンしたとだけ告げておこう。

「オツと、失礼……あ、あー……コホンツ。いやいや、肝心の自己紹介がまだだったね？」

啞然とする私に気付いたのか、咳ばらいを一つ。

「私の名は『エンリ』。再生を司るこの森が生み出した最初の娘であり、森に住まう命在者達全ての長。つまりは、皆の女神様だと思ってくれても……私はいっとうに構わないよ？」

「……承知した、森の長よ」

当然だが、最後のは聞かなかったことにする。

「……普通にエンリで構わないよ。むしろ名前で呼んでくれないか？」

「ふむ……改めて承知した、エンリ。ああ、この響きは実に……」

はて、この続きは何だったのだろうか？」

知らず知らずに口から出た台詞だったが、途中から思考に雲が掛かり続かなかった。

「・・・今のさつき知り合った仲なのに、私に聞かれてもわかる訳が無いじゃないか？」

「む、それはすまない・・・今の発言は忘れてくれ」

確かに彼女の言うとおりである。

「して・・・君は先程、森に住まう命在者全ての長と言っていたが・・・」

そこまで喋ると、彼女は私の言葉を遮った。

「ん？ああ・・・それならちようどいいね。せっかく知り合ったのだから、君に私の家族達を紹介しようじゃないか」

言うや彼女は私に背を向け、「着いて来たまえ」と続けると歩き出した。

「まあ、少し待ちたまえ・・・」

そんな彼女の背中に私は待ったを掛けた。

「・・・何だい？」

私の言葉に彼女は立ち止まり、不思議そう表情で振り返った。

「一つ、当たり前前のことを聞くが・・・」

その不思議そうな表情に向け、私は改めて問う。

「エンリ・・・君はそんな簡単に、私を信用して良いのかね？」

「何でだい？」

「オイオイ・・・君はおかしいと思わないのかね？」

「おかしいって・・・いったい何に？」

「いや、何にではなくてだな・・・こんな言い方は失礼だと思うが、君は紛いなりにも長と呼ばれる立場なのだろ？」

「ああ、そうだよ・・・そんで、それがどうか？」

「・・・」

エンリよ・・・その、『アンタなに可笑しなこと言ってるのよ?』  
みたいな表情は止めてくれ・・・

「・・・いや、なんでもないさ・・・だから気にしないでくれ」

「了解。じゃあ、改めて行こうか・・・名無し君」

「まあ、取り敢えず待つんだエンリ・・・君に一つ聞くが、その名無し君とやらはいつたいたいなんだ?」

まさかとは思うが、名無し君とは私のことだろうか?

だとしたら、それは聞き捨てならんぞ?

「なんだって・・・君の名前だよ、名無し君?」

「だから待て。いつの間に私の名は、名無し君とやらになったのだ?」

「んー・・・それは今さっきだね。ちなみに命名は私だよ?」

少し考える仕種をした後、エンリは良い笑顔で答えた。



「……」

は、話せば話すほど頭が痛くなるではないか……

「……だ、だから待て。良いかねエンリよ？私が聞いているのは、いつ名付けただとか誰が命名したか？などの話しでは断じてない」

「そうは言われてもねえ……人に名前を聞いておきながら自分の名は名乗らない君には、面倒臭いから名無し君呼ばわりで十分だと私は思うけどねえ？」

言うやエンリは、皮肉めいた笑い顔を私に向ける。

「むッ……そ、それはすまなかった。どうやら名前に関しては、完全に私の落ち度のような。誠に申し訳ないと、謝罪しよう」

私は謝罪の念を込めながら、エンリに小さく頭を下げた。

思い返しみれば、エンリの言うとおりであった。

名を尋ねる時は、先ずは自分から。

それは、どの世界であつても共通の礼儀だった。

「ちゃんと分かってくれたなら、私は気にしないさ……それで、

君の名は？」

「……」

「……どうかしたのかい？もしかして君には、何か名乗れない理由でもあるのかい？」

「……いや、そんな訳ではないのだがな……」

先程まで完全に忘れていたが、何を隠そう私は記憶喪失。

クソッ、こんな重大なことを忘れていたとは……

もはや自分の脳天気さ加減に、言葉も出ないぞ。

「……エンリよ、少し私の話しを……いや、事情を聞いてくれないかね？」

「……それくらい、別にかまわないよ」

私の雰囲気ですわったのか、エンリの表情は真剣な物へと変わる。

「……すまない」

私はエンリに小さく頭を下げ、目覚めてから現在に至るまでの経路の一つ一つを、自身で確かめるかのようにゆっくりと話し出した・

私と彼女は向かい合い、木で造られた椅子に腰を下ろし、体を休ませている。

目の前に座るエンリは足を組み、背中を反って伸びをする。

出たところが強調され、彼女体付きが意思せずとめ視界に入り込む。

スラリと伸びる長い足は無駄な肉を感じさせずに引き締まりつつも、同時に女性的な柔らかさを感じさせる。

少し視線を上げれば目に映る、括れた腰周りと大き過ぎずも決して小さくのない豊かな胸元は、女性として一つの完成系であることを体言していた。

「何処を見てるんだい？」

「……別に私は、やましい気持ちで見ている訳では断じてないぞ？だから気を悪くしないでくれると、非常に嬉しい」

少し前……

自分の事情について一通りの説明を終わらせ、改めて先程の落ち度を謝罪した私に、エンリは笑顔で返してくれた。

「気にしなくていいさ……それに、そんな事情があるなら尚更だよ。今後どうしたら良いかどうすべきかで悩むくらいなら、私に着いて来るといい」

それに対し、私がどういう意味かを聞くと、エンリは簡単に説明をしてくれた。

「私には特別な能力チカラが在ってね・・・そいつを君に使おうと思うんだよ・・・ああ、別に危ないことはないさ。危険性とか後遺症もないよ?」

説明を聞くところ、どうやら彼女には不思議な能力が存在するらしい。

しかし、エンリの能力で解決出来るのなら、わざわざ移動するのは何故だ?

何か特別な場所、または準備なり儀式が必要となるのだろうか?

つと、

「ふふふ・・・違う違う。こんな場所もなんだし、ついでに私の家でのんびり休まないか?」

私の思考が読めたのかは知らないが、柔らかく笑いながら言った。

・・・そして、今に到る

「へえ・・・じゃあ君は、私の体を眺めて何を考えてたんだい?」

「ふむ・・・それはだね、君が自分のことを美人だ女神だのと呼んでたからな・・・」

「間違ってるかい？」

「いやいや、そんなことはないさ・・・君はとても美しい。これは間違えようがなく事実だ」

私は笑いながら言う。

「それはどうも」

私の返事に気を良くしたのか、エンリは優雅に笑って返した。

その仕種からして、一枚の絵画のようだ。

一目見れば誰もが思う。

整った目鼻立ちと、強い輝きを持った金色の瞳。

その上、先程私が確認したとおりのスタイルまでも所持して、誰が美しくないなどと言えようか？

・・・だが、だからこそ不思議に思う。

物事とは優劣を付けるに当たり、先ずは他者と比較することから始まる。

故に彼女・・・エンリの家に着いた時は、心底驚いたものだ。

何故なら・・・

「ところで、私の家族とは仲良くなれたかい？」

「はて、どうだろうか・・・生憎と、私は動物の言語は理解出来ないのですね」

言って私は、膝に乗せた一匹の子犬を撫でた。

私達の足元にはリスやウサギなどの小動物が群がり、エンリの到っては肩に小鳥達が止まって羽を休めている。

そう・・・

そこには、私と彼女を除いた人と呼べる存在は皆無であった。

・

「ハハハッ、それに関しては私も同意するよ。その子達の言語は、いくら頑張ろうとも分からず仕舞いさ・・・」

「ほう・・・それはなかなか興味深い。ならばエンリ、いったい君はこの子達と、どうやって仲良くなったんだね？」

普通に考えてしまえば、動物達に懐かれた程度の話だろう。

だが私は、不思議と聞かずにはいられなかった。

「ああ、それはねえ・・・」

私の疑問にエンリは目を閉じると、手を掲げ私に向ける。

「それはね？こつやったのさ・・・」

ツ！！？

・・・全ては一瞬で、その一瞬は全て・・・

私の内部へとナニカが入り込み、そのナニカは私の全てを理解する。

世界へと生まれ落ちる意味。

そして、生を終える意味。

それらは全て、私を私へとナス、ありとあらゆるモノへと繋がっていく・・・



「・・・今のは？」

私の体に不快な感覚は一切ない。

唯一存在するのは、ただただナニ力を受け入れたと言う結果だけ。

それだけが、ただ感じられる・・・

「・・・」

返事はなく、エンリは目を閉じたまま俯く。

「エンリ・・・どうかしたのかね？」

「いや・・・どうもしないさ。そう、どうもね・・・」

エンリは震える声で繰り返し、顔をゆっくりと上げると、

「だから君は・・・『エミヤ』は何も気にする必要はないよ・・・」

そう応えながら、儂くも微笑んだ。

気付けば閉じていた目は開かれていた。

そして、そこからは涙の滴が一つこぼれた・・・

/  
2

英霊・エミヤ・・・

叶うはずも無い理想を追い求め、ただひたすらに戦い続ける生涯はあまりにも痛々しかった・・・

正義の味方など、所詮は都合の良い物語りの中にだけ意味が存在する、迷惑な幻想に過ぎない。

そんなことは誰もが承知で、分かりきったものだった。

それなのに・・・

それなのに何故、彼は自らのいつさいを省みず駆け抜けることが出来たのか。

何故、彼は正義の味方なんて在りもしない幻想を、命をとってまで目指したのか。

「エンリ・・・何故、君は泣いているのだ？」

エミヤの声は私の心に波紋を呼ぶ。

「すまない・・・君の過去を見てね。そのおかげか、涙が出てしまったみたいだよ」

正直な話しをすれば、彼の魂から呼び出した情報に泣いてしまった訳ではなく、世界が彼に課した罰に対してなのだが。

「まあ、結果として君の名が分かったから、覗いといて良かったね・・・」

「では・・・私の名が分かったのか？」

「そうさ、君の名は『エミヤ』。ちなみに、私が持つ特別な能力は『知る理解するまたは解明する』ことさ」

私はエミヤの顔を見据えて聞いた、

「それで君は、エミヤは何が知りたい？」

エミヤ・・・君は己の過去を知ったら、再び理想を求めるとかい？

いや、そんなことは聞くまでもない話した。

アノ理想は、エミヤにとって全てなのだから・・・

だけど、それではあまりにも満たされない。

だからエミヤ・・・

私が君に、全てを話すことはないだろう。

「それで、エミヤは何が知りたい？」

「ふむ、何がか・・・取り敢えず確認をするが、私の名はエミヤで良いのだね？」

「ああ、それは間違いないよ」

「エミヤ、か・・・そうか、私の名はエミヤと言うのか・・・不思議だな、この名を口にした途端、私の胸に懐かしい物が感じられる・・・」

心の中に存在する大切なナニカが、少しだけ満たされた。

「それは良かった。それじゃあエミヤ・・・次は何が知りたい？」

エンリは私の言葉に嬉しそうに微笑むと、再び問う。

「次か・・・それではエンリ、私の失った記憶に付いて教えてくれないか？」

名を知っただけで得たアノ心を満たされる喜びは、まだまだほんの些細なものだろう。

これから全てを思い出した時、私の心はどれ程の喜びを感じられるか・・・

「失った記憶ね・・・それは具体的にどんなことだい？」

「・・・具体的にとは？」

「そうだねえ・・・」

私の問いに考えながら、真っ直ぐに見詰めてくるエンリの瞳。

その瞳に映る本当の色が何なのかは、私には知るよしも無い。

「これからの君に出来ることと、これからの世界でエミヤが属する種に付いてかな？君には悪いけど、他については答えるつもりはな

いから」

「答えるつもりがない、だと・・・それは何故なのだ？」

「それは簡単な話しさ、エミヤ。君はね、再生されたんだよ・・・その昔、どこかの遠くの世界でエミヤと呼ばれた存在からね」

「・・・なんだと？」

「あ、あー・・・わかりやすく言つと、今のここに居るエミヤは複製、いや複製版をうたつてるヤツみたいな物かな？」

「・・・」

そんな馬鹿な・・・

「待てエンリ・・・それはつまり、この私がかつての私から再生された、全く別の同一人物だとも言いたいのかね？」

まるで悲劇の物語に多様される、世界と戦う主人公のようではないか。

こいつは些か、冗談が過ぎる。

「まっ、そんな感じのもんだね。エミヤにはまだ説明してなかったけれど・・・ここ再生の森を簡単に紹介すると、魂の再製工事みたいな場所なんだよ」

そう言つて、エンリは私から目を逸らす。

「魂には本来終わりが存在しない。何故なら輪廻なんて物が存在するぐらいだからね・・・でもね？それでも世界から拒絶された、廃棄された魂はどうなると思う？」

「・・・」

「エミヤの記憶にあるだろうけど、人はいらなくなつた物をどうする？リサイクルショップとかでやってるじゃないか・・・もう必要のない物はね、ソレを必要とする別の誰かに売られるんだよ」

吐き捨てるように・・・まるで呪詛を詠むかのように、エンリは私に突き付ける。

「馬鹿な・・・そんな馬鹿な話しは聞いたことがないぞ、エンリ・・・」

私が世界に不要だと？

私が世界から売られたと言つのか？

「そんな、そんな馬鹿な話しが存在するのかッ！！私は今もここに



存在して・・・人として生きているのだぞッ!？」

「・・・うん。それについても一つ教えとくよ・・・エミヤはもう人間と呼ばれる生き物じゃないよ」

「・・・まさか、本気で言ってるのか、エンリ?」

私はエンリを睨みつけた。

「私がもう人ではないだと? 笑えない冗談は止してくれエンリ・・・もし、もし君が言うように人ではないのなら、いったい・・・いったいこの身は何者だと言うのだッ!?!?」

「・・・本当さ。君はもう人じゃあない・・・今になっては、ただの化け物の類さ」

「クッ・・・まさか、この私が化け物だと? 人の形をした手足が付いているのか? 人の言葉を喋り、先程まで君と談笑していたこの身が、もはや化け物だとッ!?!」

純粹な生命でもなければ人でもなく、もはやただ化け物だと言うのかッ!?!!

「そつだよエミヤ・・・例えば姿形が人に類似していようと、君は人間とは違う存在なのさ・・・でもね、エミヤ?」

言ってエンリは、ヤレヤレと首を振った。

「逆に聞くけど、何故君は自分が人間だと言えるんだい？」

「……どう言う意味だ？」

「簡単な質問だよ……エミヤ、君はつい先程まで、自分の名前にかんする記憶すらなかったんだよ？なのに君は、いったい何を根拠にして自分が人だと言えるんだい？」

エンリは興味深そうに私に目をむける。

「……」

私はただ黙り、何も答えられなかった。

「ふむ……どうやら君は、自分がここまで感情的になっている理由すらも分からないみたいだね……」

「……ああ、そのとおりだよエンリ……君の言うとおり、私は自分分からない……」

私は自らの頭を抱え、まるで救いを求めるかのように、弱々しく言葉を吐いた。

「もし、もしもそれが事実なら・・・私はどうしたら良いのだ？教えてくれ、エンリ。私は何故このような・・・いびつに歪んだ存在になってしまったのか・・・」

「・・・着いて来るといい」

エンリは腰を上げ、私に背をむけた。

「エミヤ、君には再びチャンスが与えられた・・・それを生かすも殺すも君次第。だが、君は選ばなくてはいけない・・・」

「選ぶ・・・だと？」

「そつ、選ぶんだよ」

「まいったな・・・君はこんな、こんな紛い物の私に向かって、いったい何を選べと言うのだ？」

そもそも出来損ないの複製品な私に、何かを選ぶことなど許されるのだろうか？

「なあーに、ただ簡単な選択をするだけだよ・・・まあ、着いて来ればすぐに分かるさ」

「・・・承知した」

・  
・  
そこに存在したのは、どこまでも澄み切った小さな池だった。

わずかに吹く風に揺られ、いつさいの濁りもない水面に小さな波紋をが生まれる。

見ているだけで吸い込まれそうな透明感。

その水面に映る自分の姿を眺めながら、私は選択を迫られた。

「さて、簡単な質問をするけど・・・エミヤ、君は歪んだ自分を受け入れて、人の世界で生きたいかい？それとも、ここで静かに暮らすかい？」

そこでいったん区切り、エンリは口の端を吊り上げた。

「ちなみに・・・ここで暮らすを選択した場合は、私達は将来的に再生の森でアダムとイブになるかも知れない・・・まあ、私はそれでもいっこうに構わないよ？」

「エンリ、その落ちは流石に引つ張りすぎだ・・・」

「別にいいじゃないか・・・ブーブーツ!!」

「・・・」

「ハイハイ、わかってますよ・・・話を戻すけど、エミヤはどうしたい？」

「私は・・・こんな私にも何か、出来ることがあるのだろうか・・・」

「自分の名しか分からず、自分が理解出来ない私に・・・いまさら現世に生を受けて、意味があるのだろうか？」

「ほうほう……いやぁーまったく、悩み多き年頃だねえ君は」

エンリは興味深そうに何度も頷いた。

「さて、エミヤ……君が何を出来るのかだけど、そんなのはね？  
そこらじゅうに、腐るほどあるのさ。だから立ち止まって悩むだけ  
無駄。全身全霊を以って、前進あるのみだよ」

「……そうか」

「むっ？どうやらその顔は信じてないねえ……」

エンリはため息を吐き、私に笑って言う。

「命無き物にしる命在る者にしろ、そこに存在するだけでなにかが  
変化する。これは全てに対して言えることだよ？」

「ふっ……君が言うと思議と出来そうな気がするよ……あり  
がとう、エンリ」

そうだった、かつて誰かが言っていた気がする……

「出来るか出来ないかはどうだっていいもので、結局はやるかやら  
ないかだったな……そうか、考えてみれば簡単な話だったのだ  
な……」

そう、至極単純な話だった。

記憶から抹消された過去の一瞬も・・・

今この一瞬すらも・・・

そして、遙か先の未来で迎えた一瞬ですらも、そう・・・

その全てが、等しく私なのだ・・・

「決まったのかい？」

「ああ・・・」

私はエンリに微笑む。

「答えはとうに得ていた。私は行くよ・・・この心が望むままに」

「そうかい、ならコレは選別がわりだよ・・・」

ツ！！？

自分の唇にしっとりとしながらも柔らかく、ひんやりとしながらもほのかに温かいナニカが触れた感触。

同時に、私の中にいくつもの記憶が蘇る・・・

投影魔術、強化魔術、戦闘経験、そして何故か虎・・・

・・・と、虎だとツ！？

「・・・な、何をするんだね君はツ！！？」

「ん？何って・・・強いて言うなら、ナニかな？」

「クツ・・・この卑猥な廃れエルフめ・・・」

私の中で再び、エルフに対する幻想がブロークンした。

つと、

「まあ、何はともあれさっさと行くといいよ。そら、思い立ったらなんたらキック」



言うやエンリは私を蹴飛ばす。

「ぬおおッ!?」

その結果、私は背中から池にダイブした・・・

「さてエミヤ、これで君とはお別れだ・・・それから、さつき君に私のチツスで返した記憶だが、アレは君の全てではない。だから探すんだ・・・想像し、理解し、幻想を創り上げるんだ・・・」

冷たい水の中へゆっくりと沈でいく体・・・

遠ざかるエンリを見上げながら、私はハッキリと思った。

エルフに対する幻想が『三度ブローケンしたッ!!』と・・・

「あ、ちなみにあのチツスは私の初チツスだから、未来永劫大切にしてくれよ?それから、もしかしたらいつか何処かで再会するかもしれない・・・だからその時まで操立してくれても、私はいつこうに構わないからね?」

知ったことかッ！！！

名は新たな幻想へ / 幻想は新たな誓いへ（前書き）

合体ッ！！（フュージョン。ハアアアアッ！！）

名は新たな幻想へ / 幻想は新たな誓いへ

/

「・・・」

どこまでも澄み切った青空が、視界いっぱい広がった・・・

耳に響く風を切る音と、肌を感じる空気を摩擦する抵抗。

まるで鳥になった気分だった・・・

そう、私は空を飛んでいるのだ・・・

・・・ハッ？

「飛んでる・・・だと？」

果てのなき大空を、私は自由に飛んでるだと？

「ふっ・・・こいつはまいったな」

初めて出来た、初めて飛べた。

これは何ともまあ、喜ばしい限りではないか・・・

テエツ!!!?

「な、なんでさッ!？」

胸の中で感想を読んでる場合ではなかった。

ついでに言えば、この身は飛んでなどいなかった。

この身はただ、落下してるだけだった・・・

そう、格好付けてなッ!!

「だから私よ、呑気に考えてる場合ではないぞッ!!」

自らを叱咤しながら、私は落下方向に視線を送る。

「・・・随分とまあ、空高くからの再スタートを切らせてくれたよ  
うだな・・・」

強化せずに見た限り、地面の様子は窺えない。

このまま落下するとただでは済まないだろうことは、言うまでもなく  
明らかだ。

「チツ、こんな目に遭わせてくれて、恨むぞエンリッ!」

言うや全力で視力に強化を施した。

ん・・・アレは？

強化された視力が真っ先に捉えたのは、

「やれやれ・・・まさか来て早々、争い事に巻き込まれるとはな・・・  
この身は全く以って運がない」

遙か先

流れる雲の隙間から見えて来た光景は、異形の者達が群れを為して  
暴れ回り、大地を血の色で紅く染めた地獄絵図であった・・・

妙齡の女性が一人、胸に少女を抱えながら走る

これはきつと何かの間違いだ。

だからきつと、これは質の悪い夢だ。

だからお願い・・・

お願いだから、夢なら早く覚めて・・・

「ハア、ハア、ハア・・・ゴホッ」

酸素が足りず、心臓の鼓動が馬鹿みたい速い。

「ハア・・・ハア・・・ツ!？」

自分の村が妖怪の群れに襲われ、裸足のまま荒れた大地を逃げ出した。

その結果、鉛のように重くなった足はついに膝を折った・・・

ドサッ!!

「クウウ、・・・」

腕に抱いた少女を傷付けぬように肩から倒れ込み、口から苦痛をこぼした。

「ハア、ハア・・・に、逃げなきゃ・・・この娘だけでも、この娘だけは・・・」

胸に抱えた少女と女のあいだに、血の繋がりはなかった。

そろそろ三年になるか、女が山から娘を拾ってきたことが、二人が親子としての始まりを迎えた時だった。

まるで自らが腹を痛め産んだかのように、女は娘を愛し、かいがい



しく世話を焼いた。

そして娘もまた、そんな女を誠の母のように思い、良く懐いていた。子を身籠れず悩む女を知る者達は皆、仲睦まじく暮らす二人を見ては口を揃えてこう言った・・・

子を身籠る事が出来ぬ不憫な女に、山の神が授けた『奇跡』だと・・・

「・・・立たなきや」

とうの昔に限界を迎え悲痛な叫びを挙げる体は、既に満身創痕だった。

だが、それでも関係などはないと、自らがボロボロの体に鞭を打って立ち上がる。

逃げなくては・・・

胸に抱えられ、静かな寝息を立てる愛し子を、私の娘を逃がさなくては。

「・・・待っててね、紫。もう少しで・・・ッ!？」

が、運命とは何処までも非情な物である……

突然背後から感じる悪寒。

女は震える体で振り返り、ゴクリと息を呑んだ。

「ヒヤハ……人間、随分と遠くまで逃げた。でも残念、私達にはわかる……」

嘲笑い、長い髪で顔を隠した赤い女は告げる。

「その妖怪から感じる妖気はとても大きい……それじゃあ駄目。居場所をバラして回ってるのと同じ」

「……違つ」

震える声で、だが力強く人間の女は返した。

「何が違つ？まさか、何年も一緒に暮らしてたのに、気付いてなかったのか？」

「違つツ！！この娘は……たった一人だけの、私の大事な娘ツ！！」

この娘が妖怪？

そんなことはとうの昔に、初めて会った時から承知のこと。

だけど、一緒に暮らし一緒に時間を過ごした二人は、時間を分かつことで親子になったのだ。

そこに妖怪と人間などと言う隔たりはなく、唯一存在するのはただ一つ絆だけ。

この娘は私の宝だと言う想いだけ。

掛け替えのない、大事な家族だと言う事実だけ。

人間の女は叫ぶ。

例え実母ではなくとも、母親としての意地を。

胸に抱いた娘の幸を、ただそれだけを強く願う。

「だからこの娘は渡さないッ！！大事な我が子を・・・お前ら何かには、指一本触れさせないッ！！！」

その叫びは何処までも眩しかった。

この娘を救えるのならば何もいらぬ。

その願いが聞き入れられるなら、女は己の命すらもまるで価値の無いゴミの様に、喜んで代価に差し出すだろう。

その姿勢は何処までも眩しく、それと同時に何処までも母であった。  
・  
・

「人間、それは無理なお願いだ・・・生まれてまだ間もないのにそれだけの妖気を出すなんて、将来的にはとてつもない大妖怪になる。それこそ私程度は手も足も出ないような化け物に・・・」

妖怪は笑いながら走り出す。

「でも残念・・・その大き過ぎる妖気は、生まれたばかりの未熟な小娘には扱いきれない。だが今は、私達低級妖怪にとってただの御馳走ッ!!」

今まで食した人間共とは到底比べることも出来ぬだろう、極上の餌に向かつて。

殺られるッ!!

人間の女は絶望に染められる。

自分に迫り来る妖怪に抵抗する術はなく、また逃げることも今となつては不可能だろう。

「ヒッ」

唯一女が出来たことと言えば、胸で眠る我が子を守る様に強く抱くことと、在りもしない救いを願うことだけ。

助けて・・・

その瞬間、

ドオンッ！！

女の頭上から爆発音が鳴り響く。

ドオンッ！！

ドオンッ！！

ドオンッ！！

それも連続くし、次第に近付いて来る。

何かと頭上を見上げれば、

「……人？」

爆音鳴り響く空からは、一人の人間が落下して来る。

それも不思議な事に、自らの体を左右に揺らすかの様に何かを投合し、その何かを爆発させている。

「アレは……ッ!!?」

空を不思議そうに見上げる女は、胸に感じた突然の衝撃に息を詰まらせた。

「気になるのはわかるが、よそ見は駄目だったな……人間」

すぐ正面から妖怪の声。

「……え？」

妖怪を言に自分の胸元を見ると、そこには娘の体を避けて突き刺さる妖怪の腕。

「……そんな……」

眩くと共に、女の体は後ろへと倒れた。

「心の臓を突かれてまで、その化け物を手放さないとは……良くやったよ人間」

倒れた人間に冷笑を向け、妖怪は手を伸ばす。

「その努力を評価して、親子仲良く食らってあげよう」

「……カハッ」

心の臓を突かれた女は、薄れる意識の中で空に目を向ける。

「お願い……この娘を、この娘を助けてあげて……おね、が……い……」

口から出たのは最後の言葉だろう。

既にその瞳は色を持たず、開けた口と瞼はもはや閉じることはない。

「ヒヤハ……そんな願い、いつたい誰が聞き入れるんだか……これだから人間は面白い。そして、実に馬鹿らしい」

今だ続く爆発音。

一瞬だけ空に視線を向けて理解した。

駄目だ、アレは助からない。

例え助かったとしても、アレは自分と同じ人外の者。

目の前の人間を助ける道理など存在せず。

「・・・ヒヤハ、ヒヤハハハハッ！！」

今だ眠る餌に手を伸ばしながら、妖怪は笑い続けた。

妖怪は人間を悪戯に殺すのではない。

殺すと言うことは、結果として餌として食らうこと。

つとは言え、妖怪の世界も弱肉強食で・・・これは非常に稀ではあるが、時には共食いをすることもある。

それらの事柄は、世界に記された自然の理として、確かに存在した。

故に現状もその断りから見れば、別段おかしな話ではない。

ともすれば、非力な人間がこぼした最後の願いなど、神ですら聞き入れる事はないのだろう・・・

だが、神が聞き入れ無くとも彼は違った



「残念ながらも、化け物よ……」

「な、あッ!？」

突然背中に走った衝撃に、妖怪の体が地面と水平に飛んだ。

「その考えは失敗だったな……彼女の願い、聞き入れた者がここに居るッ!！」

所々が焦げた紅い外套を纏い、妖怪を蹴り飛ばした者が声を荒げ宣言した。

「さて化け物よ、今度は貴様が最後を迎える番だが……死に逝く準備は十分か？」

この時、世界は新たな幻想を刻み始めた

／幻想は新たな誓いへ

間に合わなかった

落下の速度を軽減させる為、対角線上に己の投影品を爆破させる最中に、女性は化け物の腕に胸を貫かれてしまったのだ・・・

憎かった・・・

女性を殺した化け物が。

間に合わなかった己が、憎くて仕方がなかった・・・

だが・・・

嘲笑う化け物に殺意を向けようとした私の目は、今まさに息絶える  
だろう女性の瞳を捉え歓喜した。

我が子の幸福。

ただそれだけを願う彼女の瞳には、死への恐れもなければ、化け物  
への恨みも存在しなかった。

我が子の為を想い、我が子の為に生きたのだろう。

それが・・・いや、それ以外に、彼女の生きる意味は存在しなかつ  
たのだろう。

だからこそ、私は思う。

その瞳の輝きは、何よりも美しい光だと・・・

ならば彼女に対し、私が出る事は一つしか存在せず。

その願い、この身が必ず聞き届けよう・・・

人間の女に限りなく近い姿を持つ妖怪は、体に感じる痛みを忘れてただ呆然とするしか出来なかった。

自分を蹴り飛ばし、死刑の宣告を叩き付けた存在に・・・後少しでこの手に捕えただろう極上の餌を背中にし、こちらに鷹のような鋭い双眼を向ける紅い騎士の姿に対して、全てを忘れて呆然とするしか出来なかった・・・

死に逝く準備は十分か？

その言葉と共に膨らんだ殺気に、目の前に居る存在がどれ程の力を有しているのが理解出来た。

アレと戦っては、絶対に駄目だ・・・

アレは少なくとも、自分達を統べるお方と同等の力を持つて・・・

アレと私が戦えば、まず間違いなく自分は殺されるだろう。

・・・いや、それ以前に戦うという選択肢すら存在し得ない。

「・・・な、何故お前は邪魔をする・・・」

蛇に睨まれた蛙のような心境の中、震える口元から綴られたのはその言葉だった。

「何故私が邪魔をするか、か・・・それを問われると、私としては答えようがないのだが・・・」

紅い騎士は視線を動かさずに続ける。

「ならば逆に問おう、私が貴様の邪魔をするのは可笑しなことかね？」

「あ、当たり前だッ!!」

紅い騎士の問い掛けに、叫ばずにはいられない。

「お前は私達と同じ、同種、同族だぞッ!!なのに・・・なのに何故そんな人間の願いを聞き届けるッ!？」

「ふむ・・・ああ、成る程な。貴様が言いたかったのはそのことか・・・」

紅い騎士は妖怪の叫びに笑い、顎に手をやり溜め息をこぼした。

「やれやれ・・・どうやらこの身は、完全に魑魅魍魎の類らしいな。はてさて、いったいどうしたモノか・・・」

「何を言っているツ!? お前は同族を前にして、非力でつまらない人間の味方をするのかツ!!!?」

「クツ・・・貴様はなかなか、思考が幼稚な様だな・・・」

鼻を鳴らした紅い騎士は、まるで癩癩を起こした子供を見るかの様に笑う。

「・・・何だとツ!?!」

先程まで怯え震えていた妖怪は、紅い騎士の言葉に己が感じた力の差も、抱いていた恐れすらも忘れて叫んだ。

「私が幼稚だと・・・ふ、ふざけるなツ!?!」

「オヤオヤ・・・顔が真っ赤なようだが、何かお気に召さなかったかね?」

「グツ、人間の味方風情が・・・舐めるなよツ!?!」

怒り心頭の妖怪は、叫ぶと共に駆け出す。

そこに先程までの恐怖はなく、理性を忘れてただ激情のまま突進した。

殺してやるッ!!

殺してやるッ・・・殺してやる、殺してやる、殺してやる

ッ!!!!

「ふっ・・・普通はこんな安い挑発に乗るかね？」

紅い騎士は構えも取らずにただ笑う。

「化け物よ・・・最後に良いことを教えよう。だから貴様は・・・幼稚だと言っんのだよッ!!」

そして、言葉と同時に地を蹴った・・・

ッ!!!?

擦れ違い様に、閃光の如く走る銀の一線。

それが、この妖怪にとって全ての終わりだった・・・

「・・・まあ、次がない者に教えを与えたところで、もはや活かすことも出来ないのだがな・・・」

「・・・ば、馬鹿な・・・いつたい何処からそんなモノを・・・」

己の体を切り裂いたモノに目を向け、愚かな妖怪は地に付した・・・

「何処から、か・・・さてね。教えたくとも、既に事切れていては意味もないであろう?」

もはや息をすることのない妖怪には目もくれず、紅い騎士は横たわる親子の元へ向かった・・・



「・・・すまない。本当は貴女も助けたかった・・・だが、情けない話しだが間に合うことが出来なかった・・・」

私は今だ我が子を大事そうに抱きしめながら、色のない瞳で空を仰ぐ女性に頭を下げ黙祷を捧げる。

落下の最中、焦る心で感じ取った物は美しさだった。

一人の人間が我が子を想い、その身を以って救いを求めたのだろう。

緊迫した状況にあってもなお、目を奪われる程にソレは美しかった。  
・  
・

「・・・」

数秒か、または数分なのか・・・下げ続けた頭を上げ、言葉を詠む。

「尊き母よ、私はここに誓おう・・・」

言葉を紡ぎながら、女性の死に顔へと体を屈ませる。

これはきっと、私が貴女に出来る唯一の供養だろう・・・

「貴女が最後の瞬間、己の命にすら目を向けず願った我が子の幸せ・  
・あの眩しいまでに純粹でいて尊い貴女の想いは、この身が受け  
継ぐ。必ずや成就させよう・・だから尊き母よ、安心して眠る  
が良い」

誓いの言葉を言い終えた私は女性の顔に手を置き、開かれたままの  
瞼と口を労る様に閉じた。

この時、風に晒され永遠の眠に付いた女性の顔が、静かに笑  
った気がした・・・

「・・・さて、いつまでもここに居る訳にもいかんな・・・」

女性の胸に抱かれた少女を抱き寄せ、私は再び一礼をしてから立ち  
上がった。

「本当は野ざらしにはしたくなかったのだが、状況を見る限りそう  
も言ってもらえんか・・再度言わせてもらおう。尊き母よ、本当に  
すまない」

こちらへと近づく数多の気配を背中に、私は少女を胸に抱いて駆け  
出した。

小さくなる女性の亡きがらを背に、新たな誓いをこの胸に・・・

命の灯を終わらせた女は、幸せな夢を観る

温かく笑う自分と、無邪気に笑う娘。

そして、そんな二人を見守るように立つ存在・・・名も知らぬ一人の紅い騎士が微笑んでいた。

今やその場所に自分は居ることは出来ない・・・だが、それでも女に後悔はなかった・・・

女が瞳に捉えた光景・・・そこには、幸せそうな娘の笑顔が在った。

無邪気に笑い、時には泣く娘の姿が在った。

そして、泣き出した娘に手を差し延べる存在が居た。

娘に優しく微笑む、紅い騎士の姿が在った。

私が居なくとも、彼が居てくれる。

母が居なくとも、彼が父として共に在ってくれる。

・  
・  
女は二人の姿に幸せそうに微笑み、夢の中から姿を消したのだった。

ありがとうございます様

それが、最後の言葉

名は新たな幻想へ

/

幻想は新たな誓いへ（後書き）

わっしょいッ!!

書いは母子の名へ / 母子の名は指切りへ (回鍋肉) (前書き)

多分きつとメイビー。

誓いは母子の名へ

／ 母子の名は指切りへ（回鍋肉）

／ 誓いは母子の名へ

夜空には月が浮かぶ。

人は寝静まり、異形の者達が活動的になる時間。

そんな闇夜の下、今だ眠り続ける少女を抱えた紅い騎士は、薄暗い森の中を駆け抜ける。

木々の間をかい潜るように、人間離れた速さで森の中を走る紅い騎士……

ずいぶん前から感じる気配は、今だその差を開けることなく迫り、一秒とすら彼の騎士に休む時間を与えない。

追う者と追われる者。

その二つの者は、今だ互いの関係に終わりを見せなかった……



「ふう・・・これだけ走れば、だいぶ引き離れたと思うんだが・・・」

走りながら背後の森に、その奥に広がる闇の中へ意識を向ける。

「・・・」

風が吹いて枝が揺れ、葉が落ちて風に舞う。

その全てに音は鳴り、その全てが気配を乱す。

ならその先、自らの鼓動すらも追いやった先へ・・・

聴覚を越え、音の遙か先へと感覚を研ぎ澄ませ・・・

「・・・チツ、いい加減しつこい奴らだ・・・」

私は眩きと共に、大地を蹴り付け跳躍する。

「このままでは、流石に終わりが見えぬか・・・仕方がない」

枝から枝へと飛び移りながら、視力に強化を施した。

腕に抱く少女を気遣いながら、一際背の高い木を探し目を懲らす。

「あの枝がちょうど良いか・・・」

視界に捉えたのは、この身にとっては良質な足場。

さて・・・

今この身がやるべき事は決まったが、問題はソレを実行出来るか否か・・・

「いや・・・そんなことなど、この身には関係のないことだ。私はただ行うのみ・・・ただそれだけ」

自身の戦闘の記録、そこから引き出した光景をこの場にて再現するまで。

程なくして目的の枝に辿り着いた私は、枝に片膝を立て少女を落とさぬように腹に抱く。

そして、自分だけに許された言葉を唱える・・・

「  
トレース・オン  
投影開始」

言葉を詠むと瞬時に、手の中には記憶に在る通りの黒い弓が現れる・

・

「ふっ……では、参るうか」

その確かな手触りは、この場で新たな確信と自信に変わる。

こちらに向かう気配は四つ。

互いのあいだに開いた距離は、記憶に残る私の最大補足可能距離に  
は今だ至らぬ。

だが……それも今となつては過去の話し。

「……皮肉なものだな」

喜ぶべきか嘆くべきか、人外の身になつて視力が上がるとはな……

「だが、今だけは運命に感謝を……」

矢を投影し弓を引き、そして放つ。

ギイイ……ヒュンツ……

一瞬の溜めをも置かずして放たれた矢は、一寸の狂いもなく対象の  
一つを射抜いた。

「・・・」

残滅の対象が一つ途絶えた事を確認。

私は確かな手応えに小さく頷き、再び無言で弓を射る。

ヒュンッ・・・

再び命中。

また弓を引いては、無言で矢を放つ。

ヒュンッ・・・

三度命中。

そして最後の矢を投影し、やはり無言で放った。

ヒュンッ・・・

「・・・残滅完了」

静かに眩き、投影で生み出した弓を消す。

「さて、早くこの娘を安全な場所まで……ん？」

再び走り出そうと、少女の体を抱き寄せようとした私は、

「……」

いつのまに目を覚ましたのか、不思議そうにこちらを見上げる少女と見つめ合う形で固まった。

「……」

「……」

しばらくのあいだ、静寂が二人を包んだ……

「……お、おはよう」

私は無言に負け、無難に挨拶をする。

「……」

少女は瞬きをしながら周り私の顔を見て、

「……オジサンは誰？」

その瞬間、空気が凍り付いた……

「……」

……い、今なんと？

「……すまない。もう一度言ってくれないか？」

「……オジサンのお名前は？」

「……」

オ、オジサン、だと……な？

「どうかしたの、オジサン？」

「……いや、何でもない。それよりも……」

私は少女に笑みを浮かべながら聞く。

「す、すまないが……一つ尋ねてもいいかね？」

・・・だが、その笑みは若干引き攣っていた。

「いいよ、オジサン」

「オ、オジ・・・」

グウツ・・・お、落ち着け、落ち着くんだエミヤツ！・・・！

「で、では聞くが・・・そのオジサンとはいったい・・・誰のことだね？」

「?????」

少女はキョトンとした表情で、

「オジサンはオジサン」

私に指を向けた。

「・・・」

心の中に、『ピュー・・・』と木枯らしが吹いた。

「・・・そうか、そうかそうか・・・オジサンか・・・」

そうか、私はオジサンか・・・

「それで、オジサンは誰？」

「ふっ……オジサンは、オジサンはなあ……エミヤと言っただよ」

「エミヤ？」

少女は可愛らしく首を傾げると、

「エミヤ……おじちゃん？」

可愛らし笑顔で私に止めを刺した。

「そうさ……私は、エミヤはおじちゃんなのさ……」

心は硝子……そんな言葉が記憶からサルベージされた。

「……そ、それで、君の名は何と言っただね？」

ヒビ割れた心で精一杯の笑顔を浮かべ、私は少女に尋ねる。

「私は紫。八雲紫」



「八雲紫か・・・了解だ、紫。ああ、この名の響きは実に君に合っている」

この少女の為だけに生まれた良い名だと、私は心の底から思った。

きつと、あの女性が伝えきれぬ程の愛を、願いを込めて付けたのだらう・・・

「ありがとうおじちゃん。紫もこの名前大好きなんだ。だって・・・祭お母さんが付けてくれたんだもんッ」

「・・・ああ」

祭・・・そうか、あの女性は名は祭と言うのか・・・

八雲祭、尊ぶべき母よ・・・私は貴女の名を、生涯忘れる事はないだらう。

「紫・・・きつとこの名は、君だけの為に存在するのだらう。だから誇りにするんだ・・・君の母が、君を愛した証だからな」

「・・・誇り？」

言葉が少々難しかったのか、少女・・・紫は首を傾げた。

「クッ、自慢にするといいのだよ。自慢の名だと思えばな・・・」

「なら大丈夫だよおじちゃん。だってもう、自慢の名前だもんッ」  
そう言つて、紫は眩しく笑う。

その笑顔は同時に、あの女性の・・・八雲祭の笑顔に感じられた。

ああ、そうか・・・コレが、コレがアノ尊さなのだな・・・

良かった・・・この命を救えて、本当に良かった・・・

「ああ、そうだな・・・こんなこと、君には言つまでもなかったの  
だな・・・」

この時、私の心は言い表せぬほどの喜びで満たされた。

闇を纏う異形の群れ、月明かりの下で一人の男が群れを率いる。

目指すは更なる力へ。

我が身を至らす極上の餌の下へ。

護る者と奪う者。

衝突の時は近い

／母子の名は指切りへ

理想をなくした英雄

世界から追放された紛い物の騎士は、新たな理想と憧れを求めて旅立ち、始まりの地で八雲紫と運命の出会いを果たす。

最愛の母を亡くした少女

世界から異端の力を授かりし者。

この少女もまた、別れの地で紛い物の騎士と運命の出会いを果たした。

闇夜の語らいは始まりの合図

互いを名乗り合った少女と騎士は、新たな幻想を真の始まりへと誘う。

「……紫、君はこれからどうしたい？」

闇に当てられてもなお眩しいばかりの笑顔を作る少女……八雲紫に、私は優しく問い掛ける。

「……なんでそんなの聞くの？」

不思議そうにこちらを見上げる紫。

「色々とおつてな……しばらくのあいだ、私が君を預かることになったのだよ」

その無垢な表情に、私の胸は鈍く痛む。

母親のことを語るべきか語らぬべきか・・・僅かに悩んだが、見た限り紫の年齢はまだ10にも満たないであろう。

下手にその事実を伝えてしまい、紫の幼い心に一生物のトラウマを植え付けるようなことになったとすれば、私は己の軽率さを許せぬだろう。

ならばしばらくのあいだ、この娘が現実を受け止められる様になるまでは、このことは伏せるしかない。

きつと、今はそれがこの娘を傷付けずに済む、最善の方法だと思う。

ハッ、聞こえがいいだけに、自分でも嫌になる考えだ。

下手な御託ばかり並べ、自分を正当化だ・・・仕方がないのだろうが、果たしてその言葉だけで片付けられるのであろうか？

だがしかし、私には他に出来ることがないのもまた事実か・・・

「そんな訳で、だ・・・君の意見を聞きたいと思ってな？」

「・・・え？」

私が言うと、紫の瞳に見る見る涙が溜まって行く。

「お母さんと……もう会えないの？」

「むッ……まあ待て、紫。預かると言っても、先程伝えたようにしばらくのあいだ……ちなみに説明するが、しばらくとはずっとや一生とは同じ意味ではないので、何も心配はする必要はない」

私は言いながら、涙ぐむ紫の頭に手を置き、

「だから泣くんじゃない……泣いてしまったら、せつかくの可愛い顔が台なしだぞ？」

そう諭しながらも、紫の頭を優しく撫でた。

その肌触りはまるで、上質な絹糸を元に作られた金糸のようだ。

そして美しい金の髪は月明かりに照らされ、眩しくも淡い輝を燈す。

「じゃあ……またお母さんに会えるの？」

頭を撫でられ、紫はくすぐったそうに頬を緩める。

「ああ……時が来ればまた会える。だからその時は、目一杯甘えると良い……」

……心が酷く痛い。

自ら理解した上に吐いた嘘なのに、心が酷く痛む。

「これは何と云う偽善か。」

「これは何と云う自己満足か。」

「……おじちゃん……泣いてるの?」

「なに、心配は無用だよ……」

べつやら顔に出てたようだ。

迂闊……心配させまいとした私が、その相手に心配されては世話がない。

「でも……おじちゃん、今も泣きそうな顔してるよ?」

「……そう見えるかね?」

「うんっ!ー!眉毛がこうで、お口もおーんな感じでグニユってなってるよ?」

元気良く言って、紫は自分の顔を指でいじくり回した。

「・・・」

まるで何処その若造が、冬木の虎に竹刀で殴り飛ばされた時の顔だ  
(要約すると酷い顔だ)

それと同時に、何故か私の胃に痛みが走る。

「クツ・・・そんなにか・・・確かに『グニユ』っと言う擬音が似  
合いそうな顔だなそれは。だが紫よ、気持ちは伝わったが・・・そ  
いつは流石に心外だぞ？」

それよりも紫、可愛い顔が酷いことになってるぞ？

まるで惨状の後だぞ？

「そうかな？ちょっと面白い顔なんだけどなあ・・・」

「・・・そ、そうか」

泣きそうでグニユってるのが面白いのか？

私にはよく分からんな・・・

「いいかね紫？大人とは人前で泣けない生き物なのだよ・・・それ  
に私は男だ、君のような愛らしい少女を前にメソメソ泣くなどと・・・  
・そんなみっともないことは出来ぬよ」



童心に理解が追い付かず、無難な説明をする。

だがこの時、エンリの前でウジウジとして居た自分を思い出し、無性に情けなくなった。

「ふうーん・・・大人の男の人って、難しいんだね？」

「・・・まあいい」

言って私は、紫の体を再び胸に抱いた。

「さて・・・それで、お姫様？しばらくのあいだは私と共に居るとになるが、お姫様は私と一緒に来てくれるかね？」

「・・・うん」

紫は私の胸の中で小さく頷く。

「おじちゃん、優しそうだから一緒に行く・・・お母さんにまた会えるまで、紫良い子にする」

「そうか・・・ならばこの身は君だけの剣となろう。あらゆる厄災からからその身を守る盾となろう・・・この誓い、受け取ってくれるかね？」

「……うん。良くわかんないけど、紫はおじちゃんを信じるよ」

「クッ……ありがとう紫。ならば我が身の幻想は君の為に紡ごう」

ああ、絶対に守り抜こう。

「ここに契約は交わされた。その笑顔を必ずや、私が守護する……約束だ」

今はただ、それだけが我が存在の意味。

「……約束？じゃあ、指切りだね……ハイッ」

言って紫は指を差し出す。

「ふむ……指切りかね？」

「うん、指切りッ」

「承知した。では約束を……」

私は紫の指に己の指を絡めた。

紫は笑顔で歌う。

今になって考えれば些かアレな内容の歌だが、こんなのも悪くはない。

誓いは何も、交わし合うだけの物ではないのだ。

己に一度突き立てたのなら、その形はどうで在れ私はそれを果たすまで。

この指に触れた温もりを、ただ護るだけ。

「・・・指切った」

紫の歌が終わり、小指と小指が離れる。

「ああ、指切った・・・」

私は自由になつた手を強く握り締めた。

「さて紫・・・しばらくは当てのない旅になるが、これからは互いに助け合つて行こうか・・・では先ず、この森を抜けるとするか」

言うや、私は枝から飛び降り駆け出した。

・・・後で泣きべその紫に、『怖かった』とえらく怒られた。

どうやら、私は考えが至らなかつたらしい。

「どうやら、この身はまだまだ未熟のようだ・・・精進あるのみだな」

今だにむくれる紫をあやしなから、シミジミと零した。

／指切りは回鍋肉へ（閑話的な何か）

「・・・」

木漏れ日の下、私は火を焚きながら瞑想する。

瞼は閉じられ、思考は記憶の中を泳ぐ。

自身が求める結果と、それに至るまでに要する手順と工程。

それらを模索しながら、それを行う時をただただ待つ・・・

想像せよ・・・

暫くすると、焼べられた薪がパチパチと音を発てて弾け、火の粉を飛ばす。

「・・・そろそろ頃合いか」

私は瞼を開き行動を開始する。

「トレース・オン  
投影開始」

想像するのだ・・・

自身が求めるソレを、この場に再現させるのだ。

「・・・」

想像は形をなし、手の中にソレは生まれた。

「では、戦いを始めようか・・・さて諸君らよ、今からその身を切り刻まれる用意は十分かね？」

私は振り返り、背後に並べられた食材（野草と猪）達に言い放った。

右手に包丁、左手には中華鍋。

そして、足元には木を切り出して作ったまな板。

ここに武装は完了した。

そんな朝のーコマ。

あの後・・・

夜の森を抜けた私は、視界いっぱい広がった壮大な山並みに頭を抱えた。

「またか、またなのか……」

ここに来るまで既に、野を越え山を越え谷を越えついでに森をも越えて来た。

この世界は私に、次は運河でも越えろと言いたいのだろうか？

「……クソツ、これは何処の鉄人レースかね……」

再び眠りの世界へと落ちた紫を抱きなおし、半ば自棄になりながら走り出した。

そうなのだ、いくら愚痴を言おうとも、進むしか方法はなかった。

ああ……

いったいいつになったら、私達は人里に辿り着けるのだろうか……

その後も私は走り続けた。

再び山を越え、また再び野を越えた。

軽い鬱になり掛けた頃、空が次第に光を帯び始め次の間にか日が昇り、私達は暖かな陽射しに照らされた。

朝だ・・・朝がやって来た。

山並みの間から後光に照らされたかのように顔を出した太陽が、世界に朝を告げていた。

「良い眺めだ・・・」

そして私は黄昏れる。

「なあ、エンリよ・・・君からすれば、私達は遭難してるようにでも見えるのだろうか・・・」

雲の向こう側からは、エンリの嫌な笑みが垣間見えた気がした。

つと、

「・・・おじちゃん大丈夫？」

いつの間にか起きたのか、腕に抱いた紫が私を心配そうに見上げていた。

「・・・起きてたのかね」

「うん、さっき起きた」



「そうか、おはよう紫・・・それとすまないな、今だ私達は自然の檻に捕われたままだよ・・・」

どんなに目を凝らそうと、私の目には山々が見えるだけ・・・視力に強化を施すまでもなく。

「まったく・・・ここら一帯の原住民達は、いったい何処にいるのだろうか・・・これだけ私が走り回ったと言うのに、そのあいだに一度たりとも人間を姿を確認出来ぬとは・・・」

それ以前に、腑に落ちない点が多数存在する。

現にこの景色だ。

山々を縁取るように木々が茂り、地下からは水が沸いて小川が流れている。

これだけの自然だ、野生の動物や川魚がどれだけ生息しているのだろうか、私には想像も付かない。

そして、その全てが人間の生活には欠かせぬ恵だ。

これほどの資源が溢れ返っていると言うのに、あまりにも人の手が入ってさ過ぎる。

必然的に疑問が浮かぶ。

これはもしや、近く人は住んで居ないのではないか？

「ふーん・・・それはしょーがないよ、おじちゃん」

私の眩に対し、紫は両手を広げて言った。

「お母さん前に言ってたもん・・・外に出たら何処に行くにも一ヶ月は山道を行くって」

紫の広げられた指の数も、左右の手で三と十の合わせて三十。

「・・・いや待て紫よ、それは流石に遠すぎるのでは？」

何処に向かうにも山道を行き、片道で最低一月は掛かるだと？

オイオイ、ここはいつの時代なのだね・・・

いや、待てよ・・・そう言えば、この時代を西暦に当てはめるといつ頃になるのだろうか？

私の記憶に在る時代ならば、これだけの自然が手付かずで残ってる場所はなかったはずだ・・・

つまり、人間の歩みから想像するに、未来ではないことは確かだろう。

ならば過去なのか？

それとは別にして、確か私が旅立つ時、エンリは別の世界だと言ったが・・・別の世界？

つまりここは、異世界とも取れる訳か。

だがそうなれば、紫と私の間に何らかの食い違いが生まれるはずだ。はたして私と紫の間に、そんなものは存在しだろうか？

言葉は問題なく話せ、意味や使い道も今の所同じだった。

紫の格好も私の記憶に在る着物に近く、多少だが時代誤差な柄をしてるぐらいだ。

そこから考えるに、過去の説が一番濃厚なのだが・・・ん？

「どうかしたかね、紫？」

思考に没頭する私は、不意に顔を叩かれた。

「・・・紫、さっきから呼んでた・・・なのにおじちゃん、紫を無視した」

ムスツとした顔で言う紫。

「・・・それはすまない、紫。少しばかり考えごとをしていてな・・・  
・どうやら私は君の呼び掛けに気付かぬほど、考えごとに没頭して  
しまったようだ」

「どうやら、私は考え出すと止まらぬようだ。」

「これは気を付けねばいかな。」

「それで、私に何か？」

「ううー・・・お腹空いたあ・・・あう」

「手足を力なくばたつかせ、紫は果てた。」

「成る程な。良く理解した」

「そして今に到る」

「・・・完成だ」

中華鍋を反し、ここに新たな幻想を誕生させる。

「さあ、紫よ・・・これが私の作った自慢の一品、猪と野草の回鍋肉だ。限られた材料、限られた原料で完成させたのだぞ。さあ、味わって食べるがいい・・・間違っても甘く見るなよ？」

私は誇らしげに語りながら、空腹で弛み切った紫に満面の笑みで回鍋肉を差し出した。

久しぶりに握る包丁は、実に素晴らしい。

誓いは母子の名へ / 母子の名は指切りへ(回鍋肉)(後書き)

多分あれだ、格好付け過ぎたんだよ。

回鍋肉は安息へ(オマケ)(前書き)

眠いのじゃあ・・・

## 回鍋肉は安息へ（オマケ）

/

紫と出会い、既に一月が過ぎる。

今だに見えぬ人里を探し数々の山々を越え、幾度もの夜を越え歩き続けた。

しかし、旅路の途中にあった出来事と言えば、紫の空腹を満たす為に狩りをしては私が料理を振る舞ったりなどと、特に筆することは何もなくここまで来ていた。

だが、一ヶ月とは実に早いものだ・・・

過ぎすあいだにはとても長く、思い返した時はとても短く感じる一ヶ月と言う時間を共に過ごし、私達は自然の中で互いを知る。



少しずつであるが、私達は距離が近付けたのだろうか？

言葉にしなくとも、簡単なことなら表情だけで見て取れるようになったと・・・まあ、私の方から見た話しなのだが、多少なりともそうなれたと思う。

これが勘違いではなく本当で、少しは紫を理解出来たのなら幸だと勝手に思っている。

なのだが、決して私達二人のあいだに壁がないと、隔てるものが存在しないと云う訳ではなく、今だ縮まらない距離があるのもまた事実。

紫は森や洞窟の中で眠る度、私の体に抱き着いて来ては母の名を呼んだ。

この時、紫にとって私が母の代わりとして映ってたのなら、それは喜ばしい限りだが・・・それはきつと違うのだろう。

確かに出会った当初よりは懐いてくれてはいるが、いまだに紫は私のことをおじちゃんと呼び、名を呼ぶことは一度としてない。

この身は確かに八雲紫を守護することを誓ったが、その紫からは今だに真の信頼を得てはおらず。

それだけが悲しくもあり、何故か当たり前のようにも思えた。

いやはや、子を守るとはなんとも難しい・・・

っと、

「……おじちゃん、あそこに何か見えるよ？」

今日も変わらず私の胸に抱かれた紫が、前方を指差した。

「む？何かとな……」

紫が指差した先に目を向ける。

「……ああ、どうやらアレは集落のようだな」

人里を目指してから、今日で一月が経った。

ここに到るまで、私達はいくつ野山を越えてきたのだろうか……

「じゃあ、やっとゆっくり出来るね」

「ああ、喜べ紫……これではらくのあいだは、柔らかい布団の上で眠れるぞ……」

私はシミジミと呟いた。

それと同時に、まるで眩しい物を見るかのように目を細めた。

長かった、本当に長かった・・・

いったい何度、何度紫の寝相に悩まされたか分かったものではない。

ある時は鼻っ柱に頭突きを食らい、またある時は鼻の穴に指を突っ込まれ、そのまたある時は踵落としを鼻っ柱に喰らった。

ホンのしばらくのあいだなのだろうが、あの日々から解放されると思うだけで私は感無量だ。

・・・

しかし紫、何故君は私の鼻ばかり狙ったのだね？

「では紫、我等が安息の地へと行くところか・・・」

目尻に温かい湿り気を感じながら、私は紫を強く抱いて歩き出す。

向かう途中、異様に甘い香りが鼻孔を満たす。

私は気になり、立ち止まって辺りを見渡すのだが、何処にも香りの発生源が見付からない。

この香りはいつたい何処から・・・

そのことが腑に落ちず、しばらくのあいだ視線を泳がせた。

「・・・気のせいかな？」

見通せる限りを隈なく探したが、やはりそれらしいものは見当たらない。

気になった私は、視力に強化を施そうと、

「・・・おじちゃん、早く行くんですよ？」

胸に抱いた紫が、私の服を引っ張りながら言う。

「ああ、そうだな・・・」

紫に急かされた私は、頭に湧いた疑問を振り払い、再び歩き出した。

この時、彼は気付けなかった。

地中に潜む妖怪の存在に。

彼は己が抱いた疑問を信じるべきだった。

自分達が足を踏み入れた場所は、敵が狡猾に用意した罠だと。

彼らを落とし入れる為に用意された餌場だと言つことに・・・

ふと浮かんだネタ

もしもこの小説のエミヤが赤い悪魔に召喚され、セイバーがアーチャーの正体を知ってたら・・・

某所 (普通にえみやん宅)

「アーチャー……いえ、シロウ。私は貴方に会いたかった……」  
私と対峙する少女は剣の英霊なのに剣も構えず、笑みを浮かべ私に歩み寄って来る。

互いの距離は歩数にして十ほど、その距離をゆっくりと私に向かって歩む少女……いや、少女の姿をしたサーヴァント。

「あの場所に還り、私は別の願いを持ちました……」  
まるで、至高の喜びを噛み締めてるかの様な微笑みを浮かべ、少女は言葉を続ける。

「もう一度、貴方に会いたいと……」  
近づく毎に少女は瞳を潤ませ、今にも涙を零してしまいそうだ。

少女にとって、その一步一步が至福の音を奏でてるのだろう。

「……」

私はただ黙り、少女の独白を聞くしか出来なかった。

「私が・・・私が自分で選んだ別れだと言うのに、願わずにはいら  
れませんでした・・・」

既に目の前まで来た少女は、私の目を見詰めながら言った。

「また会うことが出来ましたね、シロウ・・・」

「セイバー・・・君は・・・」

私は問わずにはいれない・・・

「・・・すまないが、誰だね君は？」

「・・・え？」

「すまないのだが、私は君のような少女と会った記憶がない。だから多分、何かの間違いではないだろうか？」

「え？な、何を言ってるのですか？私です、貴方のサーヴァントのセイバーですよ？」

困惑する剣の英霊。

「・・・む？いや、君がサーヴァントのセイバーだと言うことは重々承知している」

聞くまでもなく一目瞭然だ。

「ならやはり、貴方は私の知るシロウです」

「だから何故だね？」

「な、何故って・・・貴方は私がセイバーだと言うことを、名乗らずとも知っていたではないですかッ!!」

「・・・いや、一目瞭然なのだが・・・」

「それに、私が貴方を見間違っなど有り得ませんッ!!!!」

「そ、そうかね・・・」

「そうですッ!!!!!!」

ライオンの如く吠えるセイバー。



「……で、ではセイバー……こちらの不手際かも知れないので、君の真名を教えてくださいませんか？」

何処からきたのかは知らんが、その自信の理由を聞きたい。

「何を今さら……アルトリア、私の真名はアルトリア・ペンドラゴンです」

……何だと？

まさか……こんな少女がかのアーサー王と言っのか？

それ以前に、アーサー王は女だったのか？

「どっかしたのですか？」

「いや、どうもしないさ……ただ、一つだけ分かったことがある」

「……それは、つまり……何なんですか？」

セイバーは私に、期待の色を含んだ瞳で聞く。

「ああ……一つだけ分かったのだが……」

私は腕を組み、数回頷いてから言う。

「やはり……君は誰だ？生憎だが、私の記憶に君のような少女は該当しない……」

「……」

「何故なら先ずその髪だ……今のところ私の知り合いに金髪は一人しか居なくてな？」

「ほ、ほう……だ、誰ですかその女は？」

セイバーは肩を震わせる。

「誰でも君には関係なからう？」

金髪とは言わずもがなが紫だが、この少女に言ったところでわかるまい。

「……私には関係ないのですか？」

「いや、君には関係ないだろ？」

むしろ私からすれば、紫とセイバーのあいだに関係が存在したら驚きだ。

っと、

「……そうですね、私には関係ないのですよね……グスッ」  
肩を震わし、セイバーは瞳から涙を零した。

「……」

美しい涙だと、私は思わずにはいられ……いや、待てッ!?

「な、何故に泣くッ!?!?」

多分だが、きつとこんな感じになるのかも知れない……

そしてこの後、赤い悪魔を挟んで色々と地獄を見るに違いない。



回鍋肉は安息へ(オマケ) (後書き)

ね、眠いのじゃああああッ!!!

安息は蜘蛛へ

巻（前書き）

微妙に追加。

/

視界に捉えた集落を目指し、私達は森を抜け開けた原を歩く・・・  
時折吹き付ける濁いた風に吹かれながら、私達は安息を求める旅路  
の途中でそこを見付けた。

私は達成感を噛み締めながら、己の体を落ち着かせる事と、未だ幼  
い紫を休ませる為を目的に足を向ける。

・・・そして、暫く歩くとソレの全貌が明らかになる。

「ふむ・・・どうやら、外張りはちゃんとした集落のようだな・・・」

その外観は、木で出来た策に周囲を囲まれている。

囲いの中に立ち入ると、そこには木造に土壁を施した平屋が並び立ち、大きな水瓶が家の戸の横に配置されていた。

一帯の家々を見渡すと、途切れ途切れに人の声が聞こえるが、賑わいを感じるには些か殺風景な印象を受ける。

そもそも印象云々以前の話しに、この場所から感じられる気配が少なすぎる。

「これは所謂、隠れ里・・・なのか？」

辿り着いた場所は人影もまばらな、あまりにも静かな場所だった。



「・・・静かだな」

随分と殺風景な場所だ。

本来あるだろう光景が、行き交う人々の姿が全く見受けられない。

「やって来たのは良いが・・・」

まるで、過疎化が進んだ地方の農村。

ヒュウ・・・

「・・・」

一陣の風が吹き、私達だけが立った景色の中に砂埃を上げた。

「クツ・・・これでは、な・・・」

私の口からは、皮肉な笑いがこぼれた。

ここまで活気を感じず寂れた状況では、気軽に人を頼る事が出来ない。

「・・・静かだね、おじちゃん？」

胸に抱いた紫が辺りを見渡し、

「それに・・・紫が住んでた所とお家が違っね・・・」

不思議そうに言っつて、首を傾げた。

「・・・違っのかね？」

「うん」

紫は大きく頷く。

「紫がお母さんと住んでたお家は、あんなんじゃないなくて全部木だったもん」

「あんなんとは？」

「ふに?・・・紫のお家では、あんな茶色い土なんか見なかったも

ん

「・・・成る程な」

紫が言ってるのは、間違い無く土壁の事だろう。

「一つ確認するが・・・紫、君は余所の集落に行った事はあるかね？」

「今が初めてだよ？」

「そうか・・・」

少し気になるのだが、生憎とこの世界がいつで何処かの解明が済んでない。

悩むのは決して悪くないが、考えが行き過ぎて疑心暗鬼になるのは馬鹿らしい。

「まあ良い・・・追いつ追いつ考えるとするか」

「どーかしたの？」

「いや、どうもせんよ。それよりも、先ずは人を探すとするかね・・・」

言っちゃ、私は微かに感じる気配の下へと歩みを進めた。

考えるだけならば、いつでも出来るだろうさ・・・

今は何よりも一先ず、何処かで落ち着く事を最優先とする。

後の事はそれからだ。

人気の無い里の中を散策する私は、井戸の中を覗き込む子供を見つけた。

「フム・・・あの子はいったい、何をしてると思っ？」

現在、私の首に跨がり肩車をする紫に聞いた。

「良くわかんない・・・おじちゃんは？」

「残念ながら私にもわからんよ・・・」

上半身が井戸に収まった格好で足をバタ付かせ、今にも落ちてしま  
いそうな有様だ。

見ているこちらとしては、非常に危なっかしい。

「ところで紫・・・私はこの場合、あの子を助けた方が良いのかね  
？」

「わかんない」

「・・・」

まあ、そりゃそうだろうさ・・・

「仕方ない・・・」

いつまでも眺めてる訳にも行かず、私は井戸から足だけを覗かせる  
異物へと成り下がった少年に話し掛ける。

「その少年、君は井戸を覗いて何をしてるのだね？それと・・・  
そろそろ落ちやしないかね？」

つと、

「うわぁッ!?!?」

少年は私の声に驚き、頭から井戸の中へと垂直に落下した。

なにいつ!?!?

「言ってるそばから落ちるかねッ!?!?」

これは私が悪いのか?

「我に触れぬ(ノリ・メ・タンゲレ)」

急遽マグダラの聖骸布を投影、井戸に落ちた少年を捕縛に掛かる。

投影された聖骸布は瞬間に落ち行く少年の体に巻き付き、そのまま私の腕まで引き上げた。

「大事無いかね?」

私は掴まえた少年の顔を覗き込み、聞いた。

「・・・」

少年は放心した顔で私を眺めると、次に紫へと視線を向け硬直した。

「……」

私の首に跨がる紫は、自分を見つめながら硬直する少年の顔を不思議そうに眺めると、

「……大丈夫？」

そう言っつて笑顔を浮かべた。

「……えッ!? あ、うん……だ、大丈夫だよ。大丈夫だ、よ……」

少年は紫の言葉にあたふたと手を振り、何回も頷いてみせた。

何故だろう……不思議な事に空気が甘酸っぱい。

「あの……ぼ、僕は平田。き、君は？」

そう言った少年の顔は、真っ赤に染まっていた。

紫と少年の瞳から感じられる……いや、少年の視線だけに感じられる甘酸っぱい香。

それと何故だか、無性に背中を搔きたくなる感覚。

・・・まさか、これが若さなのか？

一切の光が届かない、薄暗い場所。



そこで、大きなナニカが蠢いていた。

何処かへと伸びる二本の糸を引きながら、ナニカは闇の中で蠢いていた。

安息は蜘蛛へ

壱（後書き）

いやー眠い。

安息は蜘蛛へ 式 参 泗（前書き）

多分改訂済み

安息は蜘蛛へ 式 参 泗

／其の式

「私は紫。八雲紫」

少年の名乗りに笑顔で応たえる紫は、

「それでこの人がおじちゃん」

次に私の頭をポンポンと叩きながら、楽しそうに言った。

「・・・」

オイ待て紫・・・おじちゃんはさすがに酷いのではないかね？

「・・・少年、私の名はエミヤだ。おじちゃんでもいっこうに構わんが、名が『エミヤ』だと言うことは決して忘れぬように」

「そっか、紫ちゃんて言うんだ・・・よ、よろしくね紫ちゃんッ」

「うん、よろしくねッ」

「ふっ・・・まあ、別にいいさ」

そんな雰囲気だと言うことは、薄々気付いていたさ。

それに、私は立派な大人だ。

子供を相手にして、ムキになるのは大人気ない。

だから大人らしく、ちゃんと流すさ・・・

私はそう、自分に言い聞かせることにした・・・

「横から失礼するが、少年・・・少々君に聞きたいことがあるのだが、聞いてもらって構わないかね？」

少しだけ己を宥めてから、気を取り直して問い掛ける。

「いいよおじちゃん・・・それよりも、僕の名前は平田だ。頼むから忘れんなよ？」

「・・・承知した」

かなり納得の行かない部分があったが、気にしないことにする。

「では平田、一つ尋ねるが構わないかね？」

「オウツ」

「では聞くが、ここはずいぶんと静かな場所なのだな・・・」

私は辺り一面を見回して、少年・・・平田に目を向ける。

「家の並びや規模などから考えるに、本来はもっと多くの人々が住んでると思うのだが・・・住民は皆、何処に居るのだね？」

「・・・知らない」

間を置いて返した返事と共に、平田はプイッと顔を反らす。

「ふむ・・・では、君の両親は今、何処に居るのだね？」

「・・・母ちゃん達なら、今は長の所に居るよ」

「そうか・・・ならちょうど良い。私達を長の所まで案内してくれないか？」

「別にいいけど・・・なんでさ？」

応えながら、平田は訝しいげな顔をした。

「いやなに、私達は流れ着いた身でな？だからこの長に挨拶をしたいと、そう思ってるのだが・・・駄目だろうか？」

「別に駄目じゃないけどさあ・・・」

平田は言葉を濁しながら、さりげなく紫に目を向ける。

「クツ・・・なら私が話しをしてるあいだ、紫の相手をしてくれな  
いかね？」

分かりやす過ぎる挙動に、思わず苦笑がこぼれた。

ふむ・・・どうやら平田は、紫とお近づきになりたい様子。

先程からチラチラと紫に目をやり、紫が気付いて目を合わせると、  
サッと視線を反らす平田。

いやはや、これはなかなか微笑ましい光景だ。

「・・・い、いいの？」

「私は別に構わんよ。むしろこちらからお願いたいぐらいだ・・・紫も構わんだろ？」

実際のところ、紫は暇を持てあますだろうしな。

ならこれは折角の機会だ、この微笑ましすぎる少年に、わずかばかりのチャンスを与えようではないか。

だが、

「・・・イジメない？」

先程とは打って変わり、紫は怯えた目で平田へと視線を向けた。

「い、イジメる訳ないよッ!？」

平田は首を左右に振りながら言う。

「ぼ、僕は昔っから女の子には優しくしろって、母ちゃんから言われてるんだッ!！」

「・・・本当？」



「ほ、本当だよッ!!」

怯えながら言う紫の言葉に、平田は拳をギュッと握り力説した。

「まあ紫、私が言ってるのはほんの少しのあいだけだ。それにこの少年は、君の嫌がる行為はしないだろう・・・いや、むしろ喜んで欲しのだろ?」

あまりの微笑ましさに、私はからかうように平田へと振る。

「うッ、そ、それは・・・」

「む、違うのかね?」

「ち、違くない・・・違くないよ」

言うや平田は恥ずかしそうに俯いた。

「クククッ・・・では平田よ、紫の相手は任せたぞ?」

「オ、オウッ!!」

笑いながら言う私に、平田は大きな声で応えた。

「おじちゃん……」

「なに、大丈夫だ紫……」

不安そうに私の髪を引っ張る紫に、私は若干の痛みを感じながら言う。

「この少年は心根の優しい子だ、それに私もすぐに戻るつもりである。だから君は、何も心配する必要はない……そんな訳だから紫よ、髪を引っ張るのを止めてくれんかね？」

「うううう……」

紫はさらに強く私の髪を引っ張り、泣きベソをかいた。

「……」

これは大変だ、このままでは私の髪が抜けてしまう。

「……ま、まあ今はこんな感じだが、紫のことをよろしく頼む」

「……お、おう」

気付くと平田は、紫の反応にすっかり肩を落としていた。

少し哀れだ・・・

少年よ・・・男は打たれ強くなくては、異性と上手くやっっては行けないぞ？

何故かは知らんが、君の気持ちは良く分かる。

不思議と大変良く分かるのだが、そんなすぐに諦めては駄目だ・・・きっと、男とは打たれ強くなくては駄目なのだ。

「まあ、がんばるのだ」

まるで懐かしい光景でも見るかのように思いながら、私は平田の肩を優しく叩いた。

平田に先導されながら、人気のない家並みを私達は歩く。

今だに紫はぶすりとむくれ、私の髪を引っ張り続けているが、もはや気にしないことにした。

「平田、紫は人見知りをしてるだけだ。だからあまり気にするな」

私は未だ肩を落とす平田に言い、空に目をむける。

「それにしても、今日は天気が良い・・・」

こんな日は普通、子供達が走り回ってると思うのだが、子供達は何処に行ったのだろうか？

つと、

「・・・皆どっか行っちゃった」

平田は立ち止まり、まるで私の思考を読んだかのように小さく呟いた。

「昔は一緒に遊んだりしたんだ・・・でも、去年の夏からだんだん遊ばなくなっただ・・・」

「遊ばなくなつたとは・・・子供達に何かあつたのかね？」

「知らないよ・・・ただ、皆居なくなつちやつたんだってさ・・・母ちゃんが言つてた」

寂しそうに呟き、平田は再び歩き出す。

「子供だけじゃないんだよ？隣のおばちゃんも向かいのじいちゃんも皆・・・皆どこか行つちやつたんだ。今じゃ僕の親と数人の年寄りしか居ないよ」

「・・・そうか」

私は何も言えず、ただそう返す。

なんとも腑に落ちない話した。

居なくなつたで片付けるには、不信な点があまりにも多すぎる。

平田の話しを聞くに、何処かへ移住したと言つ訳ではないだろう。

ならいつたい、住民達は何処へ行つたのか・・・

「着いたよッ」

歩きながらも考えに没頭する私の思考を遮る、平田の元気な声。

「一番大きな木が植わってる所、アレが長の家だよッ!!」

平田が指差したのは高台の先、立派な柵が植えられた一軒の屋敷。

一目見て位の高い人物が住んでるだろうその造りは、日本がその昔神を讃えた社を思い出させ、周りに建つ家々との構造の違いは時代の変わり目を思わせる。

まいったな・・・

これではますます、この世界が今いつの時代なのだか分からない。

「アレか・・・ありがとう平田。ではしばらくのあいだ、紫の世話を頼む」

平田に感謝を伝え、肩に乗せた紫を降ろす。

「紫、良い子で待ってるのだぞ?」

「うううう・・・分かったよおじちゃん・・・」

若干渋りながらも、紫は頷く。

「でも、早く戻って来てね?」

「承知した。平田、暫く紫の相手を頼むが、あまり遠くには行くなよ？」

「長の家からならこの里が見渡せるから、何処に居たってすぐに見付かるよ」

「それでもだ。それに、こちらから君達が見えようとも、近くに居なくては何も出来ないではないか・・・たがら平田、くどいようだがあまり遠くには行って駄目だぞ？」

「へえーい・・・」

「・・・ハア。まあ取り敢えず、そのことを忘れぬように頼む」

私は平田に念を押し、若干の不安を感じながらも屋敷へと向かった。

屋敷を訪ねた私は対応する老婆に訪問のウマを伝え二・三事のやり取りをすませた後、長の居る部屋まで案内される。

「すまないが、お目通りを願いたい」

私は戸を叩きながら声を掛け、返事を待つ。

「・・・どなたかな？」

戸の向こう側からは掠れた声が返ってきた。

「突然の訪問、すまない。私は今日この里に着いた旅の者だが、顔見せを兼ねてこちらの長殿にお目通りを願いたいと思い、寄らせてもらった・・・中に入っても構わないかね？」

「旅のお方が・・・こちらへの顔見せじやる？なら気にする必要はない、入ってくれて構わんよ」



「ありがとう。では、失礼する」

戸の向こう側から聞こえる声に返事をし、戸を開けて中へと入る。

途端、私の鼻孔を再び満たす甘い香り。

・・・この香りは？

その香りは里に入る時に感じた臭いと全く同じ物だが、この部屋から感じられるソレはあの時とは比較にならない。

「・・・おっと、先ずはお初にお目には掛かるが、私はエミヤと言う旅の者だ。以後、お見知りを」

屋敷の中に入った私は、不思議な香りに軽い不快感を覚えながらも、長に向かい頭を下げた。

「なかなか礼儀正しい旅の方じゃ・・・まあ、先ずは座りなされ」

私を迎えた者は、白髪を長く伸ばし肉の削げ落ちた枯れ枝の様な体つきをした、初老の男だった。

「心遣い感謝を」

一例の後、静かに腰を下ろす。

「いやいや、構わんよ」

長はそう言って、シワをより深くさせながら微笑む。

「して、本日はどう言った目的でこの里を？」

「本日の訪問は、暫くこの里に住む許可を貰い受けに・・・それと別に一つ」

私はいったん言葉を切り、改めて続ける。

「現在、この里に起きてることに付いてお聞きしたい」

「・・・先ずは里への受け入れじゃが、それにかんしてはワシからは何も咎めん・・・して旅人よ、この里に起きてることとは？」

「・・・」

私は長へ目を向け、ただ沈黙を続ける。

対し、

「……」

初老の長も同じく、私に目を向け沈黙する。

しばらくのあいだ、沈黙が部屋を包と、

「ふむ……どうやらごまかせぬようじゃな……ハア」

長は顎に手をやり溜め息を一つ付いた。

「……一つ聞きたいのじゃが、そなたは何処でその話しを？」

「なに、平田と言う少年から聞いたまで……」

訝しげにこちらを見る長に、私はただ一言告げる。

「それで、長殿……返答は如何ほどに？」

「……今、平田は何処に居るのじゃ？」

「……平田は今、私の連れと共に居るが……それが何か？」

話題を反らされた事に疑問を抱くも、私は正直に言う。

「……」

私の疑問に長は黙り俯く。

「長殿、どうかしたのかね？」

「いやいや、そうかそうか・・・アノ娘子は今、平田と居るのか・・・」

俯きながら何度も頷き、長は顔を上げた。

「それはいい・・・ああ、実に都合がいい。ハハ、ハハハハッ！！」

その顔は歪み、高らかと上げた声は今までとは違い、もはや掠れた初老の声色ではなかった。

「・・・お前は誰だ？」

「ハハッ・・・誰だ、誰だか・・・ワシは、俺はいつたい誰だと思  
う？」

・  
言うやその顔がひび割れ、長く伸びていた白髪が抜け落ちている・・・

「・・・クソ」

私は有様を凝視しながら齒噛みした。

視線の先、そこにあつたのは耳まで裂けた口と、額から一本の角を生やす化け物の存在。

「成る程。そう言うことか・・・」

「取り敢えず、人間じゃあないのは分かっただろ？」

体つきまでもが一変し、枯れ枝のような細く衰えた体は、真逆の太く荒々しい肢体へと変わっていた。

「私達はまんまとハメめられた訳か・・・」

訪れる前に感じた香りと、この部屋に踏み入れた瞬間に感じ香り・

「成る程な・・・この香りは催眠効果を施すのか。部屋を囲む複数の気配、これは今になって増えたのではないな・・・こいつらは最初から居たのだろ？」

気付けば全てが遅く、私は敵陣の真っ只中に孤立無援の現状。

今になって思い返せば、最初に抱いた疑問を先延ばしにしたことが失敗だった。

しかしまあ、こうもあっさりと畏に掛かるとはな・・・

つくづく、己の考えの甘さに嫌気がさす。

「まあ待て、そんなに自分を責めることあーねえよ」

私に向かい、憎たらしい笑みを浮かべる異形の者。

「お前をここに迎え入れたのには、ちゃんと意味があるんだ・・・」

「ほう・・・では、私をここに招いた意図を聞こうかね？」

膝を着い姿勢で油断なく構え、私は返答を待つ。

「いやなに・・・こうやって向かい合って見ると、お前はかなり強い妖気を発してるようじゃねえか・・・」

そう言うや、さらに笑みを深める。

「どうだ？ここは一つ、俺とお前で手を組まないか？」

「クッ・・・その提案、実に下らんな」

私にはべもなく拒絶した。

「私の力を認めた上で手を組みたいと言うのなら、せめて対等の立場で交渉すべきではないかね？」

「ハッ・・・お気にめさなかったか。なら、そうさせてもらおうか・・・」

片手を上げ指を鳴らす。

その動作は世界を歪め、私達が現在腰を下ろしている屋敷は、その姿を廃墟へと変えた。

「紹介しよう・・・こいつらが、我が同胞達だ」

「ふむ・・・随分と醜い家族達だな」

変わり果てた室内を見渡し、私は嫌悪感を隠さずに言い放つ。

私を囲む異形の者達。

四肢の長さだけが人とは違う者も居れば、体の造り自体が人とは呼べぬ者。

様々な姿を持った者達は皆、私の言葉に殺気を向けた。

「やれやれ、どうやら反感を買ったようだな・・・だが」

私は肩を揺らしながら腰を上げ、

「生憎とな、私も君達が気にいらんのだよ・・・特に貴様がなッ」  
言い切ると異形の群れの中へ飛び込み、未だ甘い香りを発する存在に蹴りを放つ。

ズガアアアアツ!!!

一匹の異形がその身をくの字に折り曲げ、木戸を幾重に破壊しながら吹き飛ぶ。

そして、その後を追うように、私も廃墟と化した屋敷から飛び出した。

「なんだこれは・・・」

外に飛び出した瞬間、私は言葉を失った。

何故なら私が目にした先には、想像を絶する光景が広がっていたからだ・・・

雲一つなく晴れ渡っていた晴天は、今や民家から高々と上がる火柱によって紅く染め上げられ、先程まで何もなかった井戸の周りには、数え切れぬほどの人骨が積み上げられている。

その積まれた骨は、かつてこの里に暮らしていたただるう人々か、または私達と同じ旅人の成れの果てだろう。



哀れな亡きがら達・・・

何の供養もされず、今や朽ち果てたそのさまを晒すだけ。

それは、あまりにも酷い光景だ。

この場には、あまりにも死が満ちている。

そう、そこには地獄が存在した・・・

「・・・」

私は言葉もなくし、立ち尽くす。

「オイオイ・・・まだ話しは途中だぜ？」

背後からは愉快そうな声。

「・・・」

その言葉には応えず、ただ黙って振り返る。

「なァーに怖い顔をしてだか・・・んで、どーするよ?」

変わらぬ笑みを浮かべ、私に言う異形の者。

その姿は先程よりさらに形を変え、今や二本の腕とは他に背中からは六本の腕を生やしていた。

「・・・貴様」

「だからよ、俺と手を組むかい?それとも・・・ここで死ぬかい?」

／其の酒

空は紅く染まり、大地からは火柱が伸び火の粉を飛ばす。

命在る者は骸へと形を変え、護るべき者とは引き離された。

まるで異界のような異空間。

炎が空を紅く染めた世界・・・そこで私は、八本の腕を生やした異形の者と対峙する。

「貴様は何がしたい？」

私は変わり果てた里の姿を背に、周囲を異形の群れに囲まれながらも問う。

「何が、か・・・そうだな、強いて言えば俺は力が欲しい」

応えるのは一人、群れを率いる八つ手の異形。

そいつは私の問いに顔を歪めると、狂ったように叫ぶ。

「こんな紛い物の命じゃあ満足なんか出来ない。だから力が欲しいッ！！・・・何者にも舐められない、笑われない力がッ！！！」

「聞いてもいないことまでペラペラと、わざわざ吠えながら語る必要はない。その良く喋る口に、少しは自重を教えたらどうだね？」

感情を表にして叫ぶ異形の男に、私は喋りながらも思考する。

力が欲しい、か……その気持ちは分からなくもない。

正直に言っ飛ばせば、否定する気は毛頭ない。

そもそもが、他者の願望に対し私がとやかく言うことに、なんの意味も存在しない。

この男の態度から見取れるが、そこに思い至るまでに色々あった……もしくは、成らざる得なかったのだろう。

ならば、それに付いて意見することに意味はない。

何よりも、だ……力が欲しい、それは私自身も思うことだ。

この身には、力が到らず助けられなかった命がある。

言うまでもなく、紫の母がまさにそれだった。

「それで、貴様はその為に彼女を狙うと？」

「当たり前だろ？」

「当たり前か……では聞くが、何がどう当たり前なのだね？」

「ハッ、あんな生まれたての小娘一匹に、他に何の価値がある？」

「……価値だと？」

「たまたま強い力を持って生まれ、たまたまその力を俺に奪われた・  
・それがあの小娘が生きる意味だ」

異形の者は目を細めて笑いを深めると、喉をゴクリと鳴らした。

「それに、まだ若いからなあ・・・肉も柔らかく内蔵も新鮮だろう  
なあ・・・ああ、実に美味そうだ」

「美味そう、か・・・まるで、貴様に食われる他に価値は存在しな  
いような言い草だな？」

「他にどう取れる？」

私の問いに返って来たのは、心底不思議そうな顔と言葉。

「……」

私は何も応えずに目を閉じた。

心は熱く猛りながらも、頭の中は静寂のまま感情は次第に冷めて行

く。

この場に居ない紫の身が心配だ・・・

怪我はしてないだろうか？

泣いてはいないだろうか？

惨状に怯え、震えてはいないだろうか？

今すぐにも探し出し、あの幼い少女を抱きしめてやりたい。

そんな衝動に駆られる。

そして、それらとは別に私の心を満たす疑問。

それは平田のことだ。

背後に広がる惨状を目にし、真っ先に生まれた疑問。

あの平田と言う少年は、いったい何者なのだろうか？

考えるのは後回しだ・・・

あらゆる要因がこの身を焦がすが、現状ではあの娘を信じることに出来ない。

あの少年・・・平田を信じるしか出来ない。

ならばそう、今の私は・・・私にしか出来ないことをするしかないのだ。

今この瞬間、この身がすべきことは決まったのだ。

紫が心配なら、それを早々に片付ければ良いだけ。

それからあの娘を迎えに行けば良い話し。

平田の事が気になるなら、後で考えれば良い。

今はただ、それだけで良いのだ。

「そうか・・・では、私達は相容れぬ。私は貴様の敵だ」

目を開けた私は重心を低く取り、異形の者を睨みつけ言い放った。

「この場にて貴様は潰える・・・そのくだらない夢の続きは、死後の世界で観るといい」

「んだよ・・・お前の目を見た時、俺と同じ臭いがしたと思ったの

によ・・・力を求めて止まない、ナニかに狂った願望を抱いた同類の臭いがよお？」

「否定はしない。私自身、その気持ちは良く分かるさ・・・だが、だかな化け物よ？」

一切の否定をせず、私は鷹の目を以って睨み付ける。

「例え気持ちがかろうとも・・・私には貴様を肯定する気には、あの娘を泣かせる気には・・・毛頭なれんのだよッ！！」

「ケッ・・・交渉決裂、か・・・まあいいか、ならお前も喰らうまでだなッ！！」

言うや異形の者は身を低く構え、

「じゃあ挨拶代わりに・・・シャアッ！！」

弾丸の如く地を蹴った。

ッ！！？

その踏み込みは刹那の速さ。

唐突に襲い来る悪寒に腕を十字に構えると、いつの間にか異形の者が目の前に現れた。



「グウツ!？」

瞬間、私の体に衝撃が走ると同時に浮遊する感覚。

相手が放ったのは一撃、拳による単純な打撃。

その一撃だけで私の体は宙を舞った。

「ハッ、防いだかつ!？そいつは大したもんだ・・・が、生憎と俺は鬼との混血。防いだ腕は大丈夫かあ？」

「・・・チイツ」

私は着地と同時に舌打ちをする。

咄嗟に組んだ腕には鈍い痛みが走り、感覚が痺れている。

これはなんたる失態か。

まさか、体に強化を施す前に先手を打たれるとは・・・

その結果に到った要因はただ一つ。

偏に、私が抱いた油断が招いたのだ。

そして、唯一の救いはこの身が既に人外であったこと。

もし人のまま今の一撃をまともに受けていたならば、私の両腕は原形を止めてはいなかっただろう。

迂闊だった・・・

目の前の存在を過小評価したあまりか、些細な痺れとは言えど両腕にハンデ貰うとはなんとも迂闊。

「情けない話しだな・・・こんなにも早く、再び運命に感謝をする結果になるとは・・・」

やはりこの身はまだまだ未熟。

「オイオイ、本当に大丈夫かよ？」

「なに、貴様が気にする必要は皆無だ。これは私の油断が招いた結果に過ぎん・・・」

腕の痺れを自身への教訓とし、私は言葉を詠む。

「  
トレース・オン  
投影開始」

体へと強化を施すと同時に、記憶の底から一対の陰陽剣を取り出す。

## 陰陽の夫婦剣

記憶を無くしたこの身が現在、唯一再現することが許された武器の宝具。

それと同時に、記憶の奥底に残る戦闘の記録を観る限り、かつての生涯では私が最も良く愛用し、最も戦場の中を共に歩んだ剣。

陰陽の宝剣『干将・莫耶』

白い陰剣（莫耶）の刃には水波模様（漫理）が。

黒い陽剣（干将）の刃には亀裂模様（龜文）が。

白と黒の一对の刀身、その双剣はかつての姿よりさらに眩しく、互いを照らす。

記憶の中で投影によって再現された時よりも、記録映像として残るかつての姿よりも・・・その刃には一段と強力な神秘を内蔵していた。

「ほう・・・何処からともなく武器を取り出したか。しかもソイツは・・・オイッ!！」

そう叫ぶや私の手に現れた双剣に合わせるように、周りを囲む異形

の者達から投げ渡される剣。

「随分と立派な武器みてーだがよ、二本と八本・・・質は及ばねえーが、数はこっちが上だぜ？」

「残念ながら、数が勝ると言う理念は私と対峙する場合、全くの無意味だ・・・」

両腕を下げ重心を低く構えを取り、私は皮肉げに言う。

「さて化け物・・・今から貴様は私によって十の手足をもがれるが、その覚悟は十分かね？」

「ハッ、口の減らはねえ奴だ・・・だが面白い、来やがれッ!!」

「何が面白いのかは知らんが、今度はこちらから向かわせてもらおうか・・・」

言うが早く、私は地を蹴った。



安息は蜘蛛へ 伍 漆 漆（前書き）

明日、改訂致します。

安息は蜘蛛へ 伍 漆 漆

／其の伍

キーンッ！！

刃と刃が絶え間なく衝動し、その度に甲高い悲鳴を上げる。

反らし、弾き、切り込む。

あれから何度、お互いの刃を交えたか。

二つと八つ・・・

合わせて十の刃と刃が奏でる演奏は、未だ終わる事なく続く。

おかし・・・

先程から何度となく相手の隙を付いては切り込むのだが、走らせた刃は思い通りの軌跡を辿らず。

おかしい・・・

手数之差はあれど、ここまで防戦一方になるのは何故だ？

おかしい・・・

干将・莫耶を振るう腕が異常に重い。

気付けば攻勢に移るところか、守る事すらままならない。

「  
ッ!？」

私は思考を止め、後方へと跳び退く。

次の瞬間、私の残像を切り裂くかの様に走る銀光。

おかしい・・・

この者が振るう剣に技などは存在せず、手数と腕力を武器にしていた振り回すだけの剣技。

なのに何故・・・



っど、

「シャアアアアッ！！！」

雄叫びが上がり、八つの刃が殺到する。

「チイツー！！」

舌を打ちながらも、私は双剣を八の字に交差させ迎え撃つ。

ギイインツ！！

より甲高い悲鳴を上げ、互いの刃が鏝ぜり合いをし火花を散らす。

「テメエー、本当にしぶといなあ？」

八つの剣を振り下ろし、私を押し潰さんとする相手の顔には、**歓喜**の色が滲む。

「ハッ、生憎と・・・それはこちらの台詞だよッ！！」

背筋を最大にまで活用し、一瞬の間だけ刃を押し返す。

「　　グオツ!?!」

刃が返された相手は、瞬間的にのけ反る。

それは一瞬の間だけ生まれた、私達にとって何よりも大きな隙。

「そら、隙だッ」

私はその隙を見逃さず、がら空きになった腹部へと前蹴りを入れると同時に、

「これはオマケだ、受け取りたまえッ!?!」

蹴りの反動を使い後方へ跳び退きながら、干将・莫耶を投じる。

・・・が、しかし・・・

何だとツ!?!?

放たれたはずの刃は重力に負け、音を発てて地に落ちた。

「・・・ハハッ」

相手は驚愕する私を嘲笑う。

先程くらわせた蹴りのダメージか、歪む口元からは血が滲んでいる。

「もしかしてよ、今日は不調かい？ だったら・・・残念だ、なあッ  
！」

その笑みを顔に貼り付けたまま語尾を強め、再び追撃を開始した。

「チツ・・・トレス・オン 投影開始」

私は苛立ちを隠さず舌を打ち、再び迫り来る刃の群れに干将・莫耶を投影する。

そしてまた、八本の剣撃を迎え撃つ。

「また出しやがったなあ？ まったくもまあ、憎たらしい奴だあッ！  
！」

新たに鳴り響く剣と剣の衝撃音。

迫る刃を反らしては弾く、ただその繰り返し。

ここにまた、戦いは振り出しに戻された。

おかしい・・・

何故こんなにも、思い通りの結果が生まれないのだ？

何故こんなにも、両腕が重く感じるのだ？

これはもしや・・・

「一つ聞きたい・・・」

止む事なく襲い来る斬撃をいなしながら、私は問い掛けた。

「貴様・・・最初の一撃、何か仕込んだな？」

「・・・ん？何か、ねえ・・・」

愉快そうに笑い、私の腕に視線を向ける。

「どうかね、腕の感覚は？痺れはしんどいかな？痛みは感じないかね？」

笑みを浮かべながら言い後退し、おもむろに追撃を止めた。

「・・・」

「・・・んだよ・・・せつかく口調を真似てやってんだから、ちったあ面白い反応しろや？」

無言で返す私に、つまらなそうに言う。

「・・・生憎と、貴様のようにペラペラ喋る質ではないのでね・・・」

「オイオイ・・・お前、状況が分かってんのか？お前は最初の一発で毒を盛られたんだ・・・本来ならもう、腕が使い物にならないぐらい強力な毒をな」

言いながらも、不思議そうに首を捻った。

「しっかし、未だに良く動いてやがんなあ・・・普通なら今頃、痛みではいずり回ってるぜ？いやぁー、お前さんは大したもんだよ」

「クツ・・・残念ながら、この身を包む外套はただの布にあらず・・・つとは言え、毒を中和するかどうかは知らんがな」

私は皮肉気に笑いながら、感覚の薄い腕を振るう。

「まあ少なくとも、それなりの効果はあったようだ・・・」

生身でくらっていたのなら今頃は、奴の言う通り両腕の機能は死んでいただろう。

・・・だが、結果は別の物となった。

違和感は確かに存在するが、未だに腕は動き続ける。

動く事が可能ならば、この身にはそれで十分なのだ。

「ケツ、どつちにしろまともじゃねえーんだろぅが……それで、お前はその腕で何をすんだ？」

「そつだな……ではここで一つ、腕を使わずとも可能な手品でも披露しようかね？」

言いながら、私は瞳を閉じる。

エンリは私に言った……『理解しろ』と。

エンリは私に言った……『想像しろ』と。

エンリは私に言った……『幻想を創り上げろ』と。

「ケツ……余裕かましやがるから次は何をするかと思えば……まさか手品だと？」

「そつだ……この身が貴様に、最高の幻想劇をお見せしよう……」

「

目を開き、私は求める物へと視線を向ける。

想像しろ……種は『目の前』に転がっている。

理解しろ……答えは『ソレ』を観察して得るのだ。

創り上げる……理解した在り方を『再現』するのだ。

「刮目せよ化け物……これからその目が映し出す光景は、決して見逃す事は許されず。同時に、決して逃れる事は出来ない……」

そして、肝を冷やすが良い。

笑う事も忘れ、言葉を発する事も忘れるが良い。

「  
トレース・オン  
投影開始」

言葉と共に紡ぎ出すは、この身が宿す幻想。

それは則ち、『剣』。

「  
ロールアウト  
工程完了。全投影、  
バレット・クリア  
待機」

そして、頭上には27の剣軍が現れる

／其の達

紅く染まった空を裝飾するは、全てが同じ姿を持つ27の剣達。

紅い騎士を主とし、彼の望むがままに存在する剣の軍勢。

この時、この場にて紅い騎士は、戦況を己の支配下に置く。



「オイオイ……何だそりゃ……」

突如として頭上に現れた剣軍に、相手はただ呆然とする。

だが、それも仕方無い事。

何故ならばその刀身は、目の前に立つ相手が未だ八本の腕に持つ剣と、完全に同一の姿を持って存在しているから。

ロールアウト  
工程完了

バレット・クリア  
全投影、待機

剣軍を生み出す為に紡いだ、私の魂に記録される言葉。

紡がれた言葉には、意味が存在する。

頭上に待機する剣軍を以ってして、対象の残滅を行う為。

目標へと剣の軍勢を進軍させる為に、その言葉には意味が存在する。

・  
・

その為の言葉を、再び紡ぐ・・・

「フリーズアウト停止解凍。ソートパレル・フルオープン全投影連続層写」

言い放つと同時に、同一の姿を持つ27の剣軍の全ては、残滅の対象に向かい流星の如く降り注いだ。

「な、舐めんなああああ、————ツ！！？」

残滅の対象は全ての腕を振り回し、迫りくる剣軍を迎え撃つ。

八本の剣と27の剣軍。

数えるまでもなく、その差は歴然である。

• それに加えて、迫りくるのは何も剣の軍勢だけには限らなかった・

「貴様はずいぶんと間抜けだな？」

上を見上げる敵の正面へと一足で迫り、私は干将・莫耶を振るう。

互いの影が一つに重なり、一瞬の交差の後、大きく離れた。

降り注ぐ剣の群れ。

宙を舞う二本の腕。

甲高い音を響かせる、剣と剣。

砕ける八本の剣。

驚愕の化け物。

肉を突き刺す鋭利な刃。

声にならぬ悲鳴。

嫌悪感を催す柔らかい音。

遅れて舞い散る鮮血。

「上にはばかり意識を取られ、正面への注意を怠るとは……その結

果がそれだ、間抜けな化け物よ」

数々の剣にその身を貫かれ、不細工なオブジェへと変わり果てた存在に目を向け、私は問い掛ける。

「ところで化け物よ・・・私の手品はどうだったかね？」

肝は冷えたかね？

「チエツ・・・壊れちゃった」

家並みの中を歩きながら、少年はつまらなそうに呟く。

つと、

「・・・平田君？」

横を歩く少女が不思議そう言う。

「何でもないよ、紫ちゃん」

少年は笑って応えながらも、自らの胸に手を当てた。

触れた胸に痛みは無い。

そんな物は当の昔に・・・初めて死んだ時、時間と共に捨ててきた。

「・・・おじちゃん、結構強いじゃないか」

少年は歩きながら笑う。

「ねえ、紫ちゃん・・・さっきね、僕の三つある体のうちの二つ、

三つの中で一番強い入れ物が壊されたんだ・・・」

顔も向けず言う少年は、空を見上げて悟る。

そろそろ、潮時なのかなあ・・・

「さて……」

体中に剣を刺し、オブジェに成り果てた化け物に、私は問い掛ける。

「まだ息があるなら答えたまえ……平田と言う少年は何者だね？」

「ハ、ハハハツ……ガフツ……な、何の事だあ？」

口から吐血しながらも、愉快そうに笑う。

何本も突き刺り、体を地面へと縫い付ける剣。

私が振るった干将・莫耶によって切断された、二本の腕。

その姿はあまりにも無残。

「本当に息があるとはな……」

飽きる程の生命力に、私は若干の呆れを覚える。

「だが、生きてるのなら都合だ……繰り返すが、あの平田と言う少年は何者……いや、アレは何なのだね？」

「……何、か……さーね、俺は知らねえよ……ただの人間のガキなんじゃねえのか？」

「……残念ながら、それは間違えだな」

「コホツ……んだと？」

再び血を吐く。

「先程までは何故か疑問を抱かなかったが、あの少年には影が無かった……この意味が分かるかね？」

そう、それは人間には有り得ない事。

「きつとあの少年は、貴様の手先。もしくは、かつてこの場に暮らしていた子供の地縛霊……さて、貴様はどちらだと思っ？」

つと、

「……ク、クハツ、クハハハアツ!!!!」

口から血を流しながら、体中から流血しながらも狂ったように笑い出す。

「カーーーーーハツハツハツハツ!!!!」

「……」



気でも狂ったのか・・・

刺し傷の数々に致死量をゆうに越えただろう出血、生きてる事が不思議なぐらいだ。

見て取るに、激痛と出血によって脳が先に限界を迎えたのだろう。

「・・・もういい。すぐに止めを刺してやるっ」

化け物の狂い死ぬ姿など、見るに堪えない。

「だから、黙って逝きたまえ・・・」

言っや、私は手に持つ干将・莫耶を振るり上げる。

いくら呆れる程の生命力があろうと、首を切り落とせば終わり。

頸動脈から鎖骨あるだろっ位置まで、刃の軌跡を走らせれば終わり。

「終わりだ・・・」

言って、私は干将・莫耶を走らせた。

・・・だが、今まさに首を落とそうと言う瞬間、

「・・・それは酷いよ、エミヤおじちゃん」

血に塗れた化け物の口から、子供のような声色で名を呼ばれた。

／其の漆

「貴様は、いや・・・君は平田なのか？」

寸での所で進行を止めた刃は、私の驚愕した顔と、子供の・・・平田の声で喋る化け物の顔を映す。

「そーだよおじちゃん。僕は・・・いや、この場合は違うね・・・僕も平田だよ」

私の問いに、血で塗れた顔を歪ませ肯定する。

「本当はさ・・・おじちゃんを殺して、その体を貰おうかと思ったんだけど、無理だったみたい・・・だっておじちゃん強いんだもん。」

ハハハツ・・・僕、まいっちゃったよ」

喋りながらも楽しそうに笑う様は、無邪気な子供を思わせる。

「何故なのだ、平田・・・何故君が・・・」

首筋に当てた干将・莫耶をそのままに、私は問う事しか出来ない。

「何故つて・・・分からない？それって凄く簡単な事なんだよ、おじちゃん？僕はね・・・力が欲しかったんだ」

「力・・・また、力かね？」

「そうだよ、力だよ・・・」

化け物は・・・いや、平田は私に笑って言う。

「おじちゃん・・・僕は誰よりも強くなきゃね、この世界じゃ生きられないんだよ・・・そう言う風に、存在してるんだよ・・・」

「・・・」

分からない・・・いや、分かる訳がない。

少年と私の前に現れた平田は、何処からどう見ても普通の子供だっ

た。

何故、普通の少年が力を求める？

何故、普通の少年がそこまで力に固執する必要がある？

そんな事、分かりたくもない。

「ハハツ・・・分からないって顔だね、おじちゃん・・・でも、そんなんじゃないよ？」

「・・・平田、君に聞きたい」

私は唇を噛みながらも言う。

「平田、君は・・・紫をどうするつもりだ？」

「・・・」

平田は笑みを止め数秒の沈黙をした後、再び顔に笑みを浮かべて応える。

「どーしよっか？」

「・・・どーしよっか、だど？」

「うん・・・実はさ、僕にも分かんないんだ・・・」

平田は語る。

「最初はさ、糧にはちょうど良いからって、食べようって思ったんだ・・・でもあの時、初めてあの娘を直接見て・・・これって、何だろうなあ・・・何だか、凄く眩しかったんだ」

自分でも分からない感情、行き場を探す迷子のように・・・感情の機敏を淡々と語る。

眩しかった・・・

自分が欲しかった物を、望んでた生活を知ってるあの娘が。

あの娘を一目見て、そうだと理解出来たんだ・・・

母親の愛情。

守ってくれる誰か。

何も知らずに生きて来て、何も与えられずに死んだ自分。

あの娘とは天地の差だ。

人間じゃない事の他には、何処にも同じ物なんか無い。

なのに・・・なのに何でかな？

これ程の差を見せ付けられたのに、不思議と妬みや憎しみの感情は生まれなかった。

むしろ逆に、一緒に居たいと思えた・・・

「ハハツ・・・やっぱり、僕にも分かんないや・・・」

感情を語り尽くし、平田はただ笑う。

「・・・そうか」

私には何も言えない。

むしろ、私が平田に伝えられる言葉などあるのだろうか？

知り合ったばかりの、ポツと出の私が発する言葉の中に、伝わる事など存在するのだろうか？

それすらも分からない。

「平田、私は君に何も言わない・・・いや、言えない。だが、質問には答えてもらおう・・・紫は今、何処に居る？」

「ほんと、おじいちゃんは優しいね……」

どう取ったかは知らないが、平田は笑う事を止めた。

「それから、紫ちゃんだけど……本気で助けたいなら僕を殺す事だね」

「殺す、だと？クツ……今まさに死にそんな有様で、いったい何を言い出すのだね」

「おじいちゃんは分かってないなあー……コレって、ただの器だよ？」

そう言うや、化け物の体にヒビが入る。

「だから探さなきゃ、ちっちゃな僕を……ね……」

声が遠退くと同時に、糸の切れたマリオットを思わず動作で、化け物の体は崩れ落ちた。

「……平田、君はなかなかやってくれる……」

もはや動く事のない物体から視線を外し、未だ周囲を取り囲む異形の者達を見回す。

「諸君らに、一つ言っておこう……この場は見逃すが、あの娘へ対する今後一切の干渉を禁ずる。異存は無いかね？」

・・・返答は皆無。

異形の者達は皆、こちらを静止して眺めるだけ。

「フツ・・・よろしい。ではこの契約、破る事は決して許されず。もし、この契約を破る事があったならば・・・私がその者の身を、魂を、存在すらも残さずに殺すッ」

全力で殺気を飛ばし、私は威嚇する。

そして、方向性を持たず全面に発せられた殺気に当てられ、身を震わせ後退する異形の者達へと宣告する。

「理解したなら名乗ろう。私の名は『エミヤ』・・・覚えておくのだ、私の名を・・・あの娘を守護し貴様らに仇為す我が名を、ゆめゆめ忘れぬように」

再び場を支配する静寂。

先程と唯一違うのは、異形の者達が皆、私に怯えながらも頭を伏している事。

「ふむ・・・君達はなかなか賢い。ならば契約通り、この場は見逃そうではないか・・・」



殺気を治め、淡々と告げる。

「では、諸君らよ……早々に、私の視界から去れ」

私が言うや、瞬く間に散り散りへと退却する異形の者達。

まるで、蜘蛛の子を散らすかの如く逃げ出し、十も数えぬ間にその姿を消した。

「さて……トレース・オン 投影開始」

腕の中に弓を投影し、今や廃墟と化した屋敷の庭に植わる柵の枝まですべてで駆ける。

里の中を駆け回って探すには、もはや時間が足りない。

ならばどうする？

そんな簡明な事は考えるまでも無く、体が勝手に実行に移している。

「……なかなかの景色だ」

加速の付いた状態で跳び、柵の枝を踏み台にし空へと跳躍。

「平田、私は君を討とう……紫の為などでは無く、私の誓いの為に」

紅く染まった空の下へと舞い上がりながら、私は弓を構えた。

そう・・・

時間が足りずに探せぬのならば、鷹の目を以って見通すしかあるまい。

「紫・・・私は君を理由になどしない」

ただ私は、私自身の誓いを果たすだけ。

君は私が『必ず護る』と言う誓いを・・・私が勝手に守るだけ。

「その為だけに、私は平田を討つ・・・」

紅く染まった世界の下に、未だ蒼い世界が存在する。

亀裂が走るように、蒼い世界を覗かせる。

その亀裂を目掛け、矢は放たれた・・・



安息は蜘蛛へ 伍 漆 漆（後書き）

特になし。

／其の捌

幸福と不幸。

百ある命の百ある時間の中に、ソレらは平等に存在する。

だが、ソレらは結果と呼ばれるモノでしかなく、百ある時間の中で歩む過程は様々なモノであり、幸福な結果へ到るも不幸な結果に到るも過程に左右される。

例え幸福が平等に百存在しようとも、百の時間を歩む最中、その結果に到るまでの要因によって平等に与えられた幸福の結果へと到れるか、または不幸な結果へ到るかは決して平等とは呼べない。

また、百ある命に与えられた百の時間を、百ある命の全てが成就出来るかも平等とは呼べない。

簡潔に言つのならば、結果とは過程により生まれるモノでしかなく、百ある命が百ある幸福な結果を得るか、百ある不幸な結果を得るかは決して同じではなかったのだ。

そう・・・

かつて、一人の少年がそうであったように・・・

「・・・紫ちゃん」

眠る少女を眺めながら、少年は涙を流す。

「僕ね・・・君とずっと一緒に居たいんだ・・・でも、それって無理みたい」

青空の下、自分の手で眠らせた少女を眺めながら、少年は運命を呪う。

いったい、僕の何がいけなかったのだろうか？

半人半妖として生まれ、母にすら疎まれた幼少期。

何故、こんな紛い物の命になったのだろうか？

一匹の鬼が戯れで襲った女は、鬼との子を孕み絶望の中で自らの命を絶った。

何故、僕は生まれてしまったのだろうか？

死んだ女の腹を食い破り、赤子は産声を上げた。

何故あの時、僕は死ななかったのだろうか？

生まれたばかり赤子に生きる術はなく、飢えて死ぬか何者かに補食されるか・・・本当は、そうあって欲しかった。

「結局、死ねなかったなあ・・・」

だが、少年は生きながらえてしまった。

死ぬ間際に見付けた一匹の蜘蛛が、少年を生かしてしまった。

「あんな蜘蛛、食べなきゃ良かったよ・・・食べなきゃ今頃、僕はこんな気持ちをしなくて良かったのに・・・」

食べなきゃ自分の異能に気付くこともなかった。

食べなきゃ半分とは言え、人間として死ねた。

食べなきゃ・・・

「君と会うこともなかったんだよね・・・でも、君に会えなかったんだよね、紫ちゃん？」

出会えて良かった・・・そう思える自分が存在する。

出会わなきゃ良かった・・・そう言ってる自分も存在する。

「ハハツ・・・僕って、どっち付かずだよね？」

少年は自らを笑い、眠る少女へと手を伸ばす。

「だからさ、紫ちゃん・・・僕は自分じゃ決めないこてにしたんだよ・・・僕の今後を決めるのも、君の命運を分けるのも、全てはおじちゃんの行動次第・・・他人任せだけど、別に構わないよね？」

この手が君に届いたら、僕は君の全てを奪おう・・・

いつだって、手は奪う為に伸ばす。

守る為には使えない。

使ったことなど、過去に一度もない。



だから、今さら守る為になど使えない。

怖いから……

否定されることが、拒絶されるのがどうしよもなく怖いから……

「……さよなら……紫ちや」

今まさに少年の手が少女に触れようとした時、首に走る衝撃に視界が揺れた。

「……え？何で??？」

少年の手は動きを止め、体は静かに倒れる……

「ケホツ……な、何がおぎだの？」

いがる喉と力の抜けた体を不思議に思う少年は、首に感じる暖かさに気付く。

「……血？」

自分の首からは、真っ赤な液体が流れていた。

少年の首から流れる液体。

心臓の鼓動と呼応するように、ドクドクと流れ出る血液。

え・・・な、なんで？

突然の出血を疑問に思い手で首を摩ると、細長い棒状のナニカに触れた。

「・・・矢？」

手が触れたナニカは、首に深々と突き刺さる一本の矢だった。

「・・・い、いったい何処か、ら？」

朦朧とし始める視界を動かし、辺りを見回すと・・・

ナニ、アレ？

そこには、蒼い硝子世界の一部を砕いたかのように亀裂が走り、割れ目からは紅い世界が覗いていた。

それはまるで、世界と言う境界を抜切ったような、空間を割ったかのような光景。

「・・・ハ、ハハッ・・・ゲホッ・・・ハハハハッ」

喉に溜まった血を吐き出しながらも、笑いが止まらない。

「ハハツ・・・あーあ、やっぱり拒絶されちゃったあ・・・ゴホッ  
!?ア、アハハ・・・アハハ、ハハツ・・・」

一際大きく咳込み、笑い声は次第に途切れる。

「こんなことが出来るなんて・・・紫ちゃんは、やっぱり・・・凄い、  
や・・・」

その言葉を最後に、自らが流した血の海に倒れ伏す少年の瞳は、瞼を開けたまま光を失う。

その瞳が最後に映し光景は、亀裂の向こう側の紅い世界からこちらを見据える、紅い騎士の姿だった・・・

「・・・終わったか」

矢を放った私は着地と同時に、投影した弓を消す。

「この光景は妖術の類だったのか・・・しかし、これほどの規模で世界を造るとは、君はなかなか大したものだよ平田」

少年が倒れると同時に、紅い世界はヒビ割れ崩れ去っていった。

紅い世界が音もなく割れた後、その代わりとして覗いたのは  
晴れ渡る青空。

どう言った原理かは分からないが、今まで私が居たのは本来の世界とは隔離された、別の空間だったようだ。

そして、どうやら私は三度運命に救われたようだ。

あの亀裂がなければ、私は閉じ込められたままだっただろう。

何故あの紅い世界に、あのような亀裂が都合良く現れたのかは分からないが、これで私の役割はいったん終わりを迎えた。

「ふう・・・すまないな、平田」

大きく息を吐いた私、は亀裂の向こう側に倒れる少年の姿に、小さ

く謝罪の言葉を捧げた・・・

／其の玖

「・・・ふう」

青空の下で眠る紫の寝顔を見ながら、私は安堵の溜め息を吐いた。

「本当に良かった、どうやら無事のようだな・・・」

言いながら眠る紫の体を抱き上げ、平田の亡きがらへと目を向けた。

自らの流す血に染まり、静かに眠る平田。

短い時間とは言え、私達に笑顔を向けた少年の顔は、今や血に塗れ

た死に顔しか伺わせない。

「クツ・・・何を今さら迷う・・・既に現状は、結果に到ってしま  
ったではないか・・・」

胸の内に響く数多の声。

自分を責める叱咤の数々と共に、あーだこうだとありもしない理想  
論を繰り返す。

ああすればきつと、平田を殺さずにすんだかも知れない。

こうすればきつと、今も平田は笑っていたかも知れない。

「悩むだけ無駄なのだ・・・全ては後の祭り。終わったことはやり  
直せない」

私は頭を振り、下らない迷いを振り払う。

「今は何よりも、紫。君が無事で良かった・・・」

腕に感じる暖かな温もりに、心の一部が満たされる。

早くこの場を立ち去ろう。

そして、今度こそこの娘が本当に安らげる場所を、私が探してあげ

よう。

「……では、行こうか紫」

平田の亡きがらへ向けていた目を空に向け、私は歩きだす。

……その時、背後に微かな気配を感じた。

「……」

無言で振り返るが、そこには何者も存在しない。

「……私の思い過ごしであって欲しいのだが……失態を繰り返す訳にもいかん」

ヤレヤレと肩を揺らし、私は念入りに気配を探る。

今日の一日だけで、私は二度の醜態を晒した。

そして、二度ともに幸運によって救われたようなものだった。

……だが、いつまでも運に救われるとは限らないのだ。

軽率な考えで三度目を繰り返すことは、もう許されない。

ならば念には念を入れ、私は些細なことにも警戒をしなければなら

ない……

つと

「……なんだこれは？」

探り当てた気配の数に、私は自分の感覚を疑う。

感知した気配は、平田の亡きがらから発せられていた。

血に染まったその体から、小さな気配が細胞分裂するかのようが増え、一瞬のあいだに百を超える数へと到達する。

その瞬間、

パアアアアアーーーーンッ！！！！

つと、小気味よい音を奏でながら、平田の体が破裂した。

「ッ！？」

目の前で生じた出来事に、思考が一瞬のあいだ動きを止める。

それと同時に、驚愕する私へと降り懸かる物体。



飛び散る赤と・・・モゾモゾと蠢く、黒い塊の数々。

アレは危険だッ!!？

それは本能なのか・・・または幾多の戦闘経験が導き出した自身への警告か、私は咄嗟に跳び退いた。

「チイツ・・・詰めが甘かったかッ!？」

舌を打ちながら、飛来する黒い塊を観察する私の目が捉えたのは、黒い塊の正体だった。

それは、数え切れぬ程の蜘蛛達の姿。

「平田・・・どうやら君は、なかなか粘着質のようだなッ!！」

先程まで私は、平田を殺したことに胸を痛めていた。

他にも何かしらのやりようがあったと、己を責めていた・・・これは間違いのない事実。

そう事実なのだが、これはまことに勝手な言い分になるが・・・ここまでくると、流石に憎たらしく思えるから不思議だ。

平田よ・・・しつこい男は嫌われるぞ？

だがその時、そんな考えなど関係ないと言わんが如く、既に地に落ちた小さな蜘蛛達は私達へと群がる。

「チツ・・・今はそんなことを考えてる場合ではないか・・・」

下らない思考を中断し、私は蜘蛛の群れに背中を向ける。

「生憎と、この場合は流石に多勢に無勢・・・なので退かせてもらおうか」

そう言うや、私は体に強化を施し駆け出す。

強化を施した身を以ってして全力で駆け出すと、すぐさま背後に迫る蜘蛛達の気配はなくなる。

元々の話しが、私と蜘蛛の体には規格と呼ばれる差が存在する。

例え蜘蛛達がいかに駿足だったとしても、互いの一步によって進む幅が大きく違う上、強化魔術と言う追加の要素が施された私に追い付ける道理は皆無であった。

そして現在、眠る紫を胸に抱いて走る私は、アノ井戸・・・平田と初めて会った井戸の前に差し掛かった。

走り始めてから左程の時間は経っていないが、迫る蜘蛛達を撒く為に里の中を大きく迂回しながら走ってきた。

だがそれも、もはや必要なさそうだ。

「・・・このまま逃げ切ることが出来れば、こちらとしては願ったり叶ったりだが・・・やはりそう簡単にはいかんなッ!!」

叫び地面を転がる私の足元からは、白く鋭利な爪のようなものが突き出す。

「成る程・・・それが君の正体かね？」

地面から突き出した白い爪を尻目に、私は井戸を睨みながら言った。

ズリッ・・・ズリッ・・・

井戸の中から響くのは、ナニカが石の壁を這い上がる音。

「・・・トレース・オン投影開始」

睨みながら待ち構える私は左の腕に紫を抱き変え、右手に投影した干将を持ち、莫耶を手に持たず地に転がした。

「平田・・・私はもはや逃げん。何故なら、君の正体は既に見破った・・・今度こそ、その身を討ち滅ぼすでしょう」

・・・その時、ナニカは井戸の中から顔を出した。

／其の壱拾

紅い騎士・・・彼を待つ幾多の運命達。

彼を迎えるだろう、対立と対話と抗争の数々。

彼は何かを護り、彼は何かと共存し、彼は何かと戦う。

彼の長い歩みの中には、数え切れぬ程の運命が存在する。

同時に、数え切れぬ程の選択肢が存在する。

そして、全ての始まりを告げる戦いは一つの選択と共に、この場にて終わりを迎える・・・

「それが君の正体か・・・失礼な言い方で申し訳ないが、偉く醜い姿ではないか、平田・・・」

私は井戸から這い出た存在に・・・十二の脚を生やした蜘蛛の姿に哀れむように言う。

全貌を現にしたその容姿は、何処までも醜かった・・・

蟻のような形をした半身は黒光りし、局部的に膨らんだ腹部には蜘蛛を思わす縞の模様が走る。

一言で表現するに、その姿は昆虫の類に見受けられるが・・・頭部だけが昆虫とは掛け離れた、人間の色と骨格に基づいた形を持っていた。

しかし、その顔は人間とは明らかな違いを持っていた。

人とは程遠い顔形・・・九つビー玉状の瞳と十字に裂けた口元はその醜い姿に拍車を掛け、見た者に目を背けたくさせる程の不快感を与える。

それなのに、僅かにだが覗かせる平田の面影・・・それはあまりにも醜さとは不釣り合いで、あまりにも痛々しかった・・・

「平田・・・私には君の真意など分からない」

哀れむような瞳を向け、私は語り掛ける。

「・・・だが、勝手ながら、君に同情する気にもなれんよ・・・」

そう・・・

これは人に限らず言える事だが、感情や知性のある生き物達には皆、何処かしらで勝手な部分が存在するのだ。

何かを求める際に、他者の不幸に救われる事がある。

他者を陥れる事で、結果として成功を得る事もある。

それを生業にする者だって、世界には多数存在する。

「平田・・・君の生きた時間の中で、何があったのかは分からない・・・そして多分、私には君に対して出来る事は無いのだろう」

例え存在したとしても・・・それはきっと、何の救いにもならないのだろう。

「・・・いや、それを為した所で、私達にとって救いとは呼べる物ではないのだろう・・・」

何かを得る為に、私達は何かを犠牲にする。

未だ見えぬ幸福を得る為に、私は君を犠牲にする。

私自身が掲げた、勝手な誓いの為に・・・

「では、私と君の・・・最後の戦いを始めるとしようかね？」

これから戦う相手に、哀れみなど必要ない・・・いや、そんな物に意味などない。

何故、私達は戦うのか？

何故、戦いに到ったのか？

その理由が何であれ、私は目的を見失う訳にはいかない。

「だから平田よ・・・私は容赦などせぬよ。ただ、私の理想の為に、  
な・・・さあ、来るが良いッ!!」

私は殺気を込め、あまりにも醜い異形の化け物を・・・変わり果てた平田の姿を睨み付ける。

『……………ッ!!!!????』



私の殺気に反応したのか、平田は泣き叫ぶかのような雄叫びをあげ、十二の脚を私達に向けて伸ばす。

「・・・」

私は迫り来る脚に対し、無言で足元に転がる莫耶を蹴り上げる。

その刀身を回転させながら、高々と空へ舞い上がる一対の片割れ・・・  
・莫耶の姿を見上げながら、正面に居る平田に干将を投じる。

ヒュッ・・・

風を切る音と共に干将は平田へと放たれ、投じると同時に私も地を蹴る。

迫る十二の脚をかい潜り、平田へと一直線に突き進み・・・

「  
トレース・オン  
投影開始」

自由になった右手の中に、八つ腕の蜘蛛が使用した剣を一本生み出し、その刃に強化を程す。

この時、先に投じられた干将が腹部に突き刺さり、平田は悲鳴をあげる。

そして、次の瞬間には私が正面まで迫り、右手に持った剣を振るう。

『 ツツツ！！！！?????』

斬撃によって胴を切り裂かれ、平田は再び悲鳴をあげた。

だが、その身は未だ動きを止めず、伸びた脚を私の背中へ向けて引き戻す。

だが生憎と、

「すまん、平田・・・頑張りは認めるが、これで詰みだ」

もはやこの身に追撃する意味はないと、平田から遠ざかるように横に跳び、十分な距離を取る。

残念ながら、君には何もせん・・・

「頃合いか・・・」

呟くと共に、最初に空へと蹴り上げた莫耶が干将に引き寄せられ、平田の後頭部に突き刺さる。

これにて準備は全て整った。

既に行動を起こす必要はない。

必要なのは言葉だけ・・・そう、たった一言を紡ぐだけ。

「  
フロクンファンタズム  
壊れた幻想」

私が最後に行ったのは、この身に宿す幻想の破壊。

この時を似て、爆音と共に白い光が場を包み、二度に渡る戦いに終  
止符が打たれたのだった・・・

赤く染まる空の下、私は紫を胸に抱きながら歩く。

安らぎを見付ける為に、再び山々を越える為に……

「ふう……降り出しに戻ってしまったな……」

沈む目を浴びながら、私は溜め息を吐いた。

今や人の居ない里は背後に小さく存在し、赤く染まる空へ向け一本の煙りを上げている。

「またしばらくは、紫の寝相に悩まされるのか……ああ、鬱だな」

いつそのこと、寝相の悪さを教えてやるか？

それとも、眠る時に距離を置くか？

……いや、それはそれで、私が寂しい気がする。

それによく考えてみれば、教えた所で眠る度に鼻を攻撃される私の気持ちだが、攻撃した当の本人の紫に分かるのだろうか？

いや、そもそもの話しが、例え意識した所で寝相が治るのだろうか？

「・・・不毛だな」

今までの考えは、あまりにも不毛だ。

「紫よ・・・私は決してくじけぬぞ・・・例えいつの日か、君に鼻を砕かれようともな・・・」

そう、私がシミジミとこぼすと、

「・・・おじちゃん、それ独り言？」

胸の中に抱いた紫が、可哀相な人物を見るような目でこちらを伺っていた。

「・・・気にするな紫。それよりも、出来ればその目を止めてくれんかね？」

地味に傷付くからな。

「・・・分かった」

多少のまを置き、紫は頷くと、

「それよりおじちゃん？」

辺りをキョロキョロしながら、私に聞く。

「どろした紫？」

「平田君はどうしたの？」

「・・・平田、かね？」

紫の問いに返事を考えながら、私は心の中で謝罪を述べる。

「平田は・・・君が寝てるあいだに、家に帰ってしまっただけ？」

「ふうーん・・・ねえ、おじちゃん？」

紫は再び私に問う。

「なんで紫達はお外を歩いているの？」

「それはな・・・」

さて、どう伝えるべきか・・・

「ふむ・・・そのことなのだが、実は里の長に滞在を断られてな？ どうにかならんのかと粘ってはみたのだが・・・まあ、無理なものは無理のようだ。それで、仕方がないので次の里を目指すことにしたのだよ・・・私の力が及ばず申し訳ない限りだが」

私は適当な説明を順々に列べ、紫の頭を優しく撫でる。

紫、下手な嘘を付いてすまない・・・

だが、今は君が事実を知るにはまだ早いと、私はそう思うのだ。

ああ、これもまた私の勝手な考えなのだろう・・・

だが紫よ・・・いつの日か君に全てを話すと、私は君の未来に向けて約束しよう。

この約束は絶対であり、破ることは先ずない。

「そっか・・・じゃあ、またしばくは、おじちゃんと二人つきりなんだよね？」

「ふむ・・・まあ、そうなる訳だが・・・私と二人では嫌かね？」

聞いといてアレなのだが、嫌だと言われた場合、私の心は硝子なのでバラバラ砕け散るだろう。

「うーん。紫は全然嫌じゃないよツ！..」

私の心境など知るよしもない紫は、勢いよく首を振るっては満面の笑顔で応えた。

「・・・」

その返事は笑顔と共に、私の心に深く記憶された。

「・・・そうか、それは有り難い限りだな・・・ああ、本当に有り  
難い」

やはり、護った者の笑顔とは良いものだ・・・

理想の押し付けで結構、自分勝手と言われようといっこうに構わな  
い。

例え誰になんと呼ばれようとも、そんなものは関係などない。

何故ならば、コレが私の幸福なのだから。

「クツ・・・では紫よ、またよろしく頼むぞ?」

なあ私よ・・・

今日だけは、紫の始末の悪い寝相も寛大な気持ちで受け止めようで  
はないか・・・

それだけの価値が、この笑顔にはあるではないか?



なあ、私よ……お前もそつ思つたら？

前言撤回したのは言つまでもない……

安息は蜘蛛へ  
捌  
玖  
壹拾（後書き）

オツケー牧場

蜘蛛は育児記録(紫)へ (上・下セット) (前書き)

ガシャン、ガシャン・・・ガツシャーンッ!!

超・魔術合体ッ!!!!!!

「ふむ・・・始めた本人が言うのもアレだが、何を書いけば良いものかな・・・」

私は片手に木炭を持ち、広げられた紙と睨めっこをしながら首を捻る。

現在、私が腰掛ける椅子と肘を置く机は、木を加工して作った自作品。

目の前に広げられた紙も同じく、先の作業の際に余った木の皮を水で漉いて、私自らが作った。

さらに言えば木炭も同じく、焚火の燃えカスである炭から流用と、何ともエコな現在。

「まあいい・・・取り敢えずは、日常の出来事でも書くとするかね・・・」

悩むよりも先ず、何かを書くとしよう。

今日この時から、紫の成長の記録をここに記す・・・

1頁目 / 某日

アノ村から旅立ってから、早くも二月が過ぎる。

相も変わらず、山と森の中をさま迷う私達。

もはや自然の素晴らしさよりも鬱陶しさが胸を占める訳だが、同時に馴れとは恐ろしいものであり、今では原始的な生活が骨に染み付いてしまった。

もういつそのこと、ここいらに根を張るのも良いかもしれない・・・

さて、内容は変わるが・・・最近、紫が小鳥と戯れてるのを良く見掛ける。

自然の中で笑顔を浮かべる子供の姿・・・コンクリートジャングルの中で、自然を知らずに育った大人達を知る身としては、大変癒される光景だ。

ふむ・・・上の文章は撤回すべきだな。

やはり、自然は素晴らしいものだ、私はここに綴る。

2頁目 / 夏の日

色々と飛ばした気がするが、多分それは気のせいだろう。

さて、話しを戻すが、季節は早くも夏を迎える。

ことは言ってみだが、実際に今が何月かは知らない。

だがまあ、多分夏季だろうと思う。

強いて言うなれば、少し前まで雨が頻繁に降ったことと最近になって感じる気温の上昇、そして日が沈むまでの間隔が長いことの三つの要素から夏だと推測したまで。

それに、蝉も鳴いている……

さて諸君、コレを夏と呼ばずして、いったい何を夏と呼ぶのかね？

っと、ここに述べておこう。

### 追記……

そうそう、紫の成長のことだが……最近は私が勉強を教えている。

最初は単に、何かあの娘にもやることがなければ可哀相だと思い、簡単な算数と理科を教え始めた。

もっと他に、何か遊びでも教えてやれば良いのだが……残念なが

ら、私の記憶に娯楽の二文字は見付からなかった。

またしても力が及ばず、情けない限りである。

話しを戻すが、紫は勉強の最中も楽しそうにしているので、将来は有望なはずだ。

私が説明を始めると、一字一句とも聞き逃さぬようにと真剣に聞いてくれる。

その真剣な姿勢は、教える側として大変喜ばしい限りだ。

うむ……つまり、紫はなかなか優秀な生徒だと、そう言いたいのだ。

季節は雪の降る冬季へと変わり、私達二人の旅路は一先ずの終わり



を迎える。

雪化粧に染められた森の一角に、私達は住まいを持つことにした。

それに到った理由は簡単、全ては寒さを凌ぐ為だ。

体の小さな子供は、体温の低下が体の大きな大人より何倍も早く、体の出来上がってない紫では、免疫力の低さから風邪なども拗らせやすい。

・・・まあ、妖怪が風邪を引くかどうかは知らんのだが、子を育てる身として当たり前前の配慮だろう。

ああ、そうだ・・・

上記には住まいと書いてあるが、『実際は丸太を組み立てただけの簡単なログハウスだ』とだけ付け加えておこう。

時間とは本当に早いものだ・・・

季節は四季を巡り、私達が出会ってから一年もの時間が過ぎた。

この感情は何だろうか・・・最近の私は母性と言つものに目覚めて  
いるのだろうか？

食事を作り、服を作り、日常の中で紫の成長を目にする度、私は強  
く思う。

紫の為に一日を、日々を過ごすことが幸せでたまらない。

親と呼ばれる者達は皆、このような心境でいるのだろうか？

だとしたら、親であるとはなんとも尊いことなのだと、私は強く思  
う。

いやはや、私もずいぶんと所帯じみたものだ・・・

追記・・・

先日、紫がおねしょをした。

五頁目 / 記憶

最近、自身の記憶を掘り起こしながら色々考える。

かつての私は、いったい何者だったのだろうか？

何を目的にして、何を糧に生きていたのだろうか？

いくら悩めど、答えは得られず、悶々とした日々が続く・・・

追記・・・

今朝、紫が再びおねじよした。

六頁目 / 投影と幻想

春の日差しの下、私は目を閉じて干将・莫耶を構える。

記憶に残る敵の姿を瞼の内側に捉えながら、静かに深呼吸を繰り返す。

脈動の音を脳内に響かせ、魂に記録された戦いをこの場に再現する。

対峙する仮想の敵は蒼い残像を残し、深紅の魔槍をこちらへ向けて突き出す。

先ずは反らす・・・

出方を伺いながらひたすら防ぎ、襲い来る全ての朱を弾く。

記録され速度よりも幾分か遅い突きは、双剣によってはじかれ火花を散らす。

やれやれ、記録どりの手強さだな・・・

しかし、不思議と腕に走る衝撃の重さが、かつてより遙かに軽く感じる。

どうやらこれは、身体能力の上昇が引き起こした結果のようだ。

能力の上昇は技術の向上へ続く道となる。

つまり、私は次の段階へ到れると言うことだ。

かつての私には望むだけに終わった場所へと、さらなる武の高みを目指せると言うことだろう。

・・・だが、それは嬉しい誤算であると同時に、今まで培ってきた経験を霞ませる危うさを伴う。

この身に残る記録は、所詮過去の遺物でしかない。

つまりそれは、憶測と言う決め付け……一種の油断だ。

私は仮想した敵への評価を、かつての物から新たな評価へと変える。

どうやら人に在らざる今ならば、まともに打ち合ってもこちらにお釣りがくるようだ……

だがやはり、決して楽な相手とも言えぬ。

現に、少しでも気を抜けば朱く閃光のように迫る一撃が、私の心臓を喰らうだろう。

まあ、油断する気は毛頭ないのだがな……

それからも、攻防は続く……

時には私から攻め入り、しばらくのあいだ、互角の攻防を繰り広げる。

現実には音を生み出さぬその攻防が、私の額に汗を浮き上がらせ、わずかな緊張感をいだかせた。

拮抗する一対の剣と朱い魔槍。

臉の裏側にだけ飛び散る火花。

互いに一步も引かず、決着は未だ見えない。

仮想の敵は口の端を吊り上げ楽しそうに笑い、私も想像の中で皮肉気に笑う。

この日、鍛練は空が陰るまで続いた・・・

さて、かなり飛び飛びになってしまったが、日記の続きを再び書いて行こう・・・

紫と二人で過ごす生活も、数えて三年の年月が過ぎる。

そう、春夏秋冬と・・・四季を三度も巡り、気付けば三年も経ったのだ。

年月とは思いつく時には一瞬でしかなく、実際に過ごす時には長いと言つのは誰もが承知のことだろう。

だからこそなのか、私はここに実感する・・・何とも早いものだとつくづく思うのだ。

特筆に値することはコレと言ってないのだが、ただただ平和な日常を紫と二人で謳歌するだけなのに、それが偉く幸せだと感じる。

やはり、幸せとは当たり前の中に存在するものなのだと、改めて実感させられる日々だ。

・・・なのだが、一つだけ気掛かりなことがある。

紫は初めて会った頃から何ら変わらぬ容姿で、いまだに成長の兆しが訪れない。

生憎と私は紫の正確な歳を知らない。

だが、そろそろ二次成長が訪れてもおかしくないと思うのだが・・・



まさか、成長が遅れているのだろうか？

それとも妖怪と呼ばれる種は、人間と発育の速度が違うのだろうか？

・・・有り得そうだ。

ふむ・・・そう考えると、やはり人とは寿命も違うのだろうか？

今になって思えば、私は妖怪の生態には無知なのだから、何かあっても不思議ではないのであろう・・・

だがしかし、記憶に残る吸血鬼の存在を思うに、人よりは時間に囚われない生き物なのだろう。

そう考えてみると、寿命の違いや発育の差は十分に有り得る話しだろう・・・っと、私は三度推測する。

驚いた・・・

これ以上はないと言うほど、私は驚いた。

それと同時に、少しばかり困ったことがある。

つい先日、紫の服を新調したばかりだと言うのに、またサイズが合わなくなるとは・・・

しばらくのあいだは、大きめの服を何着か作っておく必要があるな。

しかし・・・

まさか、アレがあーなるとはな・・・これはまさしく、人体の神秘だ。

・・・妖怪だな。

追記・・・

ずいぶんと前に書いた日記に、紫の發育不良に付いて記したと思うが、アレは杞憂に終わったと・・・ここに告げよう。

二年後の私より

八頁目 / 言葉遣い

さて、言ってしまうえば早いものだが、紫に勉強を教え初めてから七年もの時が経つ。

記憶にある日本社会で言うならば、義務教育の大半は終わった辺りだろうか？

最近になつては、元々が知識欲の溢れる優秀な生徒だった紫に対し、私が教えられることにも限界を感じ始めている。

そして、それと伴うように紫の口調や立ち振る舞いも、随分と大人びてきた。

だんだんと語尾を伸ばさなくなり、誰に似たのか人をからかうような発言や、随所に皮肉の入り混じった言葉がかなり増えた。

少し背伸びをした感じが見られ、微笑ましく思えるのだが・・・少しだけ、今後の彼女に不安を覚える。

やれやれ、まったく誰に似たのだから・・・

追記・・・

それと、最近になって紫が・・・私のことを何故だかは知らぬのだが、『おじ様』と呼ぶようになった。

自分がいつまでも若いつもりではないのだが、さすがにおじ様はどうにか出来るのだろうか？

森の中に建てたログハウスで暮らし始め、気付けば十年程の年月が過ぎた。

毎回毎日と同じことを言ってる気もするが、ここまでくるとやはり時が経つのは本当に早いのだと、飽きずにそう感じる。

しかし、十年か・・・

十年と言う月日は、幼かった少女を一人の女性へと変えるには十分過ぎる時間。

成長し大人になった紫は絶世と言言葉が霞むほどに美しく、同時に上品さや艶やかさを兼ね備えた立派な女性へと到った。

私は何処にでも居る普通の男だったならば、迷わず彼女に求婚の申し出をしただろう。

親バカのひいき目などではなく、自信を持ってそうだと言える。

そうだと言えるのだが、もし・・・もし本当に紫が求婚されたら、私はどうしたらいいのだろうか？

親バカと言われたらそれまでだが、私にとって紫は自慢の娘だ。

そこに血の繋がりの有無は存在しなくとも、胸を張って家族なのだ・・・私はあの娘の親で、あの娘は私の大事な娘なのだと言えらる。

つまりは、何処の馬の骨かも分からぬ小僧に、大事な娘をやる訳にはいかんと・・・結局はそうなる訳だ。

追記・・・

だが、性格は少々胡散臭くなった。

太陽のような笑顔は、今や胡散臭い笑顔にしか見えない。

かつては愛らしさを覚えた、上目遣いで子供らしい甘える仕種は、今やきな臭い罨にしか思えない。

・・・何故なのだ紫？

十頁目 / 真実

季節は目まぐるしくも回り、時間は数え切れぬほどの月日の数々を置き去りにして、また新たな季節を繰り返す。

今になっては歴史を刻み劣化の目立つ住まいは何度も改築を繰り返す、隣接した場所にはこれと言った使い道がないにも関わらず、二階建ての物置を造った。

今の所は、冬場に食料を保存する以外の使い道がないが、いつか役に立つ日が来るだろう。

さて・・・

それらは一旦横に置いておくとして・・・今日の晩にでも、私は紫に全てを話そうと思う。

聡い彼女のことだ、わざわざ私が言わなくとも自分の生い立ちに、大方の予想は付いているだろう。

だがこれだけは、私は自分の口から彼女に伝えてやりたい。

私の口から、彼女の母が私に託した願いを・・・アノ想いを話してやりたい。

母の愛を知って貰いたい。

そして、彼女に謝罪してやりたい。

今まで、君に嘘を付いてすまかったと・・・

あの時、君の母を助けられなくてすまかったと・・・

「紫・・・少しいいかね？」

開いていた日記を閉じて、私は背後に立つ紫に問い掛ける。

「あら、気付いてましたの・・・」

気配を殺して背後に立つ紫は、クスクスと笑いながら返す。



「それでおじ様、どうかしたのかしら？」

「先ずは一つ……いつも言ってると思うが、人の背後に立つのは止めたまえ……何故なら、私の心臓に悪い」

「承知の物事に対し驚愕は生まれない……おじ様は昔、私が脅かそうとしたらこう言っていましたわ」

「またそれかね……」

聞き飽きた台詞に、私は軽く疲れを覚えた。

それは彼女がまだ幼い頃の話し……

他にこれと言った娯楽が存在しないからなのか、または紫が私の反応を楽しむ為にやっていたのかは不明だが、アレやコレやと色々な場所に隠れて私を脅かそうとしていた。

しかし、あまりにもバレバレだった為に、一度たりとも私を驚かすには到らなかった。

そんな少女に私が言った台詞……それが今では、彼女の口癖になった。

「いいかね紫？何事にも頻度と呼ばれる物が存在する・・・つまり新鮮さが大事であり、マンネリはいかんのだ」

「ええ、覚えておきますわ」

言うや紫は、再びクスクスと笑う。

「ふう・・・君は本当に良い性格になったようだな？」

まったく、いったい誰に似たのだから・・・

最近では当たり前前となった、このやり取り。

遠い昔に、私の腕に抱かれていた小さな少女。

その面影は、今や平行世界へと消えたのだろうか・・・

「あらあら・・・残念ながらおじ様、私は貴方以外の背中を見て育った記憶がないのだけれど・・・それに付いてどう思います？」

「成る程な・・・君が言うには、つまり私が悪いのだな？」

大変悔しいが、言われてみれば確かにそうだった。

「まあいい・・・それよりも紫、今日は君に大事な話がある」

こと、

「……求婚かしら？」

紫は少しのまを置き、真顔でそう言った。

「いったいぜんたい、君はその電波を何処から受信したのだ？」

「電波だなんて……本気にしていただいても、私は全然構わないですわよ？」

再び真顔で言う紫。

「すまないが、生憎と私は子供と結婚する趣味は持っていない」

「……あら、体は大人ですわよ？」

紫は数秒のあいだ不思議そうな顔で私を見詰めた後、体の膨らみを自らの腕で強調させながら言う。

「頼むから冗談は止めてくれ……そもそも、私が述べているのは歳の問題であって、君の体の発育ではない」

「あらあら・・・ほんと、残念ですわ」

紫は残念そうに呟くと、冗談なのか本気なのか分からない雰囲気  
で肩を落とした。

「・・・ハア」

激しく頭痛がする。

「ともかくだ、今日は君に大事な話がある。出来れば茶化さず  
黙って聞いてくれ・・・」

網膜に焼き付き、決して色褪せることのない光景。

それは、今の私を動かしてると言っても過言ではない、尊くも儂い  
至高の輝き。

「紫・・・君の母は・・・」

この場を以って、私は全てを話そう・・・

君の母が私に見せ付けたあの至高の輝きと、今も私を魅了する尊さ  
を。



蜘蛛は育児記録(紫)へ (上・下セット) (後書き)

ポンポンが痛いのじゃああああ...



育児記録は決意へ

/

決意は離別へ

/

投影によって作り出されたランタンが淡い光を燈す中、私の口から淡々と語られる今に到るまでの全てを、紫はただ黙って聞いていた。話しの節々に入る私の謝罪の言葉に頷くこともせず、言葉を挟む事も一切せずに口を閉じ、揺らぎのない真つすぐな瞳を私に向ける。

こちらを真つすぐに見詰める紫の瞳が、私を通して何を映しているのか・・・それは分からない。

また、それと同時に、問い掛けることも出来ない。

だから私は、独白のような一人語りを続けた・・・



「私は結局、君の母を助けることが出来なかった・・・そして、そんな己を許せずに、自己満足で君を守り続けたのだよ・・・」

何の感情も窺わせない紫の瞳に目を合わせ、胸の内に潜ませた真実の全てを話した私は、まるで体内に蓄積された毒を吐くかのように笑う。

「ハッ・・・私には眩しかったのだよ。君の母が最後に見せた瞳の輝きが・・・己の命を一切顧みずに、ただ誰かの幸福を願うあの姿勢が、私には暗黒に包まれた世界を照らす、太陽のように思えた・・・」

私はあの時・・・彼女が最後の瞬間に見せた瞳の光に、言いようもなく焦がれた。

私はあの局面でありながら「なんて美しい光を秘めた瞳なのだ」と、緊迫感をも忘れてそう思ってしまった・・・

「だから私は、その瞳の輝きの理由を・・・君を救いたかったのだ」

私はあの瞬間、他に何も考えられなかった。

倒れ伏す女性に黙祷を捧げながら、胸の内では歓喜の叫びを上げていたのだ。

こんなにも素晴らしいものが、この世にはあったのかと・・・そう思った。

私の目の前に、こうもたやすく転がってるものなのかと歓喜したのだ。

「・・・」

紫は未だ沈黙を続け、私から目を反らすことをしない。

「幻滅したかね？君を自己満足の為に育てた、嘘つきな男だと・・・母を救えなかった男だと？」

無言の紫に居た堪れない物を感じた私は、身勝手な不安を抱きながら問い掛ける。

「・・・」

私の問い掛けに対し、紫は沈黙の姿勢を貫く。

「クツ・・・沈黙はなかなか効くぞ、紫？」

自棄の言葉に返答など期待してはいなかった・・・だが、私にとって沈黙は何よりも辛かった。

ああ、私は本当に勝手だ・・・

「・・・ねえ、おじ様？」

そんな私の姿に、紫は瞳を閉じて言う。

「物事って・・・時には、過程よりも結果が大事ではないかしら？」

「・・・」

紫の言葉に対し、今度は私が沈黙で応えた。

「物事は過程により結果が生まれると・・・貴方は昔から、私に言い聞かせましたわ」

言葉を続けながら瞳を開き、紫は微笑みを浮かべる。

「だからおじ様・・・私がこの場所で今も息衝ていられるのと言う結果が、貴方と言う過程によって生まれたのなら・・・何を思っ  
て、私は貴方を幻滅できましょうか？」

開けられたその瞳にはあの日、幼い娘を守って自身の生涯を閉じた一人の女性とまったく同じ光を・・・私を焦がしたあの瞳と、同じ輝きを宿していた。

「そうか・・・」

やはり君は、彼女の娘なのだな・・・

「ありがとう紫・・・君がそう思ってくれるのなら、私には何も言うことはない・・・いや、元からそんな言葉は何処にもない」

向けられた笑顔に、私は微笑みを返す。

君がそう言うってくれるのならば、私の存在は何も変わらない。

私は君を守護する盾であり、君の道を妨げる全てを滅ぼす剣だ。

「・・・ああ、それでいい」

失ったはずの輝きに照らされ、胸の内で再び誓いを立てながら私は紫に微笑む。

「それでは紫・・・これから不甲斐ない私をよろしく頼むが・・・構わんかね？」

「ええ、当然ですわ」

返って来たのは、太陽を思わす笑顔。

都合の良い話しだがこの時、私は紫の笑顔に満たされた部分があった。

勿論、未だにやりきれない感情は消えず、シコリのように胸の中に

は存在する。

だが、いっこうに構わんさ・・・

それらを消せずとも、それ以上に胸を満たす温かさがある。

紫の浮かべた笑みが、全てを教えてくれる気がするから、私は前向きに在ろう。

私は八雲紫の笑顔を守れたのだと、そう信じて・・・

「それよりもおじ様・・・」

小さくありながらも確かな喜びを噛み締める私に、紫は言葉を続ける。

「私、やりたいことが出来ましたの・・・少し聞いてくださる？」

「む？私は別に構わんから、なんでも言ってみるが良い・・・して、やりたいことはなんだね？」

「ありがとう、おじ様」

紫は柔らかく微笑む。

「やりたいこと、その具体的な内容は今は言えないのですけれど・  
・二つほど、おじ様にお願いがありますの」

「内容は言えない、か・・・まあ、それも構わん」

紫は『今は』つと言ったのだ、じきに教えてくれるだろう。

「では改めて聞くが、お願いとはなんだね？」

「先ずは一つ目・・・」

紫は目を細め、私の頬に手を伸ばす。

「名前を・・・おじ様の名前を呼んでもよろしいかしら？」

「ふっ、何を今さらなことを・・・」

頬に触れた白魚のような手の平は、滑らかな肌触りを持ちながら染みの一つも存在せず、私の心を優しく撫でるかのように動く。

「好きに呼んでくれて構わんさ・・・いや、むしろ名で呼んでくれないかね？」

頬を撫でる動きに多少のくすぐったさを感じながら、私は紫の頭に手を置いた。

「ふふふ・・・好きに呼んで良いのでしたら、好きに呼ばせていただきますわ」

「一応、先に言うておくが・・・変な呼び名はなしの方向で頼むぞ？」

紫の発言に嫌なものを感じ、私は釘を刺した。

「と、」

「・・・なら、エミヤおじちゃんかしら？」

首を傾げながら空いた手の人差し指を顎に当て、紫は楽しそうに言う。

「勘弁してくれ・・・」

紫よ・・・考える素振りを見せといてそれかね？

「だいたい、私は変な呼び名は止めると言ったではないかね・・・なのは何故、語尾におじちゃんが付いて来るのだ？」

そもそも、それでは初めて会った時となんら同じではないかね？

「・・・なら、エミヤと呼んでも？」

「当たり前だ。何よりも紫……私の名を君が呼ばずして、いったい誰が呼ぶと言うのだ？」

今まですつと、私は君の為にこの世界を歩んで来たのだ……

勝手な話しにはなるが、君が最初に呼んでくれれば、私の名は本当の意味を持たぬ。

何故ならば、君が私と言う過程によって今も息衝いているのなら、私はその逆だからだ。

そう、君が今も息衝いてるからこそ、私は今も息衝いていられるのだから……

「あらあら……やっぱり求婚かしら？」

「……」

「……冗談ですわ」

つまらなそうに言って、紫は私の頬から手を離す。

「それではエミヤと……呼び捨てでも構わないかしら？」



「何度も言っが、好きにしてくれて構わんさ……だが私は、下手に畏まれるよりもそちらの方が好ましいな」

「そう……なら、エミヤ……二つ目のお願いを言って良いかしら？」

私の名を噛み締めながら、紫は言う。

「わざわざ確認を取るまでもないが……取り敢えず、言ってみるといっ」

「なら、エミヤ……しばらくのあいだ、私に貴方が修行を付けてくださらない？」

「オイオイ……何を言うかと思えば、紫……君は本気で言うのかね？」

「あら、私はいつだって本気ですわよ？」

「……」

紫よ……それは嘘が過ぎるのではないかね？

「君に修行を付ける。それ自体は構わないが……改めて聞くが、

今は理由を言えないのだな？」

「ええ……」

一切の濁りが存在せず、優しくも力強い確かな決意を秘めた眼差しが、私を真正面から射抜く。

「私自身の力で、私自身の為に……そして、これからの為にする  
こととしたいことがありますの……だから秘密ですわ」

「……了解だ紫。私は君の為に、及ばずながら力になろうではないか」

やれやれと肩を揺らし、私は紫の頭を撫でた。

「私は君の決意に口出しするつもりはない……だが、一つだけ君に言いたい。何かに迷った時や躓いた時は、迷わずに私を頼ってくれないか？」

「……」

「もしも君が、何処か世界の果ての場所で膝を抱えようとも……私は決して、君を孤独にはしないと約束する。だからお願いだ、何かに迷い立ち止まった時には、この言葉を思い出して私を頼って欲しい……」

言いながらも、私の手は紫の頭を撫で続ける。

決して壊さぬように、そして愛おしげに。

何故この時、私はこのような言葉を述べたのだろうか・・・それは自分自身、良く分からない。

だが、決意を秘めた紫の瞳を目にして、そう言わずにはいれなかった。

「・・・ええ、もちろん分かっていますわ・・・」

私の言葉に紫は柔らかく微笑むと、頭の上に置かれた手に触れたのだった・・・

「エミヤ・・・近いうちに、私は旅に出ますわ」

とある朝、紫の口から放たれたこの一言が、私の頭に衝撃を与えた。

「旅に出るとは・・・また、ずいぶんといきなりだな？」

「世界を周ってみたいの。色々な景色に、色々な人や妖怪を見てみたいの」

「・・・まるで君は、一人で行くような言い草ではないかね？」

「そのとおりですわ・・・だって、私は一人で行くつもりですもの」

然も当然と言いた気な素振りで、紫は続ける。

「それに・・・その為に私は、貴方に師事を求めたのですから」

「そうか・・・」

微笑みを浮かべた紫。

止めることも出来ずに、ただ押し黙る私。

対象外な私達二人はこの時、一時の離別を約束した。

「本当に一人で行くつもりかね？」

雲を割って降り注ぐ春の木漏れ日を浴びながら、私は紫の背中を見詰めて言う。

「ええ・・・何度もおっしゃったように、一人で行かせてもらいますわ」

私の問い掛けに振り返る事もせず、紫はハッキリと返した。

「・・・そうか」

「そんなに心配かしら？」

私の心情を悟ったのか、紫は振り返る。

「自分の身を守る程度の力は付けたと、貴方からお墨付きをいただいたのに・・・貴方はまだ、私のことを一人前としては見て下さないのかしら？」

「君を一人前にか・・・そうだな、私には否定が出来ないな」

私の感情は未だ、紫に対して子供扱いを止めない。

「何故なら、私からすれば君はいつまでも子供だ。だが、それだけではない・・・」

ただ単純に、この身を支える存在が目に見える場所から離れると言うことが、どうしようもなく寂しい。

「じゃあ、寂しいのかしら？」

「・・・ああ、君の言つとおりだよ」

一切をごまかさずに、私は紫の背中に伝える。

「私はな紫？君の側に居れないのが、寂しくて仕方がないのだよ・・・」

親心のような感情がこの身に生まれた時から、君だけが私の生きる目的だった。

だから私は、どうしようもなく寂しいのだよ・・・

「・・・」

「あの日から三年になるかね？私の知る限り全ての護身術の類を教え、君に役立つだろう魔術の知識と基礎、そして戦いに在り方と戦術を教えた・・・」

本来なら紫に対して最も適性が高いだろう魔術などは、記憶の曖昧さからなのか元々の到らなさからなのか、微々足る物しか教えられず。

「女性である君に私がまともに教示出来たのは、全てが直接的な武の類だけだとはな。やれやれ・・・本当は君に、生傷の絶えない血生臭い武術など教えたくはなかったのだが、私にはそれしか出来なかった・・・」

贅沢を言うのなら、戦う為の技術など教えたくなかった。

紫に魔術を教える度、かつて私が師事しただろう少女の背中を垣間

見た。

同時に曖昧な記憶はその背中を霞ませ、胸の中に大きな消失感を生んだ。

それなのに私は、胸が消失感に満たされそうになる度、懸命に教えを乞う紫の姿に満たされた。

クツ・・・

心配する相手に救われるとは、我ながら何とも笑える話だ。

「紫よ・・・いつ如何なる時も微笑みを絶やさず、優雅に振る舞うのだ。それは時に自信へ変わり、時に余裕へと変わる」

私は出来る限り最高の笑みを浮かべ、紫の背中に手を置いた。

「君は私の自慢の弟子であり、同時に最愛の娘だ。だから常に胸を張れ・・・君に不可能など存在しない」

つと、

「あら、私はいつでも笑顔ですわよ？」

紫は振り返り、柔らかい笑みを浮かべる。



「残念ながら、君が常備してる笑みは胡散臭い……だから精進するのだ」

言って私は、浮かべた笑みを皮肉気に深める。

「ひ、酷い……」

私の発言に顔を逸らした紫は、

「私がこんなにも……こんなにも愛くるしい笑顔を浮かべると言うのに、胡散臭いの一言で片付けるだなんて……エミヤは鬼畜ですわ」

そう言いながら、よよよとしな垂れた。

「……」

……何だねそれは？

「紫……いつたい君は、そんな言葉を何処で覚えてきたのだね？」

「企業秘密ですわ」

「……まあ、それはどうでも良い……取り敢えず、体には気を付けるのだぞ？」

頭痛を覚えた私は、脱線した話しを元に戻す。

「ふふふ・・・貴方は時々、とても可愛らしいのね？」

「要らぬお世話だ」

「あらあら・・・」

何が面白いのか、紫はクスクスと笑う。

「いつまでも話し込むのは、寂しん坊のエイヤには悪いから、私はそろそろ行かせていただききますわ」

「いったい誰が寂しん坊だ・・・まったく、君はつくづく口の減らない娘だ・・・」

いったい何処で、紫の教育を過つたのだろうか・・・

「君の言うとおり、無駄話も終わりにしよう・・・そろ、さっさと何処へでも行ってしまえ」

困った愛娘の笑みに手の甲をシツシツと振りながら、私は背中を向ける。

「ええ、言われなくとも行かせていただきますわ・・・」

向けられた私の背中には、紫の言葉が投げ掛けられた。

「エミヤ、今までありがとう・・・私はこれから世界を周り、色々なものを見てまいります。そして、未だ知らない自分を知ると思います・・・」

「・・・」

「私だけの力や、私だけの答え・・・それらを探し出して、必ず貴方の元に戻って来ます。だからエミヤ・・・その時はまた、私の頭を撫でて下さらない？」

「ああ・・・承知した。では紫、またいつの日か・・・必ず会おう振り返らず返し、私は笑う。」

君のやりたいことや求めるもの・・・それがなんなのかなど、私には毛頭分からない。

だが、君が私を求めると言うなら、求めるに到った理由など知ったことではない。

君が何を行おうとも、私には関係ないのだ。

私はどんな時でも変わらず、ただ君の側に……

「……ええ、また」

紫は最後に、小さな別れの言葉を残して歩き出す。

私の背中とは反対の方向へと……

「……」

背中に届いた紫の言葉。

その別れの言葉に、私をどうしようもなく情けない気持ちなり、しばらくのあいだ、一人で立ち尽くした。

「いい加減、子離れをせんと……」

言い聞かせるように口から出た呟きは、静かな空間に虚しく響き渡る。

脳裏には、顔も名前も思い出せない少女がいる。

今の自分と紫が同じように、揺るがぬ決意を前に離別した少女が。

かつての自分が、どのような決意を抱いていたのか……それは思い出せない。

ただ、一つだけ・・・

思い出すのとは別に、今や残像として残る少女があその時に何を思っていたのか、それが不思議と分かる気がした。

「核心は持てないが、きつとお節介な彼女のことだ、不甲斐のない私を見てこんな思いを抱いてたのだろうな・・・」

まったく同じとは言えないが、近い思いを抱いてたのだろう。

「やれやれ・・・しばらくは何を言っても、全て独り言になってしまっな」

芽吹く草花を眺めながら、私は歩き出す。

いつかくる、再会の時を胸に・・・

思えばこの瞬間、紫と離れることで、運命は新たな始まりを告げていたのかも知れない。



育児記録は決意へ / 決意は離別へ（後書き）

理想としては、いつかゆうかりんと肉体言語をさせたかったりする。

絶対負けるだろうけど。

離別は涙へ / 涙は温もりへ / 温もりは誘いへ（前書き）

そして伝説へ・・・



離別は涙へ / 涙は温もりへ / 温もりは誘いへ

／離別は涙へ

季節は巡る。

あの日、紫を見送ってから早くも二十年が過ぎた。

二十年・・・

人であつたなら大変長い年月・・・だが、今の私にはあまり関係がなかった。

老いを見せぬ私の体に、時間の経過は酷く曖昧に感じられる。

しかし、時間を振り返る時にだけ・・・騒がしかった日々を思い返す時にだけ、目まぐるしさを伴い、瞼の内側に紫の顔が何度もちらついていた。

彼女は今も変わらずに、元気でやっているだろうか・・・

二十年と言つ年月の中を私は変わらず存在し、世界も変わらずに回り続けた。

ならばきっと、妖怪である紫も私と同様に、変わらずに存在し続けているのだらう。

そう信じることだけが、今の私に出来る唯一の術。

それに、妖怪の身とは、天命を全うするまでは偉く長そつだ。

私達二人が約束した再会の時までのあいだ、世界と同様に変わらず過ごせばいいだらう。

・・・だが私達とは別にして、人々の歴史は日々進化を続けているよつだ。

ここ最近になって、狩りをしながら山を散策する度に、人間の姿を遠目に発見する。

かつて、私がどれだけ人の存在を探して歩いたか・・・

呑気に山を歩く彼等は、それをちゃんと分かっているのだらうか？

当時の八つ当たりをしようかと、弓を構えた私の気持ち理解出来

るのだろうか？

・・・まあ、先ず理解など出来る訳がないだろう。

やり場のない怒りは矛先を変え、一匹の熊が犠牲になった。

つとは言え、元々が狩りに来ていたのだから、熊を仕留めたことに何も問題はない。

それはいつたい置いておくとし、いまさら姿を現した人間の存在・・・さと、どうすべきか？

私個人としては人の暮らしに溶け込みたいのだが、果たして向こうが受け入れてくれるか・・・

元来、人間という種族は異端を嫌う生き物だ。

姿形は同じであれ、肌の色や髪の色が違うこの身を見て、どんな行動に到るか見当も付かない。

何よりも、ふとした拍子に争いの種に発展したとしたら、それは大変面倒な話しになるだろう。

ふむ・・・そう考えてみると、無駄ないざこざをこちらからわざわざ作りたくはないな。

まあ、ただの人間に恐れを抱く必要はないが、むやみやたらと問題を起こすのは避けたい。

そう、避けたいのだが・・・

向こうから近付いて来た場合は、どうすればいいのだろうか？

現在に到って、我が家に近づく気配を感じる。

数は四つ・・・感覚から予測するに気配達は、そろそろ百メートルを切る距離に達しただろう。

「・・・逃げるか」

呟き、私は椅子から立ち上がる。

身支度は・・・私には必要ないな。

食事や睡眠などは、人外の身になってからと言つもの、限りなく趣味に近かった。

ああ、故に食料は要らぬだろう。

必要になった場合は、狩りなどをして取れば事足りる。

ただの一度も敗走はなく、

ふと、そんな言葉が頭に浮かんだが、

「クツ・・・紫、私も新しい何かを探して見せるぞ」

私は全く以って気にせず、我が家を飛び出した。

「お花、いかがですか？」

「・・・いや、いかがと言われてもな？」

何故こうなったのだろうか？

思い返せど、この話しに到るまで発展した要因が、いまいち分から  
ない。

・・・

我が家を飛び出したのはいいのだが、目的地などはなから存在しな  
い私は、ただ当てもなく山々を走り回った。

紫の居ない現在、制限なく全力で走ることの出来る私は瞬く間に山  
々を越え、気付けば日が沈むまでのあいだにかなり遠くまで来てい  
た。

「ふむ、こいつはなかなかの絶景だ・・・」

そんな言葉が、思わずこぼれた。

視界に広がるのは、今まで大自然の中で生活していたと言うのに、  
それでも見慣れぬ暗闇の中でさえ華やかさを讃えた景色。

言うなれば自然の花園。

そこには見渡す限りに背の高い向日葵が並び、闇空に向かい顔を揃  
えていた。

・・・それはどうでも良い。

問題はその向日葵達の中心に立つ、一人の少女だ。

襷袢たすくわんを一枚だけ羽織り、泥に汚れた髪を腰まで伸ばす少女。

見るからにみすばらしいその身形は、私に何とも言えぬ感情をもた  
らさず。

「・・・」

向日葵と同じように空に顔を向ける少女の姿を、私は沈黙のまま見  
つめる。

闇の下で佇む少女の姿は一枚の絵画のようで、その一切が霞むこと  
なく鮮明に、私の網膜へと焼き付いた。

「・・・いかな」

大きく頭を振るって、私は少女へと歩み寄る。

「・・・」

今だに空を見上げる少女は、私の接近にも気付いた様子はない。

「君は何をしてるのだね？」

すぐ傍まで来ていた私は、こちらに気付く気配のない少女に声を掛けた。

「先程からずっと、君は空を見上げていたようだか・・・何か面白いものでも見えるのかね？」

すると、

「・・・」

少女は無言で振り返り、私の顔をボーっと見上げる。

「・・・む？ああ、大変失礼した。私はエミヤと言う旅の者だ。突然話し掛けて申し訳ないのだが、君の名を教えてくださいかね？」  
振り返りこちらを黙って見上げる少女に、私は頭を下げてから名乗る。

「・・・名前？」

少女は首を傾げる。

「名前・・・私の名前、分からない」



「・・・なんだと？」

この少女は、今何と言ったのだ？

「貴方はエミヤ？」

「あ、ああ・・・私の名はエミヤだが・・・」

少女の反応に、私は戸惑いながらも返す。

「じゃあ、私の名前は？」

「・・・いや、申し訳ないのだが、私に聞かれても分からんよ」

「そう・・・」

少女は私から視線を外し、再び空に向ける。

「・・・」

私も少女に倣い、空へと視線を向けた。

見上げ先には満天の星空。

黒に満ちた世界には、宝石のように散りばめられた星々が、その存在を自らが主張するように瞬いていた。

つと、

「貴方はお花が好き？」

いつのまにか私へと視線を戻していた少女が、こちらを見つめて言う。

「私はお花が大好き。だから貴方に、私のお花をあげたいの・・・  
貴方は貰ってくれる？」

「すまないが、私に花は似合わないのな・・・もっと相應しい人物にあげてはどうだね？」

少女の真意は分からないが、あまり気が進まない。

何よりも、花は私のような男には似合わないと思う。

「そう・・・」

私の返答に、少女は悲しそうに俯く。

「いや、決して嫌いな訳ではないのだぞ？」

「・・・本当？」

俯く少女は顔を上げた。

「じゃあ・・・貴方はお花を貰ってくれる？」

「それは・・・すまない」

「・・・」

私の返答に対し、少女は無言で立ち尽くす。

そして、次第にその瞳には涙が溜まり、

「グスッ」

次の瞬間には、涙のダムは決壊したのだった。

なんでさッ!?

／涙は温もりへ

「まあ、なんだ・・・私が悪かった。だから、そろそろ泣き止んでくれたりすると大変嬉しいのだが・・・駄目かね？」

闇空の下、草原に腰掛けながら私は参っていた。

「ヒック・・・お花、貰ってくれる？」

困る私の真横で膝を抱える少女は、いくぶんか涙の引いた目でこちらを見上げてくる。

「・・・」

「・・・グスッ、お花・・・貰ってくれる？」

再び少女の瞳に、ジワリと涙が滲む。

「・・・ハア」

私は溜め息を一つこぼす。

「ああ、お花でも何でも貰ってやるさ・・・だからお願いだ、もう泣き止んでくれないかね？」

こちらを涙目で見上げてスンスンと鼻を吸る少女に、出来る限り優しい声で応えながら、その頭を撫でた。

いい加減、泣き止んでもらわないと私が困る。

むしろ少女に泣かれたままでは、私までもが泣きたくなってくる。

それに、先程までのやり取りは既に五回も繰り返されてたりするだけに、そろそろ勘弁してもらいたい。

例えるならば、心身共に疲労困憊だ。

「・・・うん」

頭を撫でられた少女は小さく頷き、目尻を擦りながら立ち上がる。

「ふう……」

やれやれ……やっとのこと泣き止んでくれたか。

ああ、助かった……

私はこの時、心の底からそう思った。

「じゃあ、あの……向日葵、貰ってくれる？」

「向日葵だろうが、毒だみだろうが、黒百合だろうが、君がくれるならなんだって構わんよ……それよりも、流石に寒くはないかね？」

オドオドとしながらこちらを伺う少女の肩に、私は自らの外套を掛けてやる。

「コレを着るといい……春とは言えど夜は冷える。私の着ていたお古ですまないが、ないよりは幾分かましだろう？」

「別に寒くないけど、ありがとう」

そう言って少女は、私が渡した紅い外套を羽織る。

「……どういたしまして」

一言ばかり余計だと思ったが、私は気にしないことにする。

「えへへ……それじゃあ、貴方にお花をあげるね。私の大切なお花をッ!」

少女は大きな声で言って、向日葵の下へと元気良く駆け出した。

「ふむ……」

元気に走る少女の背中を眺めながら、大きく首を傾げた私は、

「私はいったい、何をしてるのだろうか？」

あまりにも今さらが過ぎる疑問を口にした。

やったあッ!!

胸の内に響く歓喜の叫び。

笑顔を意識せずとも、少女の顔は自然と綻ぶ。

えへへ・・・初めて、誰かに花を渡せたなあ・・・

気付いた時にはこの場所に居た。

背の高い向日葵達に囲まれて、少女は大地に寝転び空を見上げていた。

最初の瞬間から自己を確立してるのにも関わらず、己の名前もどうやって生まれたのかも分からないまま、この場所に存在していた。

けれど、少女には最初の時から、ただ一つだけ分かることがあった。  
・  
・

それは、蕾が開くことでもたらされる生命の軌跡。



まるで命の開花を思わすかのように咲き誇る、花達の素晴らしさ。

理解すると同時に、少女は自身の存在の意味を知った。

私はもつともつと色々な人に、お花の素晴らしさを知って貰いたい。

少女が初めて抱いたのは、そんな些細な願い。

・・・だが、少女の願いはいつまで経とうとも、叶う時が来なかった。

何故なら少女は、自分と向日葵達以外の存在を知らない。

自分と向日葵達以外の存在に、一度として出会ったことがない。

それ故に、少女は満たされることがなかった。

一人の少女に対して、運命とは斯くも意地悪な物であった。

だがしかし、それも今となっては過去の物へと姿を変える。

満たされることのなかった少女は一人の紅い騎士と出会い、出会うことで願望の充足を得る。

それと同時に、充足がもたらした初めての達成感や少女の心を満たし、その顔に本当の笑顔を与えた。

そして、この瞬間まで意地悪でしかなかったはずの運命はその仕打ちの一切を止めると、少女に対して何処までも優しい贈り物を贈ったのだった・・・

それはなんてことのない、何処にでもある小さな触れ合い

「これね？私が初めて会った人に渡そうって、ずっと・・・ずっとー  
ーと思つてた花なんだッ！！」

私の下まで駆け足で戻った少女は、手に持った物を満面の笑みで差し出す。

「ほう・・・こいつはなかなか、大した一本ではないか・・・これは本当に、私が貰ってしまったていいのかね？」

私は感心しながらそれを受け取り、聞くまでもない質問をする。

「うんッ!！」

即答する少女。

「ふむ・・・元気な返事ではないか」

私は手に持った向日葵の頭を撫でながら、少女に対して優しく微笑む。

少女が私に手渡したのはなんの変哲もない、有り触れた一本の向日葵。

特別な花卉をしてる訳ではなく、特別な色をしてる訳でもない。

ましてや、特別大きな花を咲かせた訳でもなかった。

だが、そんな到って普通の向日葵が眩しい。

「ああ、この向日葵は実に素晴らしいな……」

「その子は私が育てた、自慢の一本だから……だから、大事にしてね？」

「約束しよう」

我が子を思うかのように言う少女に、私は身を屈ませ視線を合わせる。

「君が私にくれた向日葵とその笑顔は、未来永劫に大切にさせてもらう。だからここに誓おう……さて、小指を借りても構わないかね？」

言いながら、自らの小指を少女に向けて差し出す。

「……小指？」

「そうだが……まさか君は、指切りを知らないのかね？」

「……指切り？」

首を傾げキョトンとする。

「……ごめんなさい。私、知らない……」

不思議そうに首を傾げたかと思えば、次のまには申し訳なさそうに俯く少女。

「いや、別に知らなくとも構わんよ……君は私の言った通りに言葉をなぞってくれれば、それでいい」

「……」

少女は怖ず怖ずと小指を差し出す。

「では、お手を拝借させていただきます」

私は少女の手を取り、互いの小指を絡ませた。

「ッ!?」

小指同士が触れた瞬間、少女の肩がビクリと跳ねる。

「オット……驚かせてすまない」

「別にいい……人に触ったの初めてだから、少しだけ驚いただけ

だし……それに……」

少女は言いながらも、繋がれた小指と小指をぼんやりと眺め、

「暖かくて、少しだけ嬉しいな……」

「……私もだよ」

少女の呟きに反応し、私の口からは意識せず勝手に、共感の言葉がこぼれ落ちる。

「私もちょうど、他者の温もりに飢えていてな……」

「……そう、なの？」

「ああ、そうなのさ……私は寂し<sup>ヒミヤ</sup>ん坊だから、な」

唐突に襲う寂しいさを吐き出すように、私は肯定の言葉を発した。

「えへへ……じゃあ、私達はお揃いだね？」

そんな私に少女は楽しそうに笑うと、絡めた小指を互いの腕ごと大きく振るった。

「そうだな……まあ、この場合は似た者同士と言うのだがな」

少女のするがままに小指を遊ばせながら、私も釣られて笑った……

／温もりは誘いへ

闇空の下、指を絡め少女と交わした約束は、私の存在に新たな意味を生む。

そして……

それは私の魂に、新たな誓いを生む。

「では、この向日葵は大切にさせてもらう」

指切りが終わり、私は少女の手から手を離す。

すると、離された手と同時に互いの結ばれた小指同士も離れ、一瞬の間だけ心の中が小さく揺れた。

「……ところで、つかぬことを尋ねるが、君はずっとここに居るのかね？」

だが私は、そんな感情の機敏を一切面には出さずに、少女に対して疑問に思っていたことを聞いた。

「……うん」

少女は小さく頷いてから、寂し気に言う。

「気が付いたらここに居たの……だから私はずっと、誰かが来るのを待ってた」

「そうなのか……しかし、誰かが来るのを待ってたとは？」

「うん、待ってた……お花をあげる相手を、待ってたんだ……だからね？」

言いながら、少女は私を真っ直ぐに見つめる。



「来てくれて、本当にありがとう」

「そうか・・・では、改めてありがとう。それと一つ」

こちらを真つ直ぐに見詰める瞳の中に、小さくもハッキリと映る自分の姿を見据えながら、私は少女の頭に手を伸ばす。

「遅くなってしまい、誠に申し訳ない・・・」

伸ばした手は少女の頭に再び置かれ、優しくも力強い動作で少女の頭を撫でた。

「んう・・・」

頭を撫でられ、少女は気持ち良さげに目を細めると、

「ねえ、なんで貴方は謝るの？」

そう言って、不思議そうに首を傾げた。

「結果として来たのは私だったから・・・だからだよ」

「うん、そうだけど・・・でも、なんでなの？」

「ふむ、なんでか・・・では聞くが、こんな私でも君は待っていた

のдарろ？」

きつとそれは、相手が誰であろうと言えること。

たまたま私だったのだと、簡潔に言っしまえばそれだけで終わる話しだらう。

なのだが、私はこの少女に対し、感謝の気持ちを伝えてやりたい。

「敢えて説明するならば、理由はそれだけかね・・・だからこそそのありがとうと、ごめんねなのだよ」

「・・・良いよ」

少女は目を閉じて微笑む。

「貴方はお花を受け取ってくれたし、初めて触ってくれたから・・・私もありがとつだよ」

「何、これぐらいはやすいものだよ・・・それよりもだ、君はずっと一人なのかね？」

「うん、でも、ずっとお花さん達が居てくれたから・・・私は一人じゃないよ」

「成る程。君は良い家族に恵まれてるのだな・・・」

私は少女の頭から手を離し、空に向かい顔を向ける向日葵に倣い、闇空を見上げる。

「何故、空は……こんなにも広いのだと、君は不思議に思わないか？」

「分からない……」

目を向けずに言う私に、少女は寂しそうに呟く。

「私はここしか知らないから、空の終わりなんて分からない……うっん、空だけじゃないよ？山の向こう側だって知らないし、森の先……森の中だって分からない」

次第に声のトーンは下がり、終いには顔すらも俯かせる。

「そうか……」

私は闇空から少女へと視線を戻し、問い掛ける。

「なら君は森の先や、あの山並みの向こう側……そして、今私達が見上げている空の遙か彼方を知りたいかね？」

「……教えてくれるの？」

少女は顔を上げて、不思議そうに私を見る。

「誰がだね？」

「それは・・・貴方が？」

「クツ・・・残念ながら私は、空の果てなどと言う御大層な物は知らんよ」

私は苦笑いながらも、少女に手を差し出す。

「知りたい物事や分からない物事は、自ら探しに行くのも一興だと思うが・・・君はどう思う？」

「え????」

理解不能と言いたげに、少女は瞳をパチクリさせた。

「ふむ、いまいち分かりづらかったか・・・では、単刀直入に言おう」

言って、私は少女に微笑む。

「似た者同士・・・いや、君の言うところのそっくりさん同士、一緒に空の果てを探してみないかね？」

「・・・連れてつてくれるの？」

「そのつもりだが、嫌かね？」

「嫌じゃない・・・でも、私は家族達を置いて行けない・・・家族が居ないと、きっと私は・・・」

「・・・」

家族、か・・・それはつまり、向日葵達のことを言ってるのだろう。

「ごめんなさい。気持ちは嬉しいけど・・・一人は嫌なの」

言いながら、少女は悲しげに俯く。

「いや、私の方こそ考えが足りずに申し訳ない・・・」

私は少女に謝り、言葉を続ける。

「だが・・・私は君に色々と見て欲しいのだ・・・本来なら会ったばかりの相手に言っているいい言葉ではないのだろう・・・私は君に世界を知って欲しい」

初対面の少女に対し、自分が言っていることがどれだけ厚かましい

言葉なのか、それは自分自身で良く分かっている。

だが私は『この少女を放っておけない』と、あまりにも身勝手なことを思ってしまった。

「初対面の男が馬鹿を言うと、笑ってくれても別に構わない。だから聞いてくれないかね？君が一人を嫌い家族を求めのならば、私が君の新しい家族になる」

「・・・え？」

「厚かましいお願いだと言うことは、私自身が重々承知している。だが君に問いたい・・・私では君の家族になれないだろうか？」

視線は向けたまま、手も差し出したままに言う。

家族・・・その言葉に惹かれる物があった。

それとは別に、少女の悲しげな表情を見ると、何故か私の頭に紫の泣き顔が浮かぶ。

今や遠くへと旅立った、愛娘の・・・幼い紫の姿が。

だからなのか、私はこの少女を護りたいと思った。

この少女の横に立ちその一生を見守りたいと、思ってしまった。

「・・・」

少女はただ黙り、差し出された手を不思議そうに眺める。

「繰り返すが、私は君と家族になりたい・・・だから向日葵の娘よ、良かったらこの手を取ってくれないか？」

離別は涙へ / 涙は温もりへ / 温もりは誘いへ（後書き）

・・・なる訳もなく。



誘いは命名へ / 命名は海へ（前書き）

ふむ、未完成だな・・・

/

「私ね・・・本当は寂しかったんだ」

私の問いに込められた願いは、少女の言葉と右手に伝わる温かさで返された。

「ああ・・・今までの間、君は一人で良く頑張った」

私はホッと胸を撫で下ろし、一言一言に慈愛を込めながら頷く。

「本当は・・・本当はずっとね？誰かが迎えに来てくれて、私を抱っこしてくれるって思ってた」

言いながら少女は私を見上げ、瞳を涙で濡らす。

「でも、誰も来なかった。ずっと一人だった・・・私には親が居ないのかな？って、そう思ってた・・・けど、それって凄く寂しかった」

た」

その瞳には涙の粒を作り、止まる事も知らずポロポロとこぼれ落ちた。

可哀相に……

いくら向日葵達を家族と呼ぼうとも、そこには言葉を交わす事はない。

生まれたばかりの少女にとって、それは寂しかったのだろう。

「そうだな」

私は少女を真つ直ぐと見詰め返し、自由の効く左手をその頬に伸ばす。

「涙は女の武器と良く言うが……これは確かに強烈だ。特に君のような少女にやられてはな……」

そう言うや、伸ばした左手が触れた少女の頬を摩りながら、ヤレヤレと肩を揺らした。

つと、

「グスッ……ごめんなさい。すぐに泣き止むから置いて行かないで……お願い」

私の言葉をどう取ったのか、少女は鼻を鳴らしながらも謝り、止まらぬ涙を消す為に目元をゴシゴシと擦る。

「待て待て、私は別に嫌だと言ったのではない」

私は内心で焦りながらも少女の頬を撫で、冷静に否定する。

「だいたい、自分で連れて行くと言った矢先に置いて行くなど、絶対に有り得んよ」

むう、今のは完璧に私の失言だ。

参った、これは非常に参ったぞ……

「……本当？」

「ああ、本当さ……むしろ、紛らわしい事を言ってますまない」

私は謝罪を述べながら、少女の頬に残る涙の後を指でなぞる。

「うつん、謝らなくて良いよ……」

少女は自分の頬に当てられた私の左手に、自らの左手を重ね合わせる。

「だからお願い・・・私を一人にしないで」

「クツ・・・その問い掛けに、私は当たり前だと応えようか」

少女の体温を両手に感じ、私の顔は自然と微笑んだ。

「そもそも話し、私は君の家族なのだぞ？それも、自ら家族を名乗り出たぐらい君を溺愛するな・・・だから君を、絶対に一人になどしないさ・・・ああ、これは約束だ」

そう言っつて、少女と重ね合わせた両手を強く握る。

「うん、うんッ!」

少女は笑い、私の両手を強く握り返す。

満面の笑みと共に返された返事には、夜を照らす眩しさを私に見せた。

少女の笑みが私に物語る。

繋がれた手は固く結ばれ、私と少女の心に別々の温もりを与える。

今まで求めていた物が満たされる少女と、与える事で満たされる私。

これは全て、私の自分勝手な解釈かも知れない。

己の行いを正当化する為に、無意識下にこじつけた物かも知れない。

だが、こじつけならこじつけでも、それならそれで良いではないか？

自己満足でもいっこうに構わないと、かつて己に言い聞かせたでないか？

目の前に少女の笑顔があるなら、アレやコレやと小難しく考えるよりも先に、少女に笑顔を与えられたと言う結果を喜ぶべきではないか？

ああ、そうだな。

「そう言えば、確か君には名が無いのだったな・・・」

夜風に揺れる向日葵達を遠目に眺めながら、私は一つの風景を思い浮かべた。

「ふむ・・・君は風見鶏と言う物を知っているかね？」

「・・・知らない」

「そうか・・・では、分かりやすく教えようかね」

私は少女の腕を引き、その体を向日葵の正面へと向ける。

「見てみたまえ、風に揺れる向日葵達を・・・さて、それでは向日葵を見ながら聞いてくれ。風見鶏とはな？ヨーロッパと言う国で住まいや教会堂の屋根に取り付けた、鶏の形をした風見の事を言うのだよ」

「・・・風見って、何？」

「風見かね？」

私は不思議そうな顔をする少女に微笑み、

「風見とは、風向計と言う風の方向を知るための器具の事でな？そして、それらとは別にして、風見鶏には風向計とは別の意味もあるのだよ」

「別のって、どんな意味なの？」

「色々と言があつて、一言では簡単に説明出来んのだが・・・まあ、私の捉え方と言えば厄除けかね？」

かつて、ヨーロッパなどで風見鶏がもつとも良く使われた理由・・・それは魔除け。

魔を払い光を得ると言う程だ、一種の守り神だったのだろう。

現在になつては優柔不断や日和主義など、曖昧さや調子の良さを表す中傷的な意味に例える事が殆どなのだが・・・本来、風見鶏には『風に抗して立つ前向きで雄々しい様子』つと言う使われ方が存在する。

「・・・厄除け？」

「そう、厄除けだよ・・・それと、風見鶏はな？屋根の上で風に揺られ、太陽の光を一身に浴びるのだ。その姿はまるで向日葵のようだと、君は思わんかね？」

どんな強風や豪雨にもめげず、後に射す光にその身を晒す様・・・それは不屈さと浄化を意味するのもも知れない。

「向日葵って・・・皆にはそう見えるのかなあ？」

「さて、どうだかね・・・ここまで語つといて何だが、結局は私の考えでしかないからな」

私は言いながら、少女の体を抱き上げる。

「だが、君が向日葵の娘なら・・・向日葵達にはそうあって欲しいと、私は思うのだよ」



「私、そんなに凄くはなれないよ・・・」

少女は俯いて言う。

「だって・・・私は淋しがり屋で泣き虫だもん」

「ふむ・・・君は自分の事を、そういう風に評価するのかね？」

「・・・うん」

少女は頷き、夜風に揺れる向日葵の姿へと顔を向ける。

「私はずっと・・・ずっと、あの子達に守られてたもん・・・」

「では、なれば良いだけの話ではないかね？」

「・・・」

少女は黙り込み、まるで眩しい物から顔を逸らすかのように、向日葵達からその視線を外した。

「無言と言う事は、君はそうなる自信が無いのかね？」

「……」

再び無言の少女は、悲しそうに頷く。

「そうか……ではこの場で、私が君に姓名を授けよう」

私は少女の体を強く抱き締める。

「決してくじけぬ心を持ち、何者よりも強く生き、数多の厄災を払い除けるように『風見』と言う姓を……」

「……私が、風見？」

「そうだ……そして、何事にも立ち向かう勇気を持ち、勇ましさ  
を瞳に湛えながらも幽艶であるように、花々に対する慈愛が香る君  
に……向日葵の娘である君に、『幽香』と言う名を授けよう」

「風見に、幽香……それが、私の名前？」

「ああ、今から君の名は風見幽香だ」

まあ、勇香でも良かったのだが……流石に、少女の名に使う漢字  
ではないと思った。

「勝手に命名してしまったが、嫌かね？」

嫌だと言われたら、その場合は二人で考えよう。

「嫌じゃない……けど、名前が凄くて不安だよ……」

「クツ……気にする必要はない。偉そうに名付けといて悪いが、名が立派で意味深いと言うのは、単純に願掛けの意味でもある」

不安げな少女に、私は笑いながら言う。

名は体を表すと良く言うが、変に気取る必要はなければ飾る必要もない。

むしろ、いくら上辺を飾った所で、良くてメッキ止まりだろう。

何かの拍子に剥がれてしまうようなメッキでは、その者を表す真の意味はない。

「ほ、本当に大丈夫かなあ？」

「何、心配はいらんさ。だから君は、ありのままに生きれば良い……それだけで、名は色々な意味を持つのだ」

未だ弱々しい少女……だが君は、向日葵達を慈しむ心を持つてる。

「だから心配は無用だ。君は風見幽香と言う名に相応しい……いや、君には風見幽香と言う名が実に相応しい」

「ありがとう……じゃあ私、今日から風見幽香で良いんだよね？」

「ふむ……まず、一つだけ訂正しようかね。君が風見幽香なのではなく、風見幽香が君なのだ……だから私に確認を取る必要は皆無だ」

今この場で重要なのは、少女に付いた名が何なのかではない。

そこに込められた意味は関係なく、少女が名を持った事が重要なのだ。

「え、えへへ……風見幽香か……名前が付くって嬉しいんだね？知らなかったよ……」

少女……いや、幽香は恥ずかしげに俯いて、私に抱き着く。

「ねえ？家族で名前をくれたって事は……貴方は、私のお父さんになるのかなあ？」

「いや……まあ、確かに名付け親と言う言葉は存在するが……」

確かに私は家族と言った。

「だが、いきなりお父さんかね？」

私は困惑しながらも、幽香に聞き返す。

つと言つか、私をお父さんだと？

そんな言葉、紫にすら言われた事がない・・・

こと、

「じゃあ・・・」

幽香は頬を染めたまま、目一杯の笑顔を浮かべ言う。

「やっぱりお父さんだね」

「・・・え、やっぱりって、なんでさ？」

そして私は狼狽える。

／命名は海へ

相も変わらず頭上に広がる闇空。

その闇の下で、私は幽香を背負い山道を降る

「ねえ、お父さん？」

私の背中に背負われた幽香が、楽しそうに言う。

「これから私を、何処に連れて行ってくれるの？」

お父さん、か・・・

あの時、幽香に名を授けた瞬間から、私の呼び名はお父さんに定着した。

だが私は、幽香からお父さんと呼ばれる度、その言葉に含まれた意

味にわずかな戸惑いを感じる。

しかしながら、若干の悦に浸っていたりもする。

しかし、まさかお父さんときたか・・・

ふむ・・・少しくすぐったいが、お父さんも悪くはない。

懐かしい話しになるが、かつて紫が私を『おじちゃん』と呼んでいただけに、新鮮さがあって素晴らしいと思える。

私はそんなことを、口には出さず胸の内で噛み締めた。

・・・だが、それはほんの束の間に終わる。

何故なら、唐突に私の脳裏に紫のつまらなそうな顔と、まるで睨み付けるかのようなジト目が浮かび、一瞬にして悦から鬱に到った。

何故だ・・・何故そんな目で私を見るのだ紫？

「そうだな・・・」

私は幽香の声に応えながらも、背中に感じる温かさに懐かしさを覚えてた。

すると、再び紫のジト目が脳裏に浮かんだりしたが、取り敢えず気にしないことにする。

「取り敢えずは山を越えて、海でも目指してみるかね？」

「・・・海って、なに？」

幽香は私の首筋に頭を置きながら、不思議そうに言う。

「む・・・まさか君は、海を知らないのか？」

実物は知らないだろうと思っていたが、まさか海と言う名所まで知らぬとは・・・さすがに予想外であった。

「うん、知らない・・・ねえお父さん、海ってどんな所なの？」

「海か・・・そうだな、分かりやすく言うのなら、果てしなく大きな水溜まり・・・だろうか？」

この時、自分で言うつといて疑問形なのが微妙だと、私は内心で呟いた。

「大きな水溜まり？」

幽香は足をブンブンと振るい、



「じゃあ、泳いだり出来るのツ!？」

つと、私の肩から顔を覗かせ大きな声で言った。

「あ、ああ・・・泳いだり出来るぞ？」

幽香が発した突然の大声に、耳が少々痛い。

つと、

「　　本当ツ!?!？」

幽香は私の耳元で、先程よりも大きな声を上げた。

「・・・ほ、本当だ」

私は微笑みながら幽香に返すが、耳が痛かった。

グ、グウツ・・・

こ、鼓膜が・・・幽香の声が頭の中で反響する・・・

だが、

「やったぁーーーーッ!!!!」

幽香がそんな私に気付く訳もなく、耳元で再び大声を上げて万歳をする。

私にしてみれば、もはや追い撃ちだ。

「・・・そ、そうか」

耳がとてつもなくキーンとして、頭の中がクラクラした。

「目的地に着く前から喜んでくれて、私としては何よりだよ・・・  
ハア」

そう言つて、私は幽香の大声で麻痺した頭を振るいながら、小さい溜め息をこぼしたのだった・・・

心の内で、『もう少し声のボリュームを下げてくださいたら、それこそ何よりだったかな・・・』などとこぼしながら・・・

視界の先に広がるは、とても幻想的な光景。

世界は光を求めるとうねり、朝焼けに向かう赤と紺が上下に隔たりなく溶け合い、空間に侵食するかの如く混ざり合う・・・

澄んだ水面が波立つ度、波間では音を生み、音は鼻腔を満たす潮の香りへと発展する。

夜風は空に掛かる濁った白を押し流し、風のを置き去りにすると同時に、ありとあらゆる色を運ぶ。

それはまるで、終わりのない空と、星を覆う大いなる海とが織り成す二重奏。

言葉では到底表現し切れぬ現象は、見慣れたはずの世界を幻想の世界へと変える。

「見慣れたはずの光景だが、改めて見ると魅せられるものがあるな・・・」

まるで、何かの拍子に神隠しに遭遇した後、世界の果てに迷い込んでしまったかのようなようだ。

・・・

山々を越えた私達の眼下には、母なる海が壮大なるその様を広げた。長らく時を山で過ごしていた私は、その光景に思わず息を呑んだ。

魂に記録映像として残る、青い海と爽快な青空。

念願の・・・夢にまで見た海と空は、私の視界に余計な物を何も混じらせる事なく存在する。

確かに私は、幽香の為にここまで・・・海までやって来た。

だが、現物を実際に目にして一番感動を覚えたのは、間違いなく私だと言える。

「うわぁ・・・」

幽香は溜め息をこぼし、幻想的な光景に見とれる。

「海って、凄く綺麗なんだね？お父さん・・・」

「ああ・・・私自身、改めてそう感じるよ・・・」

私は心ここにあらずと言った感じに、呆然としながら幽香に返す。

長いあいだ山の中で時を過ごしていただけに、久しぶりに見た海は感動を生んだ。

・・・いや、考えてみればそれ以前の話しだろう。

私の知る海は記録の映像でしかなく、この身が新たな生を受けてから初めて見る海なのだ。

だからこれは、当たり前前の感動。

「綺麗だもんね・・・それに、泳いだら気持ち良さそう・・・」

「君の考える通り、海水浴はなかなか気持ち良い物だぞ」

私は言いながら、幽香を背中から下ろす。

「取り敢えず、今日はいったん休むとして、海を堪能するのは明日へと持ち越そう・・・」

「残念・・・泳ぎたかったなあ」

幽香は私の背中から降り、つまらなそうに唇を尖らせた。

「すまない幽香・・・私も君にお預けするような真似はしたくはないが、疲れた体で泳ぐのは危ない・・・だから先ずは体力を回復させ、万全な状態で遊べば良い」

諭すように言って、私は幽香の頭を撫でる。

夜の海とは大変危険な場所だ。

理由としては、見通しの悪さや波が高い事によって、知らぬ間に沖に流されるなどの要因が上げられる。

つまり、遊び半分で夜の海に入ると、誤って命を落とすかも知れないのだ。

・・・

だがその実は、夜は寒そうだと言う個人的な意見が、一番の要因だったりする。

「さて幽香、今から寢床の代わりになる場所を、二人で探すとするかね・・・」

そう言いながら、私は幽香の手を引いた。



誘いは命名へ

/

命名は海へ（後書き）

ゆっくり改訂中



海は時化って・・・まあ、時化はホニヤララへ(前書き)

なんでもなあーい

なんでもなあーい

君のホニヤラ、ラーに

by・あずきちゃん

海は時化って・・・まあ、時化はホニャララへ

/

雲一つない青空と、照り付ける太陽。

晴れ渡る世界は青い宝石のように輝き、柔らかい春の風がそよぐ空を力モメ達が自由に飛んでいる。

ここはまさに、水辺の楽園。

私達は母なる海へと誘われるかのように、浜辺を駆け回り砂の上に足跡の軌跡を残す・・・はずだった。

「風が強いね・・・」

私の隣に立つ幽香が、ぼそりとこぼした。

「ああ、まさに強風吹き荒れる・・・だな」

私は海を眺めながら、幽香へは顔を向けずに応えた。

「雨もすごいね……」

つと、再び幽香はこぼす。

「すごい雨、か……もはやこれは、豪雨と呼ぶべき激しさだな」  
「応えながらも、私は幽香の体を抱き寄せる。」

「流石に寒いだろう……気休めにしかならんが、私の影に入るといい」

「……良いの？」

「全く以って、構わんよ」

「……うん。ありがとう、お父さん」

そう言って、幽香は私に身を寄せた。

「なに、感謝などする必要はないぞ？私は君の保護者として、当然のことをしたまだから……」

私は微笑みを浮かべ、幽香の頭を優しく撫でた。

「しかしまあ、笑えるぐらいに酷い天候だ・・・」

ビュービューと強風に吹かれ、ザーザーと横殴りの雨に打たれる私達二人。

なるべく幽香に雨が当たらぬようと、私は自分の体を盾にするが、そんな努力も虚しくずぶ濡れの幽香。

なあ、天を司る神よ・・・この仕打ちは、あんまりではないかね？

「そうだね・・・波も凄いいし、今入ったら波に飲み込まれて流されそうだね・・・」

「ああ、漁師達から言わせれば、まさに大時化だな・・・それより幽香よ？言わなくとも理解してるだろうが、絶対に海へ入ってはならんぞ？」

「うん・・・少し残念だけど止めとく」

私の忠告に幽香は頷く。

「でもお父さん・・・これからどうするの?」

「ふむ・・・」

どうするも何も、このまま雨に打たれ続ける訳にもいかんな・・・

「取り敢えずは、木陰で雨宿りかね・・・いや、もっと良い方法があったな・・・トレス・オン投影開始」

いまさらになつて気付いた私は、傘を投影しながらも自らを叱咤する。

オイオイ、私よ・・・何故に君は、こんなにも簡単な事に気付かなかつたのだ?

もしかして、アレかね?

所謂、君は馬鹿と呼ばれる部類なのかね?

つと、

「うわぁー・・・凄いよお父さんッ!! ねえ? その傘、何処から出したのッ!?!」

幽香は瞳を輝かせながら、投影によって造り出された一本の傘を仰視する。

「気になるのかね？」

「うんツ！！」

私が尋ねると、幽香は雨の音を遮るかのようになり、元気な返事を返した。

「まあ、教えてもなんら構わんが、先ずは雨を凌げる場所まで移動しようではないか」

そう応えてから、投影で造り出した傘を開く。

「さて、おいで幽香……」

片手に傘を持ちながら、空いた腕に幽香の華奢な体を抱え上げた。

「きゃツ！？……お、お父さん乱暴だようツ！！」

突然私に抱えられた幽香は頬を染め、足をバタバタと振り回す。

頬を膨らまし紅に染まったその顔に、抗議の意を表にしながら。

「さてさて……それでは今から、お転婆なお姫様をエスコートするとしますかな……」

そんな抗議の眼差しをまったく気にも止めずに、私は木陰を目指し  
足早に歩き出した。

降り続ける雨。

吹き荒れる風。

雨音と風の音が、一帯を支配する中、とある屋敷の薄暗い一室からは、  
男女の話し声が聞こえる。

「雲雀様・・・そろそろ次の妖怪を探さねば、朝廷への貢ぎ物が用意出来ませんぞ？」

「ふん、言うな慈門よ……そのような事、そなたに言われなくとも分かつちよるわ……」

雲雀と呼ばれた女は、男の言葉に鼻を鳴らした。

「しかし、大和中央の豪族達は、実に扱い易い……まさか妖怪の死体を土産に渡すだけで、一族でもないわっちが姓を貰えるとは……  
・ 氏姓制度が聞いて笑えると、そう思わんかえ？」

「仕方のない事です」

対する慈門と呼ばれた男は、表情を変えずに言う。

「普通の人間に、妖怪を殺すのは不可能……いや、殺すなどといったの外、殺されるのが末路でありましょう……つまりは雲雀様貴女様が他者よりあらゆる面で秀でていて、妖怪を殺すだけの力をも持っている事、それが当たり前前に評価された……それだけの話しでございましょう」

「ホホホツ……これも全て、わっちが神に愛されてる証じゃのう？」

女は高らかに笑い、その顔を歪める。

「はてさて、次はどんな妖怪が見付かるか楽しみじゃ……なあ、慈門よ？」



「・・・はい」

男は女の問いに深々と頭を下げ、己の口元を三日月形へと吊り上げた。

人間とは他の生き物よりも、欲に対して忠実に生きる生物だ。

賢さを武器に餌を捕る獣とは違い、腕力を武器に餌を捕る妖怪ともまた違う。

かつては生きる為の糧であった食事・・・それは次第に娯楽の一部へと変わり、進化と共に本来必要のなかった物にまで目が行き、己の保身と見栄を重んじるようになる。

人々の進化と同時にして、とどまる事の知らない欲求は、制限なく無尽蔵に増え続けた。

そして人々は、生きる事とは何ら関係のない様々な娯楽を生んだ。

知性とはなんだろう。

食べるとはなんだろう。

種を残すとはなんだろう。

人は人として歪み、発展の中に暗い闇を生む。

妖怪は妖怪としての形を保ち、次第に人との関係に変化を迎える。

世界は動き続け、歴史をなぞる。

正史にはその一切が記されぬ、深く暗い部分をも・・・

／時化はホニヤララへ

「ふう・・・」

私は胸に抱えた幽香を下ろし、雨雲が去り晴れた空を見上げる。

「どうやら、あの雨は局地的なものだったようだな・・・」

木陰から木陰を転々としながら山へ戻ると、先程までの豪雨は嘘みたいな天気へと変わり、頭上には雲一つない晴天が私達を見下ろしていた。

しかし、見上げた先・・・私達が先程まで居た山の向こう側にはまだ黒い雲が広がり、そこでは変わらず豪雨を降らしているのだろう。

「山の天候は予測出来ない、か・・・成る程な、確かに頷ける」

言いながら、私は空へと向けた視線を下ろした。

気圧や気候の問題なのか、または雲の切れ目に来ただけなのか、どちらにせよ雨は過ぎ去った。

雨脚が読めない以上、今のうちに身を寄せる場所を探しておいた方が、今後を考えた場合、得策であり利口であろう。

「さて、再び雨が降って来る前に・・・ん？」

空から幽香へと視線を下ろした私は、屈み込む彼女の姿に首を傾げた。

「どうしたのだね、幽香？長いこと雨に当てられて、体が冷えてしまったのかね？」

「うううう……お、お父さん……」

幽香は自らの体を抱きながら、ぶるぶると身を震わす。

「本当に大丈夫かね？まさか……お腹でも痛くなつたのかね？」

若干の聞き難さを秘めた質問であつたが、品の良い問い方も分からない上に何も聞かない訳にもいかず、私は間をおきながらも率直に聞いた。

「わ、わた、私……が、我慢が出来なかつたよう……グスツ」

顔を上げた幽香はそう言つて、泣きベソをかいた。

加えて伝えると、その顔は羞恥に染まり、真っ赤であつた。

「ふむ……幽香よ？」

泣きベソをかく幽香の姿にピンと来る物があつた私は、優しく微笑みながら問い返す。

「君の言う我慢とは、まさか俗に言つところの……お手洗いのことかね？」

「……うん」

返って来たのは、肯定の言葉と泣き顔だった。

「……」

「ヒック……ご、ごめんなさい。お父さんに借りた上着、汚しちやっただ……」

「……いや、別に大したことではないさ。洗えば済む話しだからな……まあそれに、雨でさんざん濡れた今となっては、何ら変わりはありませんよ」

多少なりと思う所はあったが、私は微笑みを崩さずに言う。

「だから幽香よ、お願いだから泣かないでくれ……理由はどうであれ、君に泣かれるのが私には一番辛い」

「お、お父さんは……怒ってないの？」

私の顔を見上げる幽香は、オドオドと不安そうに聞いてきた。

「ああ、別に構わんよ」

言って私は、幽香の微を優しく撫でやる。

「しかし幽香・・・着替えを用意するまでのあいだ、取り敢えずはそのまま我慢してくれないか？」

「うん、分かった・・・本当にごめんなさい」

「なに、貸した本人が構わないと言ってるのだ、君が気にする必要はない」

ヤレヤレと肩を揺らし、私は幽香の体を抱き寄せた。

「まったく、君は私に謝ってばかりではないか・・・幽香、君はいたい、何がそんなに不安なんだね？」

「だって・・・だって、お父さんに捨てられたら私・・・」

私に抱き寄せられ、幽香は一瞬だけ身を竦ませる。

「つまり・・・君は私に嫌われたくないと、そう言うことなのかね？」

「・・・うん」

「では、ハッキリと言っておくかね・・・私が君を嫌いになり、終いには捨てるだど？ハッ、そのような下らない心配など、するだけ

無駄だ……そんなことは先ず有り得ない。いや、あつてなるものか」

この私が、幽香を捨てるだと？

そいつは戯言が過ぎて、臍で茶が沸かせそうではないかね。

「それ……本当だよな？嘘じゃないんだよね、お父さん？」

言いながらも幽香は私の体に腕を回し、決して離さぬようと力を込める。

「ああ……当然だよ、幽香……」

幽香に抱きしめ返された私の顔は自然と綻び、胸には懐かしい温かさすら生まれる。

その温もりは優しく、この身の渇き全てに浸透するかのように広がり、心を悠揚とさせる熱が冷えた体をも温かく包んだ。

「えへへ……やっぱり、お父さんだ……」

「やっぱり、か……何がやっぱりかは知らんが、私に言えることは以上だ」

私は幽香の背中を摩りながら、口には出さず心の中で呟いた。

まったく、愛おしい娘だ……

古い話しになるのだが、幼少期の紫はどちらかと言えば我慢強い娘で、露骨に甘えたり感情の機敏で涙を流す娘ではなかった。

もちろん泣く時は泣くが、私に弱さを見せまいと服の裾を掴み、決して泣くまいと口をへの字に結ぶことが殆どであった。

そんな、意地っ張りな紫とは対照的に、泣き虫で甘えん坊な幽香。

タイプのまったく違う二人は、それぞれに私の心をくすぐり満たす。

「さて……話しを戻すが、いつまでもここに居る訳にもいかんでな、君の花園まで戻るとしようかね？」

「うん……」

返事はしたが、未だ私に回した腕を解かない幽香。

「……何か言いたげだが、どうかしたのかね？」

動こうとしない幽香を不思議に思い、私はそのままの格好で聞く。

まあ、このままでも歩けないことはないが、幽香を正面に抱えたこ



の体勢では、いささか歩き難い。

っと、

「このままでも・・・良い？」

幽香はそう言つて、私を上目遣いに見上げてきた。

「ふむ・・・まさか幽香、君は抱っこを御所望していたり・・・いや、御所望では分らんか」

一度、首を左右に振るつてから言いなおす。

「つまり君は、私に抱っこして欲しかったり・・・するのかね？」

「・・・うんッ!」

一拍置いてから返された、元気な返事と眩しい笑顔。

「ククッ・・・承知致した、お姫様」

私は笑いを堪えながら幽香を抱き上げ、来た道に戻る為に歩を進めた。

その時・・・

「・・・なんの音だ？」

後方から微かに蹄の音が聞こえ、私は自然と振り返る。

こちらに向かい、静かに歩を進める足音。

人の限界を超えた私の聴覚は、確かにその音を捉えた。

「どうしたの、お父さん？」

立ち止まり振り返った私に、抱っこされた幽香が言う。

「幽香・・・この山には野生の馬でも生息しているのか？」

「お馬さん？」

幽香はキョトンとし、首を傾げる。

「いや、なんでもない・・・それよりも、早く行こうか」

気にはなったが、立ち止まるまでのことではないと、私は再び歩きだした。

「……臭うぞえ」

馬に跨がる女は口元を歪め、その顔に残虐な笑みを作る。

「雲雀様、どうかなさいましたか？」

突然笑みを浮かべた女に、馬を引く男は尋ねる。

「慈門よ、札を用意しとくのじゃ……」

女が男に返したのは、その言葉だけ。

「……札を？それはつまり……近くに居るのですね、朝廷への貢ぎ物が？」

女の言う意味を理解したのが、男は馬を引きながらも笑みを浮かべた。

その笑みは女同様、残虐で醜く歪んでいる。

「どつやらわつちは、つくづく神に愛されちよるようじゃな……ホホホホッ！！」

高々と上がる笑い声。

ちょうど土産を探して、後の方針を話し合っていたところだった。

それがまさか、雨が上がり仮の宿を出て早々に、朝廷への土産物と巡り会うとは……まさに、天は我に有りと言わんばかりの幸運。

女は我が身の幸運に、ただ笑うしかない。

「急ぐぞえ、慈門……わっちを名声へと導く糧が逃げる前に、さつさと捕まえて始末せねばならんからなあ？」

「仰せのままに」

そう応えるや、男は馬を引く腕に力を入れ、歩みを早めた。

我が身の私欲。

従える女と従う男、二人の人間はそれを得る為に山を登る。

海は時化って・・・まあ、時化はホニャララへ(後書き)

サブタイトルが一番適当だった時期。

ホニヤララは火の海へ 上

/  
?

「そら、到着だぞ幽香」

そう言って私は、背中の幽香に振り返れば、

「……寝てるのか？」

僅かな息遣いと、風に揺れる緑の長い髪だけが、私に応えた。

疲れていたのだろうか？

「……結果として、私の我が儘に振り回してしまったな……」  
やはり、疲れていたのだろうか。

「今回は私のミスだ……なので、一先ずは反省をするが、すぐにも挽回するつもりだ。だから、また海に行こう……」

風に揺れる向日葵達の中心に寝かせようと、腕に頭を乗せて問い掛けるが、本人からは何の返事もない。

寝てるかどうかを確かめるようにと、軽く体を揺ると、何も反応がないままカクンと頭が落ちた。

丁寧に体を寝かせ、その顔を覗き込めば、

「・・・スウ・・・スウ・・・」

微かに聞こえる程度の小さな寝息を立て、気持ち良さそうに寝ていた。

その寝顔はとても可愛らしいく、見た者全てを笑顔にさせてしまっ  
そうだ。

「ふむ・・・」

いつの間にかやら、寝てしまったようだ。

「起こすのは先ず論外として、さてどうするか・・・」

向日葵達に囲まれ、気持ち良さそうに眠る幽香の表情があまりにも  
幸せそうで、起こしてしまうのが申し訳なく思える。

「・・・くしゅんッ」



そんな、私の葛藤とは裏腹に、幽香はくしゃみを一つ吐いた。

起こしてしまったか？

私はそう思い、再び幽香の顔を覗き込む。

だが、起きる気配はなく、寒そうに自らの体を抱きしめ、

「……お父さん……」

っと、そう呟いてから体を震わせると、幸せそうに微笑んだ。

「やれやれ……これはまいった」

幽香の寝言に対して、自分の顔が情けなくも綻んだのが、手に取るように分かる。

「いかな……このままでは、風邪を引いてしまう」

頭を数回振るい、緩み切った自分に葛を入れる。

良いか私よ、今は和んでる場合ではないのだ。

幽香の体が冷え切らぬように、暖を取る事が先決。

私に……この娘の父として出来る事は、すべき事はそれだけなの

だ。

「ふう・・・自己処理、完了。私は自分のすべき事をせねば・・・」  
頬を叩き、私は緩んだ表情を引き締める。

「さて、早急に薪かその代わりになる物でも探してくるか・・・それでは幽香、私は暫く君の側を離れるぞ？」

「・・・」

当たり前だが、寝ている幽香からの返事はない。

「幽香よ・・・良い子で待ってるのだぞ？」

言いながら屈み込み、寝むる幽香の髪を優しく撫でた後、私は森へと向かった。

後に私は、自分の行いを呪う事になる。

何故この時、彼女を一人にしまったのかと・・・

向日葵の少女は夢を観る。

遠い未来で父と二人、仲良く暮らす夢。

沢山の向日葵達に囲まれて笑う自分は、今よりもずっと大人になっていて、父と隣り合わせ並んでも親子には見られないだろう。

色々な景色が順を追って、断片的に流れてくる。

互い笑い合って、仲良く暮らす静かな生活。

見た事のない人達に囲まれながらも、騒がしく暮らす毎日。

どちらにも笑顔があって、私と父は幸せそうに見えた。

それから場面が代わり、私達の家には色々な人が来た。

父にチョッカイを出しては、逆にからかわれるミイラ取りな女。

父に頭を撫でられて、良い大人なのに嬉しそうに笑う女。

父に何か話しがあつたのだろうか、何故か私と言い合いになってしまい、そのまま父には何も伝えずに帰る本末転倒な女。

父に『昔の君はあであった』と言われ、必死に耳を抑える女。

父に『私の記憶が確かなら、君が最後におね 何をするのだね？』最後まで言わせまいと、必死にその口を塞ぐ女。

・・・あれ、全部同じ女だ？

代わる代わる場面が移り変わるが、その全てには長い金髪の女がいた。

この女・・・誰かなのかな？

少女は夢の中で首を傾げるが、答えを告げるべき存在は何処にも居ない。

そもそも、ここは少女の夢の中なのだ。

少女以外の視聴者は、何処にも存在しない。

不思議な夢はそれからも続き、少女の疑問は次第に募る。

・・・あの女は誰だろう？

その疑問を最後に、視界は夢から現実へと戻る。

「……お父さん？」

瞼が開き、最愛の名が口からこぼれた。

「何処……何処なの、お父さん？」

意識の覚醒と共に、少女は父の姿を探して視線を泳がせる。

居ない……お父さんが居ない。

な、何で居ないの？

い、嫌だよ、寂しいよ……置いてかないって、約束したのに……

お父さん……

「何処……何処なのお父さんッ!!?」

少女は声を荒げ、勢い良く立ち上がった。

その時、

「……え？」

少女はあまりの光景に、暫くの間、呼吸も忘れ父を探していた事すらも忘れて、ただただ呆然と立ち尽くす。

「何で、何で向日葵達が・・・燃えてるの？」

立ち上がる事で視点が変わり、その結果として視界が捉えた色は、何処までも広がる紅だった。

「燃えてる・・・向日葵達が・・・私の家族達が、燃えてる・・・」

何でなの・・・」

少女は立ち尽くす。

その光景を呆然と、己に迫る火の手に逃げる事もせず、ただ眺めるしか出来なかった。

そして、そんな少女など毛頭関係ないとばかりに、火の手はその勢いを増す。

火の粉を空へ向けて高々と舞い上げ、向日葵達の命を糧にした炎の津波。

その波は一切衰える事なく、荒々しくも燃え盛り、自らの勢いを増し続けた。

「教えて、お父さん・・・ねえ、何で・・・何で、向日葵達が燃えてるの・・・」

目の前に広がる惨状に、少女の瞳から涙がこぼれ落ちた。

「これ、夢・・・だよな？ねえ、夢なんだよね？」

謔言のように繰り返す少女に出来るのは、ただ願うだけだった・・・

私の家族を助けて、お父さん・・・

「よお燃えちよるのう・・・」

女は燃え上がる花園を眺めながら、淡々と呟く。

「良かったのですか、雲雀様？これ程の火です、下手をしたら大事な貢ぎ物が、焼け死んでしまいますよ？」

「良いのじゃ・・・上手くいけば、あちらから出向いてくれるわい・・・」

かったるいそうに返して、女は不機嫌な顔を作る。

「それに、こんな雑草の中を探すのは気が引けるわい・・・わたちの大切な衣装が泥で汚れてもしたら、そちは責任を取ってくれるのかえ？ええ、慈門よ？」

女が行ったのは火攻め。

人に在らざる臭いを追い掛け、山を登る二人が辿り着いたのは、少女にとつて家族である向日葵達が暮らす花園だった。

そこで女は向日葵達の姿を目にした瞬間、何の躊躇ちゆうじゆもせず火を放ったのだ。

「とてもとても、私には責任など到底取れません・・・」

男は恐れ多いと言わんばかりに頭を下げ、女の前に跪く。

「ふむ、では黙っちよれ・・・」

跪く男には目もくれず、女は燃え盛る向日葵達を眺め続けた。

「妖怪や？死ぬなら、わたちの前に出て来てからにしとくれよ・・・そしたらば、わたちが楽に殺しちゃうからのう？」



女と男、二人が理想とし求める物は、傷のない綺麗な死体。

本来なら、絞殺か毒殺が一番良いのやり方なのだが、女は今回限り火を放った。

それはいつたい、何故なのか？

その理由は、向日葵達の存在にあった。

生まれながらにして潔癖症の気あった女は、自分の体が向日葵に触れる事を酷く嫌った。

その結果として、女は自ら出向かずに火を放ったのだ。

これは幸と呼べる物なのか、または不幸と呼ぶべき物なのか・・・向日葵達は己の体を盾にして、少女の命を守ったのかも知れない。

少女の家族として、大切な存在を守ったのかも知れない・・・

/  
?

薪に適した枯れ枝を探し、私は森の中を歩く。

・・・なのだが、生憎と季節は春になったばかりで、枯た枝は上手い具合に見付からない。

加えて先程までの豪雨だ、大半が水気を吸って湿りを含んでいる。

「まいったな・・・これでは、まともに火が焚けない・・・」

私はそう呟きながらも、木々の生い茂る森の中を歩き続けた。

ここで一つ、おばあちゃんの知恵袋と呼ばれる物を披露しよう。

何故、枯れた枝が必要なのかと言えば、水を含んだ枝は火が付き難く、熱によって水分が跳ねて危ないからだ。

まあ、おばあちゃんの知恵袋どころか、極めて当たり前の事なんだが・・・

それは良いとして、どうしたものか・・・

このまま時間を費やし所で、意味はあるのだろうか？

それ以前に、早く戻らねば幽香が起きてしまう。

「やはり、あの娘を一人にしたのは失敗だったか・・・」

やれやれと、最近になっては癖になりつつある仕種をしては、再び溜め息を吐いた。

私が出た収穫は、あまりにも残念な物だった。

枯れ枝どころか、枯れ葉すらまともに見付からず仕舞い・・・これでは、何をしに来たのか分からない。

そもそも、何故こんな事をしているのだ？

そんな実には下らない、ポケの入った気分にはすらなってくる。

こんな散々な結果では、幽香の近くにいた方が遥かに良かった。

「・・・やはり戻るか」

これ以上の収穫は期待出来ぬと、私は僅かに集めた数本の枯れ枝を小脇に抱え、来た道に戻る事にした。

「私は完全に、無駄な時間を過ごしたかも知れない・・・」

僅かに集められた枯れ枝・・・これでは最悪、種火の段階で使い切ってしまう。

「むう・・・気付けば、日も傾いて来てるではないか・・・」

自らの発した『時間』と言う単語にふと空を見上げれば、日の位置がだいぶ傾きを見せている。

私は薪採しに没頭するあまり、森に入ってからずいぶんと時が過ぎていた事に、まったく気付かなかった。

「いかな．．．」

その事に気付くと同時に、『幽香は大丈夫だろうか?』と言った不安が、私の頭を過ぎる。

そして、その不安は次第に胸騒ぎへと変わり、一人にした幽香の身が堪らなく心配になってきた。

「戻ると決めたら早く戻らねば．．．」

いまさらになって思えば、和んだ思考は危機感と言う物を、頭の中から綺麗に除外していた。

「眠る少女を一人、外に置き去りにするとは．．．私は浮かれた馬鹿だ」

この世界で常識がどうあるのかは知らないが、私の考える常識の中では先ず有り得ない事。

どうして置いて来た?

お父さんと呼ばれ、気分を良くしたのか？

紫の居ない日々に寂しさを覚えていたので、新しい家族を迎えた事に浮かれていたのか？

久しぶりに感じた温もりに、骨抜きにでもされていたのか？

それとも、幽香の言葉に照れ臭くなって、安易な行動に移ったのか？

「そうだとしたら、私はどうしようもない馬鹿だ・・・」

私は自らを叱咤すると、居ても立ってもいらなくなり、小脇に抱えた枯れ枝を投げ捨て駆け出した。

もし、あの娘が目を覚ましていたとして、私の姿が見えない事に泣いていたら、どう責任を取るつもりだ？

泣かせたくない・・・一人にはしないと誓ったのだろ？

それなのに私は、こんなにも早く約束を違えるのか？

「やはり、この身はまだまだ未熟・・・護る者としても、一人の親としても・・・」

もはや、不安は苛立ちへと変わり、私は自らを罵倒する。

この胸のざわめきが杞憂きゆうに終われば、それならそれでよし。

過ぎた心配を大袈裟と笑われたのならば、その笑には笑顔で返そう。

だが、危惧した通りなっていたら・・・あの娘が本当に泣いていたのならば、謝罪の言葉を述べるよりも先ず、力一杯抱きしめてやろう。

華奢な体を優しく包んでやろう。

そして、二度と一人にしないと、あの娘に対して直接誓ってやろう。

それから謝ろう、未熟な父ですまない。

だから私よ、今日の事を教訓にするのだ。

今は何よりも先に、冷静になるのだ。

自分を責める前に、自らの教えにするのだ。

端から見れば言い訳に聞こえるだろうが、この身が現在を以ってして、親と名乗るに未熟なのは当たり前前の事なのだ。

何故ならば、親もまた子によって成長するのだから・・・

「だからこそ、親として教訓にしなければならぬ・・・」

私はその言葉を何度も繰り返して、自分自身に言い聞かせた。

その時、私は木々の合間を駆け抜けながら、微かに煙りの臭いを感じ取った。

それは木が焼ける臭いとは違い、青物を炒めた時などに発生する生臭さ。

「・・・クソッ」

脳裏に向日葵達の無惨な姿が浮かび、微かに見える煙りと焔の紅。

同時に、私の感覚が捉えた二つの気配。

私よ、何故・・・何故、気付かなかったッ!?

「幽香アツ!!!?」

私は瞬時に体への強化を施し、幽香の名を叫びながら木々の合間を全力で駆け抜けた。

木々の姿が残像に映る程の速度で、一心不乱に森を駆け抜けた先には・・・

「馬鹿な……」

私の両の眼は、炎に包まれ空へ粉塵と上がる、向日葵達の姿を捉えた。

炎が燃え上がり、紅く染まる視界。

それは私の頭に鈍い痛みを呼び起こし、胸に言いようのない恐怖を呼び寄せた。

……何だこれは？

こんな景色、私は知らない……知るはずもない。

なのに何故、どうしてこんなにも……

こんなにも、胸の奥が痛むのだ？

「グウッ……」

胸が痛い……そして、頭も酷く痛む。

「何故だ……何故、胸が締め付けられる……」

燃え上がる炎……



紅く染まる視界・・・

その全てが私の心を苛め、体を内側から食い破るかのように暴れ回る。

それはまるで、例えようのない『何か』が体内に潜み、内臓を喰らいながらジクジクと蠢もよほいてるようだった。

「クッ・・・」

しかし、今はそんな物に構ってる場合ではない。

「は、早く・・・早くあの娘を助けなければ・・・」

私は歯を食いしばり、頭を片手で抑え付けながら炎の中へ飛び込んだ。

燃える向日葵達の中・・・

そこには酸素も薄く、視界が安定しない灼熱の世界。

「・・・ゆ、幽香アアアアッ!!?」

私は叫びながら、炎の中を駆け回った。

「何処だッ!? 何処に・・・何処に居るのだッ!!!?」

どんなに叫ぼうとも、返事は返って来ない。

何故だ・・・何故、返事をしないッ!?

声すら届かないのか?

それとも、もしや既に・・・いや、そんな訳があつてたまるかッ!!

「返事をするんだッ!! 幽香、アアアアアッ!!!??」

私が火の海を走り続け、ひととき大きな叫び声を上げたその時、煙りを大量に吸い込み大きく咳き込んだ。

「ガハッ!? があ・・・に、憎たらしい煙りめ・・・」

苛立ちを口にするが、次第に視界が霞む。

喉が痛い・・・

知った事か。

体が熱い・・・

知った事かッ。

胸が痛い・・・

知った事かッ！！

頭が痛い・・・

そんな物・・・

「そんな、どうだって良い物・・・我が身など、知った事かあああ  
ああッ！！！！」

私は雄叫びを上げ、拳を大地に叩き付けた。

ドゴオオオオッ！！！！

強化を施したまま繰り出した拳が、地面へと深く減り込むと同時に、  
周辺に僅かな振動を生む。

・・・その時、目の前に道が開けた。

「・・・これは？」

私の道を作るかのように、折り重なるように倒れ込む向日葵達。

「そうか・・・まったく、君達は私などよりも、よっぽどあの娘の家族だ・・・」

絶望的な状況下でありながらも、自然と笑みがこぼれた。

そうだ、幽香には・・・あの娘には、立派な家族が居るのだ。

例え、我が身を火に包まれようとも、決して裏切らない家族が・・・

己の命を差し出そうとも、あの娘を命懸けで守る素晴らしい家族達が・・・ここには居るのだ。

「幽香・・・君は私が居なくとも、一人になど決してなりはしないのだよ・・・」

向日葵達が作り上げた道を踏み締めながら、私は倒れ伏す幽香の下へと向かう。

「何故ならば・・・彼等は自らの亡きがらを道にしてまで、私を君の下へ導いてくれたのだから・・・ああ、君は実に愛されている」

向日葵達の作り上げた道は、燃え盛る世界にありながらもなお紅い外套に身を包む幽香へと、僅かにも反れる事なく真つ直ぐと続いていた。

そして、幽香の居る場所には別の向日葵達が倒れ、大きな困いを作る。

その身を積み上げ、火の脅威から彼女を守るかのように。

そのお陰で、私は宝物を見付ける事が出来た。

「・・・遅くなってすまない」

幽香の下まで辿り着いた私は、その体を優しく抱き上げる。

「なあ、幽香・・・私は駄目な父親だな」

降りしきる火の粉に当てられたのだろうか、白い肌の上に赤い火傷をいくつも作った幽香を、優しくも力強く抱きしめた。

その目元には、涙の後が見て取れる・・・

当たり前だ・・・目の前で家族達が焼かれたのだ。

外套からはみ出し手足や首筋は赤く腫れ、見るからに痛々しい火傷を負っている。

痛かっただろう。

熱かっただろう。

代わってやれるのなら、代わってやりたい。

・・・だが、私がどんなに望もうとも、幽香の痛みを代わってやる事は出来ない。

そんな現実が歯痒い。

そして、それが出来ないとを分かっているながら、幽香をこんな目に遭わせた私自身が許せない。

到った原因が何であれ、間に合わなかった自分自身が、どうしようもなく腹立たしい。

「私はまた、君を泣かせてしまったな・・・」

そう呟いた後、空を見上げながら私は言葉を詠む。

トレース・オン  
投影開始。

『私はこの娘を護る』と、ただそれだけを強く思い・・・

「ソフトハレル・フルオーブン  
全投影連続層写」

詠まれた言葉は幻想を再現し、燃え盛る向日葵達へ向けて剣の雨を降らした。

「向日葵達よ、私にはこんな手段しか浮かばず、本当にすまない・・・」

これは、未熟な己を恥じた心からの謝罪。

「フロークンファンタズム  
壊れた幻想」

囁かれた言葉は、灼熱の燃え盛る世界に木霊こたまする。

剣は大地へと突き刺さり、次の瞬間には閃光となって崩壊する。

辺り一面の景色を爆風で揺らし、一帯を支配する火の海を飲み込んで・・・





ホニヤララは火の海へ 上(後書き)

久しぶりの合体。

ホニヤララは火の海へ 下(前書き)

文章にこだわりを持たない男

j・s。

ホニヤララは火の海へ 下

/  
?

ドオンッ！！

ドオオオンッ！！

ドオオオオンッ！！

ドオオオオオンッ！！！！

連続して鳴り響く音が意味する物、それは爆発の連鎖。

27の剣達は爆発の点を連鎖の線で繋ぎ、炎で支配された一帯を大きな面を以って一掃する。

「・・・」

爆風と飛礫つばいを一身に受けながら、私は幽香の体を抱きしめ続ける。

「クツ……この程度、痛くも痒くもない」

そう呟いて微笑むが、連鎖的に爆音が鳴り響く現在では、自分の発した言葉すらまともに聞き取れない。

熱風に晒された肌が、ヒリヒリとした痛みを訴える。

爆風に当てられ、自分の髪が焼ける臭いがする。

焼け付く風は荒々しく吹き荒れ、燃え盛る炎の波を吹き飛ばさんとし、その中心に居る私達をも襲う。

だが、吹き荒れる熱風も、それによって飛来する石の飛礫つばいすらも全て、私がこの身を以って受け止める。

我が身を盾とし、その一切を幽香には通さない。

「……この程度の熱、私にはまだまだまだ温い」

護る者が近くに居るだけで、それだけで……この身は上限なく無限に強くなれる。

「だから幽香よ、安心してくれ……」

この身が……私と言う存在が存命する限り、何者も……いや、何事にさえも、二度と君を傷付けさせやしない。

爆音を生み出す白い光に包まれ、私達は一瞬のようで長く、また永遠のようで数秒に感じられる時を耐え凌いだ。

それは時間にして一秒なのか、または一分なのか・・・正確な時間の経過は分からない。

だが、気が付けば白い閃光は次第に光を弱め始め、辺り一帯に様々な色を呼び戻した。

「なあ、幽香・・・私は君を傷付ける全ての存在から、君を護り・・・君を傷付けようとする存在その全てを討ち滅ぼすと、ここに誓おう」

私は幽香を抱きながら、ふんじん粉塵の舞う先を睨み付けた。

「・・・それを今、この場にて証明しよう」

許す訳にはいかない。

見過ごす訳にはいかない。

そんな事、あつてはいけない。

「そもそも、許せるはずがないのだよ・・・」

泣き顔のまま眠る幽香の頭を撫でながら、私は胸の内て叫ぶ。

私の大切な者を傷付けた輩を・・・君を泣かした不埒な奴らを許すなど、決してあってはならないッ！

「新しい世界に降り立ち、それなりに物を見てきたが、ここまで怒りを覚えたのは今日が初めてだ・・・」

未だ黒ずんだ煙りが上がり続け、晴れる事のない前方を睨みながら、私はゆっくりと歩を進める。

「だが、一つだけ感謝しよう・・・貴様らのお陰で、私は己の未熟を再び気付かされた。呆れる程の馬鹿さ加減を、良く理解出来た・・・」

いくら言葉を発しようとも、煙りの向こう側に声は届いていないだろう。

誰の耳にも届かない、意味のない独り言だろう。

だが、誰が聞かなくとも、私はいつこうに構わない。

これらは全て、他者に伝える為の言葉にはあらず。

我が身の未熟さを呪う私が、自分自身に言い聞かせる為に吐き出した、最大の皮肉なのだ。

だから貴様らには・・・

「我が全霊を以ってして、八つ当たりをさせてもらおう・・・」

そう言うや辺りに強い風が吹き、濃い煙りは薄く晴れて行く・・・

薄まった煙りの先に浮かぶ二つの人影。

その二つはユラユラと揺らめきながら、こちらに近付いて来た。

「誰じゃお前は？」

煙りと揺らめきと共に揺れる影の一つが、女の声で喋る。

「そちのせいで、わっちの衣装が汚れてもった・・・それどころか、髪まで泥まみれじゃ」

その甲高い声は、淡々とした口調の中に確かな怒りを潜ませていた。

「泥まみれ、か・・・」

自ら火を放っておいて、貴様がそれを言うか？

「ふざけるな」

私の口からは意図せず、怒りの言葉が漏れた。

つと、

「聞いちよるのじゃ、答えよッ!？」

女は問い掛けに応じない私に対し、甲高い声をヒステリックに荒げた。

「ククツ・・・髪が泥まみれかね?どうせ君は、元々人前に出れる顔ではないのだから?なら、泥で化粧が出来て良かったと、そう喜ぶならまだしも・・・汚れを気にするのは無駄ではないのかね?」

こちらから女の顔は伺えないが、私は皮肉げ笑い「顔は元から汚いのだろ?」つと言いたげに、馬鹿にした風に返す。

・・・それに、行いは顔に出ると良く言う。

つまりこの顔の見えない女は、元から良い人相はしてないだろう。

「き、貴様・・・」

「む?すまない、声が良く聞こえないが・・・もしや、私は何か間違っていたかね?」



「な、何か？何か、だとう・・・キイイイイーーーーーッ  
!？」

女は私の言葉に金切り声を上げ、癩癩かんしゃくを起こした。

「わ、わ、わわわわ、わつちが美しくないじゃとッ!?ふ、ふふふ、  
ふざけるなッ!!!」

次第に薄れ行く黒煙は、頭を振るい髪を掻き乱す女の姿を私の前に  
晒す。

「ふむ、まいったな・・・容姿が醜い上、ここまで沸点が低いとは  
・・・君は女性として、自分を磨き直した方が良くないかね？」

幽香を落とさぬようと気をつけながらも、私はやれやれと肩を揺  
らす。

「そもそも、私は君が美しくないと言った覚えがない・・・勝手に  
勘違いしておいて、こちらを責めないでくれんかね？」

「なッ・・・ななな、な、な、なんちい？」

女は歯軋りをしながら、わなわなと肩を揺らした。

「わわ、わつちは・・・わつちは汚れるのが嫌いじゃ・・・思った  
事はその通りにいかないのも、嫌いじゃ・・・何より、お前のよう  
な生意気な奴が大嫌いじゃッ!!!」

「ふむ、成る程な・・・大人の形なりをしておきながら、とんでもない子供なのだ、君は？」

まさか、こんな女に幽香が傷付けられたとは・・・

「阿保らしい・・・ああ、実にふざけた話だ。なあ、君もそう思わんかねッ！！」

私は幽香を強く抱きしめ、背後へと蹴りを放った。

メキイイイイ・・・

放たれた蹴りは背後に立つ気配とぶつかり合い、歪んだ低音を奏でた。

それはまるで、硬くありながらも柔らかい銅製の物体を、機械でゆつくりとひやしやげさせたような音。

「・・・青銅の胸当てかね？」

私は言いながら、背後へと伸ばした足をゆつくりと戻す。

そして、背後に倒れる誰かには振り向きもせず、淡々と告げる。

「普通ならば、足の方がただではすまんだろうが・・・残念なが

ら全力で蹴らせてもらったのでな、その程度の強度では防げんよ」

先の蹴りの結果など、振り返って見るまでもない。

そこには、自らの胸部を抑えながらのたうちまわり、青ざめた顔で引き付けを起こす人間が一人居るだけ。

視界に納めるまでもなく、探れば感覚だけで分かる。

「じ、慈門？」

その光景を前にした女はポカンと口を開け、信じられないと言った顔で呆ける。

「さて、一つだけ聞きたいのだが・・・」

未だ呆ける女に私は言う。

「君は何故、この娘を狙ったのだね？」

「・・・あ、え？な、なんち？」

ハッと我に返った女は、アタフタとしながら応える。

「・・・先程とは随分と反応が違うが、どうかしたかね？」

口調とは裏腹に鷹の眼で鋭く睨む私は、言いながら一歩ずつ近付いて行く。

「まさか、手を出す相手を間違えたと……今さら思ってたたり、するのかね？」

「……あ」

私に睨みつけられ、女は顔を青く染める。

「わ、わっちは朝廷から姓を授かる身じゃぞッ！？け、汚らわしい妖怪風情が、このわっちを手に掛けるつもりかえッ！？」

「クッ……下らん。実に下らんよ、君は」

女の露骨な態度には、もはや怒りより哀れみの感情しか生まれない。

「貴様が何者だか？そんな物はどうでも良い……無駄口を叩かんで、さっさと質問に答えろッ！！」

だが、生憎と許す気は毛頭ない私は、語尾を荒げて殺気を飛ばす。

「ひよええッ！？」

女は私の殺気に当てられ、情けない悲鳴を上げ尻餅を付くと、

「わ、わっちは悪くないのじゃ・・・」

そう言うや、ガタガタと震えながら無様にも後退りした。

「ほう・・・」

ここまでしておいて、今さら自分は悪くないだと？

「では、誰が悪いのだね？」

「あ、う・・・そ、それはつまり・・・そ、そうじゃッ！！す、全  
ては悪趣味な豪族共が悪いのじゃッ！！」

自分は悪くいとばかりに、女は声を荒げて言う。

「それは何故かね？」

「や、奴らは皆、妖怪の死体を集めて鑑賞するような気狂い共じゃ  
・・・だから妖怪の死体を貢げば、氏や姓をくれるのじゃッ！！」

「だからこの娘を襲ったと・・・そう言いたいのかね？」

「そ、そうなんじゃ・・・わっちは豪族の為にやっただけ・・・だ、  
だから自分の為に、その小汚い妖怪を襲ったのではないのじゃッ！

「！」

「小汚い、か・・・貴様は本当に無様だな。そして何より、発言がいちいちカンに障るさわ」

私は眼を閉じて言い、我が身の幻想をここに再現する。

「  
トレース・オン  
投影開始」

生み出したのは、一对の宝剣。

足元に転がす形で姿を現す二本の剣を、私は女の目の前まで蹴り飛ばす。

「持って行け・・・それを持って朝廷へ行け。そうすれば、多少なりご機嫌を取れるだろう」

現在、私の両手は幽香を抱く為に使えない。

そのせいか、足蹴にする形になった。

「その代わりに、この娘には二度と手を出さんと誓え・・・違えた場合、貴様の命はない物と思うのだ」

「ひゃ、ひゃい・・・」

女はカクカクと首を揺らし、干将・莫耶をその手に拾い上げた。

「お、重いのじゃ……」

「せいぜい、落とさぬようにな……」

私はそう言いながら、再び歩き出し、

「私はいつでも貴様を見ている……この事を忘れるでないぞ？」

すれ違い様にそう告げ、女の脇を摺り抜けた。

「は、はい……」

女は私の言葉に再び首を揺らし、その場で何度も返事を繰り返した。

/  
?

静寂と暗闇の中で、微かに灯る焚火の明かりが私達を照らしていた。

パチリ……パチリ……

乾いた音が闇夜の下に鳴り、微かに吹く風に炎が揺らめく。

あの出来事から、既に半日が過ぎた。

幽香が生まれ育った花園は、今や焼け野原と変わった。

空に向かい顔を揃える向日葵達の姿も、微かに原形を残すだけの黒ずんだ燃えカスへと形を変えた。

「なあ、幽香……君はいつになったら、目を覚ましてくれるのだね？」

私は眠る幽香の頬を優しく撫でながら、やるせなさを吐き出す。

「なあ、私は甘かったのだろうか……奴らを見逃すことは、君からすれば許されなかったのだろうか……」

眠る幽香からは、問い掛けに対する返事はない。

体の節々に火傷を負ってはいるが、他に目立った外傷はない。

なのに幽香は、未だ瞳を開けてはくれない。

何も返事をしてくれない。



聞こえるのは夜の風と、虫の鳴き声だけ。

ただ、それだけ……

なあ、幽香……

私のしたことは、間違えているのだろうか？

最初は君の家族を奪った奴らに、命を以って償わせようと……相応の罰を与えようと思った。

だがあの時、実際に奴らと見えた私の心の中には、殺すと言つ行為が選択肢には浮かばなったのだ……

「寝汗が酷いな……」

言つて、私は幽香の額に触れる。

「……すまない、本当にすまない」

未だ私は君に対し、何一つもしてやれていない。

紫の時は……平田をこの手に掛けた時は、こつも悩まなかった。

なのに何故、今回は空回りが続くのだろう……

今回は相手が人間だったから？

それでは、相手が妖怪なら平然と殺せるのか？

つまり私は、紫と幽香の同族を平然と殺す事が出来ると・・・そう言う訳なのか？

「・・・違う。種族がどうだなどと言う問題ではない・・・命は命、それ以上も以下もなく、全ては平等に存在するのだ」

私は頭を振るい、自分に言い聞かす。

平等、か・・・

本当に、命は平等なのだろうか？

私達は時に、自らが生きる為に他の生物を殺す。

それは仕方のない事だと、いくらでも納得が行く。

だが今回、人間が幽香に対してやった行為はなんだ？

奴らが生きる為に、あれは必要な行為だったのか？

貢ぎ物を得る為に・・・豪族に土産を献上して地位を得る為に、幽香の大事な家族達は火に焼かれたのか？

その為だけに、幽香は命を狙われたのか？

ただ普通に生きる上では必要のない地位を得る為に・・・人を従える名ばかりの権利と、何か支配する上で必要な権力を得る為だけに、命は物のようにやり取りされるのか？

私利私欲を満たす為だけに他者を危める事は、生きる上に必要な行為なのか？

果たしてそこに、平等は存在しているのか？

「・・・分かんよ」

頭の中がグチャグチャになるだけで、何が正しく何が間違えなのか分からない。

それ以前の話し、この疑問に正確など存在するのだろうか・・・

「なあ、紫・・・私はいつたい、どうしたらこの娘を幸せに出来るのだ・・・」

今は遠くにいる愛娘の姿を思い浮かべながら、私は夜空を見上げる。

なあ、紫・・・君は私と暮らす時間の中で、幸せを感じていたかね？

私は君と暮らせて、幸せだった・・・

生きる目的が何もない私には、君の笑顔が生きる意味だった。

泣き顔や笑い顔、怒った顔すらも全て、その一つ一つが日々を彩った。

君と言う存在の全てが、そのまま私の幸せだった。

だからこそ、私は君に問いたい。

私と共に居て、本当に幸せだったのかね？

「すまないな、紫・・・別れの時、君が私に言ったありがとうの言葉が、今はとても辛い・・・」

本当に君を幸せに出来たと言うなら、何故この娘を笑顔にすら出来ないのだろう・・・

「かつての私は、今の私を見て何と言うのだろうか・・・まあ、先ず我が身の情けなさに怒るだろうな」

護るべき存在がいるのにお前は何をやってるのかと、過去の自分は今の私を見たら、間違えなく叱咤するだろう・・・

知りもしないはずなのに、そう断言出来る。

「情けない、な・・・」

情けなく、不甲斐ない。

「どうしようもなく、私は紛い物だ・・・」

エミヤと言う一人の存在としても、子を守る一人の親としても。

夜空を見上げ、我が身をただ歎く。

自分が分からないと言う事が、こつも辛いとは知らなかった。

新しい自分は過去とは関係なく、その全てが自分自身なのだ・・・  
そう、思っていた。

だが、現実とは全く違った・・・

過去の見知らぬ自分に、思い出せぬ人々の背中に、いつだって答えを求めていた。

自問自答は、もはやただの悪循環へと変わり、私の心をバラバラに  
砕く。

自らの手では完成する事の叶わない、重要なピースが全て欠けた穴  
だらけの記憶のパズル。

そこに、答えなど存在しない・・・

だが、頬に触れる温かさがあった・・・

唐突に触れた温かさに、視線を下げれば、

「お父さん・・・泣いてるの？」

そこにはこちらを見上げ、悲しそうな瞳を向ける幽香の存在があった。

「いや、泣いてなどいないさ・・・」

私は応えながらも、幽香の体を抱きしめた。

「私が泣くのはな、お門違いなのだよ・・・だから幽香、君が気にする事はない」

抱きしめた幽香の体は、とても温かかった。

同時に、心の中が少しだけ修復されて行くような、不思議な感覚を覚える。

錆び付いた回路に油を注したかのように、胸に感じた違和感を緩和してくれた。

それはまるで、私に対して与えられた小さな救いだった。

「い、痛いよお父さん・・・」

そう言って幽香は、胸の中で息苦しいそうにもがくが、決して自ら離れようとはしない。

「ねえ、お父さん・・・私、助かったんだ・・・よね？」

もがきながらも呟き、私の背中に手を伸ばした。

「当たり前ではないか・・・それが違った場合、今の君は何者になるのだね？」

まさか、自分はお化けとでも言うつもりかね？

「うん・・・お父さんが、助けてくれたの？」

幽香は小さく頷き、未だ視点が定まらない瞳で私に聞いてくる。

「私は何もしていない・・・いや、出来なかった」

口に出してしまえば、実に情けない話しだった。

「幽香、君を守ったのは向日葵達だ・・・その身を盾にして、命を犠牲にして君を守り抜いたのだ。それに比べて、私がした事などほんの些細な物だ・・・向日葵達が守った君をここまで運んだ、ただそれだけ」

護ると誓っておきながら、誰にでも出来る事をこなしただけ。

たったのそれだけしか、私には出来なかった。

「ううん・・・私を助けてくれたは、やっぱりお父さんだよ・・・  
向日葵達がそうだって、私に言ってたもん」

そんな私を否定するかのようには、幽香は嬉しそうに微笑む。

「・・・向日葵達が、とは？」

私は幽香の言ってる意味が分からず、戸惑いながら聞き返した。

「ずっと、夢を観てたんだ・・・」

私の疑問に、幽香は嬉しそうに語る。

「空も地面もなくて、ただ真っ赤な所で私が泣いてたら・・・大丈夫だよって、向日葵達が言ってくれたんだ・・・お父さんが迎えに来てくれるって、ずっと励まし続けてくれたんだ」

「・・・」

「そしたらね？真っ赤だっ場所に、お父さんの背中が見えたんだ・・・  
・誰もいなくなった、向日葵達が消えちゃった世界に、お父さんの優しくって大きな背中が見えたんだ・・・」



笑顔でそう言いながらも、幽香の瞳からは涙が流れ落ちた。

「だからありがとう、お父さん・・・ありがとう、皆・・・」

そして顔を泣き腫らしながら、何度も何度も感謝の言葉を繰り返す。

「・・・」

幽香の姿に私は何も応えられず、ただ黙り続ける事しか出来なかった。

慰める事も笑い掛ける事も出来ずに、口を嚙むだけしか・・・

だがこの時に、一つの願望が私の胸に生まれていた。

私は尊い存在の味方になりたい・・・

全てを慈しむ事は出来ずとも、愛する存在を守り支えたい。

誰に何と言われようと、私は限られた何かを救いたい。

万人の為ではなく、大切な何かの為だけに生きたい。

そこには自分が先程うたった平等がなくとも、失いたくない限られた命の為だけにありたい。

それを私は、自分自身に掲げた新しい意味として、叶えて行きたい。

「幽香、私は……これから先、君を護れるのだろうか？」

泣き続ける幽香に、私は答えを求めるかのように言う。

「君を泣かしてばかりの私に……君と共に生きる権利は、未だ存在しているのだろうか？」

権利……本当はそんな物など必要ない。

だが私は、自分が信じられない。

いくら護ると口にしようとも、『お前ごときにこの娘を護る事が出来るか、本当にそう思っているのか？』っと、自らの誓いを否定する言葉が胸の内に存在する。

いや、実際に私は傷付けるばかりで、幽香に何もしてあげてなのだ。

だからこそ、自分に自信が持てない。

だからこの時、私はこんなにも情けない質問をしてしまった……

「お父さんは……私と一緒に居てくれないの？」

幽香は涙で真っ赤に充血した瞳を私に向け、悲しそうに言った。

「お父さんも、私を・・・私を置いていくの？」

「・・・そんな、そんな訳があるか」

その悲しそうな表情が私の中にある何かに触り、再生された事によって失なったかつて記憶を封じる扉の鍵を一つだけ壊した。

ああ、簡単な事だった・・・

自分に自信が持てようが持てまいが、生まれた場所以外には何も知らずに、唯一の家族達すらも失った少女をいまさら一人にするなど、私には出来る訳がない。

そこに必要なのは、グジグジと甘ったれた言い分をいつまでも述べる事ではない。

決して折れまいと、己の信念を何処までも貫く強い意思さえあれば、それだけで良いのだ。

護る事が出来るのか出来ないのかと、分かりもしない先の事を恐れる前に、一度でも『護る』と誓いを立てたのなら後はやるしかないのだ。

「・・・じゃあ、一緒にいてくれる？」

幽香は肩を震わせながらも、ハッキリとした口調で言う。

「ずっと一緒に、私といってくれる？一人にしないで、いつも側にいてくれる？私の事を・・・毎日、見てってくれる？」

「なあ・・・なあ幽香、私はな？」

私は一つだけ、たった一つだけ思い出した。

「大切な人達の・・・私にとって大切な、君の『味方』になりたい」

何かを護る事。

何かを救う事。

そのどちらにも、決められた定義は存在しない。

何かと組み合わせる事でしか、ちゃんとした意味が生まれない。

何かと言つ過程を歩む事でしか、その答えを手にする事は出来ない。

「幽香、君の側には・・・馬鹿の一つ覚えみたいにずっと君の味方をする、そんな曖昧な正義を掲げた存在がいては・・・駄目だろうか？」

幽香にそう言いながら、私は不器用な笑みを浮かべた。

記憶は一つだけ、確かな映像を映し出した・・・

開かれた扉の先には、赤毛の少年がいた。

憎たらしさを覚えながらも、その真つ直ぐな瞳は何故か誇らしかった。

理由も分からずに、私は安心した。

少年の言葉に、確かに救われた。

全ての不満や怒りは、新しい活力へと変わった。

それ程に、私の心は救われた。

だと言うのに、その言葉が私に対しどんな意味を持つてるのか、どうして告げられたのか、そこまでは思い出せなかった。

だが構わない・・・

私の心は、小さいながらも確かに満たされた。

やっと、自分の答えを得る事が出来た。

だから大丈夫だ、私はもう悩まない。

私はもう、迷いはしない。

例えば迷う事があるうとも、決して立ち止まる事はしない。

だからこの先、どんなに大きな迷いを胸に抱えたとしても、私は決して歩みは止めない。

そう、決して・・・

ホニヤララは火の海へ 下（後書き）

俺とお前と サロンパスッ！！

半分の理想は亡きがらへ（前書き）

なんとかなった。



半分の理想は亡きがらへ

/

「そら幽香、足元に気を付けるのだぞ？」

山道を覚束ない足取りで歩く幽香に歩幅を合わせ、私は進行の妨げになりそうな枝や弦を、投影した剣で切り落としながら進む。

後ろを振り返れば、

「ううう、歩きにくいよ・・・」

そうぼやき、生い茂る草や弦に足を取られながらも、小走りで私に続く幽香がいた。

「すまないが幽香、こればかりは、君に頑張ってくれとしか言え」「キャッ!?!」・・・ああ、さっそく転んでしまったのかね？」

言ってる傍から絡まった弦に足を引つ掻け、派手に転ぶ幽香。

その姿に私はヤレヤレと肩を揺らし、手の平で額を抑えた。

「だ、だつてえええ・・・あ、歩きにくいんだもんッ」

幽香は体を起こしながら言い、私の呆れ声に頬を膨らますと、抗議の眼差しをむけてくる。

「むう、そんな目をむけられてもな・・・」

あの日から数えて、今日で三日になる。

この三日間のあいだ、目的として目指す場所のない私達二人は、これと言った理由もないが北東を目指し山を歩いていった。

繰り返すが、理由は特にないだ。

だがしかし、確かな目的地がなかるうとも、何かを探しているのは事実。

何処かに人氣が少なく水場の近い上、現在地が判明するような場所があれば良いのだが・・・っと、そう思っではいるのだが、生憎と現実は大変厳しく出来ている。

つまりの私達は、森の中をさ迷い続けていた。

「クククツ・・・ほら、手を掴むのだ」

いまだ立ち上がらず、私にむくれた顔をむける幽香が微笑ましく、  
ついつい笑ってしまう。

「ひ、酷いよお父さん。別に笑うことないのに・・・酷いよ・・・  
グスツ」

笑い出ながら手を差し出す私に、幽香は瞳に涙を滲ませた。

「ム・・・すまん幽香、今は完全に私の落ち度だ。悪かった  
と君に謝罪しよう・・・だから早く、起き上がってくれんかね？」

ぬう・・・これは困ったな。

そんなつもりは毛頭なかったのだが、どうやら傷付けてしまったよ  
うだ。

「だって・・・だって、お父さん私を置いてさっさと行っちゃうし  
・・・」

瞳を潤ませる幽香は、恨めしいそくに私を睨む。

「も、もう私・・・歩きっぱなしで疲れちゃったようツ!..!」

「・・・す、すまん」

まいったな・・・幽香に歩幅を合わせて歩いてたつもりだったが、  
どうやら配慮が足りなかったようだ。

いやはや、これは完全に私が悪いな。

「君がちゃんと付いて来ていたから、私はてっきり疲れてないもの  
だと思つてしまった・・・すまない幽香、何処か開けた場所に着い  
たら休むとする。だからもう少しだけ、我慢してくれないかね？」

言いながら私は、いまだ座り込む幽香の頭を撫でた。

「グスツ・・・わ、分かったよう・・・」

幽香は鼻を噉ると、頭に置かれた私の手を掴み立ち上がる。

「でも、ゆっくり行ってよね？」

「ああ、承知した」

私は幽香の手を引きながら微笑み、再び歩き出した。

今度はゆっくりと、幽香を急かさぬように気を付けながら。

「・・・ん？」

森の中を歩き続ける途中、私は進行上に並ぶ木々の一本に目をむけた時、その幹にわずかに付着する赤い液体を見付けた。

あれは生き物の・・・いや、人間の血液か？

微かに香る鉄臭さと、独特の赤黒さ。

距離が如何に離れてようと、それが血であることは一目瞭然だった。

「すまないが幽香、しばらくここで待っていてくれか・・・」

私は立ち止まり、振り返りながら言う。

「ハア、ハア・・・ど、どうかしたの？」

すぐ後ろを歩く幽香はそう言い、額に浮かべた汗を手で拭いた。

いくら歩幅を合わせようと、やはり山道は堪えるようだ。

「いや、どうもしないさ。ただな、少し人の気配がしたので・・・

」

私がそう言った途端、幽香はわずかに肩を震わす。

「なに、心配はいらんよ。そんなに遠くはないので、様子を見てきたらすぐに戻るさ・・・だから君は、良い娘で待ってくれ」

「・・・うん」

幽香はわずかに迷いながらも頷き、私に怯えた瞳をむける。

「私、良い娘で待ってるから・・・早く戻ってきてね、お父さん？」

「ああ、了解した」

私は幽香に微笑みを返して、血液がわずかに付着する木々の奥へと進んで行った。

そして・・・

頭上では太陽が中天から西へと傾きをみせ、それに伴い空が赤みを帯び始めた世界の下で、私は血まみれで地に倒れ伏す男の姿を発見した。

「さて、どうしたものかね・・・」

誰に言うでもなくそう呟いて、私は男に近付き、

「・・・これは酷いな」

表になったその有様に、思わず言葉が出た。

倒れ伏す男の体には無数の創傷が見え、大中小と様々な刃物が体中に刺さっており、終いには血まみれの農具が辺りに転がっていた。

それはまさに、惨状と呼ぶべき有様。

「どうやら私は、幽香をあの場合で待たせておいて正解だったようだな・・・」

本当に良かった・・・こんな光景を、子供に見せる訳にはいかない。

「しかし、何故この男は、こんなにも惨たらしい死に様をしている

のだ・・・」

辺りを見渡し気配を探すが、近くには何者の存在も感知出来ない。

いったい何があったのか、私には見当も付かない。

だが、一つだけハッキリしている。

これだけの切り傷なのだから多少の損失はあるだろうが、この死体は五体全てが何処も欠落していない。

つまりこの男は、補食者たる妖怪や猛獣によって殺されたのではない。

これは間違いなく、同族である人間が殺したのだろう。

「怨恨なのか揉めたのか、それに到った動機は分からんが、ここまでするものかね・・・」

静かに冥福を祈り、私は男の死体から視線を外す。

「食べる訳でもなく、時には快樂や略奪の為に命を奪う・・・向日葵の化身たる幽香の瞳には、人間の姿はどう映っているのだろうか・・・」

外した視線を傾いた太陽へとむけて、眩しさに目を細めた。



やはり幽香から見た人間は、どうしようもなく醜い生き物と、そう映っているのだろうか？

だとしたならば、私は悲しくて仕方がない。

「眩しいな・・・まあ、如何に太陽と言えども、彼女の瞳が魅せた輝きには勝てんがな」

惨状を背中にしながらも、私は笑みを浮かべる。

「幽香・・・決して全てとは言えないが、人間の中にもとても尊い光を持っている者がいるのだよ・・・そして私は、その光に魅力され、それを見上げ続ける向日葵なのだよ」

だからいつか、君にもあの輝きを見せてやりたい。

人間の醜さを知った君に、人間の美しさを教えてやりたい。

そしていつか、君と紫の三人で暮らしたい。

「・・・戻るか」

背後には男の無惨な死体が転がったまま。

「何の供養もせず、君にはすまないな・・・だが、私には待たせた者がいるのだ。だから早く、あの娘の下に戻ってやりたい・・・許してくれ」

亡きがらへとそう呟き、私は空へむけた視線を下す。

そして、幽香の待つ場所へと戻る為、ゆっくりと歩き出した。

後に、男の死体が一つの波乱へと変わること、私は知るよしもない。

半分の理想は亡きがらへ（後書き）

取り敢えず、ネカフェで書いてみたが・・・通うの面倒だな。

うむ、新しいの買つか。

暫くは更新のペースが落ちます。

仕事も忙しくなるし・・・

亡きがらは大和へ（前書き）

友人からお古を貰ったのだが、再びスペックが九十年代仕様だった。  
・  
・

うむ、何かもう初っ端からポンコツだ。

こいつは近い内に、再び御臨終するんとちゃうか？

そしたら取り敢えず、窓から放り投げてやろう。

## 亡きがらは大和へ

/

それは、私が血にまみれた男の死体を発見した日から、ちょうど五日が過ぎた頃の出来事だった……

日が暮れた時間帯……夜のとばりが世界を覆う中で、よりいっそうに目立つソレ。

ソレとはつまり灯で、山脈を越え開けた原を歩く最中に、わずかに見えた都の明かりだった。

つまり幽香と私の二人は、この場で一つの岐路を迎えた訳であった。

「……まさか、こんな場所に辿り着くとはな……」

何が起こるか分からないものだ、私はつくづく思う。

「幽香……どうやら私達は、望まぬ場所に来てしまったようだ」

「……うん」

横に立つ幽香は頷き、私の手を強く握った。

「あれって……人間達が住んでる所だよね？」

「ああ、先ず間違いないだろう……」

不安げに聞いてくる幽香に、私は重ねた手を強く握り返して答えた。

「……」

「なに、私が付いているのだ、そんなに心配する必要はない……だから暗い顔をするのは止めたまえ」

「うん……でも、どうするの？」

「どうするか……そうだな、取り敢えず今は保留にするとして、

明日の朝にでも考えるところ。」

いまだ不安げな幽香にそう言って、私は笑みを作る。

「今日はもう遅い、先ずは休むことが先決だ。野宿になってしまうが、構わないだろ？」

「気にしないよ、だってなれたもん・・・それに、お父さんが一緒だから」

「一緒だからか・・・それは何より嬉しい言葉だ。ありがとう幽香・・・だが、なれにかんしてはすまない」

これは懐かれたと言うのか、または慕われてると解釈すべきか、どちらにせよ嬉しい言葉だ。

「では、星でも見上げて眠るところ」

私は幽香の手を引き、草の上に腰を下ろす。

「うんっ」

私に手を引かれ、同じように腰を下ろす幽香は、

「ねえ、お父さん？」

「・・・何だね？」

「今日はさ、どんなお話しを聞かせてくれるの？」

そう言いながら、期待の色を込めた眼差しで私を見詰めてきた。

「お話しかね？」

「うん、お父さんのお話し面白いから、今日も聞きたいッ!！」

幽香は元気よく頷いてから体を寝かせると、私の腕を引いて自らの枕にした。

「ふむ、そうだな・・・」

幽香に腕を引かれ体を寝かせた私は、夜空に散りばめられた星々を見上げながら語り始める。

「では、今日の話しは・・・」

星空の下、私が幽香へと語る物語・・・

それは、一人の少女が愛する人に全てを捧げ、その生涯を笑顔で終える物語。



本当の恋を知った少女が、たった一人の為に生きた恋の物語。

自ら運命を憎み続け、運命を逆らいながら生きた少女が、運命に感謝をする物語。

「・・・すごいんだね、その女の子は」

幽香は星を眺めながら、私の語る少女の生き様に目を輝かせる。

いくら人間とは種族が違うと言っても、やはり年頃の少女は恋の話しに弱いらしい。

「すごいか・・・まあ、この物語には意外な落ちがあるのだ。君はそれを聞いたらどう思うか・・・ぜひ、感想を聞かせてくれ」

幽香の反応に微笑まじさを覚えながら、私は物語の続きを語る。

少女が恋に全てを捧げる物語は、誰しもに幸せな最後を予測させた・

だが決して、この物語はハッピーエンドを迎えない。

少女は文字通り全てを捧げ、最後には何もかもを失う。

それは恋の物語として、バットエンド以外の何物でもなかった。

なのだが、少女には一つだけ手に入れた物があった。

それは、少女にとって何よりも大切な物。

少女が手に入れた大切な物は、愛する者が浮かべた最高の笑顔。

その笑顔が生まれたのは、恋敵が愛した人とハッピーエンドを迎えた場面であり、自分がバットエンドを迎える場面。

皮肉にもそれが、少女の恋が終わりを迎えた瞬間に、唯一手にした物だった。

ああ、そうなのだ・・・少女が恋を成就させることが叶わなかった代わりに、愛した人が恋を実らせることが出来た。

少女は力を尽くし、自分なりに頑張り続けた。

自身の恋を实らせることは出来ずとも、愛した人の役に立つことが出来たのだ。

愛した人が笑えるのなら、自身が笑えない訳がない。

そこで笑うことが出来なくては、いったい何処を以ってして本当の恋だと言えようか？

だから少女は、決して自分の人生を不幸だとは思わない。

その生涯はきつと、他人からすれば報われない恋に身を捧げ、最後には破滅を迎えた悲劇の物語だったのだろう。

しかし、少女からすれば満足の行く生涯だったのだ。

結果は失恋と呼べるものだった……だけど私に悔いはないと、実らぬ恋に意味はあったのだと、少女は全てを失いながらも幸せそうに笑い続けた。

私は世界中の誰もが羨む、『最高の恋』を経験したのだと。

物語の最後に、かつての少女はその生涯に幕を下ろす。

もう理解されただろうが、これまでの話しは全てが過去の物語……それは死期を迎えた老婆が、最後の瞬間に垣間見た走馬灯だった。

そして、これが本当の閉幕。

年老いた老婆は全ての夢を観終えると、誰にも見取られることなくひっそりと孤独な死を迎えた……

「この物語は、これでお終いだ……」

語り終わった私は、幽香に問い掛ける。

「それでは幽香、君はこの物語を聞いてどう思ったかね？」

「分かんないよ……」

幽香は難しい顔を私に向け、複雑そうに言う。

「私がどう思ったって、女の子が幸せだったら幸せな終わり方かな

つて、そう思えるし・・・もし『私が女の子だったら？』って考えたら、不幸な終わり方にも思えるもん」

だから分らないと、複雑そうな表情が物語っていた。

「そうか・・・だがそれも、きっと一つの答えなのだろうな」

「そうなのかな？」

「君は言っていたな？少女が幸せだったのなら、それは幸せな終わり方だとも思える、と・・・確かにそう言えるのだよ」

夜空に瞬く星を指差し、私は言う。

「例えば星々だ・・・見上げれば分かるだろうが、彼らは数え切れぬほど存在する。その彼らは皆が皆、別々の存在としてありながらも、一つの星なのだ・・・だが不思議なことに、星には集うことで名を持つ星座と言うものがある」

「・・・星座？」

「ああ・・・星座とはな？人が天空上の恒星を見かけ上の位置によって結び付け、人物・動物・器物などに見立てて命名したものを言うのだ・・・極端な解釈をすると、要はこじつけだな」

言いながら私は、幽香へと視線を向けた。

「話しは戻るのだが・・・いくら人間達が名を付けようと、彼らには一つ一つ違いがある。これは人間にも言え、妖怪や家畜にだって言えることだ。勿論、私や君も同じくな・・・」

突き詰めていけばいくほど、物事の全てが大小様々な違いを見せて、決して一つにはまとまらないように出来ている。

それは誰もが忘れがちなものだが、決して無くしようのない事実なのだ。

そしてこれは、些細な物事や定義のハッキリとしない物事、この二つが特にそうだと言えるだろう。

「ううう、難しいよ・・・じゃあ、女の子の幸せって、結局はどうなるの？」

「女の子の幸せか、そうだな・・・」

幽香の疑問に対し、私は正直に言った。

「女の子が幸せかどうか・・・それはきっと、私達には永遠に分からないのだよ」

「・・・」

「先程の続きではないが、人とは一人一人が個性や価値観を持っている。だから少女が自身の生涯を振り返った時、自分の人生は幸せなものだったと思えるのならば・・・それはきつと、一つのハッピーエンドなのだろう」

これは例え話しなのだが、特定の何かを議論するに当たり、その議題を否とし批判する者も居れば良として支持する者も居る。

その議論は多数決を以って答えを得るかもしれない、多数決を以ってしても票が同数に別れ、平行線で終わるかもしれない。

つまり、物語りを評価する人数が増えれば増えるほど、その評価は様々な声に割れて賛否両論と別れるのだ。

「つまりは幽香、この物語をどう解釈し評価するか・・・それは聞いた人の数だけ、無限にあるのだ」

人の数だけ違った幸せがあり、同じ数だけ違った不幸が存在する。

これは個を確立した生命達にとって、一つ真理かもしれない。

「ううう・・・やっぱり、分からないよ。だって、お父さんの言うてること難しいんだもん・・・」

「確かに難しくもある。だがな、開き直ってしまえば簡単な話しなのだよ・・・何故なら君は自分の視点で物語を解釈し、曖昧でありながらも一つ答えを述べたのだからな」

私は言いながら、幽香の髪を優しく撫でやる。

「一から始まり十で終わるかどうか、それは過程の段階で安易に決め付けるべきではない・・・だから幽香よ、君が途中で抱いた思いと最後に抱い思いを総じて感想を言ったのなら、それがこの物語に対する本当の評価なのだ」

なあ、幽香よ・・・

君はこれから先、その長い生涯を真つ当するまでのあいだに様々な人間達と出会っだろう。

だから君には、その中で自分だけの答えを得て欲しい。

その時々で得た全てを総じて解釈した、君から見た人間の在り方と善悪を知ってくれ。

私は君の将来に・・・君のこれからに向けて、そうあってくれと、強く願う・・・

「・・・っん」

幽香は夜空を見上げ、その瞳に星々の姿を映す。

一つ一つが違う輝きを生み出し、それぞれが他とは違う意味を持った星の姿を・・・

「・・・さて、話しも終わったことだ、そろそろ眠るとしようか」  
言って私は幽香の頬に手を伸ばし、触れた柔肌を優しく摩る。

「だからお休み、幽香」

幽香・・・

今夜、君が幸せな夢を観れることを、私は空に瞬く星々達に願おう。



一つの時代が終わりを見せ、新しい時代の幕開けを迎える瞬間。

ここは大和の三輪山。

春日・耳成・香久・畝傍・金剛・二上・信貴・生駒の山々が連なる大和地方の最奥。

そして、ここ三輪は八人と一人の豪族達が大和連合を設立し、それぞれが九つの分布に別れた時、その八人の権力者達を統べる一人の大王おおきみが分布した場所であった。

「・・・あ、あの女狐め、えええええッ」

長い黒髪を一本に結わい付け膝下まで下ろす女は、堀に落ちて月明かりに照らされた蓮の華を眺めながら、辺りに人気が無いこと確認するとつい先程与えられたばかりの屈辱を思い出しては、積もりに積もった不満を吐き出す。

「大王おおきみどころか、大和の豪族共とすら縁も所縁も無い身分が、ただ豪族共に気に入らからと、いつまでもいい気になりおって・・・」

憎たらしさを表に、女は指の爪を噛んだ。

何処から来たのか分からず、生まれや家族のことすら語らない女。

あの女は何者なのか？

いったいどうやって朝廷の内部へと入り込み、大王おおきみに取り入ったのか？

いくら調べようと、その全ては謎に始まり謎に終わる。

・・・いや、こちらが素性を調べれば調べるほど、あの女は謎が増えていく一方だ。

今を以って、唯一こちらに分かるのは一つだけ・・・あの女の姓が『八雲』と言うことただ一つだけ。

「チツ・・・彼奴はホンに憎たらしい女狐じゃ・・・」

舌を打ち黒髪の女は眉間にシワを寄せる。

その脳裏には、あの女が浮かべる薄気味悪い笑みが、消えることなく居座り続けた。

それは少し前に遡る・・・

時刻は宵の口。

日が暮れて間もない、夜のふけ切らない時間。

「わざわざ呼び止めおって・・・八雲よ、わっちに何か用かえ？」

「いえいえ、これと言った用事があった訳ではございませんわ・・・ただ、久しぶりにお見掛けしましたので挨拶をと、そう思っただけですわ」

八雲と呼ばれた女は、口元に白地の着物の袖を当て、クスクスと優雅に微笑む。

すると同時に、癖のない絹糸のような長い金の髪はサラリと宙を舞い、燈された松明に照らされた。

それはまるで、金色に輝く一つの幻想・・・

淡く黄金色の輝きは、妖艶でありながらも純潔さを秘めた魅力を醸し、空に光る宵の明星を思わせた。

そして、その輝きに染みや肝斑かんぱんの一つとして存在しない白く艶やかな肌が相まって、見る者全てを魅力する美を生み出す。

「・・・そうかえ、そちに気を使わせてすまん」

ほんの一瞬の合間だったが、不覚にも見惚れてしまった女は、『心の底から気に入らない奴だ』と、胸の内で呟いた。

「いえいえ・・・年功序列とでも例えましょうか、雲雀様の方が私よりも先任になりますから、後から来た者として当然の礼を持っているだけでありますわ」

女は、八雲は笑う・・・目を細めクスクスと、まるで全てを見透かしたように。

「ほ、ほう・・・」

八雲に雲雀と呼ばれた女は、その笑みに苛立ちを覚えながらも、その一切を顔には出さず言う。

「そ、それは誠に良い心掛けじゃなあ・・・しかし、年功序列とは、そちはわっちのことを婆とでも思っちよるのかえ？」

言いながらも、引き攣った笑みを顔に張り付けた。

「あらあら・・・それはさすがに、雲雀様の勝手な被害妄想と言っものではないでしょうか？」

「・・・」

「あら？私っいたらつい失礼なお言葉を・・・気に障ったのなら謝りますわ」

「……わっちは別に気にしとらん。だからもう立ち去れい」

ギリリと奥歯を噛み締めながら、雲雀は八雲から視線を外す。

つと、

「お待ち下さい」

視線と共に体まで横に反らす雲雀の態度に、八雲は先程となんら変わらぬ微笑みを顔に浮かべたまま、待ったの声を掛けた。

「……八雲よ。そちの用事は、これで終わりなんじゃろ？」

あからさまに不機嫌な声で返し、雲雀は振り返る。

「いえいえ、まだ本題が残っております……ですから雲雀様、私の話しが済むまでお待ちください」

「……本題、とな？それを言わねば、そちの用事は終わらんのかえ？」

「ええ……ですから、雲雀様が聞いていただければ、すぐにでも立ち去りますわ」

「ほう・・・そちが立ち去ると言うのなら、何でも聞いてやる。だから早く言うのが良い」

「寛大なお言葉、感謝の限りですわ・・・」

八雲は雲雀の言葉に笑みを止めると、一度だけ頭を深く下げた。

「ではお聞きしますが・・・雲雀様、貴女様は『エミヤ』と言う男の妖怪の名を御存知でしょうか？」

「エミヤ、か・・・生憎じゃが、わっちはそのような妖怪は知らん」  
雲雀は八雲の質問にどうでもよさそうに応えようと、もはや話すことはないと言わんばかりに、再び視線を外した。

「わっちはそちの話を聞いてちゃった、これでもう良いじゃろ？」

「・・・本当に、存知上げないのですか？」

「そちはしつこいのう・・・良いか八雲よ？わっちが知らんと言ったら、それは知らんのじゃッ！！」

子供が癩癩を起こしたかのように叫びながら、雲雀は八雲へと向き直ると、両の眉を吊り上げて睨み付ける。

「だからさっさと消えぬかッ!!」

「……ええ」

八雲は一切の表情を顔から消して、両の目をスラリと冷たく細めては頭を下げる。

「それでは雲雀様、長々と失礼しましたわ……ではこれで」

そう言うや礼を済ませ頭を上げた後、瞳に冷たさを秘めたまま踵を返して立ち去った。

「フンッ……しばらくの間は、話し掛けるでないぞッ!!」

鼻を鳴らし、雲雀は立ち去る八雲の背中に罵声を浴びせる。

「……何が言いたいのかは知らんが、ほんに目障りな女狐じゃッ」

最後にそう吐き捨てながら、体を去り行く八雲の背中とは反対側へ向け、肩を怒らせながら歩き出した。

「・・・」

一歩進む毎に雲雀の存在が遠退えるのを感じながら、八雲はその顔に薄く笑みを浮かべる。

「馬鹿な女・・・まさか彼が楔として渡した陰陽の双剣を、馬鹿正直にも朝廷に献上するなんて・・・」

陰陽の双剣『干将・莫耶』が本来どんな物なのか、私は彼から聞されたことがある。

長い歴史を刻み、人々の『こうで在れ』と言う願いを宿した至高の幻想。

それが、『宝具』と呼ばれる人に許された幻想と言うことを、一度だけ教えてもらった。

その至高たる宝具を、彼が意味も無くあの馬鹿な女に手渡すとは、私には到底思えない。



つまりあれは、あの女にとって一種の楔になるのだろう。

幻想を創造し破壊することが出来る彼にだけ……宝具の投影と破棄が許された彼だからこそ出来る、楔と言う使い道。

「軽率な行動は朝廷の最後ですわよ？それを貴女はお分かりかしら……ねえ、見栄っ張りの雲雀様？そもそも私の正体に気付けない時点で、貴女は驕ることすらおこがましい……せいぜい高を括って馬鹿を見るのね」

クスクスと小馬鹿にした笑みを浮かべながら、八雲は空を見上げ、

「ふふふ……もしかしたらまた会えますわね、エミヤ？」

そう呟いてから、浮かべた笑を幸せそうなものに変えた。

「でもその前に……あの娘はいつたい誰なのか、彼に聞かなきゃならないわねえ？」

八雲は唐突に立ち止まると、笑みを能面なものへと変えて、思い出したかのように呟く。

「ねえ、エミヤ・・・言い逃れることは、絶対にさせませんわよ？」

その言葉は夜風に吹かれて消えながらも、決して消せない冷たさを秘めていたのだった・・・

これらの話しは、西暦に当て嵌めると6世紀になったばかりの頃、物部が滅び時代が新たな名を持つ少し前のことだった・・・



## 亡きがらは大和へ（後書き）

こんぐらいの文章量で、週に二〜三回ほど更新出来れば幸かと・・・

まあ、平日が深夜まで書く暇ないのだから、仕方ないのです。

土日以外では、やはり仕事優先な訳ですよ。

むしろ、そこまでして書いて、翌日の仕事に支障を来たすようでは社会人として完璧にアカンし、個人的にもアカン。

・・・

ガキ共がもう少し成長すれば、平日の午後も解放されるんじゃないか・・・  
まっ、そしたらそしたで、酒を飲んで寝るんだろうかな（爆）

大和は歴史の隙間へ（前書き）

先日、仕事の出来ない（上にしない）事務員が一人解雇され、来週の仕事量がやばいことになった。

何故ならば、引き継ぎもしないで速攻帰る事務員のおバカと、その事務員の代わりを用意しない我社のおバカ具合からだ。

うむ、見切り発車もはだだしい解雇だなッ！！

/

「・・・日の出か」

朝焼けに染まった空の下、私は昇る太陽の姿を見つめながら呟いた。

「この時代には、日の光と火を焚く以外に明かりは無いのだったな・  
・さて、そろそろ人々は動き出すだろう・・・」

正面に広がる山並みのあいだからは、今日の始まりを告げる朝日が  
顔を出していた。

それは活動の合図であり、人々にとって一日の始まり。

つまり、人間達は日の出と共に目を覚まし、日が暮れると共に眠り  
に就く。

現在を以って、世界は日の出を迎えた。

そろそろ彼等は、個々の活動を始める頃だろう。

「電気が彼の人物によつて発見された時代よりも、現在は遙かに古い時代だ・・・人間達は皆、日の光と共に寝起きするしかないからな・・・」

私はそう呟きながら、小高い丘に都合よく生えていた背の高い楠木の枝から、魔術で強化した鷹の眼を用いて都の様子を観察する。

「ふむ・・・出来れば内部の動向をもう少し詳しく窺いたかったのだが、それも仕方のない話しか・・・そろそろ幽香を起こさねばな」  
木陰に移動させた幽香をチラリと見やり、変わらず眠り続ける姿を確認した私は、薄く微笑みを作り寝顔を眺め続けた。

幽香・・・君は今、幸せな夢を観てるかね？

当たり前だが、眠る幽香から返事ない。

だがしかし、返事の言葉はなくともその寝顔が微笑みを浮かべ、私に伝えてくれる気がした。

「まったく・・・私はつくづく、娘に恵まれているな・・・」

胸の内に温かさを覚えた私は幽香から視線を外し、再び都へと目を向ける。

「ほう……」

すると、いつの間に関床したのか赤く染まった空の下では人間達が農具を片手に持ち、農作業に取り組む姿が見受けられた。

ああ、成る程な……

やっこのこと疑問の一つが判明したと思えば、その答えが古墳時代とはな……運命はなかなか味な真似をしてくれる。

「しかし、大和朝廷の次は鉄製の農具か……つまり今は、渡来人から技術が伝来した後か」

技術の伝来が起きた年は確か……西暦から考えるに、聖徳太子が生まれる少し前だったはず。

そして、この身に残る記憶が確かならば、百濟から仏像や経文が伝来したことで、仏教公伝の年と呼ばれた辺りだと思われる。

「ヤレヤレ……次期には飛鳥時代を迎える年代とはな……どうやら私は、大層な昔に新たな生を受けたものだ」

言っや視力に施した強化を解いて、私は枝から飛び降りる。



音を立てず着地すると同時に、私は幽香の下へと歩く。

起こすにはまだ早い時間だと思われるが、これだけ都と近い場所に居ては、いくら私が周囲を注意深く見張ろうとも、そのうち人間に見付かるかも知れない。

すぐに移動するしないは別として、何かあった場合にすぐにも移動出来るようにしなければ、いざという時に困ることになる。

「幽香・・・少しばかり早いけど、もう起きる時間だ」

私は眠る幽香の肩を掴むと、力ない体を左右に揺すりながら声を掛ける。

「ううう・・・」

幽香は呻き声を上げると、わずかに片目を開ける。

「お、お父さぁーん・・・私まだ、すごく眠いよう・・・」

「それは顔を見れば分かるさ・・・だが幽香、すまないとは思いますが、今日はもう起きてくれないかね？」

「え、ええー・・・」

幽香は眼を半開きにさせたまま泣くと、

「じゃあ、抱っこ……抱っこしてくれたら、ちゃんと起きる」

そう言っつて、両手を広げた。

「……すまない幽香、じゃあの意味が私にはイマイチ分からんのだが……」

まさか私に、赤ん坊にやるみたく君を抱き上げ、よしよしとあやせとでも？

「む……うう……抱っこしてくれなきゃ嫌だッ!!」

呆れる私に、むくれる幽香。

「……ハア」

半眼で見つめられ、私は溜め息をこぼした。

「分かった、了解だ幽香。私は君を抱っこしてやるつもりではないか……だが、抱っこする代わりと言っつてはなんだが、ちゃんと起きるのだぞ?」

「……」

「まったく・・・君は寝坊すけな上、本当に甘えん坊だな・・・」  
などと愚痴りながらも、私は幽香の体を抱き上げた。

ッ!???

その瞬間、首筋に薄ら寒いものを感じた私は、咄嗟に背後へと振り返る。

しかし、そこには何者も存在しない。

・・・今は、私の気のせいなのか？

「どーかしたの？」

呆然と立ち尽くす私に、幽香は不思議そうに言うと、

「もしかして私、重かったの・・・かな？」

申し訳なさげな表情で、少し恥ずかしげに俯いた。

「いや、なんでもないさ・・・なんでもな」

自分に言い聞かせるように何度も繰り返し、私は幽香を抱いた腕に力を込めた。

「ああそれと、一つハッキリとさせようかね・・・幽香、君の体は羽のように軽い。そして、抱き心地はとても温かくて気持ちが良い」

「そ、そうかな？」

「ああ、私が言うのだから間違いない」

「え、えへへ・・・私もお父さんに抱っこされて、すっごく気持ち良いッ」

幽香は元気よく言うや、私に抱かれながらも腕を万歳させる。

「そうか、それは喜ばしい限りだ・・・」

腕の中ではしゃぐ幽香の姿に、自然と顔が綻ぶ。

「だがな、あまり暴れると落ちてしまっぞ？」

そう言いながら、私は幽香の体を抱きなおした。

「大丈夫だよ・・・だって、お父さんだもん」

「クツ・・・よく分からん表現だったが、信頼されるのは悪くない」

私は昇る朝日を背中に、幽香へと問う。

「今から少しばかり、眠気覚ましがてらの散歩でもするかね？」

「うんッ!」

大きな声で応えるや、首を縦に振って頷く幽香。

「ヤレヤレ、ずいぶんと元気な返事だ・・・どうやら君は、もう完全に起きてるみたいだな」

「そ、そんなことないよ？私はまだ眠いもん・・・だからお父さんは、まだ抱っこを止めたら駄目だよ？」

言っつや幽香は四肢を伸ばし、私の体にしがみつくように絡めた。

「・・・抱っこはしばらく止めないでおく。だから幽香よ、その品のない抱き着き方を止めたまえ」

はたから見れば、私達はまるでコアラの親子だ。

「はぁーい・・・じゃあ、お散歩に行こッ」

「そうだな・・・それでは、散歩へと参ろうかね」

言って私は、幽香を抱えたままゆっくりと歩き出す。

・・・む？

歩き出した瞬間、わずかにだが背後から懐かしい気配がした。

私は先程感じた悪寒と同様に、振り返って辺りを見渡す。

「・・・やはり気のせいなのか？」

振り返った先には、朝焼けに染まる都と山々が全景として映るだけ。

「いや、今の感じは・・・まさか、紫か？」

意図せず口からこぼれたのは、一時も忘れたことのない名前。

すると唐突に、別れの日に彼女が見せた笑顔を思い出し、胸の奥が熱くなった。

あの娘に会いたい・・・

それはまるで欠けた物を欲するような、一種の欲求じみた感情。

腕に抱いた温もりだけでは満足が出来ず、置いてきた温もりにまで手を伸ばす欲張りな欲求。

「紫よ……どうやら私の子離れは、まだまだ程遠いようだ」

名を口にするると、再び脳裏には紫の笑顔が浮かぶ。

「いやはや……つくづくと、ヤレヤレだな」

ふと気付けば、その笑顔で頭の中が一杯になり、私は何とも言えずただ苦笑した。

しかし、近くに居る錯覚を覚え、名を口にした途端にこれとはな・

やはり、私の中で彼女の存在はとても大きいのだと、再確認させられる。

「ねえ、お父さん……」

すると唐突に、腕に抱いた幽香が私の頬を引っ張りながら聞いてくる。

「紫って……誰のことなの？」

「ふむ……君は、紫が誰だか気になるのかね？」

「うん・・・だってお父さん、すごく優しい顔してたもん」

幽香は言いながら、興味深々と私を見つめる。

「紫って人は・・・もしかして、お父さんの好きな人？」

「・・・は？」

いきなりな言葉に、私は思わず間抜けな返答をしてしまう。

「いやいや待て待て、私が紫を好いてるだと？」

「・・・違うの？」

「私が彼女を好きだなどと、それは違う違う・・・いや、微妙に違うはないのだが、やはりそれは違うぞ」

好きかどうかと、自分自身で言っていてよく分からなくなったが、取り敢えず違うと強調する。

「いいかね幽香よ？紫とは私にとって、最初の娘なのだぞ？つまり紫は、君の姉に当たる人物だ。そんな自分の娘を異性として見るなど・・・それでは全くを以って、近親相姦ではないかね？」

正直に言ってしまうだ、私は紫のことが確かに好きだった・・・



人の愛娘としてだが。

「近親相姦？」

「近親相姦とは社会通念上、肉体関係を持つことを禁じられている者が通じ合うことであり・・・いや、そんな説明では分からんか」

いったん話しを区切り、改めて説明を始める。

「つまりはな、血縁同士が愛し合っではいけないと・・・いや待て、つまりは紫と通じ合っていない現状では、近親相姦は成立しないのだな」

どちらかが強引に迫り、結果として到ったと言うこともあるだろうが・・・そもそも話し、私は紫に劣情を抱いてない。

逆に考えたとして、紫に対してそんな感情を疑問視するのも失礼極まりない話であると同時に、私の馬鹿な思い上がりである。

つまり、私達の親子間に問題はない。

問題があるとしたら、咄嗟に口から飛び出した『近親相姦』の一言。

それは、『私は無垢な子供相手に、いったい何を口走っているのだッ!?』などと、いまさらがすぎる後悔だった・・・

「ねえ、お父さん？」

「・・・今度はなんだね？」

「じゃあ、私とお父さんは大丈夫なの？」

「・・・大丈夫とは、いったい何がだね？」

まさか、紫の次は君自身を持つてくるのかな？

「だって、血縁って血の繋がりのこと・・・でしょ？」

幽香は首を傾げて言う。

「私とお父さん、血は繋がってないけど・・・それでも駄目なの？」

「・・・駄目だ。それを容認するなど、絶対じゃない。いいかね幽香？君は愛する者を自分自身で見付け出し、その者と生涯を共に歩むのだ」

教えを言い付けるように、私は幽香の瞳を真っ直ぐ見つめて続ける。

「私は君を親として育てると同時に、親として護ることを役目としている。だが、後に君が自立を迎えれば、私は君から一歩引いた場所に居なければならぬ」

いつの日か、子は大人へと成長する。

そして、大半の者達はいずれは親になるのだ。

時と場合にもよるが、一人の大人に対していつまでも私がでしゃばるのは、自立を阻害するただの親バカ行為に他ならない。

これは幽香に限らず、紫にも言えることだが、私はまだまだ子離れの出来ない親バカ。

だからこの言葉を、私自身の心に刻み付けよう。

つと、

「嫌だもん・・・ずっと、ずっと一緒に言ったもん・・・」

ふと気付けば、私の言葉に幽香は表情を曇らせ俯いていた。

「ああ、確かに一緒に居るさ・・・だがな幽香？私は親でありながら、結局は親で終わるしかないのだ」

親には親の役目があり、伴侶には伴侶の役目がある。

「だから君は、私には決して叶えることが出来ない物や、決して与えられない想いを与えてくれる誰かを、君自身で探すのだ。そして、それが愛と呼べる物だったのならば、その人物と生涯を共に歩むか

否かを選ぶのだ」

「嫌だもん・・・私、お父さんがいいもん」

「私がいいと言われてもだなあ・・・まあいい、君にもいつかそんな出会いがくるだろう。その時は私に、生涯の伴侶となる者を紹介してくれ」

渋る幽香に苦笑しながらも、私は今までの話しを閉める。

「だが、それはまだ先の話しだろう・・・しばらくのあいだは、頭の隅にでも置いておいてくれると嬉しい」

「うううう・・・お父さんじゃなきゃ嫌だもんッ」

「クツ・・・まあ、じきに分かるようになる」

私は苦笑を微笑みに変え、優しくそう言った。

しかし、最近の私は説明ばかりしてるな。

そのうち、小言が多くてウザったがらねなければよいのだが・・・

同じ空の下、朝焼けに淡く染まる金の髪を風になびかせ、一人立ち  
尽くす女がいた。

「そろそろ、かしらね・・・」

八雲は日の光りが差し込む山々を眺めながら、目を細めて呟いた。

朝鮮半島で勢力を失ったことから勃発した、豪族達の醜い権力争い。

有力な豪族が土地や人民を支配して、他の豪族と争いを始めてから  
何年が経ったか・・・

この数年ものあいだに人間が刻んだ歴史は、殺しては殺され、奪っ  
ては奪われの悪循環を繰り返すだけ。

大王おおきみの分布するこの地は安全だろうが、それ以外に位置する土地では、今も誰かが血に染まっているのだろう。

「醜いわね・・・人間はどうしようもなく、醜い生き物ね」

軽蔑を込めたその呟きは、紛れもなく八雲の本心であった。

こんな醜い存在、勝手に殺し合えばいいと・・・光りを見据えた瞳はそう物語っていた。

だが、それと同時に彼女の胸の内には、捨てきれない感情も確かに存在した。

「ねえ、お母様・・・貴女は本当に人間でしたの？かつてエミヤは、貴女が居たから光りを得たと、貴女の瞳に希望を見出だしたと言っていました・・・人間はそこまで立派でしょうか？」

ここ十と数年ばかりのあいだに、彼女は欲望と悪意に染まった人間ばかり見てきた。

整った容姿があだをなしたのか、色欲に染まった目で見たことは数知れず、欲望のはけ口として房事を迫られた回数も数え切れない。そこに目を奪われるような輝きは一つとしてなく、目を逸らしたくなるばかり。

だから彼女は・・・八雲紫は見失った。

彼が述べた尊さと、自身が求めた理想を・・・

「いくら人間達との共存を夢に見ようとも、同種のあいだですら殺し合う人間には無理な望みだったのよ・・・」

しかしそれも、今日で最後になるだろう。

「豪族達の理不尽な支配も今日で終わるわね・・・人間の手によって人間の文明が終わりを迎えるなんて、とても皮肉な最後になるわ・・・そしたら私は、この場所から去るだけ」

まぶたを閉じて、八雲紫は瞑想する。

脳裏に自身が尊敬する唯一の存在、育ての親に当たる彼の顔を思い浮かべながら、柔らかな笑みを顔に作った。

少し前になるが、蘇我氏と渡来人が手を結んだと聞いた。

その情報を耳にしてから今日までに、それなりの月日が経っている。

もう既に、彼らは物部氏を退くに十分な力を得ただろう。

多分だが、今日の昼にでも彼らは攻め込んでくるはず・・・いや、間違えなくやってくる。

そして、軍事を受け持つ物部氏が滅べば、大和の国は事実上の崩壊を迎えるだろう。

「エミヤ・・・」

表情から一切の笑みを消した八雲紫は、次の瞬間には泣きそうな顔で朝日に語り掛けた。

「私は、すぐにでも貴方に会いたい・・・」

その呟きに返事をする者は、何処にも存在しない。

でも、彼にならきつと届くと、何度も何度も繰り返した。



「・・・紫？」

幽香を抱きながら歩く最中、唐突に紫の泣き声が聞こえた気がして、私は背後へと振り返る。

「ふむ・・・やはり、ただの気のせいなのか・・・」

しかし、そこに紫の姿はなく、朝焼けに染められた山々が何処までも広がるだけ。

「どうかしたの？」

突然振り返った私に、幽香からは心配そうな声が掛けられた。

「いや、どうもしないさ・・・ああ、どうもな」

幽香にそう返しながらも、私の頭には紫の泣き顔が浮かんだ。

「ただ微かに、懐かしい声が聞こえたような、そんな気がしたただけだよ・・・」

「ふーん・・・変なお父さん」

「ああ、確かに変だな・・・」

私は苦笑して返し、再び山々へと視線を向けた。

「しかし、山の向こう側がやけに騒がしいな？」

地響きに似た音と、大地を揺るがす足並み。

そればかりか、荒々しい雄叫びまでもが聞こえてくるような気がする。

そうとは言えど、それらが実際に私の耳に届いた訳ではないのだが、直感的な何かが確かに感じ取っていた。

「少々、嫌な予感がするな・・・すまない幽香、散歩はいったん中止としよう」

そう言うや私は、幽香を抱いたまま全力で駆け出した。

「・・・え？え、ええええー！ー！ー！ツ！？」



大和は歴史の隙間へ（後書き）

取り敢えず、ごまかせ

次の話しは、紫サイドになると思われる。

つまりは微妙な解明話し。



隙間は閑話へ (紫)

/

薄暗い室内。

光を閉ざした世界。

その薄暗く閉じられた世界は、微かに注がれる一筋の光に照らされた。

一筋の光・・・それは朝日。

東の空へと昇る、始まりの光。

「ん・・・もう、朝？」

朝を告げる光が戸の隙間からわずかに差し込み、私は意識を覚醒さ

せた。

「まったく・・・本当に嫌な太陽ね」

幸せな夢の世界から醜い現実の世界へと連れ戻す光に、私は目を細めてそっぽやきながら、胸のうちで一つの言葉を囁いた。

おはよう、エミヤ・・・

その囁きは、ここ数年のあいだに日課となった、朝の挨拶。

伝えるべき相手は近くに居ないけれど、きつと同じ空の下で光を浴びている頃だろう。

「・・・やっぱり、一人にはなれないものね」

ぼやきながらも寝巻を脱ぎ、着物に袖を通すだけの簡単な身支度を済ませると、私は部屋の戸をゆっくりと開く。

そして、戸を開いた先に広がる廊下や中庭を一望してから、頭を軽く振るっては足を踏み出す。

ああ・・・

今日もまた、苦痛をたえるだけの一日が始まる。

/  
彼女（紫）の時間

「のう、八雲よ・・・」

下品で野太い声がする。

「そなたはいつたい、いつになったらワシを受け入れてくれるのだ  
？」

声の持ち主は私の腕を強引に引き、自分の体に引き寄せる。

「　　ッ！？も、申し訳ありません・・・」

男に掴まれた腕を反射的に振り払おうとして、咄嗟に我へと返る。



「臣の様・・・私はまだ誰とも契るつもりはございませんので、どうかこの手を離してくださいませんか？」

嫌悪感に震える唇を噛み締め、私は微笑みを浮かべて言うが、思った以上に上手く笑えない。

気持ちが悪い・・・

「ふむ・・・そうかそうか」

私の引き攣った笑みは、対面する相手にはまた違った悦を与えるのか、男は下品に笑い舌なめずりをした。

「気が変わるようであれば、いつでも言ってくれよ？そなたは特別に美しいからのう・・・ワシは誰にも、そなたを触らせたくないのだ」

そう言っつて伸ばされる手は、私の長い髪に図々しくも触れた。

「ええ・・・その時はぜひ・・・」

たえるように手の平を力一杯に握り締め、私は深々と頭を下げる。

汚い手で触らないでッ！

ただその一言をたえるだけで、私の我慢は限界を迎えてしまっている。

ただか髪を触られた程度と、腕を掴まれた程度と自分に言い聞かせるが、不快感や嫌悪感は決して消えない。

早くこの男から離れなければ、彼との思い出が汚されてしまう。

まだ自分が幼い頃、彼に優しく撫でてもらった場面が・・・毎朝、彼が私の髪を透いてくれた大切な思い出が、醜い男に触れられたことよって醜く歪んでしまう。

それだけは許せない。

それだけは絶対に、我慢が出来ない。

「申し訳ありませんが、私はまだ用事がございますので・・・」

言いながら掴まれた腕を強引に引きはがし、私は男から体を離す。

「つれぬのう・・・だが、そこもまた、そなたを手に入れるには一興となる」

「ふふふ、ご冗談を・・・それではこれで」

再び深く頭を下げ、私は足早に男の視界から立ち去る。

何で私は、こんな場所に居るのだろうか・・・

いつの日からだろうか、私はそんなことばかりを考えるようになった。

彼に聞かされた母の話しに、人間の持つ輝きに興味を抱き、色々な場所を見て回った。

そこで見付けた人々の姿に、淡い期待を抱きながら近付いた。

でも、私の望む物・・・彼が魅了された輝きとは、一度として出会うことは叶わなかった。

その代わりとして知ったのは、欲望に支配された人々の醜い姿と、突き付けられた重い現実だけ。

「・・・私にはまだ、やらなきゃいけないことがある」

自分自身に言い聞かせるように呟いて、男に触られた髪を手で払う。

「本当に汚らわしいわね・・・」

人間に対する期待など、遠の昔に捨てた。

今の私に出来るのは、豪族共の娯楽によってその身を狙われた、己を守る力のない同族達の犠牲を少しでも減らすこと。

皆が皆、彼のように強くあれば良いのだが、どの世界でも弱者と強者は互いにバランスを取り合うように存在する。

そして、分け与えられたバランスは、一つの種にとって重要な役割を持っている。

その重要な役割とは、生命が生誕し死ぬことによって生じる循環の過程を正常にする天秤であり、バランスの傾きによってその天秤が崩壊すれば、最悪の場合は種の存続に大きな問題を生み出すかもしれない。

弱肉強食と言えば聞こえが悪いのかもしれないが、『奪い奪われ、食べ食べられ』これらは意味を持って存在するのだ。

生きる為に奪うことや、生きる為に食べることは決して罪ではない。

それは自然の理であると共に、生き物達にとって当然の循環なのだ。

だがしかし、他の種族達を娯楽で殺める生き物は人間だけだろう。

私はまだ食べたことはないが、妖怪達は皆、食べるために人間を殺める。

それは獣に例えても同じであって、娯楽の為に行うのではない。

そこに存在するのは生きることへの執着で、人間達のように下劣な悦楽を得る為の行為などでは決してない。

だからこそ私は、力ない同族達をむやみやたらと殺める人間達の魔

の手から、出来る限り被害を減らさなければならぬ。

他に誰もやらないのなら、現状を見逃せない私自身がやるしかない。

「ふふふ・・・笑うしかないわ」

考えれば考えるほどに、皮肉な話しだと思う。

共存と言う理想を求めた先で、私が見付けたのは現実だった。

せつかく理想を詰め込んだ宝箱を発見したと思ったのに、期待に胸を膨らませて蓋を開けてみれば、その何処にも理想は存在していなかったなんてね・・・

きっと、あの頃の私はどうしようもなく青臭かったのだ。

だからきつと、予期せぬ現実を知った瞬間、胸に掲げた決意の旗が容易に折れてしまったのだろう・・・

「本当に、笑うしかないわね・・・」

まるで、胸の中に大きな穴が空いたみたいだ。

「貴方が昔、私に言ったとおりね・・・理想は現実と幻想のあいだで揺れる蜃気楼だわ」

いくら追いかけてようと、近付くことは叶わない。

いくら手を伸ばせど、掴むことも叶わない。

そんな幻を・・・ただそこにボンヤリと漂うだけの理想像を、当てもなく追い掛けるしか出来ない現実。

一歩進んでは二歩戻るような旅路に、終わりなど何処にも存在しない。

仮に終点が存在したとして、私はその終点へと辿り着けるのだろうか？

例え辿り着くことが出来たとして、今と同じ理想を持っていられるだろうか？

はたしてそこに、自分が望む答はあるのだろうか？

「エミヤ・・・今の私には貴方だけが、  
八雲様ッ！！」・・・  
「まったく」

弱音を吐き出そうとした私は、不意に声を掛けられた。

「どうかしたのかしら？」

気持ちを切り替え声の方へ振り向くと、若い男が息を切らせながら駆け寄ってくる。

「と、突然呼び止めてしまい申し訳ありません・・・ひ、雲雀様がお呼びでして、すぐにでも・・・」

荒い息とは別に若干の言い難さを感じているのか、目には戸惑いの色を含み齒切れも悪い。

「雲雀様が、ね・・・分かったわ。案内してちょうだい」

「・・・よろしいのですか?」

「貴方はおかしなことを聞くのね・・・」

こちらを窺うように言う相手に、私は笑いながら返す。

「私が行かないと貴方が困るのでしょ?」

「そ、それはそうですが・・・」

「いいから案内しなさい」

「は、はい」

私の言葉に男は頭を下げると、

「では八雲様、こちらになります」

そう言いながら先導を始めた。

先を歩く男に後に続きながらも、私は思考する。

雲雀・・・執拗に私を目の敵にする女の呪術使い。

驕りの固まりのようなあの女はことある毎に私を敵視しては、くだらないと言うによるも幼稚と言うべきか、自らの品格を自分で下げようない掛かりを付けてくる。

いったい、私の何が気に入らないのか・・・

「まったく、困ったものね・・・」

っと、

「・・・な、何か到らない点でもございましたか？」

先導する男は私の呟きに立ち止まり、緊張した面持ちで伺ってきた。

「いえ、貴方じゃないわ。だから気にしないでちょうだい」

「ならばよろしいのですが・・・っと、大変お手数をおかけしまし



た。こちらの部屋になります」

男は部屋の戸の前に立つと、私に向かい深々と頭を下げる。

「ふふふ……この場合お手数とは言わないのよ？」

男の言葉があまりにも可笑しくて、私は思わず笑ってしまつた。

「す、すいませ……い、いえッ、申し訳ありません」

「かまわないわ……案内をしてくれてありがとう。じゃあ、貴方はもう下がって結構よ」

言い直しては再び頭を深々と下げる男に、言いようのない居心地の悪さを感じた私は、作り笑いを浮かべて労いの言葉を掛けた。

「い、いえいえそんなッ！！ありがとうなどと、私には勿体のうざいますッ！！」

すると男は私の労いの言葉に慌てふためき、

「そ、それでは失礼いたしますッ！！」

つと言いながら大袈裟に頭を下げ、脱兎の如く走り去った。

「あ、あらあら・・・彼はいつたい、何をそんなに畏まつてるのかしらねえ・・・それに、普通なら開けて下さるんじゃないのかしら？」

言つて私は、首を傾げながらも自ら戸を開く。

「・・・あら？」

開かれた戸の先には男が一人、青ざめた顔で横たわっていた。

「や、八雲様・・・」

男は私の姿を確認すると体を起こし、弱々しく頭を下げた。

「わ、わざわざご足労をおかけし、申し訳ありません・・・」

「それはかまわないけれど・・・貴方、確か雲雀様の奴やつをしてた・・・名は慈門だったかしら？」

「はい・・・慈門でございます。大変ご無沙汰しております」

青ざめた顔で男・・・慈門は名乗り、再び頭を下げた。

「やっぱり慈門ね・・・記憶が確かなら、前に怪我の治療で面倒を見た時以來かしらね」

二年・・・いや、もう三年前になるだろうか？

あの女・・・雲雀と共に中級の妖怪と戦い、辛くも仕留めることに成功したが、その代償として腹部に深手を負った彼は朝廷へと運ばれた。

その彼を朝廷直属の術者の一人として、私が治療した時以来の再会になるだろう。

私の記憶が確かならば、あの時・・・眠る彼の体に目を仕込んだのだったかしら？

「困ったわねえ・・・」

あれ以来まったくと言って音沙汰がなかったからか、または当時の忙しさ故なのか、いまひとつ記憶があやふやだ。

つと、

「何かお困りでも？」

慈門は青い顔のまま、心配そうに私の顔を伺う。

「お困りなのは貴方の方ではなくて？生憎と、そんな青ざめた顔で心配されても、私はありがたくないわ」

「グツ・・・か、返す言葉もございませんね・・・」

「分かればいいのよ・・・さあ、傷を見せてちょうだい」

「いやはや、ご用件も分かってましたか・・・」

「貴方の顔色を見れば、誰が見たって一目瞭然よ？」

慈門の顔を見据えて、私は微笑みを浮かべた。

「仮に怪我ではなくとも、その顔色は正常じゃないわね・・・あら？もしかしたら、貴方は病気がしら？」

「・・・面目ない」

慈門は私の言葉に顔をしかめる。

「本日は八雲様に傷の治療をお願いしたく、生意気にもお呼び立てした所存。身分を弁えない行い、まことに申し訳ありません」

「別にかまわないわ・・・私は雲雀様の名で呼ばれたのだから、身分で言えば当然の扱いになるわ。それよりも、早く傷を見せなさい」

言いながらも「呼んだ本人は居ないみたいだけど、ね・・・」と、私は口に出さず胸のうちで呟いた。

「はい・・・」

慈門は着物の胸元を開き、青を通り越しもはや黒く変色した胸を表にする。

「あらあら、ずいぶんと酷い内出血ね・・・これなら、肋骨もヒビだらけじゃないかしら？」

手を伸ばし、表になったその胸に触れる。

「こんな傷を貰うなんて・・・今回はいったい、どんな妖怪と戦ったのかしら？」

触れた瞬間わずかに顔を歪めた慈門に、私は目を細めて聞いた。

「・・・」

「いきなり黙り込むなんて、どうかしたのかしら？」

「いえ、お恥ずかしい話なのですが・・・」

表面上は不思議そうな表情で聞く私に、慈門は眉間にシワを寄せて

淡々と語り始めた。

出雲の国から朝廷に戻るまでのあいだ、幼い少女の形をした妖怪を襲う時、そこで一人の妖怪に遭遇したことを。

鷹のような鋭い眼光を持った、白髪で浅黒い肌をした男の妖怪と対峙したことを。

そして、自分は何も出来ずに退けられた上に、雲雀共々みすみす見逃されたのだと・・・悔しげでありながら、何処か安堵の表情で語った。

「アイツはいけない・・・今まで戦ってきたどの妖怪よりも、強力で強大なナニカを持ってます・・・情けない話ですが、私はもうアイツと対峙する気持ちが湧かない」

「・・・そう」

慈門の口から語られる妖怪の容姿に、私の思考は一瞬のあいだ停止した。

それと同時に、心臓の鼓動が騒がしく鳴り響く。

「・・・その傷だわ、酷く痛むでしょ？少しのあいだ眠りなさい・・・そのあいだに、私は治療を済ませておくから・・・」

私は鳴り響く鼓動とは別の正常な部分を働かせ、上辺には平静を保った。

「眠れと言われましても、痛くて寝付けないのですが・・・」

「なら私が眠らせてあげるわ・・・」

そう言いながら手の平を慈門の顔に向けて開くと、次にゆっくりと握り締めた。

すると、たったそれだけの動作で慈門は両の瞼を閉じ、私にもたれ掛かってくる。

「・・・」

受け止めた慈門に意識はなく、呼吸の音と鼓動だけが聞こえる。

「・・・お休みなさい」

言っただけで私は慈門の体を寝かせ、自らの親指を噛み血を滲ませた。

「やっぱり、私にはこれしか出来ないわね・・・」

流行る気持ちを優しく手なずけながら、赤い粒を作る血を一滴、寝むる慈門の額に垂らす。

彼は昔、私にこう言った・・・

「これはいまさらになるが、君が魔術を使うことは不可能だろう。何故ならば、君には魔術を使う上で必要となる『魔術回路』と言う物が存在しないからだ」

「いまさら使えないだなんて・・・では、なんの為に貴方は私に魔術を教示したの？」

「ふむ・・・それはだな？私が言うような、『魔術回路』を用いる魔術は使えないだろうが、君なら新しい活用法を見出だすだろうと・・・いや、魔術に限らず何かを生み出すだろうと、そう思ったのだ」

彼は薄く笑みを浮かべると、私の頭を優しく撫でながら言った。

「君の中には生まれ持った物が、私や他の者達とはまったく異なった力の形がある。だから私は、君ならもしかしたらと、そう思っているのだよ・・・」

「・・・」

彼の手にクシャクシャと頭を撫でられながらも、私はただ俯いた。



「なに、落ち込むことはない。使える使えないは抜きにしてもだ・  
・こう言った類は知識として持っているだけで、十分に役に立つの  
ではないかね？」

「・・・本当かしら？」

「正直に言えば、気の持ちようだろうな・・・ただ、私は君の師と  
して、君の持つだろう可能性に期待しているだけだよ」

変わらず優しく撫で続けてくる彼は、そう言いながら私の瞳を覗き  
込む。

「だから紫よ・・・視野を狭め己の可能性を殺すようなことは、決  
してしてくれなよ？」

「・・・ええ」

濁りの一切存在しない彼の瞳に見つめられ、私は生返事を返すしか  
出来なかった。

だけど、彼の真っ直ぐな思いが伝わってくる気がした。

つまりはな、私は君を・・・君の持つ無限の可能性を信じて  
いるのだよ。

その思いの言葉は胸の奥に深く染み渡り、私の中で大きな力に変わった。

彼のそれは、不可能を可能にする魔法の言葉だった。

私を何よりも強く成長させ、可能性を無限に広げてくれる・・・彼だけが使える魔法だったのだ。

この時から私の模索は始まった・・・

「私なりの解釈だけど、貴方の期待には応えたりもりよ・・・」

色褪せることなく記憶の中に存在する彼の背中に、私は語りかける。

「膨大な妖力を秘めた妖怪の血は、それだけでも純粹な力の塊である。そして、体中に張り巡らされた血管の一つ一つが、力を巡回させる為の回路・・・これが、私が持つ可能性から導き出した答え」

さあ、かつて男の体内に忍ばせた目から、自らが望む情報を引き出そう。

目とはつまり、私によって対象の精神に作られた一つの扉。

そして、血とはその扉を開く為の鍵。

額に垂らされた一滴の血は、その鍵穴に染み込むことで精神の扉を開き、精神の扉が開かれた先は心への入り口となる。

その入り口は心へと繋がり、心は対象が歩んだ歴史を映し出す。

私はその心に触れることで、目を仕込んだ対象から情報を読み取ることが出来る。

「そう、そうなのね・・・」

慈門の記憶が映し出した映像に、私の口からは渴いた笑いがこぼれる。

「なによエミヤ・・・貴方はもう、私とは違うナニカを見付けたのね・・・」

飛礫や熱風に当てられ全身に火傷や擦り傷を負った彼が、我が身の一切を省みず幼い少女を守るように胸に抱く姿を見て、心の奥底でもう一人の私が痛みを訴えた。

彼の胸は昔から、私だけの場所だったのに・・・

何で、何で知らない娘が私の居場所に居るの？

ねえ、何でなの？

「ふふふ・・・なんでかしら？すごく気に入らないわねえ・・・そう、すごくね」

私の口からは、濁いた笑いが止まらない。

こんな感情、生まれて初めて抱いた。

こんな気持ち、今までの私は知らない。

だけど、言わずにはいられない・・・

「 エミヤ（おじちゃん）の馬鹿<sup>バカ</sup>・・・」

「……エミヤの馬鹿」

空に昇る朝日を眺めながら、私はあの日にこぼした台詞を呟いた。

「私がこんなに悩んでるって言うのに、貴方は知らない娘と一緒になんて……信じられないわ」

つい先程まではこれからの身の振り方を考えていたと言うのに、ふと気付けば私の思考は見事に脱線していた。

これも全て彼のせいだ。

これもひとえに、彼が私をこんな気持ちにさせたのが悪いのだ。

例え頭を撫でてくれたって、簡単に許したりするものか。

「会いたいのにな、会い難いじゃない……どうしてくれるのよ」

空へと向けていた視線を下ろし、私は屋敷に戻ろうと振り返り、そこに立つ人物の姿に言葉を失う。

そこに立つ人物とは、

「紫よ……いきなり馬鹿はないと思うのだが……私は君に何か、恨まれるようなことでもしただろうか？」

不服そうに腕を組みながらも、少女を器用に背負う彼・・・エミヤだった。

「・・・い、いつから居たのかしら？」

「む？いつから、か・・・そうだな、いつからかと言えばつい先程、君が太陽に向かい私を馬鹿と言った辺りからではないかね？」

私の質問に、彼は真面目に答える。

「お、女の子の独り言を盗み聞きするなんて・・・エミヤ、貴方は最高にお馬鹿さんね？」

私は引き攣った笑みを浮かべ、彼に皮肉を返す。

「だいたいその娘は誰かしら？もしかして貴方、そう言う趣味なのかしら？」

思い付く限りの全てを言うだけ言って、大袈裟にソツポを向いた。

・・・

二十年振りの再会は、何とも締まりのない会話から始まった。

だけどこの時、私は不思議な気分だった。

つい先程まであんなにバカバカと言っていたはずなのに、こうして彼に会えたことがこんなにも嬉しいだなんて・・・本当に不思議だ。

こんなにも胸が満たされるだなんて、思ってもみなかった。

ねえ、エミヤ・・・

この気持ちって、いったい何かしらね？

隙間は閑話へ (紫) (後書き)

自分で言うのもなんだが、調子にのった結果がこれだ。

次からは気をつけよう。



隙間は再会へ（前書き）

仕事が忙しい・・・

つとゆーか三連休を丸々出勤するとは、さすがに思わなかった。

ほんと、まさか月曜まで引っ張り出されるとはね・・・ヤレヤレだよ。

## 隙間は再会へ

/

胸が異常なほど騒がしい。

いくら自身を宥めようと、優しく手なずけようとしても無駄で、鳴り響く警報は決して止んではくれない。

これはいったい、何の知らせだ？

まさか、これから何か・・・良くないことでも起こると言っつのか？

「お、お父さんッ！！ちよ、ちよっと早いよッ！？」

「すまない幽香、少し嫌な予感がしてな・・・」

木々が生い茂る山道を猛スピードで駆ける私は、幽香の体を強く抱きしめて言う。

「い、嫌な予感って・・・」

風を切りながら走るせい、癖の掛かった緑の髪はバサバサとはためき、そのせいで髪が目に入るのか、幽香は若干うっとうしそうに目を細めると、

「も、もしかして、お父さん言う嫌な予感って・・・ト、トイレとか？」

私にそう言っ、細めた目でこちらを恥ずかしげに窺う。

「それは全然違つぞ幽香・・・虫の知らせと言えば、君には分かるかね？」

あんまりな回答に、『君はいつたい、何を連想してるのだ？』とばかりに言っ、私は走る速度を更に上げる。

「わッ！？む、虫の知らせっ？」

突然速度を上げた私に、幽香は驚きの声をあげながらも咄嗟にしがみつくと、良く分からないと言いたげな表情で聞いてきた。

「おっと、いきなりすまない・・・虫の知らせの意味はとにかく、嫌な予感がな・・・胸騒ぎがするのだよ？」

「そ、それじゃあ全然、分かんないようッ!？」

「ふむ・・・まあ、分からないのならそれは仕方がない。さて、それよりもだ・・・そろそろ速度を上げるとするが、あまり喋ると舌を噛んでしまっぞ?」

「うううう・・・わ、分かったよう」

幽香は渋々と頷き、私の体へと回された両腕にいつそうの力を入れ、決して落ちまいとしがみつく。

すまないな、幽香・・・

これは私の考えが行き過ぎた気のせい・・・ただの杞憂かもしれない。

こんなに焦った所で、取り越し苦労で終わってしまうかもしれない。だが私は、『単なる気のせいだ』と・・・それだけで終わらせたくないのだよ。

「では、急ぐとする」

言うつや私は幽香の体を力強く抱きしめ、山道を全力で駆け抜ける。

都の周りを大きく旋回するように山道を駆け、己の感覚が知らせるがままに目的とする場所まで向かう。

時間にすればほんのわずかなあいだ・・・たったそれだけの時間で、私は山道を抜けた。

目的とする場所までは後わずか・・・

逸る気持ちを抑えることが出来ず、山を抜け平地に到ると同時に、私は視力に強化を施してその場所を見やった。

するとそこに、一人の人影を発見することが出来た。

そこは都の外れに位置した、民家の建ため殺風景な場所。

しかし現在、本来ならば殺風景なそこには、幻想的な光景が存在した・・・

「・・・」

私はソレを目にした瞬間、走るのを止め呆然と立ち尽くした。

「君はいつたい、誰なのだ・・・」

口から出たのは、言葉とは裏腹な自身への問い掛け。

日の光が彼女を照らしていた。

眩しい光に顔を向けるその姿は、私から見ればまるで後光に照らさ  
れているようだ。

さらさらと美しい金の髪が風に舞い、キラキラと宝石のように輝く。

それは何とも言えぬ、神々しく気高い佇まい。

それなのに彼女の背中中は寂しくも何処か悲しげでいて、必死に泣き  
声を上げることがたえるような・・・そんな弱い感情を、私にだけ  
訴えているように思えた。

なあ・・・君はいつたい、誰なのだ？

私の記憶には、君と良く似た佇まいが存在する。

背格好の似ても似つかない少女の姿が、私の中で今の君と重なる。

不思議だな・・・君達のあいだには、似てる要素など何処にも存在  
していない。

先ず、君の髪は腰元までの長さだが、彼女の髪は肩までしかなかった。

体つきだって、瞳の色だって違う。

性格や口調もそう……君達の持つ個性は、その何もかもが対極に位置するだろう。

なのに何故かな……私には光に照らされた君の姿が、あの少女と同じ場所へと向かっているように見える。

かつて王であった少女と同じような、人々の為に生涯の火を燈す場所に……

なあ、君は……君達はいっただい、何処に向かうのだ？

つと、

「お父さんッ！……！」

突然耳元で発せられた声に、私の意識は現実へと呼び戻された。

「ああ……すまないな、幽香。どうやら私は、考え事に没頭していたようだ……って、待て幽香」

私は頭を振るい、幽香に謝ろうとして気付く。

「君はいっただい、いつの間に背中に回ったのだ？」

先程までは腕に抱いていたはずが、いつの間にか背中に背負う形になっただけだ。

「だって私、この方が楽なんだもん……だからお父さんがポケットとしてるうちに、移動したんだよ？」

「そ、そうなのかね？」

「あんな勢い良く揺すぶられてるのに前が全然見えないのって、すっごく不安なんだよ？」

言う幽香の顔は、『結構怖かったんだよ？』と語っていた。

「成る程な……私の考えが到らず申し訳ない」

私は頭を下げ、今は背中におぶさった幽香に謝罪する。

すごく不安だった、か……ああ、確かにそうだな。

あれだけの速度で走る最中に前が見えないことや先が見通せないことは、自らの意志で見えないとは別の話として、確かに恐怖と呼べるものだろう。

「さて幽香、いつまでもこの場で立ち止まっても仕方がない……」



・先程私が確認した限り、目的地はもうすぐそのようだ。なので今度は、ゆっくりと行くでしょう」

「うん・・・何しに行くか知らないけど、ゆっくりだったらいいよ」

言って幽香は、私の首に回した腕に力を込めた。

「ああ、ゆっくりと向かうさ・・・それでは参ろうか」

私は微笑みながら、再び目的の場所へと向かい駆け出した。

背中におぶさる幽香の負担にならない速度でありながらも、だが決して遅いとは呼べない速度で。

目指す場所に居た者・・・あれは間違いなく紫だった。

それなのに何故だ・・・

何故私の記憶は、紫とは似ても似つかないあの少女の姿を、同じ物として重ね合わせてしまったのだろうか？

名も思い出すことの出来ない少女と、護るべき紫の姿を・・・私は何故重ねてしまった？

そもそも、あの少女はいつたい、誰なのだろうか？

それすらも、私には分からない。

あれだけ二人は似ても似つかない存在だと言っておきながら、比較の対象とする少女が何者なのか思い出せない。

それはいくら考えようとも、今は決して分からない。

不思議と、そうなのだと理解が出来た。

なのにたった一つだけ、わずかに思い出せた物もあった。

それは、途切れ途切れに告げられた少女の言葉。

『シ……わた……は……貴方を……』

まるでそれはノイズが混じったラジオのようで、本来なら言葉に含まれているだろう趣旨がまったくとして読み取れない。

名前も分からぬ君よ……その言葉に込められた想いは、いつたい何なのだ？

残念ながら、私には何一つとして分からないのだよ……

ただ、かつての私には大切な思い出だったのだろうと、それだけは

理解出来る。

でなければ、意味の分からぬその言葉に、胸の奥がこんなにも熱くなる訳がない。

こんなにも愛おしく感じるなど、ある訳がない。

「ヤレヤレ・・・難儀なものだな」

曖昧な自分の記憶に、私は肩を揺らしてぼやく。

私はいつたい、何がしたいのだろうか？

人間だった頃のかつての自分と再生された今の自分は別なのだと、そう思っではいるが、記憶に残る者達の姿を垣間見る度に言いようのない気持ちになる。

だがきつと、全てを思い出した所で、何かを失う訳でもないのだろうか。

それは逆にしても同じことで、思い出した所で、いつたい何が得られようか？

そのどちらも平行線・・・私は私として生きていくしかない。

私にはこの世界で生きていくしか、進むべき道はない。

「まったく、私の本心はいつたい何処に居るのだから・・・」

「どうかしたの？」

「いや、どうもしないさ・・・」

背負う幽香の心配そうな声に、私は微笑みを浮かべて返す。

「ただ、私はやはり・・・君達の存在に救われているのだと、改めてそう実感させられたのだよ？」

きつと、紫と幽香に出会えたのは奇跡とは違う必然であつて、私しに与えられるべくして存在した、救いと言う名を持った運命の出会いだったのだろう。

「ううう・・・わ、分からないよ」

「なに、簡単な話だ。君が君らしく居るだけで、私は救われるのだよ？」

父として、一人の存在として、私は幽香と紫を愛している。

「誰かを愛することが出来るだけで、それだけでこの胸は満たされる・・・ああ、つまりは幽香よ？私は君のことを、一人の存在として確かに愛しているようだ」

この想いだけで、私は進んで行ける。

「ふ、ふえッ!??」

私の言葉に幽香は驚きの声を上げる。

「わ、私そんなこと言われたの初めてだから・・・よ、良く分からないよッ!??」

「クッ・・・なに、君には分からなくていいのだよ。これは私の勝手な解釈なのだからな」

自分に都合良く変換した、勝手な解釈だ。

「ああ、ちなみに言うておくが・・・愛してるの意味は色々ある。君が将来、この言葉を誰かに伝える場合は、親愛と求愛を間違わぬようにな?それと、一つ付け加えるとするが・・・私が君に言った愛してるだがな、この場合は親愛の意味になるのだぞ?」

「う、うん・・・い、意味はよく分からないけど、言いたいことは何となく分かるから、気を付けるようにする」

そう応えながらも幽香は、「ド、ドキドキだよ・・・」「っと呟いた。

「ふむ・・・君は本当に分かっているのかね?」

「わ、分かってるもんツ!!」

「・・・」

どうやら幽香は、まるで分かっちゃいないようだ。

「まあいいさ・・・これらは追い追い、しっかりと勉強をするとしてようかね？」

「わ、分かってるんだもんツ!!」

上擦った声で幽香は叫ぶ。

「だから私、お父さんの下で立派な大人になるんだもんツ!!」

「・・・成る程な。やはり君は、何ら理解してないのだな」

先程私が幽香に言ったように、伝え方は本当に大事なのだと、改めて実感した。

「自分自身の未熟さ加減に、つくづくヤレヤレだな・・・」

次からはちゃんと、言葉を選ばなければ・・・

などと、そんなくだらしないやり取りをしてるあいだにも、紫の姿が肉眼で確認出来る距離まで着ていた。

「さて、どうするか・・・」

紫の姿が近付くにつれ、難題が頭の中に生まれた。

久しぶりに会った愛娘には、何と言ってやるべきか・・・

ここは普通に、ずいぶんと久しぶりではないかね・・・っと、ただそう言っただけでやるべきだろうか？

それとも逆に、ずっと会いたかったと言っても言って、優しく抱きしめてやる方が良いのだろうか？

もしくは奇策を要して、笑いを取りに行くのが一番だろうか？

「いや・・・さすがに、それは私の柄ではないな・・・」

ふと気付けば、思考がどんどん低い次元へと下っていたことに、私は軽い頭痛を覚えた。

「そもそも、難題などではなかったな・・・まずは考えるより先に行動だな」

っと、

「お父さん、また考えごと?」

いつのまにか背中におぶさった幽香が、肩に顎を乗せながら私の顔を覗いていた。

「む?・・・まあ、そんな所だよ幽香」

何と返してやるべきか一瞬迷い、笑いながらも曖昧な言葉で肯定する。

「ふうーん」

その短いやり取りをするあいだにも、日の光を見上げ一人佇む彼女の背中が、次第に近づく。

そろそろ、声を掛ければ届く距離だ。

私の呼び掛けに振り返る紫の姿が・・・あの眩しい笑顔が、今は見たくてたまらない。

「まったく、やはり私に子離れは程遠いな・・・」

今朝方、自分自身に告げた諫めの言葉はいつたい何処に行ったのか、つくづく感情とは思いつ通りにいかない物である。



だがそれも、今はいったん心の隅に置いておこう。

さあ、何よりも今は、大事な愛娘の名を・・・彼女の名を呼んでやろう。

「ゆか」 エミヤの馬鹿「・・・り？」

もはや言葉を投げ掛ければ届く距離にまで近付いた私は、紫のこぼした馬鹿の一言に足を止めて目を見開いた。

ば、馬鹿・・・だと？

な、何故この場で、私が馬鹿と言われなければならないのだ？

な、何故なのだ紫ッ！？

「お、お父さん大丈夫？」

呆然とする私に、幽香の心配そうな声。

「あ、ああ・・・全然大丈夫だ。私は今も問題なく、いたって正常だ。強いて言うならば、誠に遺憾なくらいまともだぞ？」

「ぜ、全然大丈夫に聞こえないよ？意味は全然分からないけど・・・

「

「グウツ……言っというてなんだが、実は私もそう思うのだ……」  
我ながら容易に混乱する思考だった。

「まあ、今はそれよりもだ……む？」

一度だけ頭を大きく振るって、混乱した自分自身を落ち着かせる。

そこでふと気付けば、目の前ではこちらに振り返った紫が、目を見開き間抜けな顔をしていた。

どうやら、向こうにしてもこの場に私が居ることは、かなりの予想外だったようだ。

それよりも、だ……まずは馬鹿と言われた理由を、彼女に聞かねばならない。

もし、私が紫を困らせることをしたのなら、すぐに謝らねばならない。

「紫よ……いきなり馬鹿はないと思うのだが……私は君に何か恨まれるようなことでもしただろうか？」

私は幽香を背負いながらも腕を組み、呆ける紫に問い掛ける。

「・・・い、いつから居たのかしら？」

私の問い掛けに紫は吃り、目を見開いたままわずかに頬を染めた。

「む？いつから、か・・・」

質問を質問で返す紫に、私は少し考えてから、ごまかすことなく答えた。

「そうだな、いつからかと言えばつい先程、君が太陽に向かい私を馬鹿と言った辺りからではないかね？」

「お、女の子の独り言を盗み聞きするなんて・・・エミヤ、貴方は最高にお馬鹿さんね？」

紫は引き攣った笑みを浮かべ、私に皮肉を返す。

「だいたいその娘は誰かしら？もしかして貴方、そう言う趣味なのかしら？」

そして終いには、顔を大袈裟に反らしてソツポを向いた。

「そう言う趣味とは・・・君が言っているのは、どんな趣味のことだね？」

「知らないわよ・・・だいたい、貴方がどんな性癖を持ってたって、私には関係ないのだからね・・・ええそうよ、全然関係なのよ」

「・・・ま、待て紫」

性癖と言つ言葉に、私の顔は引き攣った。

「君は多分・・・いや、絶対に誤解をしている。だからここはいったん冷静になって、互いに話しをしようではないかね？」

「・・・お断りですわ」

「まあそう言うな紫・・・君の方にはあるかどうかは知らないが、私の方には積もる話があるのだ」

今だソツポを向く紫に歩み寄り、私は優しく笑い掛ける。

「先程と同様に言わせてもらうが、君がどう思っているかは知らない・・・だが、私は君とこうして再会することが出来て、とても嬉しいと感じている」

「・・・」

「だんまりか・・・しかしだ、紫よ？」

ヤレヤレと頭を振るい、私は紫の頬に手を伸ばす。

「君は何故・・・何故、そんなにも悲しそうに泣いているのだ？」

「・・・泣いてないわよ」

肩を震わせて、紫は小さく呟く。

「泣いてなんか、ないわよ・・・」

「それは本当なのかね？」

「本当よ・・・本当だからもう聞かないでちょうだい・・・」

「ならその証拠に、こちらを向いてくれないかね？」

紫の頬を優しく撫でながら、ゆっくりとこちらへと向かせる。

「止めて・・・」

イヤイヤと首を振りながら、小さく拒絶の意を示す。

だが、私の手に固定され顔を反らすことが叶わず、至近距離で向き合う。

「……」

私は無言で紫の赤く充血した瞳と、頬を流れる涙を見つめた。

「み、見ないでくださらない？」

唯一自由の効く二つの瞳だけを動かし、紫は恥ずかしげに私の視線から逃れた。

「……誰だね？」

「……誰って、何が聞きたいのかしら？」

「紫よ……いったい、誰が君を泣かせたのだね？」

出来るだけ優しく言いながらも、言葉に中に冷たい物が含まれるのを感じた。

「……」

紫は一瞬のあいだ、キョトンとすると、

「ふふふ……ねえ、エミヤ？ 貴方はまさか、私の為に怒ってるのかしら？」

はかなげに微笑みを浮かべて、私の手に自らの手を重ね合わせた。

「・・・当たり前だ。私が存在する限り、何者にも君を傷付けることは許さない」

「あらあら・・・そんなことを言っちゃって、いいのかしら？」

「君と言う存在を守護する者として、私では役不足かね？」

「そんなことはないわ・・・でもねエミヤ？これは私からしたらの話しだけでも、その娘からしたらどうかしら？」

言うや、はかなげだった微笑みを悪戯な笑みに変え、紫は私の背中を指差した。

「・・・」

私は紫の指差す先を目で追い、

「す、すまない幽香・・・私が悪かった。だが決して、決してわざと無視していた訳ではないのだぞ？」

恐ろしいまでに頬を膨らませた幽香に睨まれ、額に冷や汗を流した。





隙間は再会へ（後書き）

週末ぐらいに、色々と捕捉出来たら幸いです。

時間があればですがな。

再会は縁で・・・へ(前書き)

忙しいはオロナミンCやABCの親戚だと思っんだ。

再会は縁で・・・へ

/

この再会は奇跡

一つの島国で二つの個が別々の道を歩む経過で、その最中で偶然にも交じり合った奇跡の再会。

だが、この限られた奇跡は数を為すことにより、決められた必然へと変わる。

「・・・フンッ!..!」

プイツと顔を反らす幽香。

「ゆ、幽香よ・・・君を蔑ろにしたことは、確かに私の落ち度だ。だが、先程述べたように、決してわざとではないのだよ」

背中におぶった幽香の体を軽く揺すりながら、私は稚児をあやすように宥める。

「それに、雨期のヒキガエルのように頬を膨らませてしまっただよ、せっかくの可愛らしい顔が台なしだぞ？」

「　　なッ！？」

私の言葉に幽香は目を見開き、

「わ、わた、私・・・ヒ、ヒキガエルなんかじゃないもんッ！！」

声を荒げては、瞳を潤ませ憤怒した。

「す、すまない・・・今のは完全に私の失言だったな。ああ、君には本当に申し訳ないと思う・・・このとうりだ、私を許してくれ」

瞳に涙を溜め始めた幽香に焦りながら、私は誠心誠意を込めた謝罪をする。

「き、嫌いだもん・・・」

だがその謝罪も虚しく、幽香は両の瞳からポロポロと涙の雫をこぼした。

「私のこと無視するお父さんなんか・・・わ、私は嫌いなんだもんッ!」

「た、頼むから泣かないでくれ・・・」

泣き出す幽香の姿に、私は頭を抱えなくなった。

「大嫌いなお父さんのことなんか、私知らないもんッ!」

「・・・そ、そうか」

こちらには一切目を向けずに言う幽香に、私はただうなだれた。

まさか大嫌いとは・・・

いやはや・・・面と向かって言われると、なかなか傷付くものだ。

しかし幽香よ、君は何故・・・何故そこまで不機嫌なのだ？

私の知る限り、君はあまり怒るような性格ではなかったはずなのだが・・・今日の君は、いったいどうしたと言うのだね？

つと、

「あらあら、お父さんは大変ねえ？」

自らの失言が招いた結果に意気消沈する私に、紫が良い笑顔で言うてくる。

「でも仕方ないわよね・・・エミヤはお父さんなのに、大事な娘のことを蔑ろにしたんだから」

「紫よ・・・君はいつたい、何がそんなに面白いのだね？」

「別に面白いだなんて、そんなことは思ってませんわ・・・ええ、エミヤの困った顔が愉快だなんて、決して思ったりしてませんわよ？」

「・・・」

袖を口元に当てて笑う紫に私は目を細めると、無言で冷たい視線を向ける。

「怖い怖い・・・お願いですから、そんなに睨まないでくださらない？」

しかし紫は、私の冷めた視線に笑みを深めるだけで、決して笑うことを止めない。

「なに、私は睨んでなどいないさ・・・つまりは紫よ、それは被害妄想と呼ぶべきものだ。だから君は、何も気にする必要はないのだぞ？」

「あらあら、本当に怖いわ・・・お父さんは自分のせいで泣き止まない娘に手を焼いて、挙げ句の果ては私に当たるのね？エミヤ・・・八つ当たりは、さすがに大人気がなくてよ？」

皮肉混じりに告げたその言葉に紫は笑うことを止めると、いったん真顔でそう返してから再び顔に笑みを浮かべ、私の背中におぶさった幽香へと視線を向けて、

「ほんと、駄目なお父さんでごめんなさいね・・・でも、こんな駄目な人にも優しい所が沢山あるのよ？だからいつまでも怒ってないで、ちゃんと彼を許してあげてね？」

まるで我が子をあやすように、そう語り掛けた。

「・・・フンッ！！」

しかし幽香はあやす紫には目もくれず、私の顔に一度視点を合わせるとは、再び大袈裟に鼻を鳴らしてソッポを向いた。

「・・・あ、あらあら」

そんな幽香の姿に紫は微笑みながらも、若干頬を引き攣らせた。

「クツ・・・」

表面上は笑いながらも「無視されたわねえ・・・」と呟く紫の横顔が、私にはとても可愛らしく見えた。

「何が可笑しいのかしら？」

私の視線に気付いた紫は、笑みを止めジト目を向けてくる。

「いや、別に失礼なことは考えてないさ・・・ただ君が微笑ましいなど、少し可愛らしく思えてな」

思ったこと的一切をごまかさずに言い、私は紫に微笑んだ。

「・・・貴方がそんなだから、駄目なお父さんって言われるのよ」

私が笑みと共に告げた台詞に、少しの気恥ずかしいさを覚えたのか、紫は頬を薄紅色に染めて顔を背けた。

「ふむ・・・なかなかどーした、解釈の難しいことを言ってくれて  
ではないか・・・」

そんな紫に返す言葉が何も浮かばず、私はヤレヤレと肩を揺らした。



だが、私はこの時その外面的な仕種とは別にした内面の部分で、確かな温かさを感じていた。

このささいなやり取りが、今は何と心地好いことか・・・

紫とこうして向かい合い、互いにただ皮肉を告げ合うだけなのにも関わらず、それが嬉しくて仕方がない。

この気持ちを誰かに聞かせれば、きっと「下らない」の一言でかたづけられるだろう。

だが、それはどうであろうと構わない。

何故ならこの日この場所で紫と再会したことに、私は言いようのない喜びを噛み締めているのだから・・・

「ところでエミヤ？」

肩を揺らす私に紫は顔を近付け、ボソリと小声で囁く。

「聞きたいのだけど・・・貴方の背中て癩癩を起こしてるその娘は、いったい誰なのかしら？」

言いながらも今だその頬は薄く染まったままで、視線をわずかに逸らしたその体勢。

まるでそれは、男女の秘め事を耳元で囁くような問い掛け。

「その質問はもつともだが、少しばかり今さらだな・・・それは別にいいとして、さすがに顔が近いぞ紫？」

紫が喋る度にこぼれるわずかな吐息ですら聞こえてくるこの距離では、普通に言葉を交わすにはいささか顔が近過ぎる。

「あら失礼・・・」

私の言葉に紫は顔を離し、「ハア・・・」と何故か溜め息を一つこぼす。

「ふむ・・・」

今は、何の意味を持った溜め息だろうか・・・

「いやなに、私は別に文句を言ってる訳ではないのだがな・・・まあ、それはいったん置いとくとする。さて、それでは君に紹介するが・・・」

紫にそう言って振り返る私は、幽香の顔を見て絶句した。

「・・・楽しそうだね？」

私にそう言ってくる幽香の顔は、もはや無表情とも取れる能面な表

情。

これは大変情けない話したが、見ていて普通に怖い。

「ゆ、幽香よ……き、君はいつたい、何をそんなに怒っているのだね？」

そして、再び私の額には汗が滲んだ。

「……怒ってないもん」

「ほ、本当に怒ってないのかね？」

「本当だもん……私、お父さんにはもう怒ってないもん」

「そ、そうか……」

重苦しい何かを全身から淀ませる幽香に、私はただただ相を打つしか出来なかった。

しかし、『怒ってない』か……ハッキリと言ってしまえば、それは完全に嘘だろう。

私には怒りが臨界点を容易に突破して、頭が熱くなるのを通り越し

てしまい逆に冷めてるように見えるのだが・・・

がしかし、「幽香よ・・・本当は怒ってるのだから？」などと聞く訳にもいかない。

今の幽香にそれを聞くのは、無神経な上にただの向こう見ずな蛮勇だ。

その結果として更なる怒りを買ひ、自らの首を絞めることになるのは目に見えている。

だから私には、そんな履き違えた勇氣は要らない。

むしろ、こちらから願い下げだ。

つまり余計なこととは言わず、しばらくのあいだはそっとしておこう・・・

「・・・貴女の名前は『幽香』でいいのかしら？」

そんな私の情けない思考を尻目に、紫は幽香へと話し掛ける。

「・・・」

幽香は紫に話し掛けられ彼女に目を向けるが、口を開けることはせず何も応えない。

「ふふふ・・・初めまして幽香。私の名前は八雲紫と言つものよ」

柔らかく微笑み、紫は幽香へと自己紹介をした。

「貴女も彼の娘みたいなものなのよね？ならこの場合、私は貴女の姉になるのかしらね・・・そして貴女は、私の妹になるのかしら？」

「・・・」

「ただの自己紹介だから、そんなに睨まないでちょうだい。私は別に、貴女から彼を奪おうだなんて思ってないから」

言つや紫は、いまだ無表情な幽香に手を差し出す。

「握手をしましょう？私達が知り合つた記念に」  
パシンッ！

「！・・・つて、あら？」

握手を求め差し出された手は、幽香の小さな手の平によって力強く叩かれた。

「・・・」

無表情のまま、自分へと差し出された手の平を叩いた幽香と、

「・・・」

その幽香へと差し出した手の平を、幽香自身の手によって叩かれた

紫。

微笑む紫と無表情の幽香……二人は互いに表情を変えず、無言で見つめ合う。

しばらくのあいだ、場を沈黙が支配した……

「ふむ……さて幽香よ、この女性は八雲紫と言っただな？昔に色々あって、私が親代わりに面倒を見ていたのだよ」

あまりにもマズイ二人の空気に、私はまくし立てるように言う。

「つまり彼女は、私にとって娘みたいなものであつてな……まあ言い方によっては、君とは姉妹に当たる人でもあるのだよ？」

その言葉を向ける対象は、今も背中で紫を見つめる……いや、もはや親の敵を見るかのように睨む幽香。

「……」

分かり切っていたことだが、そんな幽香からはなんの反応もない。

「ああ、これはちょうどいい機会だな……どれ、まずは二人で握手でもしてみても、互いに交流を深めてみてはどうだね？」

だが、そんなことは気にしないとはかりに言うや私は二人の腕を掴



「ふ、ふふふ……」

突然、口元を押さえながら笑い出す紫。

「……ゆ、紫？」

なかなか腰の引けた考えを巡らせていた横で突然笑い出した紫に、私は悪寒を感じ思わずも後ずさる。

「い、いきなり笑い出して、どうかしたのかね？」

「どうもしないわ……。ただ、反応が子供らしくて可愛らしいと思っただけよ」

「そ、そうかね？なら別に構わないのだが……」

「ええ、それだけですわ」

紫は眩しい笑顔で言う。

「そうか、ならば結構だ……」

そう応えながらも、『だが紫よ……その笑顔、眩しさのあまり少々寒いぞ？』と胸のうちでこぼした。



「それはともかくとしてだ、君に聞きたいことがあるのだが・・・聞いても構わないかね？」

「ええ、構いませんわ」

「では聞くが・・・紫、君は何故この場所に居たのだね？」

背中に背負った幽香の機嫌を若干気にしながらも、私は目を細めて紫に尋ねた。

ただ再会を喜ぶだけならば、再会の場が何処であろうとなんら問題ない。

互いのこれまでを語り、時には笑い時には泣けばいい。

ただ単純に、それだけでいいのだろう。

特筆すべき事柄が何もなければ、再会とはそれで済む話だ。

ああ、何もなければそうなのだろう・・・

だが、残念ながら私達には、しがらみと言う物が存在する。

それは、『ただ人間ではない』と言う非常に単純でありながらも、単純なだけにとっても大きく何処までも付き纏う種族の違い。

哺乳類とも両生類とも取れず、彼ら人類とは『ナニカ』の異なつたまったく新たな生態を持つ種族達・・・それらが一つに纏められ、私達は妖怪と呼ばれる。

いつのまにかそんな物が、私達と人間の境界には存在していた。

そして、護るべき者との・・・幽香との出会いが、私にその事柄が如何に重い物なのかを、嫌と言うほど教えてくれた。

だからなのだろうか、再会した場所が人間の暮らす場所だけに、私は聞かすにはいられない。

「何故、かしらね・・・」

紫は表情を曇らせると、私から顔を逸らす。

「そうね、何故こんな場所に居るのか・・・不思議よね、今となつては私にも分からないわ」

「・・・何があつたのだね？」

「・・・そうね、何かがあつたはずなのよね？」

私の言葉に紫は何か可笑しいと首を左右に振り、つまらなそうにぼやいた。

「でも、何も無いの・・・心惹かれる物が、何処にもなかったのよ・・・」

「そうか・・・」

ぼやく紫の姿にふと瞳の奥を覗けば、そこにはあの日に魅せられた輝きが存在しなかった。

「ふむ・・・別々の道へ歩み出した君が、今まで何を見てきたのかは分からない。そう、私には何も分からない・・・ただそうだな、私は君に問いたいことが一つだけある」

「・・・」

「まあこれは、まったくの見当違いかもしれない。だが言わせてくれ・・・」

さて、私の言葉がこの娘を曇らせた『ナニカ』を、少しでも晴らせれば良いが。

「現実はどうなにも上手く立ち回ろうと、何処かで何かが皮肉な結果を迎える物だ。だから私達は、時に躓き時に立ち止まるのだろうか・・・ああ、つまり今の君は、誰もが一度は通る道の上に居る訳だ」

半分が憶測で、半分が推測。

だが、だいたいは的を射っているだろう。

「ふ、ふふふ・・・」

先ずは返されたのは、小さな笑い声。

「あれだけ頑張ったのよ？我慢して、我慢して我慢して毎日を通してた・・・それを貴方は、『それは在り来りな通過点だ』それだけでか片付けるつもりかしら？」

次に、可笑しいと言いたげな口調で、紫は私に問い返す。

「生憎と私は何も知らないのな・・・すまないが、この話しに關しては第三者にしかねない」

肩を震わせながらも笑みは崩さず、揺れる瞳で・・・いつのまにか涙を滲ませた瞳で私を見上げる紫に、淡々と問う。

「だからこそ君に対して、私はただの第三者として問いたいのだよ・・・さて紫、君はここで立ち止まるのかね？」

「貴方は何が言いたいの？まだ私に頑張れと・・・まさか、諦めるなどでも言いたいの？」

「いや、そんなことは言わないさ・・・頑張れの一言もなかなか使いたい所が難しくてだな？あまり使い過ぎると、時には必要以上の重荷になる。だから私は、安易に頑張れなどとは言えぬよ」

「じゃあ・・・何が言いたいのよ？」

瞳を潤ませた紫は、言うや笑みを消し私を睨み付けた。

「なに、聞いているだけだよ・・・君が今後どうするのかを、ただ聞いているだけだ」

そう、ただ聞いているだけ。

これと言った答えなど、別に求めてはいない。

「・・・ふざけないでよ」

「私はいたって真面目だが？」

「真面目って、何よそれ・・・私はただ、ただ貴方に近付きたかっただけなのに・・・貴方と同じ物が見たかっただけなのに・・・貴方は、エミヤはどーでもいいと片付けるの？」

「紫よ、あまり無駄なことはするな。私と君は決して同じにはなれない・・・いや、なつてはいけない」

その言葉を合図に、頭が急速に熱を帯始めた。

まさか、この私に近付くかと？

それだけは『決して許す訳にはいかないッ！』と、心の奥底から迫り上がる灰色の何かが、そう叫んでいる。

「私は決して、君を同じになどさせない・・・ああ、君は絶対に為せる。君だけの答えと君だけの間違えを、君は今まさに見付けようとしているのではないのかね？だから教えてくれ・・・君はこの先、その理想をどう担い進むのだねッ！？」

迫り上がる灰色に頭は次第に熱を持ち、私は上から覗き込むように顔を近付け、紫の瞳を真っ直ぐに見据えた。

ぶつかる視線と視線。

目を見開き見上げる紫と、その紫を睨むように見下ろす私。

互に見つめ合う形で静止して、数秒の時が過ぎた・・・

つと、

「お父さん・・・」

唐突に髪を引っ張られ、熱くなっていた頭が一気に冷めた。

「・・・そのお姉ちゃん、泣いてるよ？」

その言葉は同時に、幽香が初めて紫個人を呼んだ台詞となった。

「・・・す、すまない」

幽香の言葉に我へと返り、瞳から涙をこぼす紫の姿を正面に、ただただ胸が痛んだ。

「本当にすまない・・・君を笑わせるつもりが、泣かせてしまった・・・」

そうだ、脅かすつもりなど毛頭なかったのだ。

もちろん、責めるつもりもなかった・・・

「・・・」

紫は私を見上げ、沈黙のまま涙を流す。

「ただ、君の答えが聞きたかった。たったのそれだけだった・・・それが何であれど、再びその背中を押しやろうと・・・ただそれだけだった。」

「私はいつたい、何を感情的になっていたのだろうか・・・大事な

家族を二人も泣かせるなんて、ほんと馬鹿な父親だ。何度も謝って、何度も繰り返して……」

「エミヤ……貴方はきっと、悪くない」

「……紫？」

突然、瞳を濡らしたままの紫に抱きしめられ、自身の胸に額を押し当てられ、私はただうろたえた。

「貴方は私の知る貴方……私が好きなの貴方は昔とは違う貴方。そして、それが今の貴方……だから貴方は、エミヤは何も気にしないで……」

「少し待て、紫……君はいつたい、何を言ってるのだ？」

「……今？昔と違う？」

つまり、何を言いたいのだ？

「意味は分からなくていいのよ……ただ、今度は私がエミヤを支えたいって、そう思ってるだけ」

「クツ……改めて待つんだ紫、それはいささか変だぞ？」



家族達が・・・私達が互いに支え合う関係なのは、当たり前だ。

「既に私と言う存在は、君に支えられてこの場に立っている。だからそれは、今さらが過ぎるのでは？」

もちろん、背中で大人しくする幽香も大事な支えで、絶対に忘れはしない。

「いいのよ・・・支えるの言葉にも沢山の意味があるだから、私にはこれからの意味で十分なもの・・・」

紫はそう言い顔を上げる。

「だからエミヤも・・・これからの私を、変わらずに支えてくたさらない？」

「それは当たり前だ・・・例え君が現実に汚れようと、永久に続く時の流れに蝕まれようと・・・ありのままにさえ生き続けることが出来れば、本質は何も変わらない」

「もし、それが叶わなかったら・・・私が変わり果ててしまったら、エミヤはどうするのかしら？」

「ああ、その時は笑いながら言っただろう・・・今さらどんな君だっただと、私は変わらず愛してるよとな」

私は自然と笑いながら、紫に応えた。

「ふふふ・・・あんまり嬉しいことばかり言っていると、そのうち本気にしますわよ?」

「・・・む、本気とは?」

「分からないなら、構いませんわ・・・」

「そうかね?しかし紫よ、君は先程から敬語に纏まりがないが、無理に敬語を使う必要はないのだぞ?」

個人的な意見を言えば、敬語はあまり嬉しくないのだが・・・

「・・・だ、誰のせいよッ!!全部エミヤが、人のことを掻き乱すようなことばかり言うからでしょッ!!」

図星を突かれたのか、うろたえる紫。

「いや、私は別にだな・・・っと、どうかしたのかね?」

再び髪を引っ張られた私は、背中の幽香へと顔を向けた。

「むううう……」

するとそこには、またもや鬼のように頬を膨らませた幽香の顔。

「……」

そんな幽香に「あまたか……」と、内心でこぼしながらも言う。

「どうかしたのかね？」

「ダメ、近親相姦……社会通念上良くないッ!」

再会は縁で・・・へ（後書き）

今週はヤサグレてるので、こんな時間に更新したりする訳だったりする。

縁は影へ（前書き）

色々と試してはみたが、最近になって方向性がやっと定まった。

なので物語を進めるとします。

決してさだまさしではない

/

近親相姦・・・

少し前に私が口走ってしまった、教育理念からは果てしなく遠退いた痛過ぎる言葉。

そのあまりにもあんまりな言葉が幽香の口から発せられ、痛い沈黙が再び場を支配した・・・

「ふむ・・・ああ、それは全く以って違つぞ幽香？」

内心では多大に焦りながらも、私はその動揺を一切顔に出さずに言う。

「君が今何を勘違いしてのるかなど、私には毛頭見当が付かない。だが、間違いなく言えることがある……」

「ぜ、全然違うもないもんツ!!」

「……まだ話しの途中だったのだが……もしや君は、私に皆まで言わせないつもりかね？」

つい先日までの君は、そこまで自己主張が強かっただろうか？

「ち、違くないんだもん……家族が愛し合っちゃダメなんだもんツ!!」

「いや、私と紫は別に愛し合ってはいないのだが……」

「それに、その人なんだか胡散臭いし、すごくきな臭いんだもん……だから絶対にダメだもんツ!!」

もはや、半ばムキになって言う幽香。

「待て幽香……君がそんな言葉を何処で覚えてきたのかは知らないが、それはさすがに失礼が過ぎる発言だぞ？」

発言をたしなめるよう言ってから、私は幽香の心ない発言で傷付いた。た。だ。ろ。う。紫。へ。と。視。線。を。向。け。る。

「見たまえ幽香・・・君があまりにも失礼なことを言うから、紫が俯いてしまったではない、か・・・君は何をしているのだ？」

しかし予想とは逆に、そこには顔を俯かせる紫の姿があった。

「・・・そんな、何故こんなことに・・・何故なの・・・いったい何故？」

顔を俯かせ、訳の分からぬ独り言を繰り返す紫。

「まいった、これは実にいかんな」

その様は、端から見ていてかなり不審だった・・・

「・・・そら、見たまえ幽香。彼女はあんなにも分かりやすく、可哀相なぐらいに錯乱しているではないか」

私は譫言のようにブツブツと何かを呟く紫から視線を外して、再びたしなめるように幽香へと言った。

「私悪くないもん・・・だって、思ったことを言っただけだもん」

私の言葉に、幽香は唇を尖らせ反論する。



「いや、考えの良し悪しの問題ではなくてだな・・・言葉とは非常に扱いが難しく、時には容易に他者を傷付ける物なのだぞ？」

唇を尖らせる幽香に言いながらも、私は少し前に自分が発った言葉に自省する思いだった。

「知らないもん・・・それにお父さんは最初、山の向こう側を気にしてたのだよ？」

「むう、それは確かにそうだが・・・」

「なのにお父さんは、何でいつまでもこんな場所に居続けるの？私  
は人間の沢山居る場所になんか、いつまでも居たくないよ・・・」

最初は強く言いながらも、だんだんと語尾を弱める幽香は俯き加減の表情で、私の体に回した腕によりいつそう力を込めた。

「そうか・・・」

成る程な・・・だから君は、先程からあんなにも機嫌が悪かったのか。

これは参ったな・・・

意味も分からず拗ねてるのかと思えば、そんな理由があったのか・  
まったく、これは本当に今さらになるが、物事とは自分の視点では計れないのだと思い知るばかりだ。

「すまない幽香・・・これに関しては、完全に私の落ち度だ。だから君には心から謝ろう・・・考えが到らず申し訳ない」

そう告げながら、私は腕を伸ばし幽香の頭を撫でた。

「わぶッ・・・う、ううん、別にいいよ」

突然頭を撫でられたからか、一瞬驚きの声を上げる。

だが、次にはニヘラと嬉しそうな笑い顔を作ると、幽香は大きく頷いた。

「それは何よりだ・・・」

その変わり身の早さに微笑みを浮かべ、私は今だに俯く紫へと視線を戻し声を掛ける。

「いきなりですまないが紫、この娘の為にも場所を他に移したい。それで何処か、人が来ないような所を知らんかね？」

「……」

「聞いているのか紫？」

無言で俯く紫を不振に思い、私は覗き込むように顔を近づけて問い掛ける。

「……え？」

すると紫はパツと顔を上げ、キョトンとした表情で数回目をを瞬かせてから返す。

「私に何か言ったかしら？」

「いや、何か良い案はないかと聞いているのだが……」

「良い案、ね……」

紫は咳くと同時に、数秒のあいだ考え込むと、

「そうね……貴方と愛し合う関係が駄目と言われても、私にはそれを全て否定するような意思は皆無で……そう、つまり恋とは各々の自由意思を互いが尊重した上に、官能的に行うべきですわ」

などと意味の分からない返答をした。

「いや待て、私はそんなことは何一つとして言っていない・・・それより先程から様子が変だが、いったいどうしたのだ？」

個人的な意見を付け加えるのならば、綺麗にまとめておきながら最後を官能的で閉めた意味が特に分からない。

「・・・予測して答えたのだけど、違ったかしら？」

「ふむ・・・これは大変素晴らしいな。ああ、見事に掠りもしない解答だぞ？」

「だいたい、『予測して答えた』とはなんだ？」

つまり君は、私の話を聞いてなかったのだな？

「ごめんなさい・・・全然聞いてなかったわ」

紫は申し訳なさに謝る。

「いや、それは別に構わんのだが・・・」

個人的な意見を言えば、幽香の発つた『きな臭い』や『胡散臭い』を聞いてなければ何よりだ。

「それより紫、君は先程から何かを考え込んでいたようだが？」

「心配を掛けてしまったみたいだけど、別に何でもないので・・・だから気にしないでちょうだい」

私にそう言って、紫は疲れたように微笑む。

「いったい、どうしたと言っているのだろうか？」

先程までの紫は、私とのやり取りに自然な笑みを浮かべていた。

なのに何故、突然疲れたよいな・・・まるで何処か空虚で、渴いたような笑みを浮かべるのだ？

っ、

「・・・早く行こうよ」

首を傾げる私に、幽香が髪を引きながら言う。

「すまない幽香・・・少し待ってもらっても構わんかね？」

「ううう・・・まだ何かあるの？」

「別段、何かがあると言う訳ではないのだがな……」

語尾を濁しながら、私は紫へと視線を向ける。

すると、向こうもこちらを見ていたらしく、互いの目が合った。

「エミヤ……私のことは気にしないで構わないから、その娘と別の場所に居てちょうだい」

「いや、しかしだな……」

「心配しなくても大丈夫よ」

紫は私に微笑むと、背後へ振り返り空を見上げた。

「これってちょうどいいと言うのかしらね？どうやら朝廷の方で、私にも用事が出来たみたい……だからエミヤ、日が暮れたらまたこの場所で落ち合いましょう？」

「……」

「絶対にまた来ますわ。だからその時まで、私の新しい妹をお願いするわね……」

「ああ、了解だ紫」

腑に落ちないものを抱いたが、私は紫の背中に何も言えず応じた。

「それと、一っだけ私から君に念を押させてもらうが・・・待ち合わせに関して、言い出しつぺは君だからな？」

つまり絶対に来るのだぞ？

「ふふふ・・・せっかく会えたのだから、腰を据えてゆっくりと話したいものね？ええ、何度も言うけれど、絶対に来ますわ」

「そうだな・・・では、またこの場所で落ち合おう」

言うや私は、山へと向かい歩き出す。

その時・・・

「 エミヤ・・・ 」

歩き出した私の背中を、蚊の鳴くような弱々しい声が呼び止めた。

「・・・どうかしたのかね？」

私は立ち止まって声の主へと振り返り、こちらを見つめる紫に視線

を向けた。

「あの山を越えた先に、私の見てきたモノがあるわ……」

連なる山々に指を差し、紫は悲しげに告げる。

「貴方がソレを目にして何を思うか、それは私には分からない。けれど、貴方には知って欲しい……でも私は、その上で変わらない貴方でいて欲しいの」

「ソレとは……いつたいあの先に、何があると言うのだ？」

「それは私には言えないけれど、でもお願い……貴方は貴方で、私の理想で在り続けて……お願い」

向けられたその瞳は弱々しく、まるで私に縋るようだった。

「……」

私はただ黙り、紫の瞳を見つめ返す。

しかし、まさかこの身が『私の理想』などと言われるとは……



はたして私は、誰かに理想と呼ばれるほど大層な・・・そんな立派な存在だろうか？

自分を客観的に評価すれば、どちらかと言えば到らないさが目立つ。毎回毎回、何かがある度にくだらない自問自答ばかりを繰り返し、悩んだ末の行動が裏目に出ることも一度や二度ではない。

それどころか、同じ過ちを繰り返してばかりだ。

そんな私が紫から『私の理想』と、そう呼ばれるに値するだけの価値があるだろうか？

いや、そんなことは関係ないか・・・

これは私の考えであって紫の考えではないのだから、いくら私が自己否定をしても意味がない。

ああ、だからそうだな・・・駄目な親が唯一持った意地とでも言うてしまおうか？

彼女が私をそう評価するのならば、彼女の育ての親として、先を行く先人として、後ろを歩く大切な娘の期待に応えぬ訳にもいかないな・・・

「いきなりごめんなさいね・・・もう行ってもらって構わないわ」

「クツ・・・ああ、承知した紫。君の本意が何かは分からないが、その期待を私は絶対に裏切らないと、ここに約束しよう」

私は微笑みを浮かべ、こちらを弱々しく見つめる紫へと大きく、そして力強く頷いてみせた。

いいだろう紫、私は君の理想で在り続けようではないか。

君が今の私を望む限り、我が存在の在り方は不変。

それが君に・・・君と君の母に救われ魅せられた私が、君達に対して行える唯一の恩返しだ。

「ええ、ありがとうエミヤ・・・」

それは惨状だった

赤黒い液体によって染まる大地。

そこに居なくとも擬似的に鼻を付く、生臭い脂と苦い鉄の臭い。

そして、辺り一面に内臓を撒き散らす、かつては人だったろう肉塊。

嗅覚と視覚、その両方が捉えた光景はあまりにも悲惨で、あまりにも不快感を催す。

他に窺えるのは、今だ苦しみもがくわずかな影。

泣き叫び痛みを訴え、なかなか訪れない死を待つ人間達の姿。

人間は簡単には死なない・・・

皮肉にもそれが、時に苦痛を長引かせる。

だが、人間は簡単に死ぬ・・・

本来なら生命力が高いはずが、時には信じられぬような要因で容易に息を止める。

きつと、これもまた皮肉・・・

「なあ、紫・・・君はこんなものばかり見てきたのか？」

意図せずに、私の口からはそんな言葉がこぼれた。

遙か先・・・

今や人間の常識から遙かに外れた視力を以って、山頂から探るように見下ろした先に見えたソレ。

そのあまりにも悲惨な光景に、私は足を止めて瞼を閉じて顔を背けた。

「・・・どうしたの？」

突然立ち止まった私に、背中におぶさる幽香の声。

「いや、何でもないさ・・・」

幽香に応えながら、閉じていた瞼を開く。

「簡単に窺ってみたのだが、この先には何もないようだ・・・まったく、ここまで来ておきながら、完全なむだ足になってしまったな・・・」

「そつなの？」

「ああ、どうやら私の杞憂だったようだよ・・・だから仕方ない、一先ず戻ろうか」

私は回れ右をするように体を向き直して、重い足取りで来た道を戻る。

今からあの場所に向かったところで、私には何も出来ることがない。

いや、幽香を連れた今のままでは、あの場所に向かうことは出来ない。

あんな惨状を、幼い少女に見せていい訳がない。

それに、だ・・・惨劇はすでに到ってしまった後、もはや今となっては全てが手遅れだ。

こんな私を理想と呼んだ紫・・・君が今その心に何を抱えているのか、それが少しだけ理解出来た気がする。

きつと君は、理想と現実に苛まれているのだろう。

光を目指して走る最中に、いくつもの暗闇を知ったのだろう。

それは君の瞳に、自らが理想を追い求める限り、決して消すことの叶わない矛盾に映ったのだろう。

そして気付いたのだろう・・・

誰もが納得する正しい答えなど何処にも存在しないと云う事実には、君は気付いてしまったのだろう。

「難儀なものだな・・・」

分かり切っていたものを再確認しては、改めてそれを噛み締めるように、そんな言葉が漏れた。

生きることも求めることも難儀で、理想を持つことは同時に現実を知ることなのだろう。

しかし、だからこそ夢や理想は美しく、その反面でとても醜い面を持つのだろう。

これはきつと嫌な考え方かもしれないが、正解も不正解も実は限りなく同じであって、物事の良し悪しや正と負も全ての生き物が抱えている。

だから私達は皆、誰にも見せない・・・いや、誰にも理解の出来ない

い心の葛藤を繰り返しながら、何処かで帳尻を合わせるしかないのかもしれない。

それがきつと・・・

つと、

「ねえ、お父さんいきなりどーしたの？」

ふと気付くと、頭の中でいつまでも考えを巡らせる私の顔を、不思議そうな顔で窺ってくる幽香がいた。

「幽香・・・これから先、私は変わらずに居られるだろうか？」

そんな幽香に、私は足元を眺めながら問い掛ける。

「そして、いつか君が現実を知った時、今と変わらずに生きることが出来ると・・・そうなのだと、偽らずに言うことが出来るかね？」

「ううん・・・何それ？」

「いや、何でもない・・・君には聞いておいて悪いが、これはただの独り言だ。だからすまないのだが、気にしないでくれ」

言いながら視線を向けると、そこには唸りながら眉を八の字にして、考え込むように首を傾げる幽香がいた。

「ふむ・・・癒しとは案外、近くに転がっているものだな」

その仕種が微笑ましく、思わず口元が緩む。

まったく、実に愛らしいな・・・

「うん???」

いきなり微笑んだ私を、幽香は再び不思議そうに見つめる。

「いきなり笑い出して、どーかしたの?」

「いやいや、どうもしない・・・さて、日が暮れるまではまだ長いからな、のんびりと山道を行こうか」

「う、う、うん?」

幽香はさらに唸り、眉を八の字に曲げる。

「私がこんなことを言うのも変だが、分からないことはいつまでも気にしないに限るぞ?」

微笑まし過ぎる幽香の表情や仕種に、私はそう言って笑みを浮かべた。



今だ気分は優れず、足取りは重いまま、脳裏にはあの惨状が広がっている。

だが、決して立ち止まることはしない。

いや違うな、この場合は出来ないと言った方が正しいのだろう。

何故なら、まだ私には背中に背負った者が居る。

まだあの娘が・・・私の後続く者が居る。

だから私は、そんな彼女らの見本と為るべく、悩みながらも進むとする。

それがたった今、私が親として持ったなけなしの意地だ。

「そうだな・・・私もいつの日にか、自分自身の答えを出さねばいけないな・・・」



縁は影へ(後書き)

改訂しなきや・・・

影は夜へ（前書き）

ダメ川柳

久しぶりに打った麻雀に負け、メソメソとふて寝してたら、もうこんな時間だよ・・・

j・s

## 影は夜へ

/

「……遅い。実に遅い」

既に太陽も西の空へと沈み、今や月の光が世界を照らすその下で、私はポツリと立ち尽くしていた。

「やれやれ、言い出しつpegが遅刻か……いや、時間の指定はしていなかったのだから、この場合は遅刻とは呼べんか」

ぼやきながら肩を揺らして、地面を一心に眺める幽香を横目にチラリと見やる。

「……」

私の視線の先には、地面へとピントを合わせたまま微動だにしない幽香。

「いったい幽香は、何をやっているのだろうか？」

屈んだ体勢でピクリともせず地面を眺めてると思えば、時々モゾモゾと体を揺らしてはキョロキョロと顔を左右に振り、しばらくすると再び動きを止める。

そして、制止する度に改めてピントを地面へと合わせ、ジーっと何かを眺める始める。

「ずいぶん前から、その繰り返しだ。」

「はたから見たらと言うのか、私から見れば大変理解に苦しむ行動だった。」

「ふむ・・・幽香、少し気になることがあるのだが、聞いても構わないか？」

「んー・・・なに、お父さん？」

「こちらには顔を向けず、幽香は声だけで返す。」

「いや、たいしたことではないのだが・・・」

「先程から待ちぼうけをしてるだけに、今は些細なことですら大変気になる・・・つと言っより暇だった。」

「君は先程から長いこと地面と睨めっこをしているようだが、そこ」

には何か面白いものでもあるのかね？」

「うん・・・ほら、お父さん」

幽香は私に顔を向けると、笑顔で右手を差し出す。

「これ、アリさんツッ!」

「あ、ああ・・・確かにこいつはアリさんだな」

差し出された手の平には、カサカサと忙しく動き回る働きアリが一匹。

「して幽香、このアリさんだが・・・どうかしたのかね？」

「アリさん、見てると楽しいツッ!」

満面の笑みを浮かべながら、幽香は手の平に乗せたアリを指で突いた。

「そうか、それは良かったではないか・・・」

面白いのなら結構だと返すのだが、残念ながら私にはよく分からない面白さだった。

「それでは幽香、しばらくはここで待ちぼうけを食うことになる。

だから君は満足のいくがままに、好きなだけアリと戯れていてくれ」

「ラジャーッ！！」

アリを持たない左の手でビシッと敬礼をすると、幽香は再びしゃがんでアリを地に放す。

「まさか、『ラジャー』ときたか・・・」

私の記憶が正しければ、この時代にはまだ存在しない言葉だったはずだ。

ラジャーの言葉をいつたい何処で覚えたのか、少しだけ気になる。

まさか、『幽香がラジャーの起源』などと言うオチはないだろうが・・・全てを否定出来るほど、私は世界を知らない。

それにだ、そもそも歴史の成り立ちはその大半が専門家や学者達の推測であって、実際の起源がいつだったかなど正確には分からないからな・・・

「・・・深く考えるのは止めよう」

くだらないことを無駄に深く考えていた自分に、思わず嫌気がさした。



そもそもが、気にするほどの内容ではなかった。

しかし、紫は本当に遅いな・・・

幽香から外した視線を空へと向ければ、その先には満天の星空が広がる。

昨晚、少女に物語を語った夜と同じ、果てのない宇宙に散りばめられた無限の星々。

それは、言葉に出来ないほど、とても綺麗だった。

そして・・・

視線を下ろすと、その先にはまた別の光景が目映った。

これもまた、綺麗だな・・・

所々に設置された数々の松明が淡く揺れ動き、朧げな光を作る。

誰が番をしているのかは知らないが、それは消えることのない灯。

その点々と灯る都の明かりがわずかに揺れる先では、今は寝静まっているだろう人間達が、静寂の中にも数え切れぬほど息衝いている。

都と言う囲いから外れた場所で、彼らの存在を遠目に眺める私と、今は向こう側にいるだろう紫。

その紫が私達の間接点に立ち、私達（妖怪）と彼等（人間）の手を掴み互いの手を引く光景は、残念ながら今の私には想像にすら思い浮かべることが出来ない。

きつと、あの娘は何度も・・・

そう、何度も近くて遠いこの距離を行き交い、消すことが決して叶わないだろうソレを、どうやって上手に埋めて行くことが出来るのか・・・今も君は、ソレを探しているのだろう。

「頑張れ紫・・・大変おこがましい言い方になるが、私はいつだって君に期待している」

あの時は使わなかった・・・いや、使うつもりのなかった『頑張れ』の一言。

思わずもそんな言葉が、私の口からはこぼれ落ちた・・・

ここは約束の場所、半日前に紫と再会した都の外れ

そして私は夕闇の下、幽香と二人、待ち合わせた相手・・・紫が来

るのをただ待っていた。

「うむ、やはり遅いな・・・」

本日、何度目なるのか分からない台詞を呟いてから、私は溜め息を吐いた。

いくら時間の指定はしてなかったと言え、もう日が落ちてからずいぶん時間が経った。

それに彼女が自ら言い出した約束だ、内容が大雑把な待ち合わせとは言えど、普通なら先に居るぐらいが当たり前だろう。

これは個人的な話したが、私の知る彼女の性格からして、これはさすがに遅過ぎる。

まさか紫の身に何か・・・良からぬことでもあったのだろうか？

そんな不安が、ふと頭に浮かんだ。

「むう・・・考えてしまうと、無駄に心配になるな」

まさに言ったとおりで、口に出した瞬間、さらに心配になった。

「やはり、私は親バカになるのかな・・・まあ、心配なものは心配なのだから、仕方がないがな・・・」

そんな自分自身に、少しだけ飽きれを覚えた。

つと、

「お父さん大丈夫？」

ふと気付けばすぐ隣に幽香が立ち、私の顔を不思議そうに見上げていた。

「いや、心配は要らんよ幽香」

「・・・本当？」

「ああ、本当さ・・・だから君は、気の済むまでアリと仲良くしてたまえ」

多分だが、それが一番の暇潰しになるだろう・・・自分で言っておきながら、微妙に物悲しさが募るが。

「む　う　う　う　・・・」

別に皮肉を言ったつもりはなかったが、言い方が悪かったのか幽香はむくれた。

「アリさんは、もう飽きたんだもん・・・だから早くこんな場所からバイバイしたいのッ！」

「も、もう飽きたのかね？」

遅い早いは別として、ずいぶんと唐突に飽きるものだな・・・

「しかしだな幽香・・・私達は一応、紫と待ち合わせをしている身なのでな。君には申し訳ないが、彼女が来るまでは辛抱してくれないか？」

「む、む　ううう・・・」

「こらこら、そんなにむくれてくれるな」

私は苦笑しながらも、頬を膨らませる幽香の頭に手を置いた。

「だって飽きたんし、つまらないんだもん・・・」

「つまらないと言われてもだなあ・・・まあ、私としても待ちぼうけはいい加減辛いのだが、相手が来ないので仕方ないではないか

「？」

「うううー……」

幽香は唸りながら、頭に置かれた私の手をいじくり始めると、

「それに、別に私は待ってないもん」

心底つまらなそうに、ハッキリとぼやいた。

「む？そ、それは確かにそうなのだが……」

そんな幽香に対して、私はただ言葉を濁す。

だが、私としては『ハイそうですね』と応えて、ただ頷く訳にもいかない。

がしかし、『私は待ってない』と言われてみれば、確かにその通りなのである。

元々の話しを言えば、幽香と紫が交わした約束ではないのだから、幽香から言わせれば極めてごもつともな意見だろう。

「だからお父さん、早くこんな場所からバイバイしようよ？」

幽香は私を見上げて、上目遣いで言う。

「仕方ないか・・・分かった、ここから動くでしょう」

内心で溜め息を吐きながら、私は幽香の言葉に頷いた。

「じゃあ、早くバイバイしよ」

「まあ待て、動くと言ってもバイバイと言う訳ではない。ただ、いつまでもこの場所に居る訳にもいかないからな・・・」

これはもしもだが、朝まで紫が来なかった場合、私達は必然的にこの場から移動しなければならない。

「だから幽香、私は今からあちらに出向くとするが、君も一緒に来てくれないかね？」

そうは言ったみたが、こんな場所に幽香を一人で待たせる訳にもいかない上、待たされた方もたまったものではないのだから、我ながら質が悪い質問だった。

「お父さん・・・今から人間達の所に行くの？」

幽香は肩をわずかに震わせると、自らの両手で弄んでいた私の手を、ギョツと強く握った。

「なに、心配は無用の長物だ・・・今度はちゃんと、君の傍に私が付いているから、何も怖がる必要はない」

「・・・」

「幽香・・・不安がる気持ちは良く分かるが、私を信じてくれると嬉しい」

「うん・・・私、お父さんを信じる」

幽香は私の手をよりいっそう強く握り締め、小さくゆっくりと頷いた。

「ありがとう幽香」

私は微笑みながら、幽香の小さな手を握り返した。

この時、私はほんの少しだけ自分がどうしようもない馬鹿に思えて、胸のうちに己を失態した。

つい先程、幽香に対して『良く分かる』とは言ったが、所詮これは口だけの言葉・・・そう、これはただの他人事なのだろう。

今の私にあるのは、ただ紫が心配だと言う気持ちだけ。



そればかりが先行してしまい、護るべき存在と共にありながらも、私は自ら危ない橋を渡るうとしている。

だが、紫もまた護るべき存在の一つ……

紫に手を伸ばす為に、幽香の顔を曇らせる。

この行動はまさにそれであり、その逆もまた然別。

これはきつと、私が抱く一つの矛盾なのだろう……

紫と幽香のどちらか、それは今の私にとって究極の二択。

いつの日か、そんな選択を迫られる日が……いや、または第三の選択が、後に生まれるかもしれない。

私はその時、何を選び何を為すのだろうか？

そんな、何処か予感めいていながらも先の知れない不安な考えが、不意に頭の中を過ぎった……

松明に照らされ、淡い色に染められた掘りの水に影を差さぬように、わずかな存在も悟らせぬようにと、私は物陰から物陰へと駆ける。

如何に人間達が寝静まる時刻であれ、警備の見張りなり明かりの番なりが配置されてるだろう。

それに、紫が何処に居るかも分からぬ状況だ、些細なことにすら用心すべきだ。

だがしかし、いくらなんでもこれは静か過ぎる……

先程からいくら探れど、いっこうに人の気配がしない。

いくら耳を澄ませど、虫の鳴き声も聞こえない。

あの惨状が半日前に起きたばかりだと言つのに、この静けさは異常以外の何ものでもない。

「少々、ふに落ちない点が多過ぎるな……」

いったん足を止め、私は辺りを探りながら疑問をこぼした。

「どこかしたの？」

「少しばかり……いや、異常に静かだと、君は思わないか？」

最近では特等席へと代わりつつある私の背中に背負われた幽香に、顔を向けずにそう聞き返す。

「んう……そうかな？」

「ああ、私の考え過ぎならそれで構わないが、もしも何かが起きているとすれば……先ず、普通では有り得ない静けさだ」

「う、ううーん……え、えへへ、私には良く分かんないや」

私の言葉に幽香は、首を倒しながら心底分らないと言いたげな口ぶりで、照れ臭そうに応えた。

「まあ、ただの杞憂で終われば御の字なのだが・・・さて、再び進むでしょうか」

背中で首を傾げているだろう幽香に言って、私は再び駆け出す。

本来、集団として人々が暮らす場所ならば、何か良くないことがあれば先ず最初に騒ぎが起こる。

これは私の知る時代と今が如何に違えど、当たり前のことだろう。

それに、重要な要人が暮らす場所となれば、最低限の警備が張られるはず。

いくら時刻が夜とは言え、見張りの者が一人も居ないのは無用心だ。

まさか、本当に何かが起きているのか？

「もしそうだとすれば、急がなければ・・・」

考えれば考えるほど不安が膨張して、次第に焦りが生まれた。

相変わらずの静けさの中、細心の注意を払いながら家並みを進む。

何処に生じるかもしれない気色を見逃さぬようと、目を凝らして放射状へと視線を走らせた。

・・・ゾクリ

辺りを探る最中、民家の並びを越えた先に見える屋敷を目にした時、背中に悪寒が走った。

「・・・アレは？」

一瞬だけ背筋を走り、すぐに消えた悪寒。

それがあまりにも不審に思え、強化を施した目で射抜くように見つめる。

気配は・・・探れない。

おかしい存在も・・・そこには見付からない。

見受けられるのはただ二つ、静けさと代わり映えのなさだけ。

見て取れたのは、たったのそれだけ・・・

「ふむ、特に何も見えないか・・・」

そこには何もなく、ただそこに屋敷が建っただけ・・・なのだが、

「だがそれは、逆に怪しいな・・・さて幽香、どうしたものか？」

「・・・ふえ？な、何が？」

唐突に話しを振られ、幽香はわずかに戸惑う。

「いやなに、別にたいしたことではないので、分からないのら構わんさ・・・」

そもそもが、いきなりこんなことを聞かれたところで、普通は困るだろう。

「そ、そう？」

「ああ、聞いておきながら申し訳ないのだがな」

幽香に苦笑で返してから、私は再び思考する。

さて、本当にどうしたものかな・・・

あそこに行くべきか、または行かぬべきか。

あまりよろしくない予感がするだけに、なかなか悩むところだ。

正直に言えば、幽香を連れた状況で必要以上の危険を冒したくない。だが、こう言った予感の大抵が、良い意味でも悪い意味でも結果に繋がることもあるのもまた事実。

「ふむ……もしかしたら、遅かれ早かれ足を運ぶことになるかもしれない……」

昔から『虎穴に入らずんば虎児を得ず』と言っぐらいだ。

「致し方ない、行くとするか……」

やれやれと肩を揺らし、私は一直線に屋敷を目指した。

ここまで来ておきながら悩んだところで、いまさら何も始まらない。

どの道が紫を探さなければならぬのだ、簡単に見付からなかった場合は最悪、手当たり次第に探すはめになる。

つまりは、そこに向かうのが遅いか早いか、ただそれだけの違いだろう。

ならば脇目は振らず、最初から本命を当たるとしよう。

「……幽香」

私は夜の下、家並みの中を駆けながら問い掛ける。

「何があるうと、決して私から離れてはならない……いきなりだが、これを忘れないでくれ」

「……う、うん」

私の口調に何かを感じ取ったのか、幽香は返事をすると腕によりいつその力を込めて抱き着いてきた。

「聞き入れてくれてありがとう……では、参ろうか」

言うや私は走る速度を上げ、今だ静寂なる屋敷を目指し家並みを駆け抜けた……



影は夜へ（後書き）

取り敢えず、来週からは少し落ち着く・・・はず。

夜は亡者へ（前書き）

話しの入りと切り所が実に難しいと、前回の終わりに失敗を感じる  
今日この頃（別に今に始まったことではない）

## 夜は亡者へ

/

同刻。

同じ闇空の下、広い朝廷の一角では、既にソレが起きていた・・・

雲の隙間からわずかに差す月明かりに照らされ、広い屋敷の庭には赤い化粧が輝いている。

庭の一面に散乱した、もはや原形を止めていない肉の塊。

それはちぎれた手足と、薄いピンク色の臓物。

夜のとばりが運ぶ静寂の下、もはや悲鳴を上げることのない人間だったモノが積み上げられ、小さな山を築いていた。

「困ったわねえ・・・」

薄暗い闇空の下、肩に一人の女を担ぎながら正面に立つ男を真っ直ぐに見据え、紫は皮肉げにこぼした。

「近い未来に終わりを迎えるだろうと、そう思っていたけど・・・まさか内側から崩壊させられるなんて、思いもしなかったわ・・・それも妖怪達の手によって、術者の皆殺しを謀るだなんてね」

「君も僕達と同じ妖怪のようだが、何故そちら側にいるんだい？」

不思議そうに尋ねるは、向かい合い対峙する血まみれの男。

「まさかとは思っけど、君は人間の側に付いてるのかい？」

「ふふふ・・・それこそまさかよ。私は別に、人間の味方をするつもりはないわ」

これは今の紫にとって、一切の偽りなき正直な言葉。

「でも、目の前でみすみすと死なせるのも寝覚めが悪いのよねえ・・・だから今回は、貴方の邪魔をしようかしら？」

軽い口調で言うては冷笑を浮かべると、肩に担ぐ女を地に寝かせゆ

つくりと歩みを進める。

ピチャリ、ピチャリと、血によっていくつもの水溜まりが出来た地面を歩きながら、紫は刹那の速さで思考する。

敵は男と脇に控えた死者が五体・・・いや、多分その他にも潜んでいるだろう。

私の予想するとうり、敵が死者を操っているのならば、ここは完全に相手側の陣地となる。

つまり地に転がる死体の全てが、あの男には己の手駒と呼べよう。

「・・・」

無言のままチラリと後ろに目をやり、紫は自分の置かれた状況を冷静に把握する。

負傷した女を背に守りながら、一人で六人を相手にしなければならぬ。

現状は考えるまでもなく、こちらが不利と言えよう。

過信も驕りも抜きに言えば、脇に列ぶ配下達はどうとでもなるが、目の前に立つ男が厄介だ。

あの男とまともなぶつかれば、今の私では先ず間違ひなく負けるだろう。

やりようによっては、負けない戦いを出来なくはない。

だが、こちらがどう足掻こうとも、理想とする勝ちを捨てることは不可能だろう。

それだけの威圧感を、私はあの男から感じる。

良くて痛み分けに持っていった後、なんとか逃亡を計る程度・・・それが、今の私には限界。

だがそれも、こちらが割に合わない痛手を負うだけで、大きな効果は期待出来ない。

そう、つまりはジリ貧・・・私が現状に求めるべき最善の結果は、決してそこには生まれない。

もっと力を自由に使えれば・・・

自分の未熟さ加減に、頭を抱えなくなる。

私が・・・八雲紫として唯一無二の力を模索した先には、この身にあまる能力の片鱗が存在した。

何が出来、何が出来ないのか・・・今だに全貌の明らかにならないその能力だが、強力な力であることは先ず間違ひないだろう。

この力が神かまたは悪魔の、そのどちらによって与えられた力なのかは分からない。

だがソレは、私の中で今も確かに存在していて、次第に形に為りつつあるのだ。

ソレが完成に到った時、私にとって吉となるか、または凶となるのか、それもまた、分かりはしない。

だけど、彼がかつて言ったように、私には確かな可能性があるのだと理解が出来た。

先の見えない可能性だけど、それがとても嬉しい。

そして、同時にとても恐ろしい。

まったく、運命って本当に味な真似をするわね・・・

ソレに初めて気付いた時、静かに近づく可能性の足音に、期待と不安が混合しては押し寄せた。

けれど、『これで彼と肩を並べるに等しくなれる』と、そう思い一人で浮かれていた自分が心の隅にいる。

そんな自分が少し恥ずかしく、今この瞬間に限りとても腹立たしく思える。

だってそうでしょ？

いくら強力であろうと、必要な時に使えない能力では、結果は無力なのだから……

私が今この時、この場で必要とする能力は、分かりやすさと使い勝手手の良さ。

結局は多様性で、如何に強大で強力な能力を持っていようと、本人の必要とする時に有効活用が出来なければ無能止まり。

情けない話したが、今の私さまにそれ……

「それにしても、貴方……いえ、彼が内通者だとは気付かなかつたわ。誰が首謀者なのかは分からないけれど、なかなか賢いようね」  
歩みを進めながらも、紫は時間を稼ぐかのように喋る。

「……彼？」

男は一瞬、不思議そうに首を傾げた後、「ああ……」と呟きながら両腕を広げた。

「それはこの体のことを言ってるのだろうけど、残念ながら君の推測は違うよ」



「あら、そうかしら?」

紫は足を止め、男の返事を待つ。

「そうさ・・・残念だけど僕は、軽蔑し抹消する対象である人間を手元に置く趣味はないし、わざわざ生かしておくほど優しくもない・・・それに、はなから役に立つとすら思っていない」

「あらあら・・・蘇我の同盟から回された貴方がそこまで言うなんて・・・同盟とは名ばかりで、あまり友好的な関係じゃないのね?」

「ふっ・・・間違っても、そんな失礼な勘違いはしないで欲しいな」

「・・・失礼な勘違い?」

「僕達は低俗な人間共とは、同盟など組んでいない。いや、組むなんてことが有り得ないね・・・まったく、考えただけでもヘドが出る」

嫌悪感を表にして、男はそう吐き捨てた。

「へえ・・・」

紫は唇に手を当て、目を細めた。

「それにしても・・・貴方はずいぶんと、人間が嫌いなようね？」

「嫌いと言うよりかは、この世界には無用な存在だと思ってるんだけど・・・君はどうか？」

「・・・それは、少し難しい質問ね」

「難しい？僕には簡単だと思うけど・・・君には何処が難しいんだい？」

「何処と聞かれても困るわ・・・逆に聞くけれど、じゃあ貴方は何故、何を以って人間を無用だと言うのかしら？」

向けられた質問に対して紫は、『目の前の男には自分とも彼とも違った、また別の答があるのだろうか？』と、そう思いながら興味津々と聞き返した。

「君は質問を質問で返すのか・・・まあ、別にいいか」

男は気だるげに、辺り一面に散らばる人間だったモノを見回すと、憎々しいげに応える。

「君の何故に答えよう・・・簡潔に述べて、人間は無駄が多い。そ

して何より、生き物の中では一番残虐だ」

「残虐ね・・・それに関しては確かに頷けるわ」

男の言い分は何も間違っていないと、紫は苦笑しながらも肯定をする。

「私利私欲の為には血縁者すらたやすく手に掛け、悲しむどころか悦に浸る・・・私はそんな人間を沢山知っているから、否定はしないわ」

「そうだ、だから必要ない・・・この世界に取って、存在自体が害にしかならない。つまりそう・・・人間は無用の長物だ」

言うや男を右手を高々と掲げ、

「僕達が望む世界に、人間は一人も要らない」

パチンツ、と指を鳴らした。

濁いた音が辺り一面に高く鳴り響く同時に、今まで静止していた五体の死者達が、地面を跳ねるかのように駆けた。

ただただ一直線に、紫の背後で気を失う女に目掛けて。

「そう……でも、残念だけど」

駆ける五体の死者達が列を為し、自分の脇を抜ける瞬間……

「……私は貴方の邪魔をさせてもらわよ？」

紫は綺麗な笑みを浮かべて、死者の一体に腕を伸ばす。

伸ばされた腕は対象の首を掴むと、その体を軽々と持ち上げては……

ブオンツッ！！

つと豪快に風を切る音を響かせながら、他の死者達をまとめて薙ぎ倒すかのように振り回した。

「……いやいや、これは驚いた」

自分の駒達が宙を舞う光景を眺めながら、男は若干の飽きれを含ませる。せて言う。

「君は女のくせに……しかもその細腕で、ずいぶんと馬鹿力なんだね？」

「あら、物凄く失礼しちゃうわね……人間の女ならともかくとして、私はこれでも立派な妖怪よ？」

心外だと言いたげな口調で応えながら、紫は腕に掴んだ死者の首を万力のように締め上げた。

「女だろうとなんだろうと、強く賢く優雅でなければ、人間の中で暮らしていけなくてよ」

口元にうつすらと笑みを浮かべ、瞳を妖しく光らせながら・・・

屋敷の敷地内に足を踏み入れた瞬間、空気が重みを増した。

息苦しさと同圧感が体中を襲い、鼻腔を鉄臭さが満たし貧血を起こしたみたいに頭がクラクラとする。

「……どつやら、悪い方の当たりを引いてしまったようだな」

私は立ち止まり、辺りを見回す。

「ここは今のところ、まだ綺麗なままか……」

屋敷の奥からは血の臭いがする。

それもまだ新しく、おびただしいほどに大量の……

「……お、お父さん」

立ち止まっ私の背中からは、幽香の震えた声が向けられた。

「私、ここ嫌だよ……も、もう戻ろうよ？」

幽香が怯えている。

だが、それも当然か……この場に足を踏み入れた途端、分かりやすいほど空気が重たいものへと変わった。

何か良くないものがこの先にはあるのだと、雰囲気から悟ったのだろう。

「すまない幽香、少しだけ待ってくれ……」

小刻みに震える幽香に出来るだけ優しく言って、私は周囲一帯に意思を張り巡らせる。

さて、どうしたものか・・・

そうとは言え、この先に広がってるだろう光景を、幼い幽香に見せる訳にはいかない。

だが、もしもこの先に紫が居たとしたら・・・私にこんな所で立ち止まっている暇はない。

「チツ・・・そもそもが、見て見ぬ振りは出来ないか・・・」

どうするかを悩みながらも広く人念に気配を探った結果、近くに今もわずかに動く存在を感知した。

だがその気配はとても弱々しく、今にも力尽きてしまいそうだ。

どうする？

生存者がいるのなら、助けられない訳にはいかない。

幽香はどうする？

確かに幽香を連れたまま、分かり切った危険を冒したくはない。

だが、手を伸ばせば助けられるかもしれない命を前に、黙って見ていることなど私には出来ない。

何故なら私は今、手を伸ばせば届く距離に居るのだから・・・

紫はどうする？

言われるまでもなく、もちろん探すつもりだ。

何故ならば、彼女を護ることが私の使命。

そして、それは幽香にも言える。

では結局、どうしたい？

私は・・・紫だけではなく、幽香も助けたい。

どちらも傷付けたくない。

けれど私は、助けられるだろう命の全ても、また助けたい・・・

だって私は、<sup>おれ</sup>『 の 』 になりたいんだから



「グウツ!？」

突然、頭の中を激痛が走った。

「ま、たか・・・クソ、こんな所で立ち止まってる場合ではないと言うのに・・・」

ズキズキと襲う痛みが、次第に視界を霞ませる。

「だ、大丈夫?」

朦朧とする意識で立つ私の背中からは、心配そうな幽香の声が投げられた。

「だ、大丈夫だ・・・何も心配は要らない」

酷い頭痛を覚えながらも、大きく深呼吸をして頭を落ち着かせる。

「ほ、本当なのお父さん?」

「ああ、心配はない。これは本当だ・・・」

幽香にそう応え、足を前へと運ぶ。

「幽香・・・君に一つだけ、私からのお願いがある」

「な、なに？」

「少しだけ・・・私がいいと言つまで、目を閉じていてくれないか？」

言つて私は顔を背中の中の幽香に向けて、出来るだけ優しく微笑む。

「・・・うん、分かった」

幽香は小さく頷き、両の瞼を閉じた。

「ありがとう幽香・・・そして、本当にすまない」

私は頭を下げ、そして駆け出す。

勢いよく戸を蹴破り、そこで待ち受けていた光景に息を呑んだ。

右を向いても、左を向いても変わらず、目に映るモノは全てが同じ。

死体、死体、死体、何処を見ても死体が転がっている。

これは酷い・・・

赤く染まった廊下の上を走りながらも、私は唇を噛んだ。

この場所で何があったのかなど、私には毛頭見当が付かないが、これは普通ではない。

いったいこの場所で、どれほどの命が消え、どれだけの血が流れたのだろうか……

そのことを考えると、私はとても悔しくて、とても悲しい。

思わず目を背けたくなる光景にも、私は足を止めず前だけを見据え、心の中で黙禱を捧げる。

願わくば再び彼らが人間として生き、人として息することの素晴らしいさと出会い、新しい命として、現世に再来することが叶うように……

「……すまない」

これは誰に向けた謝罪なのか、私の口からは行き先の分からない言葉がこぼれ落ちた。

湿り気を帯び、人の持つ脂で滑りやすくなった木目。

いくら足音に気を配ろうと、入念にワックスを掛けたばかりのよう

な、光沢を帯びて赤く脂ぎった床を擦る高い音は消えない。

その音が惨状によって生まれた不快感を、私の中でさらに大きくさせた。

いちいちカンに障る音だ・・・

内心で毒づきながらも、血によって真っ赤に染まった廊下を転ばぬように走り続ける。

変わらない赤色で染め上げられ、個々の見分けが付かない塊を、唇を噛みながら通り過ぎ・・・

しばらくのあいだ長い廊下を進むと、最初の曲がり角にぶつかつた。

これを行けば、そろそろ近いか・・・

近づく気配に焦りを覚えながらも、背中の幽香を気遣い一定の速度を保ちながら走る。

そしてまた、しばらくのあいだ廊下を進んだ私は、目的の場所へと辿り着く。

「・・・」

荒れに荒れた一室に、ポツリと倒れ伏す人影。

「さて、見付けた方がいいが・・・」

人影まで歩き見下ろす形で立ち止まった私は、しゃがみ込んですぐ足元に転がる血まみれの男の首筋に手を当て、脈があるかを調べる。

・・・トクン・・・トクン・・・

当たった指先に伝わるわずかな振動が、私に脳裏に希望の二文字を浮かび上がらせた。

「良かった・・・ほんのわずかだが、まだ息をしている」

私はホッと胸を撫で下ろして、体中に酷い創傷を負いながらも、弱々しくわずかに呼吸をする男の体を起こす。

そして、男の顔を覗き込み・・・

「・・・馬鹿な」

男の顔を見た瞬間、思わず目を見開いた。

「まさか貴様は、あの人間なのか・・・」

私が救おうとしている人物は、皮肉にもあの日、幽香の家族達を焼き払った二人組の片割れだった。

憎い・・・

頭を埋め尽くす黒い感情。

幽香の家族を焼き払い、例えわずかとは言え、幽香の体に火傷を負わせたこの男が憎い。

幽香の心に傷を負わせたこの人間が、私はとても憎い。

「か、関係ない・・・この男が今まで何を行ってきたかなど、私には関係ない・・・命を助けるのには、行いなどなんら関係がないのだ」

私は自らに言い聞かせるように呟き、背中で両の瞼をきつく閉じる  
幽香を見やる。

幽香・・・君からしたら、私は偽善者だろうか？

君の味方になると言っておきながら、私は今から君の家族を焼いた人間を、君と共にありながらも助けようとしている。

君の身を危険に晒しながら、君に害した存在を救おうとしている。

これはなんて矛盾だろうか……

こんな私を、いつか君は嫌いになるだろうか？

「……お父さん？」

「なんでもないよ、幽香……それから、まだ目を開けてはいけな  
いぞ？」

「うん、分かった」

「良い娘だ……では、再び動くとする」

言って私は男の体を脇に抱え、背中の幽香を背負いなおした。

「安全運転で行くつもりだが、君の方でも落ちないようにしっかりと  
と掴まっけていてくれ」

さて、来た道に戻るのもいいが……またあの惨状を目にするのは、  
さすがに気が向かない。

それに、再び自分でも分からないモノが胸に渦巻くのは、出来れば

避けたいところだ。

「ふむ・・・いつそのこと外から行くか」

呟いてから一人頷き、私は部屋を出る。

「本来なら、あまり動かしてはいけないのだが・・・今までしてきた行いの利子が高く付いたのだと、今回ばかりは諦めてくれ」

言ってしまうえばこれが、君が幽香に対して行った行為に対する、私からのささやかな仕返した。

「どーかしたの？」

「いや、ただの独り言だ」

赤く染まった廊下を歩きながら、不思議そうに聞く幽香に返す。

「長いこと目を閉じてもらってすまない。だが、もうすぐ用事も済むので、それまで我慢してくれ」

「うん、でもお父さん・・・ここ、さつきからなんだか変な臭いがあるから、出来るだけ早くしてね？」

「・・・ああ、もちろんだとも」



やはり如何に視覚を閉ざそうと、血と脂肪の持つ独特の臭いは消せないか……

脇に抱えた男を気遣いながらも、早足で廊下を歩く。

早く去ろうと外へと繋がる扉を探そうにも、この時代の建物は良く分からない。

かつて生きてきた時代なら、内装やデザインから判断出来たのだが……ここまで統一された造りでは、何が何処に繋がっているのかなどの見当が付かない。

言ってしまうえば、構造がまったくの未知。

っ、

「……これはついてるな」

首を傾げながら歩く最中、わずかに頬を風が撫でた。

「喜べ幽香、どうやら外は近いぞ」

私は言いながら、わずかに流れる風を頼りに進む。

一歩、一歩と進む毎にだんだんと風は強くなり、次第に隙間風の吹く音が聞こえてくる。

有り難いことに、ここから出口は近いようだ。

ここの異臭とはいいい加減おさらばして、外で新鮮な空気を吸いたい。  
赤以外の色で、心を落ち着かせたい。

「・・・これか」

浮き立つ気持ちを抑えながら歩く私は、一つの扉に辿り着き、

「なんとも憎たらしい・・・またしても悪い方の当たりを引いたか・  
・・・」

扉の前に立って今まさに手を伸ばそうとした瞬間、突如として現れた二つの気配に動きを止めた。

まったく、実に憎たらしい限りだ。

私の運が悪いせいなのかは知らないが、ここまで来てこれかね？

「しかし、ふに落ちないな・・・」

立ち止まったままの体勢で、私は扉の先を見据える。

己を高く評価する気はさらさらないが・・・何故、今さらになって  
気付いたのだろうか？

何故、今になって二つも気配が現れたのだろうか？

それもこの気配・・・動きから予測するに、明らかに争っている最  
中だ。

「どちらにせよ、行くか行かないかの二択だな・・・さて、どうし  
たものか？」

やれやれと肩を揺らして、私は幽香に意見を求めようとして、

「な、あッ!?!?」

突然、目の前で粉々に碎ける扉に驚愕すると同時に、勢い良く飛来  
する影と激突する形となった。

ドスンッ!?!!

鈍い音と共に重たい衝撃が体を襲い、咄嗟に踏ん張りを効かせよう  
とするが、血によって滑りを持った床に足を取られ仲良く宙を舞っ  
た。

「・・・だ、大丈夫かね幽香？」

情けなくも足を滑らせた結果、ツルリと宙を舞った後に背中から着地して、仰向けで倒れる形となった私は、背中で潰れてるだろっ幽香に問い掛けた。

この場合に限り、脇に抱えた男のことは・・・残念ながら二の次とする。

「ううう・・・お、重いよお父さん・・・」

「そうか、それはすまない・・・ちなみに今、私も重いと思ってたりするので、お互い様と言わせてくれ」

今にも泣き出しそうな幽香の声にそう返してから、激突した物体に視線を向け・・・

「さて紫・・・君はいつたい、何をしているのだね？」

私の腹に尻を乗せる形で座り込む紫の姿に、早く退けと言った念を込めて聞いた。



夜は亡者へ（後書き）

まとめ切れなかったので、分割。

だから次週は、頑張って戦えエミヤン。

これが最新の人事。

## 亡者は問い掛けへ（前書き）

小説の存在を、綺麗に忘れていた二日間だった。

そんなこんなで、今日もウツヒウツヒ更新だ（ゴリラはウツホウツ  
ホだ）

## 亡者は問い掛けへ

/

腹部に乗った温かな感触。

それは一つの懐かしさを私に思い出させ、淡い記憶の一幕を連想させる。

懐かしい感触と、懐かしい温もり。

その両方が相まって、私に一つの想いを抱かせた。

正直、重い。

「ちょっとエミヤ、貴方今・・・失礼なことを考えてませんか？」



「……気のせいだ」

こちらをジト目で見下ろす紫の視線に薄ら寒いもの感じて、私は首を横に振りながら返した。

「本当かしら？」

「ふっ……生憎と、私は嘘は付かない主義でな……それより紫？」

自分自身も言ってる胡散臭くなる返事をしてから、紫の体を強引に左脇へと抱き寄せて立ち上がる。

「ずいぶんと派手な登場だったが、いったい何があったのだね？」

「……」

「……分かったから、そんな目で私を見るな」

学生鞆のように横抱きに持たれ、鋭い目で私を見上げてくる紫に頭を下げた。

「なら早く下ろしてちょうだい……女の子は手荷物じゃないのよ？」

不服そうに言っつて、紫は私の腕から強引に離れた。

「ああ、それは配慮が足りず、女の子の君には大変失礼だったな」

頬を膨らませる紫に言っつて、私は崩壊した扉の先に目を向ける。

「さて・・・何があの先に居るのか、私に詳しく聞かせてくれ」

「私は構わないけれど・・・いっただったか争いは好かない質だつて、貴方は言っつてなかつたかしら？」

「ふむ・・・確かにそうだが、それも時と場合によつて異なるものだつと、君は現状に対して思わないかね？」

「それもそうね・・・けどエミヤ、その娘は大丈夫なの？」

苦笑紛れに言葉を濁して、紫は幽香へと視線を向けた。

「大丈夫と言われたところで、今さらどうしようもない・・・」

少し前から私の背中で振るえる幽香に対して、今さらごまかすことは不可能だろつ。

「それにだ・・・見て見ぬふりは、さすがに出来んよ」

崩壊した扉の先から、こちらへゆっくりと近づく気配。

こちらに動きがないことを・・・私と言う存在を承知した上で悠然と向かって来るソレを、黙って放っておく訳にもいかない。

そもそもの話しが、先ず見逃してはくれないだろう。

「エミヤ・・・貴方達を巻き込むような形にして、本当にごめんなさい」

私と同様に扉の先を見据え、紫は申し訳なさにこぼした。

「仕方ないと言うのだろうか・・・別にこれは、君が悪い訳ではないだろう」

紫が発した謝罪の言葉に、私は苦笑と共に返す。

「たまたま間が悪かったと、それだけだろう・・・まあ、私としては君の窮地に参上出来たのだから、願ったり叶ったりかもしれないがな」

言っでは腕を伸ばし、紫の頭を一つ撫でた。

ほんのわずかだが、心が高揚している・・・

ここに来るまでのあいだに目にした死体の数々と、突然あんな形で現れた紫。

今までに何があったか分からないが、この場に立ち会えることが出来て、少しだけ嬉しく思える。

私の知らぬ間に紫が何かに傷付き、涙を流す時が来たとしても……その時ただの第三者にしかねない自分は、心底嫌だと思った。

だから今は、少しだけ嬉しく感じる……

「……ありがとう」

照れ臭さそうに告げ、紫は私から顔を反らした。

「クツ……世の中には、適材適所と言う言葉があるのだが……それともまさか君は、私がかつて八雲紫と言う少女に誓った言葉を、忘れている訳でないだろ？」

「……誓い？」

反らしていた顔を私へと向き直して、不思議そうに首を傾げる。

どうやら、記憶にないようだ。

「ああ、大切な誓いだ・・・」

忘れていたのなら、思い出させてやる。

「私が守護する君、親愛なる八雲紫よ・・・この身は君だけの剣となるう。あらゆる厄災からその身を守る盾となるう・・・かつて、まだ幼かった頃の君と交わしたこの誓いを、決して忘れてくれるなよ？」

かつての誓いを・・・始まりの瞬間ときを、少しだけ誇らしげに詠みながら前に進み、私は紫へと背中を向ける。

「・・・」

「ふむ・・・紫？」

チラリと見やれば、瞬きもせずに放心する紫が目に入る。

「呆けてるところをすまないが、少しのあいだ幽香のことを頼む・・・ああそれと、そこに寝てる男のことも見ていてくれ」

「え、ええ、分かったわ・・・ほら、いらっしやい」

紫は幽香に手を伸ばして、おいでと微笑む。

その姿を横目に、私は再び前を向く。

こと、

「離れちゃ嫌だよ、お父さん……」

その声に振り返って見れば、紫に引かれながらも瞳を潤ませて、私の外套を引つ張る幽香が居た。

「なに、大丈夫だよ幽香。君のことは、今から紫が守ってくれる。だから私は、君達二人を守る為に……今から彼と話しをするだけだ」

私が発したその言葉と共に、今や遮る物を失い月明かりが差し込むそこからは、まがまがしくも淀んだ死臭を漂わせる存在が姿を現した。

「……やあ、今晚は我が同族」

痩せ型の若い男が、血化粧を施し真っ赤に染まった身形で、室内と野外の境界線上で言った。

「こちらこそ今晚は……それとだ、初対面の場合は先ず初めましてだと、礼儀知らずの君に教えよう」

紫へと幽香を預け、自由になった体を慣らすように揺らして、

「  
トレース・オン  
投影開始」

両手の中に、自身の相棒と呼べる双剣を生み出した。

「……新しく来た君はずいぶんと好戦的なようだけど、まさか・  
・挨拶が怠らないことが理由かな？」

「……それは違うな」

「じゃあ……」

男は紫へと目を向けて、ウンウンと頷きながら言う。

「もしかして……僕が彼女を殺そうとしたのが、君が交戦的な理由かな？」

「ふむ……それが最も大きな理由になるが、決して全てではない」  
やはりこの男は、紫にとって敵になるようだ。

そして、それは同時に私にとっての敵ともなる。

「ふう……」

男は悲しげに首を振り、目を細めてつまらなそうに言う。

「まさか君も・・・人間の味方になるつもりかな？」

「人間の味方が・・・初対面の君に勘違いされては困るので、訂正させてもらおうか」

一歩、二歩と足を踏み出して、私は男に応えた。

「残念ながら私は、人間などと言う漠然とした存在の味方ではない」

「じゃあ何故、君は僕の前に立つのかな？」

男はゆらりと自然体で構え、左右の腕を振りながら私へと歩き出した。

「答えはいたって簡単だ・・・それは私が、彼女の味方だからだ」

言つと同時に床を蹴り、私は男へと駆ける。

それに合わせ、男は揺れ動く左右の腕を私に向けようとするが・・・

残念だが、それはさせない。

「何をするかは知らんが、生憎とここは室内だ・・・暴れるのなら、先ずは外まで来てもらおうか？」





「退いてやれるのは、君が私の質問に答えてからだ」

「・・・」

男は黙り込み、私の瞳を真っ直ぐに見据え、初めてその顔に表情を作る。

「へえ・・・君は矛盾の塊だね？」

それは、口元を吊り上げた嫌な笑み。

「・・・いきなり何を言うかと思えば、この私が矛盾の塊だと？」

「ああ、そうだよ・・・君の目を見れば、すぐに分かるさ・・・君はとても矛盾している」

「ほう・・・まさか初対面な上、敵対する相手の在り方を矛盾と呼ぶか？」

まさかこの男は、私の知らない私を知つてるとでも言つのか？

「そつだよ？だって君は、素晴らしく矛盾してるのだから・・・」

笑みを浮かべ、即答する男。

「面白い・・・ならば聞くが、君の言う矛盾とやらはいったい、どう言った意味でだ？」

「知りたいのなら、退いたら教えてあげるけど？」

「ふざけるなッ」

私は男を睨み付け、干将・莫耶を握る腕に力を込めた。

瞬間、背後に現れる三つの気配。

「・・・なんだね君達は？」

男を拘束したまま、振り返らずに、私は背後の気配へと問い掛ける。

「彼らに聞いたところで、返事は返ってこないよ？」

私の問いに応えたのは、地に組み伏せられ拘束された男。

「やれやれ、君は聞いていないのだがな・・・それよりも先ず、自分の置かれた状況を良く考えた方が賢明では？」

「そうは言われても、それが事実だから仕方ないよ……だって、彼らは僕の人形だからね」

「……なんだと？」

「それより君さあ……いい加減、邪魔だよ？」

言うや男は大きく息を吸い込むと、両の頬を大きく膨らませ、

「プツ！！！！」

取り込んだ空気の全てを、勢い良く吐き出した。

「なッ！！！！？」

その動作と同時に、突然の衝撃に襲われ、私の体は吹き飛ばされる。

それは突然吹いた強風に煽られたようでありながら、まるで巨大な空気の壁に押されるような衝撃。

ガシャンッ！！

高々と宙を舞い、屋敷の屋根へと背中からたたき付けられた。

「・・・カハッ」

背中を強打し、口から空気が吐き出された。

「な、なんだ・・・い、今のは？」

いったい何が起きた？

分からないが、確かに屋根まで吹き飛ばされた。

奴はあの瞬間、何をした？

ただ息を吸い込み、吐き出しただけ。

何故、私は屋根まで飛ばされた？

突然の衝撃に襲われ、気付いたらここまで飛ばされていた。

「グウ・・・今は考えても無駄か」

頭を振るって起き上がると、三つの影がこちらへと襲い来る。

影の正体は三つ共、生気を感じられない三人の人間。

いや、あの男が先程述べた『人形』と言う言葉が正しければ、こいつらは三人ではなく三体と形容すべきかだろうか？

「どちらにせよ・・・」

迫る三体の人形を、前傾姿勢で迎え撃つ。

「お前達は邪魔だッ！！」

全身を深く捻っては回転させ、迫る敵をまとめて蹴り飛ばす。

別々の三方向へと、私を中心に弾かれるように飛ぶ三体を置き去りにして、屋根の上を走りながら庭へと視線を向ける。

すると・・・

そこでは男が私を見上げ、こちらに向けて手をかざしていた

「まさか・・・アレはデコピンか？」

私へと向けられた手の指は、親指で中指を弓なりに押さえたデコピンの形。

あまりにも奇抜な光景に首を傾げる私に、男はその構えを取った手を私に向けたまま、嫌らしく笑みを深めた。

その笑みを目にした瞬間、私の体に悪寒が走ると同時に、

パァンッ！！！！

っと濁いた音と共に指が弾かれ、再び私の体を衝撃が襲った。

「があッ!?」

屋根に張られた木材を巻き上げながら、二度目となる衝撃に吹き飛ばされる。

二度目の浮遊感。

全身に走る重たい衝撃が、再び私の体を闇空の下に浮かべる。

いちいちカンに障る笑い顔だ・・・

月明かりの下を舞う最中、私は揺れる視界の隅に、男の笑みと指を構える姿を捉えた。

「あまり図に乗るな・・・」

これ以上の勝手は容認せぬと、私は幻想を破棄する為の言葉を詠んだ。

「  
壊れた幻想」  
フロークンファンタズム

男の肩に突き刺ささった夫婦剣を始点にして、白い閃光と共に爆音が鳴り響き、庭の一带に爆発が生じる。

「ふう……」

音が止み光りがえ、辺りを再び静寂が包む中、私は屋根の上に着地した。

「出来れば何者かを問いたかったが……アレではもはや無理だな」  
見下ろす先には、かつては男の体だったろう五体が形を失い、今や下半身だけが庭の中心にポツリと立っていた。

同時に先程まで動いていた三体の人形、力なく崩れ落ちピクリとも動かない。

「いったい彼は、何者だったのか？」

謎は謎のままに終結を迎え、今や物言わぬ亡きながらそこには立っている。



その呆気なさに、少しだけふに落ちないものを感じる。

だが、あの下半身だけの状態でまだ生きてるなどとは、とてもじゃないが考えられない。

ならば倒したのだと、結果はそれだけだろう・・・

「そう言えば、あの男は私が矛盾の塊と言っていたが、今になっては問い質すことも叶わぬか・・・」

動揺を誘う為に吐いた言葉か、あの男なりに意味を持って言ったのか、少しだけ気に掛かる。

しかし、会ったばかり相手に『矛盾』と言われるとは・・・

だが、男が『矛盾』の言葉に込めた意図がなんであれ、私には関係のないことだ。

何を根拠に言ったのかは知らないが、所詮は敵の吐いた戯れ事。

戦いの勝者たる私には、もはや関係ないだろう。

「しかしまあ・・・意表を突かれるとは、まさにこのことだな」

ゆっくりと屋根の上を踏み締めて、体に走る鈍い痛みを溜め息をこぼした。

「あのままやり合っていたら、少し手こずっていたな・・・」  
敵の攻撃手段が判明しないまま、『壊れた幻想』によって戦いは幕を閉じた。

そう、それは実に呆気ない結末だったと言えるよう。

だがそれも、最初の段階で干将・莫耶が男の肩に、都合良く刺さっていたからだ。

如何に自分が呼び寄せた結果とは言え、狙ってやった訳ではないのだから、それは偏に運が良かったのだと言える。

現に、それがなければあの男との戦いは、もっと長引いていただろう。

「ふむ・・・やはり私は、まだまだ未熟か・・・」

それ故に、今後も精進せねばいかな。

っつ、

「む！？」

墜落から始まる二度の衝撃で破損した屋根が、『ズボリッ！』と踏み抜けた。

「そ、そうきたかッ!?!?」

崩れる屋根と共に、私は情けなくも室内へと落ちた。

ドスンッ!?!!

その結果、鈍い音を響かせ、私は背中から室内に着地した。

「ふむ、柔らかいな・・・」

なのだが衝撃は軽く、痛みは限りなくゼロに近い。

どうやら何かが私と床のあいさで、クッションの代わりになってくれたようだ。

「・・・退いてくださらないかしら?」

「・・・」

前言撤回しよう・・・どうやら紫が私と床のあいさで、クッションの代わりになってくれたようだ。

「それはすまない紫。正直、私は助かった」

心の底からの謝罪と、カ一杯の感謝の言葉を告げながら、私は急い

で立ち上がる。

「まったく・・・なんだか最近、私の扱いが酷いわよ・・・」

ブツブツと文句を言いながら、紫は立ち上がり服に付いたホコリを払う。

「何をブツブツと言ってるのだから　お父さんッ！・・・」

つと、こら幽香、いきなり飛び付いたら危ないぞ?」

突然、幽香が駆けて来るや私に飛び付き、咄嗟に受け止めるも少しだけよろめいた。

「だって私、すっごく心配だったんだもん」

瞳に涙を潤ませて、幽香は私を見上げる。

「クッ・・・それは有り難いが、少しばかり大袈裟だぞ?」

そんな幽香に私は苦笑して、優しく頭を撫でやる。

つと、

「それよりヒミヤ」

幽香を抱きながら頭を撫でる私に、紫が顔を近付けで小声で言う。

「あの男はどうしたのかしら？」

「彼は今も、外で立ってるさ・・・唯一残った二本の足でな」

「そう・・・ならいいわ。ありがとうエミヤ」

紫は薄く微笑んで、私に向けて手を伸ばす。

「それにしても珍しいわね・・・貴方、怪我をしてるわよ？」

「む、本当だな・・・」

紫に言われて気付けば、手の甲にはわずかな切り傷が出来ていた。

「まあ、少し手こずったのでな・・・なに、このくらいならすぐに治る」

多少血が滲んではいるが、この程度は傷の内に入らない。

「ふふふ・・・違うわ、そこじゃないわよ」

手の甲を眺めながら言う私の頬に、紫は笑いながら触れた。

「ああ、こんなところまで切っていたか」

「まったく貴方は・・・ほら、ジツとして」

楽しそうに笑う紫は、傷口にゆっくりと指をはわした後、私の頬から手を離れた。

「・・・どうかしら？」

「あ、ああ・・・治っているな」

自分の頬に触れて確かめてみれば、そこにはわずかな血の後が付着するだけで、痛みも傷の跡も何もなかった。

「私はこんなことまで教示してないと言うのに、ここまで出来るようになってるとはな。知らぬ間に、ずいぶんと成長したではないか・・・紫、やはり君は自慢の弟子だ」

「何を言うかと思えば、それは当然ですわよ？」

さも当然だと言う口ぶりで応えるや、紫はすまし顔で胸を張った。

「やれやれ・・・正直に褒めてやれば、すぐさま天狗か。もう少し素直になれんのかな、この可愛いげのない弟子は」

「じゃあ・・・あの日の約束通り、頭を撫でてくだらない？」

「・・・そうきたか」

素直になれとは言ったが、まさか『頭を撫でろ』と返されるとはな  
・  
・

「まったく、素直が過ぎるのか、まだまだ甘えん坊なのか・・・君  
はやはり君だな」

言いながらも腕を伸ばして、私は紫の頭を撫でやる。

「口よりも先ず、もっと手を動かしてちょうだい」

私の言葉に唇を尖らせ紫だったが、その表情は何処か嬉しそうだ。

「承知した、我が儘な娘よ」

困った娘だと、口ではそう言うてはいる私だったが、本心はまった  
くの逆で、紫の見せた子供らしさに少しだけ嬉しさを覚えた。

今だ強く私の胸に抱き着く幽香と、私に頭を撫でられ満更でもない  
表情をする紫。

二人の姿を眺めながら、私は強く思った。

私はきつと、こんな瞬間を護りたいのかもしれない……

「そう言えば紫？」

この一瞬を噛み締めながら、ふと抱いた疑問を紫へと聞く。

「あの男が見当たらないが、君は彼をどうしたのだ？」

私が言う男とはこの場合、先程まで戦っていた方ではなく、怪我を負っていたところを救助した男のことを指す。

「彼なら大丈夫よ。貴方が戦っているあいだに、私が安全な場所まで送っておいたわ」

今だ私に撫でられる紫は、どうでもよさげに応える。

「ほう……して、安全な場所とは？」

「ふふふ……そ、れ、は、秘密ですわ」

微笑みながら子供っぽく言って、紫は悪戯っ子のようなウインクをした。

「……そ、そうか」



紫の仕種にほんの少しだけ、背中を薄ら寒いものが走った……のは秘密だ。

「何処に送ったのかは、後で詳しく聞かせてもらおうとしてだ……これからどう」  
それ、僕も聞きたいな」するも何もないか。  
すまない紫……どうやら私は、詰めが甘かったようだ」

私の言葉を遮り、何処からか男の声が聞こえた。

「仕方ないわ……」

紫は私の謝罪に笑みを返して、辺りを探るように見回す。

「見当たらないけれど、何処に居るのかしら？」

「気配は感じられないが、声がすると言うことは近くに」  
その呟きに応える最中、悪寒を覚えた私は紫の体を抱いて跳び退いた。

それと同時に、私達が先程まで立っていた場所へと音を立てて天井が崩れ落ち、一人の男が降り立った。

「まさか剣が爆発するとは、さすがに思わなかったよ……でも残念だったね？」

言うは先程とは違う姿を持ちながらも、まったく同じ声色を持つ背の高い男。

「体の予備は沢山あるから、一体潰したぐらいじゃ僕は倒せないよ？」

言葉を言い終えると、左右の腕を素早く振るう。

ヒュン・・・

風切り音が鳴り、キラキラと光を帯びた何かが私達へと迫る。

互いの途中にある柱や壁を、音もなく細切れにさせて・・・

「チイツ」

迫る何かに対して体中が警報を鳴らし、私は舌打ちを打つと共に紫を抱えたまま野外へと全力で駆けた。

次の瞬間、スロー再生のようにゆっくりと、屋敷の一角が崩れ落ちた・・・

「・・・なんとか間に合ったな」

崩れ落ちる天井や柱をかい潜り、屋敷が完全に崩壊するギリギリ瞬間に野外へと飛び出した私は、脇に抱えた紫に問い掛ける。

「無事か紫？」

「ケホツ・・・ええ、おかげさまで大事ないわ」

崩れた屋敷の瓦礫から舞い上がる埃せいか、軽くむせながら紫は応えた。

「ならば良かった・・・して、幽香も怪我はないかね？」

言って私は紫を下ろし、自らの胸に抱いた幽香へと目を向ける。

するとそこには、

「ビ、ビックリしたあ・・・」

私の胸にしがみつき、目を回しながらぼやく幽香が窺えた。

問いに対する返事はなかったが、特に怪我をした様子も見られないので、どうやら無事のようだ。

「さて、皆が無事ならそれで良しとは言えんのが悲しいところだが・・・」

言いながら瓦礫の山へと目を向ければ、一人の男が悠々と立っている。

「では、改めて問おうかね・・・君はいつたい何者だ？」

「一度とは言え僕を退けた君を高く評価して、その問いに答えようか」

男は腕を大きく広げて、まるで演説をするかのように言った。

「僕は何処にでも居る、しがない妖怪だよ・・・人間が嫌いで嫌いであまらない最初の妖怪（あの人）が生み出した、妖怪と呼ばれる全ての人間達の天敵だよ」

その言葉が終わると共に、瓦礫と化した屋敷の残骸から、何十もの影が姿を現した。

「まさか君は、自らを全ての人間の敵と名乗るか？」

「そうだよ。それじゃあ聞き返すけど、君は何者になるのかな？」

私が何者か・・・言われてみれば、私は何者になるのだろうか？

かつては人間だった・・・だが、今は妖怪と呼ばれる種になった。

その自分が何を味方して、何と敵対するのか・・・

きつと、答えはどちらでも構わない。

「明確な返事は出来ないが、私はこの先、君の敵になるだろう・・・  
何故なら私は、人間の素晴らしさを知っている。そして、妖怪であ  
りながらも、人間と共に生きた少女を知っているから・・・」

脇に立つ紫の姿を横目に笑みを浮かべて、私は男に言い放った。

「だから私は、人間の敵にはなれない」

## 亡者は問い掛けへ（後書き）

また、話しが無駄に長くなった。

つとゆーか、書いてて無駄に難しい構成だと思いました（作者の力がドンドン及ばなくなる瞬間）

どーでもいい話したが、やっと固形物が食えるようになった。

だからなのか、無性にラーメンが食べたい。

愉快的なラーメンネタを求む（意味もなく）

問い掛けは園（そのへ）（前書き）

これが、今月最後の更新にならないことを願う。

## 問い掛けは圓(その)へ

/

「敵にはなれない、か・・・」

私の返答に、男はつまらなそうに言った。

「じゃあ・・・つまり君は、人間の味方になるんだね？」

「いやいや、まさか・・・君には悪いが、そんなつもりは毛頭ないさ」

人間の敵でもなければ、また味方でもないと言うその曖昧な意思に自分自身ですら『訳が分からぬ』と、渴いた笑いを浮かべたくなる。

だが、そこには一切の嘘は存在せず、全てが本心なのだと言える。

「人間と言うカテゴリーの全てを味方するほど、私は高尚な存在にはなれない。だから味方はしない・・・そしてまた、敵対もしないつもりだ」



「ずいぶんと、曖昧な考え方をしてるんだね……何故、君はそこまで人間に」

「  
トレース・オン  
投影開始」

男の言葉を遮るように、陰陽の双剣を自らの手の中に生み出して、私は両手をダラリと下げて構えを取る。

「ただ語るだけでは、決して分かり合えない……ただ客観的に物を解釈したところで、本質を真に理解したなどは、決して思っ  
てはいけない。私は最近、そう考えるようにしている」

だからまだ、安易に結論は述べない。

人間が持つ汚さと美しさ、その全てを余すことなく見据えた先に、私は答えを持ちたいから……

「……君の考え方なんて、もうどうでもいいや。語る必要も意味もなく、ただ邪魔なんだよね」

「ふむ、君からすればそうなるだろう……だから私達は今、この場で対峙しているのだから」

「そうだね……僕達は今まさに、敵として対峙してるんだよね。」

だから君は僕にとって邪魔者で、君からしたら僕が邪魔者になるんだよね。まあ、僕にはあまり関係ないけど、はいそうですかじゃ終わらないんだよね・・・だから仕方ないけれど、邪魔者の君にはさつさと消えてもらおうよ?」

自己完結をした後、男は冷たく言うや腕を振るった。

すると、私達へと向けてキラキラと月明かりを反射する、いくつもの光の筋がその身を運んだ。

「さつさと消えるか・・・すまないが、それはお断りだ」

皮肉げな笑みでそう告げながら、私はこちらへと走るいくつもの光を、両手に持つ干将・莫耶で切り裂く。

「驚いたな・・・まさか交わすでもなく、正面から防がれるなんて・・・良く分かったね?」

「なに、目にしたのは一度きりだが、大方の見当は付いていたのでな・・・」

「まいったな・・・見当が付いていたとは言え、それはさすがに博打が過ぎないかな?」

私の言葉に男は目を数回瞬かせると、溜め息を吐いて呆れ顔を作った。

「戦いとは多かれ少なかれ、博打を打つことが必要となるものだ。そもそも、己の勘を信じれぬようでは、初見の敵と対峙した場合には生き残れんよ」

挑発的な笑みを浮かべて、私は呆れ顔の男へと語る。

「だがそれ故に、成功すれば可能性を捨つことが叶う。そして、種が分かれば対抗策も浮かぶ・・・則ち、この賭けは私の勝ちだ。もはやその攻撃は、恐れるに足らず」

今だ地に落ちながらも光を反射する、キラキラと輝く細い糸を見下ろしながら、再び両腕をゆらりと下ろし構えを取った。

「ずいぶんとまあ、自信満々に言うんだねえ・・・なら仕方ないから、分かりやすい数で攻めるとするよ」

その言葉と同時に、男の周りにただ立つだけだった死者達が、ゆっくり前進を始めた。

「こう言った単純な手段が一番やり難いと思うけど、精々頑張って見せてね」

「紫・・・君達二人には何一つとして、奴の手が及ばぬようにと善処する。だがもしもの場合・・・私が到らないその時は、幽香のことを頼むぞ?」

振り返らずに言って、両手に持った干将・莫耶を強く握った。

「あら、護ってくださいさらないのかしら？」

「まあ、要らぬ配慮だとは思うが、念には念を入れ、何事にも万全の配慮をすべきだと思ってな……このような考え方は、君達を護る者として不甲斐ないだろうか？」

迫る死者達の姿を見据えながら、私は軽い口調で言って、顔に不敵な笑みを浮かべた。

その笑みが意味するのは、この窮地に在りながらも決して揺るがぬ意思と、護ることに対する絶対の自信。

「不甲斐ないだなんて……とても頼もしい背中だから、堂々と胸を張りなさい」

口調は到って平静だが、その言葉はとても弾んで聞こえた。

そして、すぐ後ろには楽しそうに笑う紫の顔があるのだろうと、背後を振り返らずとも分かった。

「やれやれ、なかなか嬉しいことを言ってくれる……だが、やはり油断と慢心は、心の中に巣くう魔物だ。情けないことを頼んでしまうが、君の方でも警戒を怠らずにいてくれ」

「いえいえ、貴方がそこまで言うのなら、私は全然構わないですわ。でも、貴方に頼りっぱなしなのも癪に障るから、少しだけ時間を稼いでくだらない？」

「ふむ……何かするつもりなのかね？」

紫の言葉に顔だけを振り返らせて、私は小声で問い掛けた。

「答えは後で分かりますわ」

私の問い掛けに、紫は胡散臭い笑みを浮かべる。

「それに、自信満々に護ると言っておきながら私を頼りにするエミヤに、私が如何に素晴らしい女かを知っていたただかなくちゃね」

「君の素晴らしさか……そんなことは改めて言わずと、昔から分かり切ってるさ」

顔を前へと向き直して、私は笑みを浮かべる。

「だが、君がさらなる素晴らしさを私に見せ付けてくれると言うのなら、期待して待っていていよう」

「ええ、もちろんですとも……でもエミヤ？」

何が楽しいのか、紫はクスクスと笑いながら言う。

「その場合、私の素晴らしさに惚れてしまっても、私を恨まないでちょうだいね？」

「クツ・・・なかなか面白いことを言うではないか」

返ってきた紫の言葉が意外性に長けているあまり、私は喉を鳴らして苦笑を浮かべた。

「あら、私は冗談で言ってるのではなくてよ？」

「ふむ、まさか本気ときたか・・・ならば紫、是非ともこの私を

「

死者の群れが自身の間合いに足を踏み入れた瞬間、

「君に惚れさせてみたまえッ!!」

私は閃光の如き速さで、死者達へと刃を走らせた。

間合いとは則ち、私の支配する領域。

思考や意識を越えた、無意識の世界で体は反応をして、踏み入れた者達を容赦なく襲う。

右へ、左へ、そして正面へと走らせた刃は死者達の体を切り裂き、夜空に孤を描くように舞わせた。

護らなくてはならない。

背にした命を、護ると誓った存在を、私は護らなくてはならない。

絶対に許してはいけない。

誓いを違えること、大切な者を傷付けることを、決して容認してはいけない。

それを許してしまうと言うことは、私が私自身を否定すると同義であるから・・・

「フツ!!」

反転するかのように干将を大袈裟に振るい、正面から右側へと迫る二体の死者を、上下二つのパーツへと切断する。

「残念だが、背後は私にとって死角にはならんよ」

背中を向けた状態からさらに体を反転させ、『360度、我に死角はなし』と円を描くように莫耶を振るう。

腕を素早く振るい、時折蹴りを織り交ぜ、斬撃に打撃を繰り返してはの追撃。

いったい何体もの死者を蹴散らしたのか、数えることは端からしていないが、二十や三十は優に越えただろう。

やれやれ、いったい何体いるのだから……

追撃の手を休めず、視界に映る死者の数を簡単に数える。

腕や脚と言った、体の一部がない者。

肘や膝、または首と言った関節が、不自然に曲がった者。

その全てが群れを作り、緩やかな波のように押し寄せる。

「チツ……多少の予想はしていたが、出来れば外れていて欲しかったな」

予想通りの光景に、私は思わずも下を打つ。

「紫、今から私は少し派手に暴れるが、幽香の耳と目を押さえてやってくれ」

背後に立つ紫に言うや全力で蹴りを放ち、囲む死者達を払い除ける。



腕がもげようと、首が落ちようと立ち上がり、再びこちらへと向かってくる死者達。

それは、ある意味で当然の光景。

特別と動きを観察するまでもなく、また敢えて推考するまでもなく、少し考えれば容易に分かること。

「  
トレース・オン  
投影開始」

もはや死と言う概念がないのなら、動きを止めるには破壊しかない。

「  
ロールアウト  
バレット  
クリア  
工程完了。全投影、待機」

早々に考えをまとめ、宙に生み出す27の剣。

「へえ、君はこんなことも出来るんだ・・・うん、すごいや」

男は口を開き、興味深そうに頭上を見上げては、愉快愉快と手を叩いた。

その余裕、高く付くぞ？

「  
フリーズアウト  
ソードパレル・フルオープン  
停止解凍。全投影連続層写」

私の言葉と共に、死者の群れへと降り注ぐ剣軍。

「  
壊れた幻想」  
フロークンファンタズム

そして幻想を破棄し、それに応じて伴うは爆破の連鎖。

炸裂する爆発音と、勢い良く舞い上がる土埃。

爆竹とは規模の違うソレを繰り返して、しばらくのあいだ視界が光に支配された。

つと、

「……やったのかしら？」

咄嗟に紫と幽香を庇うように立った私の後ろからは、紫の眩きが聞こえた。

「それなら幸だが、どうだろうか？」

爆発が収まり、今や静寂の中を舞い上がる土埃の先を睨みながら、私は改めて構えを取る。

「ふむ、残念ながらまだのようだな……まあ、予想した通りだったが」

「剣を生み出すには驚いたけど、爆発させるだけじゃ芸がないよ？」

土埃の舞う先から声が聞こえると、高く高く舞い上がる土埃が左右に吹き飛び、その中心を男が歩く。

「すまないが、私はあまり多芸な方ではなくてな……だがそれは、君も似たようなものではないかね？」

そう言いながらも、私は両の目を鋭く細めて、ある一点を注意深く観察する。

視線の先は土埃の舞うこの場では、唯一澄んでいた。

一切の風が吹かぬ現状に置いて、まるで男を避けるように割れた土埃。

それは意図的に開かれた、空気の通り道のようなようだった。

「……成る程な、少し種が見えてきた」

「へえ……今度はいつたい、なんの種が見えたのかな？」

「見えたと言っても、それはまだ推測に過ぎん。だからペラペラと、それを容易く口にする訳がないではないか」

「じゃあ、また博打でも打つのかな？」

言って男は握りこぶしを作り、私達へと向ける。

「ああ、そうなるだろう・・・だが残念なことに、この推測が当たるにせよ当たらぬにせよ、私が打てる対抗作は一つだけだ」

私は男の言葉に応え、干将を投じる。

「ッ!？」

突然、自身へと投じられた干将。

それにわずかばかり驚きを見せ、男は握ったこぶしを勢い良く開く。

「フロックンファンタズム  
壊れた幻想」

男の動作と共に言葉を詠むと、再び爆発が生まれた。

ドオオンッ!!!

干将から生じた爆発と、男の手から生じた衝撃がぶつかり合い、辺り一面に風を巻き起こした。

「・・・」

爆発と衝撃の衝突を眺めながら、私の思考は記憶の海を泳ぐ。

新たな幻想を、守る為の手段をかつての記憶から再現する為に、その鍵となる言葉を探す。

今ならば、少しは見付かる気がする。

かつての私と現在の私。

互いの在り方が如何に違えど、本質が同じならばきっと見付けられる。

如何に存在を捻曲げられようと、決して変わらない一つがある。

私と言う存在に打ち付けられた意味は・・・それだけは、決して変わらないはずだ。

きっと、今も昔も変わらず、私達は護る者だから

「 I am the bone of my sword )  
体は剣で出来ている ) 」

この言葉がいったい何を意味するのか、今はまだ良く分からない。だが、きっと何かを生み出すのだと、私の奥底に存在する誰かが述べている。

私を表す大切な言葉なのだ、意味を為す鍵なのだと教えてくれているから・・・だから私は、己を信じてこの言葉を口にする。

きっとこの言葉が、大切な者を護る為の力に変わるから・・・

っと、

「エミヤ、もう時間ですわ」

紫の声が耳元で聞こえると同時に、強引に襟首を引かれた。

「待て紫、時間とはいっただい・・・」

言葉を詠むことを放棄して、声の主たる紫へと振り返って見れば、

「・・・な、何が起きてるのだ？」

そこには体の半分を、空中に走るあまりにも不自然な亀裂に沈ませた格好で、私の外套を引く紫の姿があった。

「後で説明するから、今は急いでちょうだい」

焦り気味の表情で、グイグイと私の襟首を引っ張る紫。

「わ、分かったから、襟を強引に引っ張るなッ!？」

強引に引かれる度に、首が絞まる。

「なら早く行くわよッ!！」

言っや紫は、私の体を強引に、亀裂の中へと引きずり込んだ。

「グオオッ!?!?？」

亀裂へと体を沈ませる最中、私の首からは鈍くとても嫌な音がした。

だ、だから引っ張るなと言っただんだ・・・

「ちえ、逃げられちゃったなあ・・・」

先程までの争いが嘘のような静けさの中で、荒れに荒れた庭に立つ一人の男は、頭上に広がる闇空を見上げては呟く。

「でも、もしかしたら良かったのかな・・・もしも彼女が、あの人が予言した『賢者』だとしたら、殺さなくて正解だったと言えるからね」

闇の中に光る魔性の月を見上げながら、男はその言葉を最後に残した。

そして陽炎のように揺らめき、暗闇へと溶けるように音もなく姿を消した・・・

亀裂の内部はとても暗く、終わりの見えない一本道。



それはまるで、何処までも続く長い長いトンネルのようだった。

この感覚は、まるであの森に再生された時のようだな・・・

天も地も、上も下も存在しない空間を、ただ漂うような浮遊感。

まるで自分が死んだような・・・温かさも冷たさも感じられない空虚な世界でさ迷う孤独な魂のようで、少しだけ寂しさを覚えた。

この先に、終点は存在するのだろうか？

長い暗闇のトンネルを潜ることで、意識は次第に朦朧とし、体からは力が抜けていった。

アレは・・・出口なのか？

黒に支配された視界で唯一目にしたのは、長いトンネルの先に待つ一筋の光。

その光を目指して、私は引かれていった・・・

「・・・ここは？」

光を潜った先で、私の目は再び色を捉えた。

ここはいつたい、何処なのだろうか？

痛む首を回して辺りを見回すと、私の周りを囲むように並べられた松明が、ゆらゆらと燃え淡い明かりを燈していた。

「ふむ・・・」

目にした光景の全ては、縦横が逆転している。

視点から察するに私は現在、床に背中を預けて寝転んでいるようだ。

「さて、呑気に寝てる場合ではないか・・・ここが何処なのか、誰か教えてくれないかね？」

体を起こしながら、微かに感じる気配へと問い掛けた。

返事はないか・・・

返ってきたのは沈黙。

わずかに感じる気配は微かな揺らぎもみせず、ただ背後に存在するだけ。

「まったく・・・」

仕方ないと首をさすりながら立ち上がり、気配の下へと体を向けるが・・・

「紫め・・・訳も分からぬままこんな場所に私を放置するのは、さすがにどうかと思うぞ?」

そこには誰もおらず、改めて辺りを見回してみれど、何もない部屋の一角に一枚の引き戸が存在するだけ。

私は戸へと向かいゆっくりと歩き、首を押さえては『コキリッ』と鳴らした。

「ここで呑気に構えてる暇もないか・・・取り敢えず、出てみるか」

ぼやきながら私は戸の前に立ち、取っ手となる部分に手を掛けた。

わずかに感じる気配は、この戸の先から窺える。

この先に何かあるのかは分からないが、紫がわざわざ連れてきた場所なのだから、悪いものが待ち構えている訳ではないだろう。

「・・・多分だがな」

ほんの一瞬、紫のきな臭い笑みが脳裏を過ぎつたせいか、少し嫌な予感がした私は、疑念を払うかのように頭を掻く。

「ああ、これも一種の疑心暗鬼なのだろうか・・・すまない紫、駄目な父を許してくれ」

良く分からない謝罪の言葉を述べながら、引き戸をゆっくりとスライドさせる。

ギギギイイイ・・・

多少の建て付けの悪さからか、戸はその身を軋ませては悲鳴を上げる。

だが滑りは良好で、建て付けの悪さからくるだろう摩擦の抵抗は、私の腕にはあまり感じられない。

「ふむ・・・匠の技が光ると言うのかはしらんが、この時代の職人は良い仕事をする・・・何もないからこそ、腕が磨かれるのかもしれんがな」

くだらない感想をこぼしながら、私は開けた戸の先を見やり、あまりの驚きに目を見開いた。

「紫・・・やはり君は、確かな素晴らしさを秘めている」

それは、とても綺麗な場面だった。

大小様々な怪我を負った、明らかに人ではない容姿をした者達を、紫が微笑みながら治療する。

私の知る常識では、映画やドラマと言った、現実とは掛け離れた物語りの中にだけ存在する光景。

それを実際に目にした時、人間達には理解が出来そうで到底理解の及ばないだろうその光景に、私は喜びと慈しみを感じ深く感銘した。外面的な美しさはカケラもないそれだが、確かに胸を打つものが存在する。

生きることへの執着を見せる妖怪達の姿や、救うことの懸命さを宿した紫の眼差しが、とても美しいのだ。

「ふっ・・・君が相手では、ナイチンゲールも顔負けではないか」  
怪我を負った相手側からしたら、礼儀に外れた考えを抱いてるのかもしれない。

だが、胸が温かさによって満たされるのだから、こればかりは偽りようがない。

「懸け橋はきつと存在する……」

一歩、一歩と紫の背中へと歩み寄りながら、私は自身の胸へと刻み付けるように呟いた。

ないなら想像しろ。

何かを為すに必要な要素は、探すばかりが手段ではない。

存在しないのなら、己の手で生み出せば良い。

常日頃、私は自身にそう言い聞かせていたではないか。

想像し、創り上げろ。

それは何も、戦う為だけの言葉ではない。

夢も理想も、ないなら創れば良いのだ。

到底叶いもしない夢ならば、いつそのこと現実を夢のように塗り替えてしまえば……

「私も手伝おうかね？」

歩みを止めた私は、紫の肩に手を置いて微笑みながら言う。

「あら、いつの間に起きたのかしら？」

私の言葉に振り返り、バツの悪そうな顔でこちらを見上げる紫。

「そんな顔はよしたまえ。君は今まさに、立派な行いをしているのだぞ？」

「ありがとう・・・でも、少し不覚だわ」

私の褒め言葉に紫は唇を尖らせ、照れ臭そうに顔を逸らした。

「何が不覚なのかは聞かないが、君は立派だと繰り返そうか・・・それはさて置き、手が足りないのなら手伝うが、私では邪魔だろうか？」

「邪魔とは言わないけど・・・暇をしているのなら、あの娘の所に行ってあげてちょうだい」

言っただけ紫は、私の背後を指差す。

「ああ、確かにそうだな・・・」

紫の指差す先へと視線を向ければ、膝を抱えて座り込む幽香の姿が

あつた。

「役に立てず申し訳ないが、私はあの娘の下へと向かわせてもらおう」

「ええ、そうしてあげて」

「ああ・・・それとだ、君には後で色々と聞きたいこともある。だから根を詰め過ぎぬ程度に、無理せず頑張ってくれ」

「ふふふ・・・貴方はずいぶんと、難しいことを言うのね？」

「そうでもないさ・・・医者の不養生と言う言葉があるように、君も疲れているだろうからな。ちゃんと自分を労り、休める時には休みたまえ」

言いながら紫の頭を優しく撫でて、私は幽香の下へと歩く。

幽香の下へと向かう最中、私を興味津々と見る妖怪達。

何を思い何を窺うのかは、彼らにしか分からない。

私自身、他者が己をどう見ているかなど、あまり気にしたことがない。



ただ、一つだけ疑問を抱く……

彼らは皆、何処から来たのだろうか？

何故、彼らは怪我を負っているのだろうか？

何故、紫は彼らを治療しているのだろうか？

そして、この場所はいったい、何処でなんなのだろうか？

「取り敢えずは、後回しだ……」

様々な疑問が頭の中には生まれるが、それは後で紫の口から聞くとしよう。

「ふう……想定外のことばかりだったせいか、今日は少しばかり疲れたな……」

雑念を払うかのように頭を軽く振るい、私はゆっくりと息を吐き出してから、深く大きく吸い込んだ。

今日は色々なことがあったからか、さすがに疲れを感じる。

久しぶりに行った戦闘の影響で、体の節々が鈍く痛む。

一日と言う短い時間のあいだで、深く考えさせられることがあまりに多く、頭の中が色々な考えでゴチャゴチャしている。

その全てが蔑ろに出来ないものばかりで、考え出すと少しだけ憂鬱になるが、それが『私の選んだ道なのだ』と、良い意味での諦めを持つことにした。

「それらも含め、追い追いつくりと考えてするか・・・さて幽香、いつまでもそんな所に座っていないで、そろそろ休むとしよう」  
膝を抱え座り込む幽香の下まで辿り着いた私は、若い少女と視線を合わせるようにしゃがみ込んで笑い掛けた。

この瞬間より全ての起点は終点へと向け、長い長い過程を歩み始めた。

問い掛けは圓(その)へ(後書き)

多分、それなりにはなった(眠いから確証は持てない)

●(その)はファクターへ 巻(前書き)

ファクター・・・因子(または因数)、つまりは閑話シリーズ。

要はまた、話が長くなった。

「それで、私を呼び出したからには、ちゃんと説明をしてくれるの  
だろ？」

幽香を寝かし付け自分も眠りに付こうとした時、大事な話しがある  
と紫に言われた私は、月明かりの下で彼女と向き合う。

背後には深い森が、何処までも広がっている。

静けさの中には川のせせらぎだけが聞こえ、夜鳥の羽ばたきも虫の  
鳴き声も聞こえない。

だが、不思議と寂しさは感じられず、静けさに包まれることで心地  
好い安息感を覚える。

しかし、それはなんら不思議なことではないのだろう。

一切の不穏を孕まない静寂が安らぎを与えるのは、ある意味で当然

と言えよう。

ああ、喧騒もなければ不穏な影もないのだから、眠りに付くにはとても良い加減だ。

辺り一面を見渡せど暗闇と森が広がるだけで、何処までも殺風景な場所なのだが、森の入口にはこの時代では当たり前となるだろう、木で仮設された小屋が唯一存在した。

今はそこで、幽香が静かな寝息を立てている。

「あら、せっかくの再会なのだからと、お互いつもる話してもゆっくりしたいと思ったのは、私だけなのかしら？」

向かい合って立つ紫はクスリと笑い、私の顔を見上げた。

「ふむ、それも確かに悪くはないが・・・」

頷きながらも肩を揺らして、私は紫の視線と目合わせた。

すぐ正面に立ち、こちらを楽しそうに見上げる紫と、それを見下ろすように立つ私。

互いの距離は近く、こちらから彼女へと手を伸ばせば、容易に触れることが出来るだろう距離。

そして、それは彼女からしても同じだと言える。

「確かにつもる話しはあるだろう・・・だがこの場合、先ずは説明が必要なのだと、君は思わないかね？」

「貴方つてヒトは・・・つくづく女心の分からない男なのね？」

私の言葉に紫は呆れ顔を造ると、心底と疲れた様子で言った。

「それはすまない・・・しかし紫、生憎と私は男なのでな？女心が分からなくとも、それは仕方がないと言うものだ」

それに娘の女心を理解するのは、男親として反則な気がする。

「・・・」

「・・・分かった、私が悪かった。だからお願いだ、そんな目で私を見ないでくれ」

「分かってくれたのなら、それでよろしいのですわ」

澄まし顔で言って、紫は私の手を掴む。

「急に私の手を掴んで、どうしたのだ？」

「別にどうって訳ではないですわ・・・ただ、立ち話もなんだから座りましようかとね？」

私の言葉に紫は柔らかな笑みを浮かべると、手を引きながらゆっくりと歩き出した。

「待て紫・・・君に手を引かれなくとも、私は自分で歩けるぞ？」

「ふふふ・・・いいえ、これでいいのよ」

何がそんなに楽しいのか、紫は私の手をより力強く引きながら、顔に浮かべた笑みを深めた。

「さあ、ここに座ってくださいな」

「いや、座ってくださいなと言われてもだな・・・」

手を引かれ先導された場所を見てみれば、まだ切断されてから幾日も経ってはいない、真新しい切り株が二つ並んでいた。

「ところで紫、君は座らないのか？」

自身が指定した場所に到着したと言うのに今だ立ち続ける紫を不思議



議に思い、私は切り株を見下ろしながら聞いた。

「ええ、もちろん座りますわよ？でも先ずは、貴方が先でいいの・  
・だから早く座ってちょうだい」

グイグイと私の手を強く引きながら、紫は切り株をぽんぽんと叩く。

「まてまて・・・分かった、分かったからそんなに強引に引っ張る  
な」

やれやれと頭を振りながらも、私は切り株に腰を下ろした。

「まったく、君はいつたい何がしたいのか・・・って、少し待て紫  
？」

愚痴をこぼすと同時に、膝の上には少しの温もりとわずかな重みが  
加わった。

「あら、何かしら？」

その返事は、互いの息いきづかいが聞こえるほど近い距離から、と  
ても眩しい笑顔で返された。

「いや、『何かしら？』ではなくてだな・・・何故に君は、私の膝  
の上に腰を下ろすのだ？」

「何故って、ここは昔から私の特等席ですもの・・・何処かの誰かに取らちゃう前に、ちゃんと唾を付けておかなくちゃね？」

まるでそれが当たり前の行為なのだと、優越感と達成感で満ち足りた表情で私にそう言つと、紫は満足げに笑みを深めた。

「いやいや、だから待て。とても残念なのだが、君が何を言いたいのか私には良く分からない・・・っと言つか紫、私の膝の上はいつの間に君の特等席になったのだ？」

疑問形で応えた紫に、私は少しだけ頭痛を覚えた。

「だいたいの話しこんなつまらない男の膝上などを、いったい誰が取ると言っただね？」

「貴方には分からなくとも、私にはちゃんとした理由がありますのよっ。」

「ほう、君にはちゃんと理由が存在するのか・・・では聞くが、その理由とはなんだね？」

「それは・・・ヒ・ミ・ツ、ですわ」

言っつや紫は片目を閉じて、チツチツと舌を鳴らしながら指を振った。

「・・・」

指を左右に揺らしながらおどけて言う紫に、私は無言でジト目を向ける。

「まあ嫌だ・・・そんな冷たい目で、私を見ないくださる？」

「・・・嫌なら早く退きたまえ」

私はジト目を向けたまま、冷めた口調で言った。

すると・・・

「ふう・・・ほんと、ここは落ち着くわね・・・」

ため息を一つこぼしては、紫は私から視線を外して、まるで何も聞いていなかったかのような表情で夜空を見上げた。

「いきなりため息など吐いて、どうしたのだね？」

「別にどうもしないわよ・・・ただ、久しぶりに落ち着けたなって、そう思ったの・・・」

そう言って紫は、私の胸にその華奢な背中を預けると、

「それに、おつきくてすごく温かいなあ・・・」

幼い頃を思い出させる舌つたらずな口調で、蚊の鳴くようなとても小さな声で呟いた。

「・・・そうか」

紫の呟きに応える言葉が何も浮かばず、私はただ相を打つことしか出来ない。

あまりにも弱々しいと・・・とても危うい背中を預けられたと、不覚にも思えてしまったから。

「ねえ、エミヤ・・・私が貴方の下から巣立って、ずいぶんと経ったわよね？」

夜空を見上げたまま、紫は静かに語る。

「十年、いえ二十年は経ったかしらね・・・時間なんてものは、言葉にしたらたかが二十年だけど、私からしたらされど二十もの年月なのよ・・・この意味、貴方には分かるかしら？」

「・・・時間の経過と呼ぶものは、個人個々によって受け取る意味が異なる。だからどんな年月であれ、長くもあり短くもあるのかもしれない・・・しかしだ、君が私に求めているのは、こんな能書きではないのだから？」

「・・・貴方、相変わらず嫌な性格をしてるのね？」

顔を向けずに返されたその言葉は、不思議と嫌味には聞こえない。

「む、嫌な性格と言われてもな・・・私は君の言葉を解釈したままに応えただけなのだが、何処か気に障ったかね？」

「気に障った訳ではないけれど、もっと素直に言えばいいのにと、私は思うわね・・・でも、それがエミヤらしくて嬉しいわ」

「嬉しいか・・・残念ながら、それが私らしいと言われても、自分では良く分かんない・・・」

密着した体から伝わる温かさに、私は微笑みながら言う。

「それでだ、君が一人で過ごしたと言ったかだから二十二年さね二十二年のあいだに、いったい何があったのだね？」

「ふふふ・・・最初から素直にそう言えばいいのよ」

紫は嬉しそうに笑うと、体を揺らして足を振った。

「小さな頃から貴方に護られて、私は汚れを知らずに大人になっただけだわ・・・けど、それは体が成長しただけだったのよね？」

「ふむ、体だけが成長か・・・君が述べているのが心は未発達と言  
う意味なら、それはどうだろうか？」

「あら、違うのかしら？」

「いや、決して違くないだろう・・・だが、同時に正しくもない  
のだろうと、矛盾したことを私は思うんだ」

自分でも良く分からない気持ちを、私は自問しながらも伝える。

「これは個人的な解釈なのだが、心の成長とは一定の段階や特定の  
年齢で止まるものだと考えられる」

一つ二つと記憶を掘り返しては、肩を揺らして紫の頭を撫でた。

誰が最初に言ったのかは分からないが、男子は十代の半ばから後半  
に向かう境目で、精神年齢が固定されると言う解釈がある。

だが不思議なことに、女子は男子と違い十代を過ぎても精神が成長  
を続け、成熟までに長い期間を要するとも言われている。

何故、性別によってそのような違いが生じるのかと考えてみれば、  
残念ながら私には分からない。

しかし、これは人間を対象にした話しであって、妖怪である紫を対

象にはしていない。

ならば人間と妖怪の違いに、心身の成長はどう関係してくるのだろうか？

体の成長が人間と違うのかどうかは、今さら深く悩むほどではなく、かつての紫を思い出すだけだ。

だが、紫の心はどう成長したのだろうか？

人間よりも長い時間を生きること、それがイコールで余裕を持った成長をしたら、紫の心はまだ少女のままかもしれない。

そして、今は夢を観ているだろう幽香。

あの少女がこれから先、紫と同じ過程を歩むかどうか・・・分かりもしない先のことなど、この場で考えるだけ無意味だろうか？

今はまだ汚れを知らない心に、汚れのない環境だけを与え続けることは、不可能なのだろうか？

そもそも心の成長とは、本来はなんだろうか？

肉体は成熟を迎えた紫と、これから大人になる幽香。

二人の歩みを見守ることで、私の心はどう変化していくのだろうか？

「なのに我々は日夜つれづれなる時を過ごし、時には戸惑い歎く・・・そして、成長を終えたはずの感情が膨れては縮んだりを、忙しな

く繰り返す。私達はその度、無意識にそれは何故なのだろうかと考  
え、また新たな悩みをその心に宿す」

自身の心に向けると同時に紫へと告げられた言葉は、実に不毛な自  
問と自答の応酬。

「未熟さとは可能性だろうか・・・また、可能性とは成長なのだろ  
か。自身にすら分かりもしない葛藤と、いずれ君が迎えるだろう心  
の成熟は、今の君が望むべき在り方なのだろうか・・・」

長々と言いながらも、首を傾げなくなる言葉。

これは、なんとと言う支離滅裂だろうか・・・

噛み合わせの悪い歯車が音を響かせ、ギチギチと軋むような単語の  
羅列。

言葉が言葉と呼べる意味を持つのなら、私の口から出たこの言葉は  
言葉に在らず。

意味もなく単調に詠まれ、ただ無意味に綴られた不協和音。

西洋音楽に例えるならばなおのこと悲惨で、基本とする自然的短音  
階を持たず、実際に奏でるべき旋律的短音階と和声的短音階も存在  
しない酷く空虚な音が、ただリズムを持って口からこぼれるだけ。

だが、言わずにはいられない。



「明日の行方など、向かう先など決して見えない。だから何度も悩んで・・・悩んで悩んで悩み抜け。きつと、それだけが答えだ」

この言葉は何も紫だけではなく、私自身にも当てはまるのだろう。

そして、今だ幼い幽香やまだ見ぬ誰か、はては生涯出会うことのない誰しにも、この言葉は当てはまるのだろう。

「何度も悩め、ね・・・それしかないのは分かってたけれど、改めて言われると嫌になるわね」

「確かに、嫌になるのも仕方ないのだろう・・・だが、君には己を貫いて欲しい。本来ならば誰もが挫折する道程を、様々な苦楽を噛み締めながら自分こそが未来の担い手だと、君らしく誇らしげに歩み続けて欲しい」

「・・・うん」

紫は子供っぽい口調で応えると、コクリと小さく頷き、私の胸に頭を乗せた。

「だが紫、これだけはずっと承知していて欲しい・・・」

どうしても言わなきゃならない・・・いや、伝えたい言葉があった。

だから私は、胸に乗った紫の頭を優しく撫でながら、ありのままに告げた。

「例えば体が離れていようと、私は君を一人にはしないと云うことを・  
・これから君が踏み出す歩みが、如何に苦渋の道程であろうと関係はない。そこに差し掛かった時、君の有様が優秀さなどは皆無であろうとも、私は君らしい不完全さを見守ることを約束する。だから紫、これからもずっと君らしい君を見続ける為に、私は君の後ろに居続けるつもりだ・・私と言う存在を君に押し付けるつもりはないが、この言葉を忘れずにいてくれたら嬉しい」

「・・・」

その言葉に紫は振り返ると、キョトンとした表情で私を見上げ、

「ごめんねエミヤ・・・すごく嬉しいけど、私はそんなの絶対に嫌よ」

笑いながら首を横に振った。

「むう・・・い、嫌なのかね？」

勝手な言葉だとは分かっていたが、こうもハッキリと拒絶されると、少しだけシヨックだ。

「ええ、嫌ですわ・・・だってそれじゃあ、私達は対等ではないん

ですもの」

「対等ではないとは……それはいつたい何処が？」

「何処つて……貴方が私の後ろなんて、申し訳ないけどお断りですわね」

「……成る程」

拒絶は拒絶でも、その理由は何も私が嫌な訳ではないようだ。

「後ろ立たれるのがお断りなのは良く分かった……では紫、君にとって私はどう言った立ち位置が理想だね？」

多少なりだが、紫の言葉に心が軽くなった私は、その真意を聞いてみた。

「貴方と言うより、私達が理想とする在り方ね……ええ、そんなの考えるまでもないわ」

ポンと手を一度だけ叩くと、当然だと言わんばかりの表情で紫は私に応えた。

「どうせなら私達は、共に歩まなきゃつまらないですわ」

「・・・共になのか？」

「ええ、共に二人で歩いて行くのよ？」

「そうか、二人で歩むのか・・・ああ、確かにそれが理想的だ」

何かを心に抱き合い、共に支え合いながら歩む旅路は、確かに理想  
と言えよう。

「しかし、その場合は幽香の存在を忘れられては困る。それと、一  
つの問題があるのだが・・・君達が将来的に生涯の伴侶を得た場合、  
その距離感だと私はともかくとして、相手側からしたら少しやりづ  
らい関係になるぞ？」

「あら大変、もうこんな時間だわ・・・夜更かしはお肌に悪いから、  
早く寝なくちゃ駄目よね？」

言うや紫は手を叩き、私の膝上で猫のように丸くなると、

「そんな訳ですので、これでお休みなさい」

そう言って、素早く目を閉じた。

「・・・」

オ、オイオイ・・・何故、いきなり会話を切る？

「……って、少し待て紫。何故に君は、いきなり寝ようとする？」  
それに、まだ話しは本題に入っていないぞ？

このまま勝手に寝てもらっては、些か困ると言つものだ。

「……」

「こらこら、私の話しを聞いているのか紫？まだ話しは終わっていない……いや、始まってないのだぞ？それよりもせめて、寝るのは自分の寢所に戻ってからにしたまえ。こら八雲紫よ、人の話しを聞いているのか？」

肩を揺すれど反応はなく、手や頬を軽く叩けど目を一向に開こうとしない紫に、私は何度も声を掛けるのだが、紫はなんの反応もせず狸寝入りを続ける。

つと、

「……すう、すう」

そんな私を尻目に、紫の口からは次第に寝息が聞こえ始め、狸寝息は空寝から本当の眠りに変わった。

「ああ、頼む紫……もう寝ても構わないから、せめて場所を選ん

で寝てくれ・・・」

まだ幼い幽香とは明らかに違う紫の温もりと柔らかな感触に、理由は何故だか分からないのだが『私がこの娘の親ではなかったら、きっと今頃は大変なことになっていた』と、少しだけ心配な気持ちになった。

・ 年頃の娘を持つ男親は皆、娘の無防備さに悩むのだろうか・

そんな、実にくだらなことを考えながら、今宵の夜は更けていった・・・

静寂の夜は明け、眩しい太陽が空に昇った

朝日と共に紫が目を覚まし、やっと体の自由を取り戻した私は、幽香を起こしに小屋の中へと入る。

するとそこには、私の外套に包まりながら眠る少女の姿はなく、部屋の隅っこで膝を抱えては入り口に立った私を睨む・・・赤い外套を纏った小さな悪魔が存在した。

「・・・もう朝か」

幽香と紫を両脇に『朝日は罪なものだ』と、私は目を擦りながら晴れ渡る空を見上げて、深く深く思った。

昨日の夜から、実に踏んだり蹴ったりだ・・・

まさに青天白日と呼べる天気も、私の心までは白日の下に照らしてはくれないようだ。

何があったのかは詳しく言わないが、朝から酷い目にあった。

それもこれも、全てが紫のせいだと言える。

幽香の逆鱗に触れたのも・・・その結果として、ポカポカと叩かれ

ながら『嫌い』を連呼されたのも全て、紫がことの発端なのだと  
えるだろう。

しかもその後、幽香の機嫌を取るのにどれだけの労力を要したか・

クソ、こればかりは恨むぞ・・・

こと、

「疲れた顔なんかして、どうかしたのかしら？」

脇に立つことの発端（紫）が、私の隣で膨れる幽香を横目に済まし  
た顔で言う。

「どうかしたのではないぞ紫・・・これは君のせいだろ？」

さらに言えば、紫が膝上を占領して朝まで寝ていたおかげで、私は  
寝ることが出来なかった。

確かに人外の私に、睡眠はあまり必要ないと言えよう。

だが、当たり前前に存在する疲れがある。

それは精神の疲れ・・・肉体的な疲れとは違い、心は無休ではいけ  
ない。



感情とは日々浮き沈みを繰り返し、毎日が苦悩の連鎖だ。

ならばこそ肉体の安らぎとは別に、心の安らぎを得るための睡眠と休息は必要不可欠。

つまり何が言いたいのかと言えば、長いこと紫を抱いていたことに、酷い気疲れを覚えた。

「あら、そうなの？」

初耳だと言いたげな顔で、紫は首を傾げた。

「・・・まあいい」

紫の表情に私はただ飽きれ、隣でオドオドする幽香の頭を撫でる。

「さて幽香、こんなふざけた大人は忘れることにして、せっかくだから朝食でも食べるかね？」

「ねえ、お父さん・・・」

幽香は私の外套を握りながら、不安げな顔で聞いてきた。

「……、何処なの？」

「ああ、それは・・・」

幽香の質問に答えることが出来ない私は、無言で紫へと目配せをする。

「ええ、もちろんお答えしますわ・・・」

私の視線に紫は得意げに胸を張ると、

「じゃあ、着いてきてちょうだい」

そう言つて、森の一角へと歩き出した。

「ふむ・・・」

次第に遠退く紫の背中を少しのあいだ眺めた後、私は幽香へと目を向ける。

「さて幽香、どうやら紫が状況説明をしてくれるようだ・・・ああ、それでなのだが、私は彼女に着いて行こうと思う。君には寝起きのところをすまないと思うが、私と一緒に彼女に着いて行かないか？」

「・・・うん。お父さんが行くなら、私も一緒に行く」

幽香はハッキリとした声で応え、私の手を強く握った。

「そうか、では一緒に行こう」

だんだんと小さくなる紫の後ろ姿を、私は幽香の手を引きながら早足に追う。

空は晴れ渡り天候は良好。

わずかに吹く風は乾燥していて、この場に気持ちの良いそよ風を贈る。

これから先、私達はこの目に何を見るのか・・・

さわさわと揺れる枝と風に香る緑を全身に感じながら、私は心の内でそう呟いては息を大きく吸い込み、幽香の手を引いて森の中へと進んでいった・・・

園(その)はファクターへ 壱(後書き)

16歳の風見さん・・・何故かしらなが、『世話好きな幼なじみ』と変換される。

> i 7 2 0 3 | 8 2 9 <

こんな表情で、『まったく貴方って男は』って言ってもらえるように頑張ろう。

・・・いい大人が、何をやってるんだろう・・・

園(その)はファクターへ 式(前書き)

いやはや、本当は土曜に更新するつもりでしたが、親戚に不幸がありましたね……

して、土曜はお通夜に終わり日曜は元々用事がござりまして、ひたすら高速を走ってました。

んで月曜は月曜で葬式をやりーの子供が熱出すのと、なんや色々と御座りました。

そいで今日お医者に行ったんですが、ただのはやり風邪とのもので、大事がなくて良かったねん な訳であります。

だが、何故か僕が血液検査やらレントゲン撮影をするハメになり、見事に結核か百日咳の疑いありと言われる始末(つまり僕が一番重症だった)

もう、しばらくのあいだ入院してやるうかな? って思える今日この頃です。

長くなりましたが、今回も捏造を頑張ります(健康って宝だよ?)

■(その)はファクターへ 式

/

目を開くと、そこには見知らぬ天井が存在した。

「……は？」

見上げた先に広がる見知らぬ光景に、数秒のあいだ思考を巡らせ、自分の置かれた状況を推測する。

天井を見上げている今の姿勢と、体に掛けられた布の感触。

その二つから理解するに、どうやら自分は体を横にしているようだ。

そして、体に掛けられた布の肌触りから窺うに、自分が朝廷で使用していた寝具とは明らかに違うことが理解出来た。

つまり、ここは朝廷から自分へと与えられた部屋ではなく、誰のものかも知らない何処か別の部屋。

その何処かも分からぬ部屋に、自分は理由も分からぬまま寝かされている。

「何故こんな場所で、わっちは寝ているのじゃ？」

背中に触れる感觸と視点から理解するに、自分は仰向けに寝かされているのだと言うことは理解した。

しかし同時に、あまりにも分不相応な待遇に怒りを覚える。

「こんな安物にわっちを寝かせるとは、奴共はいつたい何を考えちよるんじゃか・・・ツウツ！」

恨み言をこぼしながら、体を起こそうと力を入れた途端、頭が酷い痛みに襲われた。

さらに、貧血なのか鼻腔が鉄臭く視界は揺れていた。

ここは何処で、何故自分は寝ていたのだろうか？

あまりの痛みには半ば朦朧とする意識の中、自分の身に何が起きたのかを思い出そうとする。

だが、いくら考えても無駄で、意識を失うまでの記憶がとても乏しく、何も思い出すことが出来ない。

「い、いったい何があったのじゃ・・・」

痛む頭を軽く振るい、重い体をなんとか起こしては辺りを見回すと、

「な、なんじゃ貴様らはッ!？」

自分を囲むように座る幾人もの影が・・・いや、人間とは明らかに違う気配を持った何匹もの妖怪達が、自分を興味深そうに観察していた。

「・・・目が覚めたか人間」

視線を右往左往とさせては驚く自分の姿を、まるで面白い見世物でも見るかのような表情で観察する、背中に大きな黒い羽を生やした一匹の妖怪が口を開く。

「本来ならお前は殺してやるところだが・・・恩のある相手からのたつての願いだったので、特別に命は取らないでおいた。まあ、あの小娘に感謝するんだな・・・」

それだけを告げると、その妖怪は腰を上げて立ち去ろうとする。

「ま、待つちやれいッ!」

一方的に告げられた言葉に声を荒げ、妖怪の背中に罵声を浴びせる。

「たかが妖怪風情が、このわっちを助けただと？ハッ、何をふざけ



たことを言っ

「

だが、その言葉を最後まで発することは許されず、呼吸までもが止まるような重い空気によって体は硬直した。

「ふっ……まさかこの程度の威圧でま、ともに息が出来なくなるとは……人間と言う生物は、なんともひ弱な生き物だな」

数秒のあいだ、猛禽類のような鋭い目でこちらを睨み続けると、妖怪は自分に興味をなくしたかのように目を閉じて吐き捨てる。

「やれやれ……しかし、実に皮肉な話しだ。お前は今まで散々命を弄んできた妖怪の手によって、自らの命を救われたのだから……ああ、実に滑稽でいて不様。そして、なんとも下等な命だよ」

「……」

自分は見下されているのだと理解するが、何一つとして言い返すことが……いや、言葉にすることが出来ず、ただただ身を竦ませた。

「まあいい……俺はあの女を呼んでくる。お前達はこの人間が馬鹿なことをしないように、しっかりと見張っておけ」

周りを囲む妖怪達にそう告げると、呼吸を止めるほどに重く絡み付いていた空気は瞬時に解ける。

「カハツ！！」

空気の縛りが解けると同時に体の硬直も解け、思い出したかのように勢い良く酸素が吸い込まれ、激しく咽返った。

「ハア、ハア・・・な、なんじゃと？」

精一杯の虚勢を張り、自分は相手を睨み付ける。

それは、毛ほどの意味もないただの強がり。

「・・・あまり俺を睨むな。正直に言うと、俺は今にもお前を殺したいんだ」

そう言うやこちらの耳元に口を近付けると、残虐さを秘めた笑みを顔に浮かべて、低い声で囁き掛けてくる。

「だから人間・・・その態度を改めてくれなければ、俺は今にも抑制が効かなくなるぞ？」

「ッ！！？」

その言葉を告げられた瞬間、妖怪の手によって自分の心臓が握り潰されたのかと思えたが、すぐにそれは錯覚なのだと思いつく。

だが、それほど強い圧力と濃厚な殺意がその言葉には込められているのだと、再び呼吸を忘れて放心した。

その時、

「止めなさい天魔」

良く通る高い声が響き渡り、殺気に満ちた重苦しい空気を取り払う。

「チツ、つくづく運に救われるな・・・ええ、ひ弱な人間よ？」

そう皮肉をこぼして、突然の介入者に天魔と呼ばれた妖怪は、声の主へと顔を向ける。

「・・・遅いぞ八雲紫。わざわざこの俺に人間の世話を任せておきながら、自分が言った約束の刻限までに現れないとは、これまさに言語道断。この程度の約束すら満足に守れぬようでは、あの話しは到底呑めないぞ？」

八雲・・・だと？

あまりにも聞き慣れた名に、その存在へと視線を向け・・・そこに立つ人物を目にした瞬間、思わず目を見開いた。

「あら、それはごめんあそばせ・・・でも、貴方に頼んだ覚えはないのだけど、どうして貴方がここに居るのかしら？」

そんな自分を置き去りに、突然の介入者・・・八雲は妖怪へと問い

掛ける。

「ほう、お前は俺が居ては不満か？」

「まさか、そんなことは言わないけど・・・記憶が確かなら、私は貴方の姉上様に話しを通したはずなのよね・・・なのに何故、貴方がここに居るのかしら？」

「姉上の抱えた用事とは、同時に俺の用事でもある。だから今日、ちようどよく手の空いた俺が、姉上に代わってここに居るんだ」

腕を組みながら何度も頷き、それが当然なのだと応えた。

「ああ、やっぱり・・・ほんと、飽きれちゃうぐらいに良い弟をやってるわ」

八雲は飽きれ顔で言って、自分へと顔を向けると、

「あら、御機嫌よう雲雀様。目覚めは良子で・・・いえ、最悪だったかしら？」

ニヤリと不気味な笑みを浮かべた。

「な、何故お前がここに居る・・・」

きつと自分はとても間抜けな顔をしているのだろつと、そう思いながらも震える声で八雲へと問い質す。

「何故・・・何故にお前は、妖怪共と仲良う話しちよるのじゃッ！  
!？」

「はぁ・・・癩癩持ちはこれだから困るわ」

面倒臭そうに言つて、八雲は頭を手で押さる。

「ねえ、雲雀様・・・いつ如何なる時も余裕と優美さを持つてなくては、良い女とは言えませんの。だから貴女みたいに、何かある度にすぐ癩癩を起こしていたら、世の殿方達に煙たがれますわよ？」

「な、なんち言い種・・・八雲、お前は己の身分を忘れ、まさかこのわつちに向かい毒を吐くかッ!？」

「すぐムキになって、ほんとおバカな雲雀様・・・残念ですけど、身分なんて私には関係ないの。だって私、人間じゃないのですから」  
言うや八雲は、クスクスと妖艶な笑みを浮かべる。

「ですから雲雀様・・・貴女が誰であつて何者であろうと、私には敬う筋合はないのよ？」

その笑い顔は妖艶さとは裏腹にとても冷たく、こちらを見据えた瞳は怪しい光りを宿していた。

「・・・」

八雲の瞳に見つめられ、背筋に言いよのない冷たさが走る。

これは恐怖だろうか？

または、恐怖とは違った何かだろうか？

八雲の瞳に自身が抱いものがそのどちらなのかも分からぬまま、わ  
つちは身を震わせ息を飲み込んだ。

紫に連れられ森の中を抜けると、今まではただ木々が生い茂るだけだった景色が急激な変化を見せる。

言葉にするなら多種多様と表現すればいいのだろうか、そこでは様々な姿形をした妖怪達が、一つの囲いに集い共存していた・・・

「・・・これは？」

私はその光景を眺めながら、横に立つ紫へと問い掛ける。

「ここはね・・・悪い人間達からその身を狙われ、命だけは奪われずに済んだけれど、その代わりに住家を追いやられた力ない同族達の隠れ里よ」

淡々と語りながら、紫はゆっくりと歩を進める。

「朝廷の豪族達は獣を狩ることに飽きていたの・・・だから自分達より強い力を持ち、獣よりも高い知能を持った妖怪を各地の者に狩らせ、その亡きがらを献上させていたのよ」

「献上させていたとは・・・何故、人間はそのようなことを？」

幽香が二人組の人間に襲われた時、朝廷への貢ぎ物を得る為と言われた。

だが、何故そこで妖怪の命を奪うと言う行為に到るのか・・・それが私には分からない。

「あら、それは簡単な話でしょ？」

私の問い掛けに紫は立ち止まり、クルリとこちらへ振り返る。

「簡単な話しとは……人間達はそれによって、何かしらの利益を得ると言っのかね？」

「ええ、そうよ……彼らが妖怪達を殺すことで得た物は、自身がそれを娯楽として楽しむこと……そして、他の豪族達に対する一種の見栄よ」

「待て紫、妖怪を狩ることが見栄とは……自身の力を誇示する為に行くには、いささか代償リスクが高過ぎるのではないか？」

命を狙われた妖怪は、当たり前前の防衛行動をするはずだ。

相手が人間……つまり同族ではないのだ。

傷付けることや殺めることに、妖怪はなんの躊躇も抱かないだろう。

ならば簡単に分かるはず……単純な力は人間よりも遥かに強い妖怪が、正当防衛と言う加害行為を行えばどうなるか。

いくら呪術を扱えるとは言え、科学によって生み出された強力な兵器もなければ神懸かった加護も持ち得ないただの人間が、妖怪と言



う人を超越した存在に何が出来る？

例えそれが成し遂げられたとして、いったいどれだけの犠牲を払うと言っただけだ……

「いいえ、決してそうとは言えないわ。何故なら豪族達は、地方を治める国造達くにおみやつに呪術に長けた数人の存在を直属の配下に抱えさせ、その彼らに狩らせた妖怪を朝廷に献上することで、大和の古墳ふるみに名を残させると同時にその血筋に保障を与えるの。つまり彼ら国造達くにおみやつは、功績を上げた呪者と共に歴史に自分の名を刻むのよ……一族の繁栄と安泰を勝ち取った、輝かしい栄光の歴史をね」

「まさか、歴史に名を残すことに……そんなものに、それ程の価値が存在するのか？」

ある特定の思想を持った個人や格式のある家ならば、そう言ったものを重視する傾向を持つだろう。

しかし、それに属さない極一般的な人間達から言わせれば、はたしてそんなものが命より優先されるだろうか？

「残念だけど、大いに存在するのよ……」

紫は私の言葉に皮肉げな笑みを浮かべると、とてもくだらないものを語るように話す。

「先ず第一に、彼ら人間達には氏が必要になるわ。何故なら、自分

達の個を主張する為の絶対条件なのだからね……そして氏は血筋を以って氏人と言う集団となり、その集団では氏上うじのかみと呼ばれる人間が頭となり氏神を祭っては一族を率いる。だから氏人に属さない者達……部民べのみや奴婢ぬひ達は、新たな氏と共に人間としての権利を得る為に呪者になるの。妖怪を狩って、当たり前前の権利を与えて貰う為にね……貴方ならもう、私の言いたいことが分かるでしょ？」

「まあ、あらかたには……しかしだ、どうしてそれが他者への見栄になるのだ？」

「見栄と言うのは単に中央での競い合いだからで、正確に言えば悦楽を利益として得ているのかしらね。つまりこれは、事物相互の回転。下の者達に氏と言う権利、つまりは餌を与えることで動力を得た物事が、与える側に大きな実績と収益を残す。要するに、これが豪族達にとって一番の娯楽……同時に、こんなのが今の人間達にとっては当たり前前の在り方なのよ」

それはなんて醜い在り方なのだろうと、淡々と語る紫の表情は渴いた笑顔を作る。

だが、それはとても痛ましく、同時に深い悲しみを物語っていた。

まるでその表情と共に『私達妖怪の命って、いったい何かしらね？』と、言葉の裏側で私に訴えているようだった。

「……」

言いやうのない悲しみを訴える紫の表情と言葉に、私は何も返してやれない。

何を伝え何を告げてやれば良いのか、そんなことだけが頭の中を埋め尽くして、ただ無言で見つめ返すことしか出来なかった。

「ちょっとエミヤ、いきなりそんな顔をしないでくださる？」

そんな私の心境を悟ったのか、紫は唇に指を当てふざけ混じりに言う。

「困ったわね・・・ちょっと哀愁を漂わせただけなのに、貴方にそんな顔をさせるだなんて・・・私って罪な女なのかしら？」

「クッ、何を馬鹿なことを・・・」

「あらあら、安いプライドなんかで無理しちゃって・・・ちなみに求婚のお誘いでしたら、いつでもお待ちしてますわよ？」

「ふむ、それはとても魅力的な言葉だな・・・だが、天地がひっくり返ろうともそれだけはせんよ」

私は紫へと歩み寄りながら、苦笑して返す。

「それにしても君は私の知らなぬ間に、ずいぶんと博識になったようだな？」

「あら？この程度の知識など、人間達と共に暮らしていれば常識ですわ」

紫は澄まし顔で笑い、これぐらいは当然だと胸を張る。

「それに、私はその為にあそこに居たのだから・・・このぐらいは当然よ」

「そうか、その為にあの場所に居たのか・・・」

だから、か・・・だからあの時、泣き腫らした後のような赤い瞳で、はかなげに空を眺めていたのか。

そう・・・アレはまるで、母親とはぐれた迷子の子ウサギ。

淋しい淋しいと、すぎる相手もない場所で、声を出さずにただ泣いているようだった。

きつと、汚れを知らずに理想を描いたが故に・・・綺麗な真実を求めた先に汚れた現実を知ったからこそに、紫はあのような悲しい表情をしていたのかもしれない。

これは推測・・・いや、ただの憶測でしかない。

しかし、如何にすぐ近くに人間達が存在していようと、唯一の理

解をなくした先には孤独があるだけ。

これは万人に共通した、等し並みが生んだ孤独。

だからきつと、心はいつだって悪循環に苛まれ、人と言う陸地に居ながらにして、自分と言う陸の孤島で毎日孤立していた。

何故だろうか、胸がとても痛い・・・

ただの憶測が、何故こんなにも私の胸をえぐるのだろうか？

まるで自分自身がかつて見てきたような、そんなやり切れなさやジレンマ。

いったい何が、この身を板挟みにすると言っのか？

いったい何が、この心を苛めるのだろうか？

理想にかまけるあまりか、自分一人が勝手にやった気になつて、結局は周りを拒絶していた。

いつだって誰かが私に、救いの手を差し出していた。

だが私は、自分はいつだって救う側なのだと、馬鹿な勘違いをしてはただ拒絶していた。

それを真に理解することなどは一度もせず、自分勝手な理想に周りを巻き込んでいた

「ああ、またか・・・」

また、あの声が聞こえる。

原因不明の偏頭痛を呼ぶ声が、また脳裏に生まれたか・・・

「どうしたのエミヤ？」

私の雰囲気から何かを察したのか、紫が心配そうな顔で見てくる。

「いや、少し考え事をしていただけだ・・・」

誰が告げて誰に訴え掛けた言葉なのか、それが気になって仕方ないのだが、今はそんなものに構ってる場合ではない。

「なあ、紫・・・私は君に一つだけ聞きたいのだが、あの日・・・あの別れの時、君が私に言った『やりたいこと』とは、結局はなんだったのだ？」

「・・・別に、これと言って明確なものじゃなかったわ」

紫は足元へと目を向け、つまらなそうに言う。

「ただね、頭の中に浮かんだの・・・子供の頃の私と貴方が死んだはずの母と三人で一緒に暮らす姿が、勝手に浮かんできたの・・・」

ねえ、もしかしたらこう言った在りもしない空想を、人は幻想って呼ぶのかしら？」

言葉の最後にゆっくりと顔を上げ、はかなげに微笑んだ。

「どうだろうか・・・申し訳ないが、私には先のことなど分からんよ」

紫から向けられた微笑みが、私にはとても痛かった。

「だが、私は思うんだ・・・君が観たビジョンが、その未来像が如何に形を変えようと、未来には確かな希望が存在していて・・・もしかしたら、もっと素晴らしい毎日が君には待っているんじゃないかと・・・私はそう思いたいし、何よりもそうだと信じたい」

例えば、ささいな楽しみの先に深い悲しみが待っていても、それ以上に大きな喜びが心を満たしてくれるような、何かに満ち足りた生活。

例えば、在り来りな毎日だと日常に愚痴をこぼす君が、そんな言葉を互いに交わし合える相手を得ることで、それが自分には当然なんだと改めて愚痴をこぼしたりする・・・やっと手にした幸せに鈍感になれる瞬間。

そんな日常が君を知らず知らずの間に笑顔にしてくれて、その君の笑顔に当てられた隣の誰かにまで喜びが伝染して自然と笑えるような・・・そんな至福の未来が、いつか見付かるはずだ。

それに・・・そんな当たり前の時間を、私は君に生きて欲しいと思う。

っど、

「ふ、ふふふ・・・あ、貴方って、ほんと馬鹿な人ね？」

紫は唐突に笑うと、私の胸を手の平で強く叩いた。

「あのねえエミヤ・・・貴方はもう少しぐらい、自分の幸せがなんなのかを考えなさい」

その言葉はまるで、普段は厳しい母親がその時だけは我が子を優しく叱るような、そんな不器用な口調で告げられた。

「む、君はいきなり何を笑うか・・・っと言うかだ、何故に話しの内容が私の幸せへと代わる？」

「だって貴方、さっき馬鹿みたいに笑ってましたわよ？」

紫は私の顔に人差し指を向け、見るからに嫌な笑みを浮かべた。

「どうせ貴方のことだから、私の幸せな未来像を勝手に想像して、ニヤニヤしてたんじゃないかしら？」

「グッ・・・ひ、否定は出来んな」



未来像を想像したまでは否定しないが、ニヤニヤだけは絶対にしてないはずだと、胸の内ですくなく否定しておこう。

つと言っか、良く分かったものだと、少しだけ感心を覚える。

「まったく貴方は・・・まあ、そんなこと今はどうでもいいことね。それよりも、貴方に紹介したい人が居るのだけど・・・」

言葉を唐突に止めると、紫は「アイツはあ、ああ・・・」と呻きながら頭を抱えた。

い、いったいどうしたのだろうか？

ぶつぶつと独り言を呟く紫の姿に、私は疑問と共に少しだけ恐怖を覚える。

いやまあ、それは大変失礼なことだとは思っ。

がしかし、はたから見ている普通に怖いから、こればかりは仕方がない。

「・・・ごめんなさいエミヤ。申し訳ないのだけれど、少しだけここで待っててちょうだい」

唐突に紫はパツと勢い良く頭を上げると、額を押さえながらそう言

って、そそくさと駆け出した。

「ふむ……」

いきなり頭を抱えたと思えば、さっさと駆けて行った紫の背中を眺めながら、私は腕組みをして首を傾げた。

「しかし、ここで待てと言われたはいいが……」

こぼしながら辺りを見回せば、興味津々とこちらを窺う妖怪達と目が合う。

しかしそれはほんの束の間で、すぐさま目を逸らされた。

これは、さすがに気まずいな……

それはまるで、自分が見世物になったかのような気分。

意識せずとも理解出来るほど、背中に突き刺さる数多の視線は痛かった。

ハッキリと言うならば、私はこの場で明らかに浮いている。

如何に私が人の目を気にしない質だとは言えど、こればかりは良い気分になれない。

とてもじゃないが、こんな場所に立ち続ける気にはなれないぞ……

「やれやれ、これでは一種の拷問ではないかね……いや待て、幽香は何処に行った？」

ぼやきながらもふと気付けば、先程まで手を繋いでいたはずの幽香の姿が何処にも見受けられない……訳ではなかった。

「……何をしているのだ？」

私からは少し離れた、こちらを窺う妖怪達とは正反対の場所で、見慣れた淡い緑の髪が風に揺れている。

その後ろ姿はまるで、森の奥をただジーツと見据えながらも、その先に在るだろう何かを執拗に観察しているようだった。

ふむ、いったい何が見えるのかな……

好奇心に負けた私は、足音を殺してながら幽香へと近づく。

一歩、一歩と、静かに近付いて行き……そして、すぐ真後ろまで着たところで足を止めて、少女と同じように森の奥へと視線を向けた。

「……綺麗だな」

そんな言葉が、思わずも口からこぼれた。

視線の先には一人の天使が佇んでいた。

大きな白い羽をいっぱいに広げて空を仰ぐその後ろ姿は、汚れなき無垢の純白。

だが髪の色はそれに反していて、艶やかな漆黒を純なる白に流す。

誰かも分からぬその女性の姿は、見惚れるほどに美しくとても幻想的だった。

しかし、わずかに窺える気配や雰囲気から、自分達と同じ妖の類だと理解することが出来た。

つと、

「お父さん・・・あの人は？」

声に気付いたのだろう幽香が、そう言いながら私へと振り返る。

その顔は、怖いぐらいに無表情だ。

「む、紫なら少し席を外している。それより幽香、君をほったらかしにしたのは謝る・・・だが、勝手に離れるのは勘弁してくれ」

最初は『あの人が』誰を指しているのか分からなかったが、幽香の表情から一瞬で悟ることが出来た。

それと同時に、どうやって二人を仲良くさせようかと、今後に向けた明確な課題が生まれた瞬間だった。

「・・・大っ嫌い」

プイツと顔を反らし、幽香は頬を膨らませる。

「今日はもう・・・お父さんなんか、嫌いなんだもん」

「ふむ、今日はもう嫌いなのか・・・ああ、ならば仕方がない。反省と謝罪の意味として、今日はずっと大切な君を見ているでしょう」

幽香の頭に手を置いて、笑いながら言っただけ。

「だから明日からは、また私を好きでいてくれないか？」

「う、ううう・・・ず、ずるいよう」

幽香はむくれて、私の腹をポカポカと叩いた。

「いやいや、君もなかなかだが・・・」

むくれる幽香の頭を撫でていると、不意に視線を感じる。

その下へと顔を向けると、どうやら視線の主は純白の妖怪のようだ。

「・・・さて、これは挨拶を返した方が良いのかな？」

まるで、何か微笑ましいものでも眺めるようにこちらを見る彼女と私の視線が交差し、不思議な空気が場を支配した。

つと、数秒のあいだ沈黙が続いた後、彼女は私達に向けて頭を下げる。

同時に舞う黒い髪が、日の光に当たって瞬いた。

「綺麗・・・」

その瞬間を目にした幽香は、夢を見るような表情で呟いた。

「やはり、礼には礼を返さねばならんか」

幽香の呟きを聞きながら、私は会釈を返した。

正直、黙って見ていたことに後ろめたさがある上に、こちらは明らかな新参者。

かなりの気まずさを感じる。

多分だが、この場所には長いこと世話になるだろう。

ならばこここの住人達と友好的な関係を築く為に、この機会をより有効的に使わせてもらおうか。

「さて幽香、これも何かの縁だと私は思う。それ以前に、挨拶はとも大切なものだ・・・」

言いながら私は幽香の体を抱き上げ、白い女性の下へと歩く。

この時、抱き上げた幽香から「ふえッ!?」やら「ま、まだ心の準備が出来てないよッ!？」などと聞こえてくるが、私はその全てを右から左へと聞き流す。

「幽香、今の君に必要なのは私以外の誰か、つまり友達や必要最低限の顔見知りだ。ちゃんとした輪を築く為に、ここで色々な妖怪に触れてみるのが良いだろう」

「あ、あううう・・・」

「こらこら、そんなに狼狽えるな・・・取り敢えずは、挨拶から入ればいいのだから、もっと気を楽しに持ちたまえ」

いったい何に混乱しているのか、ジタバタと手足をバタつかせる幽香に、私は苦笑して告げたのだった・・・





■(その)はファクターへ 弐(後書き)

何かやるつにも落書きをする暇もなければ、ふざけたネタを考える  
元気もない。

やはり、今年はまだ駄目だ・・・

今夜が山田だ。

●(その)はファクターへ 参(前書き)

大変遅くなりましたとゆー訳で・・・

やあトミー(誰?)、お久しぶりだZE

先週頭に退院は済ませましたが、しばらく医者に通うみたいです  
O!!

次は肺に穴かな?気泡かな?っと思ってますYO!!!!!!

・・・

うん、誰か代わってくれYO!!!!!!

園(その)はファクターへ 参

「初めまして。今日も良い天気ですね」

長い黒髪をそよ風に踊らせながら、白翼の女性はそう言って私達に微笑む。

着飾った感じのしない素朴でいて綺麗なその笑みは、純白の翼と相俟って清楚で落ち着きを持った印象・・・分かりやすく言うならば、一つの『大人の女性象』と呼ぶべき感想を私に抱かせた。

「・・・ああ、こちらこそ初めまして」

一瞬、女性の言葉にどう返すべきかと考えたが、頭を軽く下げて無難に返すことにする。

「それから・・・さあ幽香、君も挨拶をしまえ」

次に幽香の手を引き、自己紹介をするように促した。

「あ、あうあうう……は、初めましてお姉さん」

両の瞳を落ち着きなくキョロキョロとさせた後、幽香はぺこりとお辞儀をした。

「幽香……いったい君は、何をそんなに緊張しているのだね？」

「き、緊張なんかしてないもんツ!!」

「そうか、それなら構わんのだが……しかしだな幽香、声が少し上擦っているぞ？」

「う、上擦ってないもんツ!!」

私の指摘に対して、幽香は全力で叫び否定。

「そ、そうか……」

大声で応えた幽香に『ならば何故そんなにムキになるのだ？』と内心でツッコミを入れながら、苦笑をしては女性に目を向ける。

「ああ、大変失礼した。私はエミヤと言う者で、この娘の名は幽香。風見幽香……私の娘だ」

「いえ、気にしないでください」

くすりと上品な微笑みを浮かべると、女性はその身を屈ませて幽香と目線を合わる。

「はじめまして幽香ちゃん。私の名前は白夜……ここに暮らす妖怪の一人で、皆からは白翼の天魔って呼ばれてるの」

そう自己紹介をしては『白夜なのに天魔だなんて、変な呼び名でしょ?』と苦笑を浮かべた後、背中の白い双翼を大きく羽ばたかせた。すると、私達を囲むようにやわらかな風が生まれ、幽香の前髪を優しく巻き上げる。

「うわぁ……」

幽香は両の眼を大きく見開き、白夜と名乗る女性の背で広げられた双翼を見上げては瞳をキラキラと輝かせ、興奮した様子で言う。

「ね、ねえ、お姉ちゃんはさ……お空を自由に飛べるの?」

あ、哀れなり紫……

つい今し方に知り合ったばかりの相手が『お姉ちゃん』なのに対して、今だに『あの人』止まりの紫が実に可哀相だと思えた瞬間だっ

た。

「ええ、私は幽香ちゃんの言うように、自由に空を飛ぶことが出来ますよ」

白夜はそう言いながら翼を羽ばたかせ、『すごいでしょ?』と誇らしげに笑う。

「ふええー……すごいやお姉ちゃんツ!!」

「ふっふっふうーん……じゃあ幽香ちゃん。今からお姉ちゃんと一緒に、お空を飛んでみる?」

満足げに鼻を鳴らして、白夜は幽香に手を差し出す。

つい先程、その外見から抱いた物静かで落ち着いた大人の女性象とは打って変わり、実に子供っぽさの感じられる仕種だ。

「……良いの?」

「ええ、全然構わないわね。だって、幽香ちゃんを抱いて飛ぶぐらい、私にはオチャノコサイサイなもの」

おずおずと尋ねる幽香に応えたのは、白夜の浮かべた満面の笑みと明るい言葉だった。

「じゃ、じゃあ・・・良いのかな？」

幽香は白夜の返事に笑顔を浮かべると、次に不安げな表情で私を見上げた。

「あらいけない・・・」

幽香と同じく、白夜も私の顔を見る。

「すみません。初対面の私が勝手に話しを進めてしまいましたけど、少しのあいだ幽香ちゃんと遊んでも大丈夫でしょうか？」

「いやなに、私としてはいっこうに構わんよ・・・それに、この娘が私以外の誰かに懐くのは初めてでな？」

白夜にそう言いながら、私は幽香の頭を撫でた。

「だから正直に言ってしまえば、こちらからお願いたしたいぐらい・・・いや、君さえ良ければなのだが、幽香と遊んでやってくれると嬉しう」

撫でていた手を頭から離して、踏み出せずにいるその背中を押してやるようにと、幽香の背に優しく添えた。

「ふえ、お父さん？」

「幽香・・・私のことは気にせず、彼女と遊んでくるといい」

「・・・良いの？」

「良いも悪いもない。むしろ君に聞きたいのだが、何か駄目な理由でもあるのかね？」

「別に・・・悪いことは何も無いと思うけど・・・」

幽香は自身なさげに口ごもると、不安そうに自らの指を互い合わせに遊ばせる。

「ああ、悪い理由など何一つとして存在しない。つまりは幽香、君が今この場で自分を殺してまで良し悪しを懸念する必要は、ハッキリ言って皆無となる訳だ。同時に、そうとなれば私への確認は無用と言える。だから無駄なことは気にせず、彼女の下へ行ってきたまえ」

言っただけは、幽香の背中を優しく押した。

「そして、いっぱい遊んでくるといい・・・私が君に言えることは、たったのこれだけだ」



「う、うんツ!!」

大袈裟な音量で相を打つ言葉と、同じく大袈裟に勢いよく槌を打つ頭。

なんの前触れもなく唐突に、突然と大輪の蕾が花開いたかの如く、幽香はその顔に溢れんばかりの笑顔を浮かべては駆け出した。

「ふむ……これはアレだな、俗に言うところの情操教育上最大の謎だな」

思いの外に適応力が豊だったと言うのべきか、または子供心に火が着いたと言うべきなのは分からないが、あの娘の意外な一面を見ることが出来たのは大変喜ばしい。

「……いや、これは私が幽香へと勝手に定着させた、親しみと思いが込みが生んだ虚像なのかも知れないな……」

私が向けた視線の先では、幽香が初対面の相手にその身を預け空へと浮き上がり、楽しそうな声を上げては無邪気に笑っていた。

その笑顔を遠目に捉えた時、胸の内側で『ナニカ』が少しだけ痛みを訴えた。

ああ、やはりそうか……やはり私は、まだまだなのか……

自分以外の誰かがもたらした、幽香の無邪気な笑顔。

それは、その笑顔はとても愛らしく思える反面、とても悔しく思えた。

表情を向けるべき相手、または感情を向けてくれた対象が異なるだけで、その面相は多種多様と言えるだろう。

だから、これが仕方のないものだと言うことぐらいは、もちろんのこと分かっているさ・・・

だが、例え少しだけであろうと・・・いや、ハッキリと悔しく思えてしまうのだから、それも仕方がないだろう？

「いやはやまいった、これでは何処その子供だ・・・だが、それも良いだろうさ」

何故ならコイツは、私が勝手に抱いたくならない嫉妬心なのだから。

それ故に、これは発想の転換をした場合、確かなプラスと呼べる証。

私の感情が明確な意思を示した上で、あの娘をより深く知ろうとしている確かな証拠なのだと言えよう。

クツ、今に見ていたまえ幽香・・・

次こそは絶対に、私が君を笑わしてやる。

君が大人になるまでの限りられた期間だけは、他の誰でもない私自身に君が一番の笑顔を浮かべさせる・・・そんな、どうしようもなく贅沢で豊満な存在で居たい。

だからこそ、この場で囁かなる約束をしよう。

今しばらくのあいだは、君の笑顔は私が咲かせ続けることを、明確なる意思と共に提示しよう。

決して口先だけではないと言う証を、これから君に態度で示してみせる。

それ故に、これはだからこそその約束なのだ。

これは今この時この場で決めた、こちら側が勝手に掲げさせてもらった、何処までもわがままで何処までもはた迷惑な約束<sup>ちかい</sup>。

「きつとこれは、君からしたら迷惑かもしれんが、それを粒々辛苦と行わせてもらうさ・・・」

私は薄くまぶたを下ろし、空を泳ぐ二人の姿に小さく笑った。

「しかし・・・それは良いのだが、こいつはいったいどうしたものだろうかな?」

勝手な約束を勝手に取り付けていたこの時、私はたった一つだけ・・・大変残念なことを思ってしまった。

端から見れば中の良い母子の姿に見えるのソレだが、個人的な視点

から一つだけものを言わせてもらえば、その光景は紫がつくづく不憫に思える絵にしか見えぬ、私はとても悲しくなってしまった。

紫、君に幸あれ・・・

「それにしてもだ、まさか天魔ときたか・・・」

白翼を羽ばたかせ低空を舞う天使の姿を見上げながら、その容姿と呼び名の関連性にまつたく合点がいかず、私はゆっくりと首を傾げる。

私の記憶が確かならば天魔とは本来、仏教の説で『欲界の第六天にあつて仏法を害し、人が善事を行うのを妨げる悪魔』のことを意味する名であつたはず。

それ故に、彼女を表す名としては実に不釣り合いだと思えるが・・・  
もしやこれは一種の皮肉なのだろうか？

もしそうだとすれば、これは偉く不名誉な呼び名だと言えよう。

がしかし、知り合つたばかりの相手に対してそこまで立ち入つたことを聞く訳にもいかないのだから、実際どうなのかは不明。

・・・いや、そもそもこの時代に、仏教の教えがそこまで深く広ま  
っているのだろうか？

以下に現在が『仏教伝来』と呼ばれた時代であろうとも、それが世

に広く浸透したかと問われれば、間違いなく否だと言えよう。

「どちらにせよ、私にはなんら関係のない話しか・・・ただ、彼女の外見から連想するには、ずいぶんと似つかわしくない呼び名だ」

そう呟きながら私は、幽香を腕に抱いて空を舞う白夜の姿を眺めた。

彼女は初対面の相手としては・・・いや、妖怪と呼ぶ同族達の中では初めて友好的に知り合えた存在だと言える。

この出会いを一つの場合に、ここでしばらくは平和に過ごせれば良いのだが・・・

「お父さんッ!!!」

突然、幽香の悲鳴じみた叫び声が、辺り一面に鳴り響く。

その叫び声を耳にしいたい何事なのかと思考を中断した私は、意識の浮上と共に得も言われぬ悪寒を覚え、咄嗟に地を強く蹴っては跳び退いた。

ヒュンッ・・・

次の瞬間、風を切る音と共に黒い影が飛来する。

あたかも最初からその場所に居たかの如く、一人の大男が・・・いや、黒い大きな双羽を生やした上に全身の配色までもが全て黒一色に統一された一匹の妖怪が、先程まで私が立っていた場所に自分が入れ代わるかのように降り立っては、その身から無言の圧力を発しながらこちらを睨む。

「ふむ・・・」

考えるまでもなく簡単に、ただその姿を見て取るだけで、その存在の『程』が理解出来た。

「初対面の相手には些か無礼かもしれないが、残念ながら私は今のような登場をされてまで呑気な挨拶が出来るほど神経が太くない。ああ、それからそも気になることを質問をさせてもらうと、突然背後から殺気を当てられても困るのだが・・・そのように険悪な空気をまとって、君は私に何か用事でもあるのかね？」

そう、わざわざ考えるまでもなく、また間違えるまでもなく『この男は強い』であろうと、チリチリと肌を焼くような圧力が・・・この重苦しい程のプレッシャーが物語っていた。

「見ない顔だが、お前は何者だ？」

私を睨む鋭い目つきと、質問と呼ぶよりは尋問に近い固く高圧的な口調。

「やれやれ、質問を質問で返されては、少々困ってしまうな……」  
殺気を当てられる理由も、その目的すらも分からぬが故に、私は呑気な物言いで捲し立てる。

「すまないが、私は君に睨まれる覚えはないのだよ。何故なら私達は互いに初対面だからであり、何処か他の場所ですれ違った訳でもない。また、私に限って言わせてもらえば、この場所に来たのですら今日が初めてなのだが……はて、私達のあいだに接点は存在するのだろうか？」

「俺も長いことこの地に居るが、お前のような男は初めて見た。昨晚から二人、粗悪な人間が連れてこられたが……その身から漂う気配から察するに、どうやらお前は人間ではないようだな」

言いながら手を胸の前に運び、素早く印を刻む。

「お前と言う妖怪が、いったい何を目的にこの地に現れたのか……まさかとは思うが、お前も姉上が目的か？」

その途端、殺気が数倍にも膨れ上がる。

「はてさて……私としては、姉上が目当てかと言われても困るのだがな……そもそも質問だが、君はいったい誰なのだね？」

今や私と幽香達との境目に立つ妖怪に、腕組みをしながら問う。

「俺の質問に答えるのが先だッ!!」

声を荒げては黒い双翼をバサリと怒らせ、その身から圧を飛ばす。

「お前がこの里に現れた理由はなんだ・・・お前は何故、子供を要してまで姉上に近付いた？」

この身を拘束するかの如く放たれた圧力とは反し、問い質す口調は低くとても冷たい。

「ほう、君は人の話しを微塵も聞かない輩だな・・・」

ああ、こいつは厄介だ・・・自己簡潔の上に自己発火とは、実に厄介な輩だ。

しかし、その極端な思考が行動に表れるおかげか、だいたいのが推測出来た。

「まあ待ちたまえ。先ず最初に君の言う姉上とやらだが、私達の立つ位置関係から想像するに彼女・・・白夜のことを指して」

言い切るその前に、私の喉元を目掛け抜き手が迫った。

「オイ・・・お前が馴れ馴れしく姉上の名を呼ぶな」

その言葉はすぐ目の前、真正面から発つせられた。

互いの距離は単純な歩幅にして六歩を要するか否かであり、目測で



大雑把に計るのなら四メートル以内。

その最低限に開かれ距離を・・・私があらかじめ開けておいた間合いを一瞬で詰めた妖怪は、限界まで開かれた両の眼で射抜くように睨み付けてきた。

「それは大変失礼した・・・しかしだ、有無も言わず攻撃を仕掛けるのは、大人としてどうかと思うが？」

この首を裂かんと伸ばされた妖怪の腕を掴みながら、若干の皮肉を込めて返した。

「チツ、この状況ですら軽口を叩くか・・・まったく、実に気に入らん奴だ。何故かはしらんが、お前からはあの小娘と同じ臭いがする・・・それが余計に気に入らん」

「初対面の相手にそこまで言われるとは、さすがに心外だ・・・ここは一つ、謝罪を要求しようかね？」

言うや私は苦笑を浮かべて、掴んだ妖怪の腕を強く握った。

何故だろうか、この妖怪が『小娘』と口にした時、酷く怒りを覚えた。

その理由も分からなければ、『小娘』と言う言葉が誰を指しているのかも分からない。

それなのに、気付けば全身の血液が逆流するかの如く暴れ回り、四肢の先々から頭へと向かい急激に上って行った。

本人にすら理解出来ぬ感情は知らず知らずのうちに膨れ上がり、私は意識せずにこの妖怪の告げた『小娘』の一言に熱くなっていたようだ。

「まさかお前……この俺に対して、謝罪をしるだど？」

「そう述べたつもりなのだが……私は何か間違えたことでも言っていたかね？」

妖怪と正面から睨み合い、私は皮肉げに告げた。

「人道的に間違えたことや、口の出過ぎたことを言えば素直に謝ること、それは世の常識だと認識しているが……まさかとは思いますが、君の場合は違うのかな？」

本来ならば逆なのだろうが、私は突然の抜き手に関して何も言うつもりはない。

ただ、先の一言だけは容認することが出来ない。

「……」

返されたのは無言と、怒りの色をより深くさせた眼光。

「やれやれ、このままでは埒が明かな・・・トレース・オ  
ただ睨み合うだけで、いつこうに話しが進まぬ現状に、少しの苛立  
ちを覚える。

さらには、先ほどから当てられている殺気の方向性に微弱な変化を  
感じ取った私は、仕方なくも臨戦体勢を取ろうとするが、

「ふむ、実に良いタイミングで出てきたと言いたいところだが、ま  
ことに残念ながら紫よ・・・その気持ちの悪い登場の仕方だけは、  
今後いつさいしないでくれ・・・何故なら、とても心臓に悪いから  
だ」

それは何処から出現したのか、ふと気付けばすぐ横には空間を裂い  
たかのように走る黒い亀裂が存在し、そこから伸びた白い細腕が妖  
怪の腕を握る私の手に添えられていた。

「あ、あのねえ・・・せつかく私が形振り構わず止めに入っ  
たのに、それはないんじゃないかしら？」

やや呆れた声で、亀裂から上半身を這い出す紫。

「・・・そうか、それは失礼した」

仲裁に来てくれたことには感謝を覚えるが、ハッキリ言って気持ち  
が悪い登場の仕方だ。

これで実際に目にするのは二回目となるのだが、見ていて気持ちの良いものとは思えない。

いや、そもそもの疑問だがこの亀裂・・・この力の原理はいついかなんなのだろうか？

本当ならそれらの話しを含めた上で、先日の晩に紫へと質問をしようとしたのだが、結果としてうやむやにされたままだったな・・・

つと、

「ちよつとエミヤ、考え事はいったん後にして、早くこの手を離してくださいませんか？」

いつの間にか全身を亀裂から出した紫が私の横に立ち、添えた手をさするよう動かし、対面する妖怪にジト目を向けた。

「貴方もよ天魔。早くその殺気を治めなさい・・・つと言いますか、何を理由にして彼に噛み付いたのかしら？」

「・・・チツ、つくづく邪魔する小娘だ」

紫から天魔と呼ばれた妖怪は舌を打ち、その身から殺気を散らすと、改めて私を睨み言う。

「　　おい、その手を早く離せッ！！」

「やれやれ、いちいち高圧的なのは止したまえ・・・まあ、私としても君にその気がないのなら、わざわざ争う理由はない・・・が、君はこの娘とはどう言った関係だ？」

いったん手を離そうとするが、私はそれを止めて問い質すことにした。

先ほどの紫とのやり取り・・・それは一見すると険悪さだけが目立つ短いやり取りだったが、そこには不思議と互いを知った者同士の親しみが感じられた。

それ故に気になる・・・

私の知らない関係と言えるそれが、いったいどのような繋がりであったのか・・・

他人からしてみれば勝手な被害妄想だと言われるだろうが、私には二人の雰囲気から一種の疎外感のようなものを感じた。

「・・・この小娘と俺の関係だと？」

一瞬、呆気にとられた表情をした後、心底つまらなそうに答えた。

「何を聞きたいかは知らんが、ただの協力関係だと答えよう・・・オイ、これでもういいだろ？」

「・・・本当かね？」

「ええ、本当よエミヤ・・・私、彼とはその程度の関係しか築いてませんわ」

しつこく食い下がる私に対する返答は、紫の横槍まがいの言葉で返される。

「だから、変な心配はしないでちょうだい。こう言ったら失礼だけど、私と彼は相性が最悪なのよ？」

薄く笑みを浮かべながら『ええ、それはもう本当に』と告げるその口調は、ほんの少しだけ嬉しそうに聞こえた。

「む、私は別に君の男女関係に付いてとやかく言つつもりは・・・ばつの悪さを感じながらも、私は握っていた腕を離す・・・すると、こちらには目もくれず距離を置く、天魔と呼ばれた妖怪。」

その後ろ姿を横目に見送り、次に紫へと視線を向けた私はニヤニヤと笑う紫と目が合い、まるで自分が笑われているように思え、若干の睨みを効かせて問い質す。

「待て紫・・・君はいつたい、何を楽しそうに笑う？」

「いえいえ・・・これは一步前進なのか、または二歩後退なのかと。」

「・・・少し悩みどころだと思ってるだけですわ」

紫はクスクスと笑い私から距離を置くと、頭上を見上げては疲れ気味に話し掛けた。

「それにしても・・・今日はずいぶんと意地悪なのですね？」

「そんな、私は全然悪くなくと思いますが・・・あ、もちろん幽香ちゃんもね？」

紫が見上げた先に居たのは、私を心配そうな表情で見下ろす幽香と、その幽香を腕に抱いた白夜だった。

「ふう・・・私は貴方が仲裁に入れば、それで全てが済む話しだったと思いのだけど？」

「それはどうでしょうかね？」

白夜はゆっくりと地に下りると、私へと視線を向けてくる。

「私が見ていた限りでは、最終的に彼は紫ちゃんの為に怒ってたようですし・・・やっぱりあのヒトが言ったように、貴方達二人には面白いモノが存在してるみたいですね？」

そう言いながらも、幽香を抱いたままに歩み寄る。

「・・・あのヒトとは？」

唐突に向けられた白夜の視線に、得体の知れない何かに心を縫い付けられ、永遠に拘束される錯覚を覚えた。

これは恐怖心なのだろうか？

「あのヒト・・・あのヒトは誰でしょうか？もしかしくとも、貴方はすでに知ってるヒトだと思いますけど・・・」

独り言のような台詞を告げながらすぐ目の前まで近付いた白夜は、口元に笑みを浮かべ目を細めては語る。

それはとても小さく、正面に立つ私にだけ聞き取れる囁きだった。

「運命はいつだって残酷です。そして、同じことの繰り返しです。だから運命の女神は飽きてしまおう・・・だから女神は最高の悪戯を思い付く、それが貴方と彼女」

「少し待つんだ白夜、君はいつたい・・・な、何を言っているの・・・だね？」

問い掛けようとした瞬間、頭が重く意識が酷く朧気になり、『ズキリッ』といつかの頭痛を訴える。

だがそれだけではなく、謎の心地好さに胸が満ちる。

それはまるで、知らないものを知れる期待感が、胸に渦巻く不安感



を飲み込んだかのように、純な心が絶えず踊っているようだった。

「だけど女神は手出しをせず、ただ見守るだけ・・・何故なら必要がないから。後は貴方の存在によって、自然と世界は回っていくから」

意味など皆無なそれなのに、不思議と頭の中に浸透する言葉。

記憶を失い自分を失ったあの場所で、新たな自分を歩み始めた時の・・・

「っと言うのは、ずいぶん昔に夢の中で、知らない女性に言われた台詞なんですけど・・・何か心当たりはありますか？」

「・・・ハッ？」

あまりにも唐突に話題の腰を折られたおかげで、良いのか悪いのかは分からないのだが、一瞬にして私の意識は正常に戻った。



●(その)はファクターへ 参(後書き)

多少、いやかなり強引にまとめた感じがしますが、引っ張ってもしよーがないのでハシヨリハシヨリします。

後々、気に入らないと思ったら、加筆した上で分割します。

して・・・

後書きが願望を投げ掛ける場所が変わりつつあります(困ったものです)

>i8565—829<

ラフすら未完と言うかなんとゆーか、背後にエミヤ立たせたら熱いと思ったけど、自分で描いたエミヤとか糞だからやりません。

まあ、落書きは落書きとして、用法用量を守って楽しませようです。すね。

いやまあ、絵までクロスさせる意味は何処にも御座らんですが、本当ならこう幽香が外套バツサーやってその後ろにパパが居るとか

・・・誰かそんなの描けやッ!!

・・・イケない、イケない。



園(その)はファクターへ 泗(前書き)

遅れた理由は色々があるが、一番の理由は『夏は暑くて闘えない』  
と言う理由だったりするから、弁解の余地が全く以ってない。

・・・ええ、踏まれてきたいと思います。

園(その)はファクターへ 泗

/

「それで、心当たりはございますか？」

そう告げながら白夜は両の瞳を大きく見開いて、私の顔を下から見上げた。

私を見つめる、二つの黒い瞳。

彼女の眼として収まった黒真珠の如く漆黒の輝きは、魔性の光を秘めているように感じられた。

不幸にもその輝きを目にした者をたちまちに魅力しては、深い深い闇の淵へと吸い込んでしまうのではないだろうか、何一つとして根拠のない不吉な錯覚を覚える。

「心当たりか・・・残念ながら、私にはないな」

「・・・そう、ですか・・・分かりました。少し残念ですけど、知らないのなら仕方ないです」

言って白夜は瞼を閉じると、頭を数回振るい、ゆっくりと瞼を開く。すると、先ほどまで感じていた内面を見透かされるような感覚は消え、ただ澄んだ綺麗な瞳が私を見つめていた。

「紫ちゃんの事やこの場所の事など、貴方は色々とお聞きしたいでしょうから、お話しを致します。従って、一先ず場所を移しますが・・・着いてきていただけますか？」

「・・・説明をしてくれると言うのなら、願ってもない事なのだが・・・それは、ここでは話せないような内容なのかね？」

昨日の晩から待ち望んでいた状況説明をして貰えるのだから、本来は私から文句など言うつもりはない。

・・・だが、わざわざ場所を代える必要はあるのだろうか？

「いえ、ただ・・・」

私の言葉に白夜は視線を下ろし、キョトンとした表情で私達を見上げる幽香へと微笑みを向けたる。

「ただ・・・幽香ちゃんも居ますから、立ち話も悪いと思っただけです。勿論、他意はございませんよ？」

「まさか君に、そこまで考えて貰っているとは思っても見なかった・  
・幽香の事を考えた配慮とは気付かずに、失礼な言い方をしす  
まない」

謝罪と同時に、私は白夜に頭を下げる。

「いえいえ、私は全然構いません。ですからお願いです、頭を上げ  
てください」

私の謝罪に白夜は微笑むと、パンパンと手を叩き、

「・・・それでは、皆で参りましょうか」

背後に立つ紫と、天魔と呼ばれた男の妖怪にそう告げた。

白夜に案内された先。

そこは、私が目を覚ました小屋と似た造りをした建物だった。



そして、中へと通された私は、そこに居る目を見開いた。

そこには、私が屋敷で見付けた男と・・・あの花園で男と共に見え  
た、人間の女が居たからだ。まみ

「お、お前は・・・」

私の顔を見た瞬間、両の目を大きく見開き、肩を震わす女。

その体の至る所に布を巻かれ、負傷してるだろう事が理解出来る。

そして、隣には同様の姿で横たわる男・・・どうやら、こちらは意識がないようだ。

まあ、あの時・・・あの屋敷で私が見付けた時、男が負っていた傷の具合を思えば、未だ意識が戻らないのも当然と言えるのだが・・・

まさか、こんな場所で再び顔を合わせるとは・・・

男の方はともかく、この女までここに連れて来られてるとは、これはいったい何の因縁なのだろうか？

つとは言え、あの男があの場合に居た時点で、だいたい事の予想を  
してはいた。

だが、まさか本当に、二人揃って再び顔を合わす事になるとは・・・

やはり、つくづく運命と言うものは、私に対して優しく出来てはいないようだ。

「な、何故に、お前がここに居るのじゃッ!？」

怯え体を震わせながらも、女は僅かばかりの虚勢を張る。

「やれやれ・・・久しぶりだな人間」

その姿に私は若干の呆れを覚えるが、それを顔には出さず、目を細めて睨みを効かせる。

「どうやら私達には、見えない運命の糸が絡み付いているようだな・・・まあ、迷惑極まりない話したが」

正直に言って、実に嬉しくない再会の形だと言えよう。

そもそも、再会を望んですらいない相手なのだが・・・

「ヒッ」

ただ睨むだけで殺気などはいっさい込めていないのだが、女は過剰に反応を示し顔を青く染める。

「・・・つくづく、やれやれだな」

私を怯えを孕んだ目で見上げ、小刻みに体を震わせる女の姿に頭痛がした。

正直な話し、ここまで露骨に怯えられると、女が幽香に対しておこなった行為を抜きに、とても複雑な心境になれる。

「ふむ・・・しかし、この場に集められたと言う事は、君達は『アノ』出来事に無関係とは言えないからかね？」

つと、

「それに付いては、私と紫ちゃんから説明を致します」

白夜がそう言っつて、私と女の間に関に体を入れた。

「・・・承知した。ああ、それと・・・」

未だ怯えた表情でこちらを見上げる女に、私は出来るだけ刺激をしないように告げる。

「あの時、君達が行った行いを許すつもりは毛頭ない。しかし、今は君達と敵対するつもりもない・・・だから、そんなに怯えられても困る」

「わ、分かつちよる・・・」

未だ振るえ声で応え、女は小さく頷いた。

つと、

「ハイハイ、少し失礼しますね。また話しが拗れるといけないので、取り敢えず貴女は、奥で横になってくださいね・・・あ、その方も一緒ですよ?」

楽しそうに手を叩きながら言って、白夜は意識のない男を肩に担ぐと、『シツシツ』と女を部屋の奥へと追いやった。

「・・・彼女のノリは、いまいち分からん」

にこにこ顔で男を運ぶ白夜の姿に、私は得も言われぬ疲れを覚えた。

「さて・・・それでは、何処からお話し致しますでしょうか・・・」

男を運び終え、横になる女の姿を確認した後、白夜は元居た位置まで足早に戻ると、紫へと目配せをする。

「・・・まずは自己紹介かと」

紫の返答は、実に正論を述べていた。

「あらら、それもそうですね・・・私ったら、うっかりしちゃいました」

言って白夜は舌を出し、自らの頭をポカリと叩く。

・・・少々、彼女への印象が変わる仕種だ。

「・・・困ったお女だわ」

幼稚な仕種で自らを諷める白夜の姿に、紫は苦笑をこぼした。

「では最初に・・・私の名は白夜ひゃくちや、この里を管理する者です。そして・・・」

自己紹介の次に、天魔と呼ばれた男を指差す。

「彼の名は鸚磨おし磨・・・私の愚弟です」

「クツ・・・まさか、この場で愚弟と呼ぶかね・・・」

いきなり告げられたへりくだりの言葉に、私の口からは苦笑がこぼれた。

それと同時に、天魔・・・いや、鸚磨おし磨へ『好い気味だ』と言う感情を含ませた視線を送ると、一瞬だけ視線が交際する。

だが、その視線はすぐに反らされた。

愚弟、か・・・

大人げのない話しだが、つまらなそうに視線を反らす鸚磨おし磨の姿に、胸がとてもスツキリした。

敢えて言うまでもなく、実に子供っぽいやり取りだ。

つまるところ、私達二人は『どっこいどっこい』なのかも知れない。

「取り敢えず、私達二人の自己紹介はしましたけど、他の方々に關しましては・・・残念なのですが、私からのご紹介は出来ませんね」

「そうですね・・・では次に、貴女の知っている事を教えていただきたいですわ。一緒に説明をするにしても、私自身が貴女から断片的にしかお聞きしてませんから、正直な話し説明するのは無理ですので・・・」

言って紫は私へと顔を向け、難しそうに眉を顰ひそめる。

「・・・それに、あの男の事を聞きたいですわ・・・きっと、彼も同じ疑問を持つてるハズですし」

「あの男・・・ですか？」

その言葉に白夜は、私と紫の顔を交互に見る。

「ええ・・・私達には分からなくとも、貴女なら知ってそうですね・・・」

「うーん、聞いてみない事には何とも答えられませんが・・・」

白夜は頬に手を添え、少し考え込む仕種をした後、

「それは追い追い聞くとして・・・取り敢えず、簡単な説明から入りましょうかと思えます。それで、何かお聞きしたい事は？」

そう言つて、私へと視線を向けた。

「・・・それは、質問に答えると言つ意味だと、そう受け取つても構わないのかね？」

「はい。何処から説明をしようにも、先ずは何を知りたいかが分かりませんから・・・だから、私が皆さんから向けられた疑問や質問に答える形が、一番だと思いましたので」

言つて白夜は、クスリと微笑みを浮かべた。

「そうか・・・では、先ず最初に聞きたい事なのだが・・・」

言いながら私は、紫へと視線を向け・・・すぐ白夜に戻す。

「彼女と、紫と君は・・・いや、紫と君達はいつからの付き合いだ？」

言い直してから改めて辺りを見回し、白夜と鸚磨おじまの顔を見やった。

っと、

「貴方は・・・やはり、紫ちゃんが一番なんですか？」

白夜は小声でそう言い、寂しげな瞳で私を見る。

「・・・何？」

白夜がこぼした突然の言葉に込められた意味が、私には分からなかった。

『紫が一番』とは・・・いったい白夜は、何が言いたいのだろうか？

突然の言葉に理解が追いつかぬまま、私は紫の顔を見る。

紫が大切かと聞かれれば、確かに大切だ。

しかし、紫が一番かと聞かれれば、彼女の他に頭を過ぎる顔も、私には確かに存在する。



そう、確かに存在するのだが・・・

「・・・エミヤ？」

白夜の寂しげな瞳に見つめられ、何も応えられずに黙る私が紫の顔を眺め続けていると、紫は不思議そうに首を傾げる。

「難しい顔で私を見るなんて、私の顔がどうかしたの？」

「いや、どうもしないさ・・・ただ、少し考え事をしていただけだ」

紫にそう応え、私は気にするなと肩を揺らす。

どうやら白夜の言葉は、私にしか聞こえなかったようだ。

・・・いや、改めて白夜を見れば、その表情に先程までの寂しげな雰囲気は、いっさい感じられない。

もしかしたら先程の言葉は、私の聞き間違えだったのかも知れない。

そう・・・きっとあれは、私の聞き間違えだろう。

そう、私は自分に言い聞かせ、改めて話しを進めようとした・・・のだが、唐突に袖を引かれた。

「・・・どうかしたのかね？」

私の袖を引いた人物・・・それは、悲しげな表情で私を見上げる幽香だった。

「うーん、なんでもない・・・なんでもないよ・・・」

幽香は首を振り、笑って見せた。

「本当に、なんでもないのかね？」

「・・・うん、なんでもないよ。ただ、暇だったただけだもん・・・」

言って幽香は、私の袖から手を放した。

上辺だけの笑顔と呼べる、とても寂しげな表情を浮かべながら・・・

「・・・そうか、暇だったのか」

私は袖から離れる幽香の腕を掴み、その手を決して離さぬようにと、強引に握っては繋ぎ止める。

「なら、話しが終わるまでの間、手を繋いでいよう。そうすれば、私は君を忘れはしない・・・そうすれば、君も話しに加われるかも知れない」

何故、幽香は寂しげに笑ったのか・・・それは、一人の親としても、また護る者としても到らぬ今の私には、到底が如く分からない。

だから、こうして少しの間でも互いに触れ合っている事で、不安や悲しみの暗い暗い行き詰まりを、打開したいと思った。

それぐらいの単純な方法しか、未熟な私には思い浮かばないのだから・・・

「・・・ほんと？」

「ああ、本当だとも・・・いや、一つだけ訂正しよう。別にそうしなければ忘れてしまふとか、そんな失礼な事は思ってなんかいない・・・勘違いしては駄目だぞ？」

「・・・うん、分かった」

幽香は嬉しそうに笑い、コクリと小さくも確かに頷いた。

「よろしい・・・さて、では改めて、話しを進めようか」

笑顔に微笑みで応えながら、私は幽香の頭を撫でた。

そして、白夜へと視線を視線を向け、

「・・・む、どうした白夜？」

「ふふふ・・・いえ、別にどうもしませんよ。本当にどうもせんので、気にしないでください」

私の顔を見ながら笑う白夜は、何処か嬉しそうだった。

「・・・そうか。では、本題に戻るが、君達と紫はいつから繋がっていたのだ？」

「私達と紫ちゃんは、そうですね・・・かれこれ、十年程の仲でしょうか？」

「ええ、そうなりますわね。今年でちょうど、十年になりますわ・・・」

白夜の言葉に紫が続ぎ、鸚磨おし磨へと目配せをし、

「私は今、非常に残念な事に気付いてしまつた・・・それイコールで、つまり貴方とも十年來の付き合いになると言う悲しい事実に、今さらながら気付いてしまいましたのよね・・・」

そう言つや、『・・・ハア』と溜め息を吐いた。

「貴様の言うそれは、お互い様だ。いちいち口の減らない小娘が・・・

・少しは長幼の序を弁えたらどうだ？」

「・・・少しぐらい長生きしているからって、己が必ずしも優れていると思つては駄目よ？」

紫は見るからにきな臭い笑みを浮かべ、鸚磨へと指を差す。

「何年、何ヶ月長く生きたかより重要なのは、何を見て何を知ったか・・・そして、その時々で対面した物事に目を背けず、何を考え何を得たかですわ」

「・・・ハッ、何を偉そうに語るか」

「あら、偉そうかしら？」

「フンッ、お前は実に生意気だな・・・人と妖怪、己の立ち位置すら決められない小娘が、何を悟つたように語るか・・・」

鸚磨は鼻で笑つと、口の端を吊り上げる。

「ああ、つまりこうか・・・絵空の夢にすぎる童女には、現実は無過ぎたのだから？」

「言ってくれるわね・・・」

紫は目を細めて、鸚磨おじまを鋭く睨む。

「貴方の言う通り、確かに私はまだ若いわ。自分の目的も、大切な理想も見失いかけた。人の世に希望を求めたはずが、人が人として持つ些細な現実ですら躓き、何度も立ち止まるばかりだわ……」

その華奢な肩と、指を差す為に伸ばされた腕は、ふるふると小刻みに振るえていた。

「……何が言いたい？」

「何が言いたいかなんて、とても簡単な事よ……私は、少なくとも貴方よりかは多くを得たわ。殻に閉じ籠って、いつまでも狭い価値観に囚われて何も見ようとしらない年寄りよりかは、遥かに多くの物事を知った……」

強められた語尾、睨み付ける目、その両方が紫の怒りを表す。

「だから、貴方なんか……頭の固い引き籠りの年寄りなんかに、偉そうに否定される言われはないわッ！！」

紫が声を荒げるのは、珍しい……いや、ここまで怒りの感情を露あらわにする紫は、初めて見たかも知れない。

そもそも、私の良く知る紫は、声を荒げる事は先ずしない。

また、感情的に物を述べるような質たちではなかったはずだ。

その紫が、ここまで明白あからむかに怒りを示すとは……

「ク、クククツ……やはり、貴様は気に入ら」  
そこまでに  
しなさいッ！」ない奴だが、姉上に免じて許してやる……姉上  
の寛大なる心遣いに、感謝の気持ちを忘れるなよ？」

「ええ、そうね……貴方の偉大なる姉上様は、貴方のような愚かな弟を持って大変ですから、あまり気を使わせたら可哀相ですものね……」

「……雌が、あまり耳障りに鳴くなよ……動物には優しい俺も、さすがに始末したくなるぞ？」

白夜に対する哀れみを込めた紫の発言に、鸚磨おしりは高圧的な言葉と挑発的な笑みで返す。

「あらあら、ずいぶんと物騒な事を言うじゃないの……でも、貴方に出来るかしら？」

言って紫は、『クスリ』と冷笑を浮かべた。

「君達……いい加減、止めにしたまえ」

白夜の制止を受けながらも、皮肉の応酬をする二人の間に私は体を

入れる。

「特に紫・・・君には昔、『いつ如何なる時も優雅に振る舞え』と、私はそう教えたはずだが？」

「・・・そうね」

「それから、元を糾<sup>ただ</sup>せば君の一言が発端だ。聞き流せば良いだけの言葉を、互いに売り買いするだけでは、決して優雅とは言えないぞ？」

「分かつてるわよ・・・けど、納得がいかないじゃないの・・・」

紫は顔を逸らし、悔しそうに言った。

「・・・やれやれ、君の気持ちは分からなくもない」

言い分は良く分かるのだが・・・事の発端を自分で作ってしまったのは、擁護<sup>しゆいよ</sup>のしようがなかった。

「だがな紫、如何に納得のいかない言われたとしても、ムキになつては負けだ・・・意味を流すにも返すにも、感情的になるのは控えた方が利口だ」

「ええ、次からは気を付けるわ・・・ごめんなさい、エミヤ」



「私に謝罪など無用だ。分かってくれたのなら、それだけで良い・・・だから君は、彼に謝るべきだ」

そう言いって、私は紫の頭に手を置き、優しく笑ってやった。

「ええ、そうね・・・少し口が過ぎたわ、天魔。どうか、許してくださらない？」

「・・・フンッ」

鸚磨は顔を逸らし、不機嫌そうに鼻を鳴らした。

・・・取り敢えずは、問題なさそうだ。

「ああ、それと・・・君には、私からも謝罪をさせてもらおう」

言っただけで私は、鸚磨へと頭を下げた。

「紫が君に告げた言葉が如何なる意味であろうと、伝え方が到らなかったのはごまかしようのない事実だ・・・すまなかった、どうか許してやってくれ」

「・・・小娘の戯れ事など、気にしてない。だから俺に、わざわざ話し掛けるな」

「そうか、なら良いのだが……」

つまらなそうに私を見る鸚磨おしんに、私は紫の頭を撫なでながら言う。

「だが、君からも紫に謝あやまって欲しい……勿論、今すぐには言わないし、いつになろうとも構かまわない。しかし、いつか君の中で折ひを見た時、紫に謝あやまって欲しい」

「ハツ……何故、俺がそいつに謝あやらなきゃならん。貴様の言っただように、くだらない言い掛かかりを付けたのはそいつだぞ？」

「ああ、それは分かっている。だがな……いったい君に、この娘の夢や生き方を笑わらう権利があるのか？」

どちらが悪いなどと、非を訴うえるつもりはない。

しかし、私は事の発端はつじがどちらであれ、紫を頭かぶごなしに否定ひされて黙もっているつもりはない。

「君が気に入らないと言うのも、愚かだと思おもうのも自由だ。君の価値観かちかんがそう言うのなら、それはそれで構かまわんさ……だが、他人から頭かぶごなしに貶けなされるような言いわれはない」

誰たれだって、自分おれに対しても、また誰たれかに対しても、少なからず思おもうところがある。

しかし、思うは勝手に否定するもまた勝手に……だからこそ、押し付け詰り合<sup>な</sup>うのは違う。

悩んだ末の間違えも、行った後に生まれた後悔すらも……それは一つ一つの価値観が生み出した、結論でしかないのだ。

応と言えるも、否と言えるも、それは互いに一つの価値観。

自分や自分達にとって許せる物が、または許せない物なのかと言う、たったそれだけの違い。

「理解しろとは言わない。賛同しろとも、褒めろとも言わない……ただ、認めてやってくれ。この娘が持つ考えの良し悪しを、一つの意味ある個として、『そう言った価値観や、考え方も存在するのだ』と、認めてやってくれ……私が言いたいのは、それだけだ」

それだけを言い、私は白夜へと顔を向ける。

「紫と君達の関係は、一先ず保留とするが、問題はないだろ？」

「はい、大丈夫ですと言いますか……そもそも、私は答える側ですから」

苦笑する白夜からは、当然と言えば当然の返事。

「確かにその通りだ……ああ、それでなのだが、もう一つ君に聞

きたい事がある」

言って私は、朝廷での出来事を思い浮かべた。

「白夜、君はあの人……いや、『最初の妖怪』と言う存在を知っているかね？」

その瞬間、白夜が目を見開き……そして、鸚磨<sup>おじま</sup>までもが表情を僅かに強張らせた。

それどころか、空気までもが重たい物に変わる。

### 最初の妖怪。

それは、朝廷で見えた<sup>まみ</sup>あの男が口にした、人類全ての敵。

あの男の言い草からすれば、自分を造った存在らしいが……その正体は分からない。

そして、白夜に聞いたところで、私の望む答え返ってくるかも分からない。

だが、先程の二人の反応から察するに、少なくとも耳にした事はありそうだ。

もし、もしも白夜が何かしらの情報を知っているのなら、聞かずにはいられない。

「それで、どうだろうか？」

大きく見開かれた白夜の瞳を見据え、私は言う。

「もし、少しでも知っているのなら、隠さずに教えてくれ」

「・・・何故・・・何故、貴方がその名を？」

「先日の夜、朝廷で一人の男と交戦した・・・」

思い浮かべるは、幽鬼のような男の姿。

「男の名は分からないが、三つだけ確かな事を言っていた」

「・・・それは、何ですか？」

「・・・一つ目は、自分が妖怪である事。二つ目は、人の絶滅が目的であると言う事。そして、三つ目は」

私が言い掛けたその瞬間、

「 『僕は、最初の妖怪によって造られた』と・・・そう言うてましたわ」

つと、紫が横から割り込んだ。

「　　ッ!?!?」

その言葉に、白夜は自らの体を抱きしめ、ガクガクと震え出す。

「そんな、何故・・・」

そして、体と同様にガクガクと震える声で、『何故』と呟くその顔色は、血の気を失った『蒼白』だった・・・

●(その)はファクターへ 泗(後書き)

ぶっちゃけ、ゆゆこ(変換たるい)編のテコ入やら最終チェックやらをしたり、ついでに軽いストライキごっこをしてたりしました。

まあ、ゆゆ(たるい)編から、第一部が後半に入る感じだったりします。なので、気長にお付き合ってください。

後まあ、涼しくなったら元気になったり、頻繁に更新したりします(夏場は無理です)

まっ、家庭の事情が片付いたらですが・・・

んなこんなで、次のファクター伍(表部分)の後書きに、説明書を書きます。

色々入り組んだり後追いしたりの説明(簡単な)をしますので、暇だったら目を通してみてください。

この後書きすら目を通してないとかは、僕チンは受け付けません。

く俺、男だけど、<sup>かしこ</sup>畏、く

●(その)はファクターへ 伍(前書き)

ファミレスで客と待ち合わせ中なのだが、待てど暮らせど先方はや  
って来ない。

ちなみに、約束の時間は正午。

仕事の打ち合わせなんだから、最低でも5分前には来ようよと、コ  
ーヒーを啜りながら更新する暇な俺・・・



園(その)はファクターへ 伍

/

「まったく・・・嫌な話しを聞いちゃったわね・・・」

日が西へと沈み、空には月が昇る亥いの刻こく。

冷たい夜の風に吹かれ、ふわりとはためく金色の長い髪を、紫は己の指で優しいく撫でた。

最初の妖怪。

白夜から聞いた、その名の由来と能力。

そして、最初の妖怪が人間を恨む理由。

その真相を聞かされ、まだ年の若い紫は勿論の事、白夜に質問をした本人エミヤですら複雑な表情を浮かべ、言葉を飲み込んでしまった。

「……可哀相に」

決して報われる事の叶わない者を、心の底から哀れむかのように咳き、紫は夜空に浮かぶ月を見上げた。

その視線の遙か先……遙か上空の雲を抜けた先では、半月が淡い光りを放ち、闇夜を照らす。

それは、彼女の長い髪と同様に、美しい金色の光を放っていた。

「半月、半円の形をした弦月……または弓張り月」

ぼんやりと、雲の切れ間から覗く月を眺めていると、誰かが呼んでいるように思える。

「ふふふ……この気持ちを『花鳥風月』とでも詠めば、私は詩人にでもなれるのかしらね……」

紫は笑いながら、夜空の月から視線を下ろした。

あの話しは、今の私には卑怯だ……

あの時、白夜の語る最初の妖怪に纏まわる話しに、紫は得も言われぬ痛みを覚えた。

エミヤが白夜に聞いた『何故』の真相とは、とても恐ろしい物だっ

た。

人間を憎む理由を知る事と同時に、聞かなければ良かった・・・知らなければ良かった理由をも知ってしまった。

その結果として、悩みの種が増える事となった。

「これだから、年寄りの因循こんじゆんは嫌いなものよ・・・」

紫は自らの体を強く抱き締めては、幼子のように『いやいや』と頭を振った。

八雲紫と言う女性は、停滞ていたいした思考や考え方を酷く嫌う。

例えば彼・・・鸚磨おし磨のような、古い習慣やしきたりに従うだけで、考えを改めようとしない因循こんじゆんな考え方や、老成を言い訳に聞こえを良くした因循こんじゆん姑息こくそくなやり口を特に嫌う。

故に紫は、先人達から与えられた古い考えにばかり囚われず、今を生きる自分達が手にした、今までにない新しい考えを取り入れる事で、より良い未来へと発展させる事に意味があるのだと、里に暮らす同族達に訴え続けた。

何より『陋習ろうじゆとは正し打破すべき習慣であり、執拗しつように執着する物ではない』と言うのが、彼女の持つ利口な考え方だ。

だからあの時・・・紫は白夜の話した内容と、鸚磨おし磨の告げた一言に、強い反感を覚えた。

藪やぶをつついて蛇を出す事を避ける為に、『俺達はこの件に一切関与しない』と、そう述べた鸚磨おしま。

そして、鸚磨おしまの発言に何も言わず、仕方がないと目を伏せるだけの白夜。

紫は二人の態度に苛立ちを覚え、すぐさま鸚磨おしまへと異論を述べようとするが、白夜が何も言わない限りは自分に発言力は生まれないと、口を嚙つくみ言葉を飲み込んだ。

・・・だが、場を包む沈黙に苛立ちの高まり、感情の抑制が効かなくなる。

だから紫は、なら彼を頼ればと、継すがるような瞳でエミヤへと視線を向け・・・自分の顔を複雑そうな瞳で見詰める彼を、真っ直ぐ見詰め返す形となった。

何故、彼はあの時、あのような瞳で自分を見ていたのか？

最初の妖怪に纏まつわる話しと、紫を見詰めるエミヤの瞳が意味する物。それら一つ一つが異なった細い糸となつては、強固な縄を編むかのように頭の中で複雑に絡まり合う。

故に、『何故』だろう、『何故』なのかしら、『何故』なのと・・・苛立ち口を挟む事すら忘れ、ただただ立ち尽くした。

そう、最初の妖怪とエミヤの瞳が・・・得ては生まれた回答と疑問が紡績ほつせきした二本の糸が複雑に絡み合い、今に悩みを抱えた紫を更に悩ませる事となった。

「ねえ、お母様・・・私はいったい、どうしたら良いの?」

決して返えされる事のない問い掛けを、紫は夜の風に託した。

私を育てた母は・・・私の事を守った母は、確かに尊い存在だった。

縁故えんこなどない拾い子の自分を・・・人ではない妖怪の自分を、何故あそこまで愛してくれたのか?

母が死に、自分が彼へと託された今となっては誰にも分からないそれが、紫には不思議で仕方がなかった。

しかし、ただ一つ・・・たった一つだけ、紫には分かる事がある。

それは、こんな自分を、人ではないこの身を・・・母は愛してくれただと言う事。

それだけは、如何に我が身を悲観しようとも、決して覆くつがえす事が適わない。

何故なら、八雲祭はつうめが八雲紫へと向けていた想いは、種族と言う差別関を越えた深い情なのだから。

だって、母は妖怪の自分を我が子のように育て、文字通りその身を犠牲に守ったのだから……

「絶対に、諦めたくない……」

紫の記憶の中に、今も残る母の面影……それは、とても綺麗で温かな笑み。

かつて、彼……エミヤが誇らしげに語る母の生前の姿に、今は亡き母の事を知りたいと、そう思ったのが始まりだった。

母の持つ光に魅力されたと、何処か嬉しそうに語るエミヤが、紫には自分を照らす光に見えた。

なら、彼は母と言う光に……人に『何か』を見たのだろう。

そして、母と言う光に照らされた彼が、今度は私を照らしたのだ。

それなら、そこにはきっと、人や妖怪と言う種族を遙かに超越した……そう、生命が巡ると言う事には、不とは違う幸こゝろの連鎖が存在しているはずだ。

そう……きっとそこには、『何か』があるはずなのだ。

紫が理想の要かなめと呼べる物を得たのは、この時、この瞬間だったのだらう。

だから紫は、世界を見たいと願い、人の在り方を学ぼうとした。

そして、理想を追う者が払うべき、あまりにも高い代価を支払う事となった。

それは、『現実』。

理想を追う過程で見せられる現実とは、夢見る者達が決して避けては通れぬ、一つの洗礼なのかも知れない。

隔靴搔痒と、思うようにいかぬもどかしさの末に、歩みを止めた者達。

現実と言う試練を通過する事が叶わなかった、夢破れし様々な者達。夢語りを夢のままに終わらせるか、夢を現実に侵食させ成就させてしまうのか・・・その最中にて窮境つひまぎに立たされ、選えびたくもない選え択えを迫られた者もいるかも知れない。

厳しくも痛々しい現実は、何故こんなにも執拗しつように立ちほだかる。

何故こんなにも夢や理想を嘲笑うのだと・・・探求者達は現実を目にする度に、世界の在り方が憎く思えるのかも知れない。

・・・だが、それは当たり前前の事なのだろう。

何故なら、命とは人や動物に限らず、決して一つには括られない物

だからだ。

そして、紫もまた世界を見て歩く事で、現実を知り夢破れようとしていた。

だが、理想がただの幻想へと還ろうとしたその時、懐かしい光に照らされた。

それは、彼・・・エミヤだった。

現実の光に照らされる下で、紫はエミヤと言う理想との再会を果たし、太陽とは違う光に再び当てられる。

そして、気付かされたのだ・・・結局のところ、八雲紫がその時までに抱いていた理想とは、エミヤと言う存在に影響されただけの物だったと。

かつての母を光と尊ぶ、『エミヤ』と言う強い光に当てられて、物を知らぬ心が好奇心の延長線上に浮かべた絵空の夢。

ならば、その程度の夢など容易に朽ちて当然だったのだと、今なら素直に認められよう。

でも、きっと違う。

しかし、それは昔の話しであって今は違うのだと、紫は自分に言い聞かせる。



八雲紫は、いつまでも借り物の理想で終わらせる女ではないのだと、遠い光を見据える。

あの日・・・あの時、『エミヤ』と言う光の中に深い陰りを見たからこそ、あの時と今は違うのだと言える。

その事に気付かされたのは先日、彼との再会を果たした時だ。

そう・・・それは、たったの一日前の出来事ではない。

けれど、紫にとってこれは『されど大切な一日』なのだ、今を前向きに立てるようになった大切な理由だった。

「お母様・・・私は、八雲紫は頑張ります。だから、安心して見守っていてください・・・」

紫は瞳を閉じ、微笑みながら言った。

「いつかきつと、私が夢を叶えて・・・彼に、本当の意味で『紫は良い女だ』と、そう言わせてみせるわ」

この感情が何を意味し、何処に向けられた物なのかは分からない。

けれど、これは確かな情なのだ。

エミヤと言う存在が、私の中で日に日に大きくなっていく・・・それが、とても喜ばしくて、とても切ない。

「困ったわね・・・これじゃあまるで、恋する乙女みたいだわ」

未だ持て余すだけの感情に、紫は嬉しそうに笑った。

この感情が恋に落ち着くのならば、それはそれで悪くはないと・・・

長い時を生きる上で、様々な悩みと様々な喜びを噛み締めて、今に得た物があるのだ。

だから私は、その全てをあます事なく受け入れよう。

ありのままに進み、ありのままに悩もう。

ありのままに募らせ、ありのままに育もう。

それが、因循を嫌う私には、一番らしい生き方なのだから・・・

「・・・ところで、私に何か用事でも？」

笑みを崩さずに振り返り、紫は暗がりへと話し掛ける。

すると、

「……うん、お話しがある」

そこには、長い緑の髪を風にはためかせた幼い少女……幽香がいた。

「お話しは構わないけれど、貴女……一人なの？」

遠回しに『彼は？』と含ませながら言うと、紫は幽香へと歩み寄る。

「それにしても、嬉しいわね……貴女が私に話し掛けてくれたのは、これが初めてよね？」

「……うん」

幽香はハッキリと頷き、紫を睨み付けた。

「だって、私……貴女が嫌いだもん」

「……あら、それは何故かしら？」

「私にも分かんないけど、貴女は好きになれない……でも、お父さんは貴女が好きみたい」

だから、余計に『嫌い』なのだと、幽香は紫から顔を背けた。

「そう・・・なら、仕方がないわね」

その言葉に紫が返したのは、肯定と苦笑だった。

### 独占欲。

親を想うがあまり、他人に取られたくないと感じ、無意識に拒絶する事。

今の幽香を分かりやすく表すのなら、この言葉が一番正しいのかも知れない。

勿論、全ての親子関に表れるとは言わないが、大抵の人が経験する感情だろう。

そして、八雲紫はとても聡い女だ。

その事を重々承知しているからこそ、苦笑と共に肯定の言葉を返したのだろう。

それだけ、彼はこの娘に愛されているのだらうと、微笑ましさと仕方なさを混ぜ合わせて・・・

「・・・ねえ、貴女は私の知らなくお父さんを知ってる？」

言って幽香は、再び紫の顔を見詰める。

その表情には、僅かな期待の色が含まれているように、紫には感じられた。

「それは、どうかしらね・・・貴女が求める内容によっては、私が知らない事も沢山あるわ」

「・・・そうなの？」

途端とたんに、幽香は残念そうな表情を造る。

「ええ、そうよ・・・例えば彼の過去とか、貴女と出会ったきつかけとかね・・・言ってしまうえば、貴女が私に求める内容は、お互いに聞きたい部分なのよ」

彼と私達は別々の存在なのだから、知らない時間があるのはお互い様なのだと、紫は幽香に言った。

「でも、そうね・・・少しうる覚えだけど、私がまだ幼い頃の彼だつたら話せるわよ？」

「ほんとに？」

紫の言葉に、幽香の表情は僅かに輝く。

「ふふふ・・・ええ、本当よ」

紫は微笑みながら、『やっぱり、分かりやすいわね』と、改めて思う。

自分の好きな彼は、この娘からも本当に好かれている。

だから、この少女は幼さとは別にして、ここまでも扱いやすいのだ。もしかしたら、自分も昔は、この少女と同じだったのかも知れない。そう言う風に考えてみれば、嫌いと言われるのも悪い気分じゃない。むしろ、これは自分からすれば、逆に好ましいのかも知れない。

「じゃあ、教えてあげるけど・・・彼、エミヤわね」

紫と幽香、二人で夜風に吹かれながらの会話。

それは、二人だけで話す初めての時間。

今は嫌われているが、いつかは仲良くなりたい。

紫が幽香との間に望む関係は、仲の良い姉妹関係。

ねえ、幽香・・・

私はね・・・同じ背中を見て育った私達二人が、先の未来で同じ背中を追い掛けたとしたら、きっと面白い事になると思うのよ・・・だから、私と貴女はこれから先、時には喧嘩をして、時には仲直りをして・・・そうやって、少しずつ深まっていけたら良いと思うの。だって、例え元々の縁故えんこがなくとも、私達は彼に育てられた姉妹なのだから・・・

「空気が澄んでいるお陰か、さすがに夜でも明るいな・・・まったく、科学とはつくづく両刃だ」

背の高い木の枝に跨がりながら、私はある一点を見据えていた。

半月が照らす下、魔術によって強化を施された鷹の目が捉えるのは、私が良く知る二人の少女。

良く知る少女・・・それは、紫と幽香の二人。

その姿を遠目に眺めながら、私は溜め息を吐いた。

「ふむ、わざわざ強化をするまでもなく、肉眼のままでも支障はなかったな」

大した事ではないのだが、『自分は妖怪の体になったのだな』と、大変今さらな事を実感した。

「しかし・・・何故、幽香は紫と話しを・・・」

あの女とひと話がしたい。

それは、白夜達と別れた時、私に幽香が言った言葉。

幽香の言うあの女とひが誰なのかは、聞かなくとも見当が付いた。

何故なら、幽香があとひの女と呼ぶのは、私の知る限りでは紫ただ一人だからだ。

だが、その理由までは分かる訳がない。

だから私は、紫に何の用事があるのだと尋ねた。

しかし、幽香はただ『お父さんには秘密だよ』と答えると、一人で行くと言い残し紫の下へと向かってしまった。

「突然の事とは言え、止めておけば良かったかもしれない・・・」



二人の様子を遠目に窺<sup>うかが</sup>う私は、ハラハラとして落ち着かない心境だった。

「何も問題がなければ良いが・・・さすがに心配だ」

初めて会った時から、あの二人・・・いや、主に幽香は紫を敵視していた。

その理由は分からないが、初対面の相手をあそこまで嫌うのは、普通とは言えない。

勿論、幽香ぐらいの歳なら、人見知りをする事はあるだろう。

だが、あそこまでハッキリと敵視をするのは、非常に珍しい。

現に、幽香はあの時、初対面の白夜に怯えながらも自己紹介をし、彼女の腕に抱かれ空を舞った。

白夜は例外だったのだと、そう言われてしまえばそれまでだが、私の良く知る幽香の性格から考えたら、あれが普通の反応なのだと思う。

まあ、そこまであの娘に他人<sup>ひと</sup>との出会いがあつたのかと言われたら、それもまたそれまでなのだが・・・

やはり、早急に二人が仲良くなれる方法を、考えなくてならんかも知れない。

端から見れば、互いに向かい合い会話をしているだけだ……だが、ここからでは、彼女達のする会話の内容までは分からない。

あの時と同様に、険悪なムードでなければ良いのだが……

「少なくとも、紫は大丈夫だろう……まあ、たまに抜けてはいるが、今や立派な大人だからな」

自らに言い聞かせるように言って、私が枝から飛び降りようとしたその時……突然、足元にアノ亀裂が現れた。

「やれやれ……どうやら、バレていたか」

改めて視線を向ければ、こちらへと手を振る紫の姿が見えた。

すると、その手の動きが、横から縦へと動きを変える。

ちよいちよいと、手首のスナップが効いたその動き。

どうやら紫は、私に手招きをしているようだ。

「……行くか」

こっそりと覗き見をしていただけにあまり気が進まないが、バレてしまった以上は仕方がない。

繰り返すが……勿論、気は進まない。

しかし、後で二人に何かを言われるよりはマシと、そう思ったただだ。

「……言い訳は不毛だな」

私は自嘲をこぼしながら、自分の頭を乱暴に搔いた。

また、あの二人に挟まれるのか……

二人に挟まれた時の光景が、頭の中で鮮明に蘇る。

その光景に若干の憂鬱さを覚えながらも、私は手招きを続ける紫に片手を上げて頷き、『承知した』と応えた。

その動作と合図が、向こう側に見えるかどうかは分からないが、何らかの手段で私を見付けたは確かなのだから、多分大丈夫だろう。

……ただ、アノ不気味な亀裂に飛び込む勇気だけはなかったもので、二人の下まで普通に歩いて向かう事にした。

しかし、紫はどうやって私の存在に気付いたのか……

彼女の生み出しただろう亀裂を横目に、朝廷での出来事を思い出す。

あの時、紫はこの能力を使い、私達をここまで運んだが・・・では、その原理とはいったい何か？

もし、単純に空間転移の類いならば、目に見えるような道を創る必要はない。

賢い紫の事だ、そのぐらい言わずとも分かるだろう。

むしろ、肉眼で容易に確認出来る程度の道など、あのような状況下では邪魔・・・また、普通は弱点にしかならない。

何より、あれでは使い所が限られてしまい、応用性にも利便性にも欠ける。

なら、あの亀裂が意味ある物とした場合・・・あれは彼女が持つ本来の力を延長線上に働かせ、変質・応用をさせた末すえに、『移動』と言う結果を生んだ物のだと考える事も出来る。

しかし、そう考えた場合、そこには新たな疑問が生まれる。

もし、本来の力を派生させる事で、あの亀裂・・・一種の異空間ゲートのような物を創ったのだとすれば、最早それは科学を超越していると言えるよう。

何故なら、空間とは『何も存在せず空いている場所』であり、上下・左右・前後への果てしない広がりひろがりの事を差す。

哲学で言えば、時間と共に物体界を構成している基礎概念となり、がいかってき概括的かつ普遍的な表象ふへんてき・・・つまり、ただのイメージに過ぎない物が空間なのだ。

そんな漠然としたイメージを、たかだか本来の力を派生させただけで、都合良く生み出して使用する事が可能か？

・・・いや、常識的に考えれば先ず不可能だと、ハッキリと言える。

また、それを可能にさせるとした場合、紫の持つ本来の力とはいったい何なのか？

私の考え過ぎなのかも知れないが・・・もしかしたら、その先には触れはならない。』 』かが存在するのも知らない・・・

「ふむ・・・本人に聞くのが最も確実に、最も手っ取り早いか・・・

」  
どれだけ私が頭を捻ろうとも、答えなど分かりはしないのだから、当然と言えば当然。

「しかし、ずいぶん長い事、私は考え込んでいたようだ・・・」

くだらない考えに時間を掛けたお陰か、進行上に幽香の背中を見付けた。

しかし、そこには幽香が一人立っただけで、紫の姿が何処にも見当たらない。

それどころか、気配すら感じられない。

「幽香・・・紫は何処に行った？」

「・・・あの女ひとなら、さつき帰った」

振り返る事はせず、幽香は淡々とした声で応えた。

妙に淡泊だが・・・紫との間で、何かあったのだろうか？

「・・・帰った、だと？」

自分で呼んでおきながら、私の到着を待たずに帰ったのか・・・つまり、これは一種の罰なのか？

「やれやれ・・・発端は我が身の失態とは言え、なかなかやってくれる・・・」

心配だったとは言え、やはり覗く見はしないに限る。

本日、改めて得た、大切な教訓だ。

つと、

「ねえ、お父さん・・・」

幽香は振り返り、決意を込めた瞳で私を見上げた。

「・・・どうかしたのかね？」

私を見上げる幽香の真剣な眼差・・・そこからは、一切の濁りを含まない真っ直ぐな瞳と共に、何かを強く訴えているように思えた。

「うん、私ね・・・」

真っ直ぐと一度も目を逸そらさずに、一度も瞬まばたきをせずに、幽香は私に言った・・・

「私は、お父さんを守れるようになりたい。そして、あの女ひとよりも・・・八雲紫よりも強くなりたいッ！！」

それは、純粋な願いだったのだろう。

あの女ひとには負けたくないと言う対抗意識、それが始まりだったのだろう。

そして、初めて八雲紫の名を呼ぶ瞬間となった。

思えばこの時、風見幽香は本当の意味で、自我を持ったのかも知れない・・・





●(その)はファクターへ 伍(後書き)

このファクターと言う話しの目的を具体的に言えば、重要なキャストの配置。

大雑把な立ち位置や現時点での考え方、各々の関係の簡単な配備。

言わずとも分かるでしょうが、話数にすると無駄に長くなるし、今回収しても意味ない部分もあります。

なので基点となる物を配置し、回想や別視点からの回収をしようと思います。

それ以前に、争い、いがみ合いを元に発展、進歩するのが世の成り立ちと考えています。

人類の歴史がそうであるように、あの時に起き戦争や事件が教訓とされ、現在に確かな形を残しました。

綺麗事で片付けても仕方ないし、時代が違えば火炎放射機で焼かれるか、手榴弾で『おがああああちやーん』、または『天皇陛下万歳』してかも知れません。

つまり、『はだしのゲン』です。

そして、今に胡座を掻くのは、実に愚かなのかも知れません。

・・・話を戻しますが、エミヤと言う外来因子を、世界がどうする

かもやる訳です。

そもそもは居ない存在である訳で、草薙の剣が天下取っちゃうみたいな扱いの世界で、劣化だろうが何だろうがやるうと思えば宝具バンバン出来るエミヤが介入したら、世界と言う固はアレルギー反応なり起こすのが筋だと思ってます（人体が良い例だ）

まあ、本作では意図的に介入させられたのですが、それならそれで意味なり粋なりがある訳です。

ただ、最近になって改めて考えさせられたのが、『エミヤって戦い好きじゃないよね』な部分だったりします。

まあ、悩み所です。

して、前に言ったように、当おバカSSのメインは紫とエミヤです。なので、紫の幼少期にエミヤが何を言い、何を伝えたのかも重要だったりします。

つまり、まだまだ設定やら話しの筋が訳ワカメな段階ですので、気長にお付き合ってください。

取り敢えず、第一部が終わるまでね（笑）

j・s、此処に眠る



因子は花隠しへ 吉(前書き)

くっ付けてみた。

因子は花隠しへ 壺

嗚呼、桜よ桜　この想い、どうしてくれよう。

その身を遠退け、決して魅入られぬようにと己を戒めるが、巡る月日は何とも残酷。

会わぬが為に、強い焦がれを抱く。

会わぬが為に、醜い狂いを抱く。

会わぬが為に、美談にならぬ道　過ちへと、歩みを進めて行く。

なあ　桜よ　。

いつそ、この狂いに身を任せてしまえば良いのだろうか。

あの男が述べた“永遠”に、継り付いてしまえ良いだろうか。

誰にも渡さぬと、あの娘の七つの祝いを謳ってしまえば　逝

ってしまえば良いのだろうか。

お前と共に。　あの娘と共に。

ずっと、ずっと。　永久と共に。

ならば私よ　あの娘の七つのお祝いに、不滅の愛を謳ってし

まえ。

然すれば、七つ還る時には、美しき花が咲くだろう。

私を魅力するおまえ色の薄い紅が、桜となって咲き誇るのだ。

その体、髪に始まり心に終わる愛し魂ですら 誰にも渡さぬと。

土埃が舞い上がる。

それが、一瞬の間だけ私の視界を薄い霧もやで塞いだ。同時に、ヒュン と風を切る音。

それは、私の顔面へと迫る、握り拳程の大きさをした石だった。

これは 布石ふせきだろうか。

上半身を反らし、顔へと迫る石を躲かわす。

すると、その一連の動作が一つの隙を生み出した。

石を躲す為にと上半身を反らした結果、死角となった場所から影が迫る。

成る程 これが、布石を投じた目的だろうか。

悪くはない。

教えを実直に、だが馬鹿正直には行わない。

これは、戦闘者には正しい姿勢と考え方だと言える。

だが、褒めるばかりではなく、残念な事も一つある。

それは 先の一手が、次に続かない事だ。

先とした一つの動作が、一つの結果を生む。油断に始まり慢心に

終わるそれは、戦いの場に巣くう姿なき魔物。

それを時には逆手に取り、自分の策と転じる事。

つまり、戦いに身を置く限り一とは単独に止める物ではなく、群とし一連の動作にすべき部分である。

また、それが私の称える戦法とよと言う物の基本だ。

「クツ　　まだまだ私は、この程度でやられはせんよ」

言いながら、私は干将・莫夜を大袈裟に振るい、迫り来る彼女を牽制する。

口元には笑みを浮かべ、次がなければ先の布石に意味は無しと、死角からの追撃を待ち構えた。

すると同時に、ヒュン　　と再び風を切る音が耳を衝く。

それが背後から迫るのを感じ取り、私は体を反転させながらも、跳ぶように後方へと地を蹴った。

その先には、突然の行動に目を見開く彼女が居た　　。

### ハガクシ 花隠し

白く埋もれた景色　　季節外れの雪化粧が、花の蕾を隠す様を

説いた言葉。

### 肉体と言う器に潜ませた真意

目には決して見えぬ悪意と善意。その二つの心をも降り積もる雪が白で隠してしまうなら、薄紅色に染まった桜の木の下を覗く事は、とても恐ろしい　　。

「まあまあ　悪くはなかったと言えば、納得してくれるかね？」

彼女を見下ろし、私は言った。

「う　　ひっく。ず、ずるいよ」

私に馬乗りされ、身動きの取れない彼女は、泣きべそを掻いた。  
癖のある緑色をした長い髪は泥に塗れ、くしゃくしゃと地面に広がっている。

そして、すんすんと鼻を齧る音。

年頃の娘　　いや、少女が地に組み伏せられ瞳に涙を溜める姿は、私の精神に多大なるダメージを与えた。

「ぐっ　　ず、ずるいと言われてもだな」

「ずるいよお父さん。また、私を騙したもん」

「む、待て幽香。さすがに、騙したと言われては心外だぞ」

「ひっく　　」

幽香は鼻を齧り、怨めしそうな目で私を見上げる。

「お父さん。騙したもん　　私、油断したと思ったもん。お父さんに、騙されたもん」

舌の足りない幼子のように言って、幽香は瞳を潤ませた。



「こらこら、だから待て。取り敢えずは、待つんだ幽香」

待った　　と、私は今にも泣きだしそんな幽香に手の平を向けた。

「全く、私は別に騙していないと言うのに、人聞きの悪い事を言わないでくれ。それに、良いかね幽香。先ず最初に言っておくが、騙すも何もこれは戦いだ。騙す騙されたより、油断した君が悪いんだぞ」

先人達は良く、「油断大敵」なる言葉を使った。

それは　　油断は失敗を招く元であるから、何よりも恐ろしい敵である事　　最早、この言葉が意味する物は諺ことわざとして使うだけに限らず、何事に対しても意味を持った格言だと言える。

「ううう。お父さん。最近、私に冷たいよ　　ねえ、何で。何でなの？」

「まさか、いつ私が君に冷たくしたのだね？」

「冷たいよ。だって　　もうずっと一緒に寝てないもん。それに、お風呂だって、私が大きくなってから別々だもん」

そう言っつて、幽香は身動きの取れない現状で、じたばたと手足をばた付かせる。

「やれやれ。そうきたか」

体は十分に成長しているだけに、少し呆れてしまう。

「なあ幽香、何度も言ったが、君はもう子供じゃないんだ。最低限、自分の身の回りの事は自分でやってくれないか？」

幼い子供をあやすような優しい口調で、私は言って聞かせる。そもそも、年頃の娘と同じ布団で寝るのは、私の常識から言わせるとよろしくない。

これは、風呂に関しても同じ事。

常識的に考えれば、極めて当たり前の事だ。

しかし、幽香の言い分と私の常識はともかくとして、今の状態で暴れられたら非常に迷惑だな。

「い、嫌だもん　私は、まだお父さんと一緒に寝たい。お風呂だつて、一緒に入りたい」

「いや、嫌と言われてもだな　」

嬉しい事なのか、または悲しい事なのか、親離れはまだまだ遠い様子。

仕方ないか。

「ふむ、ではこうしよう。次からの模擬戦で、君が私から一本取るようになったら、一回だけ一緒に寝てやろうか」

「それ、本当だよな。それ、嘘じゃないよね　？」

ピタリと動きを止めて、幽香はまじまじと私を見上げた。

「ああ、本当だとも。だから、次からは普段より頑張ってくれ」

「 うん。私、頑張るッ!! 」

元気良く返事をして、幽香は笑顔を浮かべた。

「 あっ じゃあ、ついでにお風呂も一緒に入る 」

「 ふむ これは、君にはとても残念なお知らせだが、聞いてくれ。今の君と一緒に風呂 絶対にダメだ。常識的に、あつてはいけない。申し訳ないが、諦めてくれ 」

いったい何がついでなのだろうか、深い溜め息が出た。

あの頃と比べて、体は確かに大きく そして、女らしくなっていた。だが、中身だけは、あの頃と未だ変わらないまま。

やはり、親離れはまだまだ遠そうだと、つくづく思った 。

時は流れた 。

私はこの世界に降り立ち、紫と出会 そして、幽香と出会った。

僅かばかりに触れた人類の歴史と、身を以って経験した妖怪の歴史。

私があつた 幻想の郷で過ごしている間に、人の世では蘇我が物部を滅ぼし、推古天皇が即位していた。

そして、初の女帝推古天皇が即位すると同時に現れたのが、厩戸皇子 彼の聖徳太子だ。

彼は蘇我への牽制と共に豪族の再構成を計り、天皇の権威を高める為の政策を行った。

例えば、「憲法十七条」が有名だろうか。

- 一・和を尊ぶこと。
- 二・仏教を敬うこと。
- 三・天皇に服従すること。
- 四・礼法を基本とすること。
- 五・訴訟は公平に裁くこと。
- 六・勸善懲悪を徹底すること。
- 七・自分の職務を守ること。
- 八・早く主仕し遅く退出すること。
- 九・信を義の根本とすること。
- 十・怒りは捨てること。
- 十一・官人の功績と過失により賞罰を行うこと。
- 十二・国司・国造は百姓から不当に税を取らないこと。
- 十三・管吏は自分の職務を熟知すること。
- 十四・他人に嫉妬しないこと。
- 十五・私心を取り去ること。
- 十六・民を使う時は時節を考えること。
- 十七・物事は独断で行わず、議論すること。

これらの十七条は、「和」と言う日本特有の精神が元となり制定されたと謂われている。また、聖徳太子はこの定めによって、天皇が主君である事をはつきりとさせ、天皇に従う役人の心得を示したともされる。

そして、その前年に制定されたのが「冠位十二階の制」だ。

冠位十二階の制とは、黒で始まり白・黄・赤・青・紫へと昇進する過程に、二つずつ冠位を区切った物だ。

そもそもは、官職世襲の欠点を改めさせ、氏や姓の家柄だけに囚われず、才能や功労のある有力な人材を役人に登用出来るようにと、「和」の精神を重んじる聖徳太子によって定められのが、この「冠位十二階の制」と言われる制定だそうだ。

これにより推古朝には今までとは全く異なつた法が生まれ、個人が昇進可能な体制が出来上がったと謂れている。

あれから、ずいぶんと時が流れた。

年数にして、五百と数十年もの年月。記憶として思い返せば一瞬のそれは、一瞬の花火のような、儂くも短い時間。

しかし、歴史と言う形を持った、確かな世の歩みだ。

目まぐるしくも、時は移り変わる。

飛鳥の人間社会では、仏教興隆の詔。天皇のお言葉によって、仏教が政策の軸となつた。

しかし、当時はまだ仏教に対する理解が乏しく、呪術の一つとして認識されていた。だが、寺などの建築物が次々と建てられ、その内部に置かれた様々な仏像や工芸品にを目にし、それらの美しさに圧倒されたそうだ。

この時、人々は初めて仏に対する畏怖の念を感じたのだろう。

それからも、時は巡り巡る。

推古天皇が次期天皇を明確に示さずに亡くなつた事で、聖徳太子の子孫は蘇我の陰謀により滅ぶ。だが、後に乙巳の変と呼ばれる事件が勃発し、それによって大化改心となり、古代最大の内乱と謂れる壬申の乱が起きた。

そして、かつての姓は八色の姓として再構成される。考え方によつては、これによって二世エリートの優遇が確立され、今の律令国家「日本」が誕生したのかも知れない。

歴史　それらを実際に己の肌で味わう事。書物や映像などと言つ擬似ではなく、時の流れと共に体感する事。

それら全てを言葉で表現するなど、到底が不可能な話し。簡略的に述べれば、ただ　　只々（ただただ）、何かを見せ付けられた。

人間とは全く異なつた立場、全く違う尺度で目にした全てが、何かを訴えていた。

巡り巡る時の中で、「ナニカ」を生み出そうとしていた　　。

「君がこんな時間に顔を出すのは、珍しいではないか」

我が家の戸を開いた先には　　畳の上に正座をし、音を発せず湯呑みを啜る紫が居た。

真つ直ぐと伸ばされた背筋と、薄く細められた両の脛には気品があつた。

そして、長い金の髪を畳に流し、紫色のドレスを着た佇まいは、まさに和洋折衷と言える。

そう　　紫色のドレスを纏い、洋を香せる八雲紫と言つ女性の姿は、畳を敷いた和室に居ながらにして、まるで一枚の絵画のようだった。

本当に、綺麗になった。

鼻<sup>ひしき</sup>屑なく。また、偽もりなく。心の底からそう思った。

容姿だけではなく、雰囲気も落ち着きを持っている。あの頃とは  
違い　　そう、垢抜けしたのだろうか。

それが良いのかは分からない。

また、悪いのかも分からない。  
ただ　　。

「ええ、今日は用事がありました」

湯呑みを置き、紫は微笑む。それが、私の思考を遮った。

「君が、私に用事か　　」

珍しい事もあるものだ、少し可笑しく思えた。

だが、これと言って何が笑えたと言う訳ではない。

ただ、可笑しく思えたのだ　　。

「そうなのよ。今日は、貴方にお願ひがありますの　　　そんな理  
由では、駄目かしら？」

「いやいや、何も駄目ではないさ。ただ、少しばかり珍しいと思っ  
てな」

「あら、何も珍しい事ではないですわ。だって私、悩み事は全て貴  
方に打ち明けていますから　　ですから、今さら何を言っても珍  
しくないですわ」

ええ、何もね　と、紫は繰り返す。  
澄まし顔。気取った声。その二つから考えるに、半分はからかいのつもりだろう。

しかし、ただのからかいと取れるその言葉は、少しだけ寂しげに聞こえた。

理由は自<sup>おの</sup>ずと分かる。

それは、彼女と私の間に存在する　大きな壁だ。

昔は　。

二人を遮る壁など、私達の間には存在しなかった。

今は　。

あの時からだろうか。私達の間、互いの踏み込めない壁境界線のような物が生まれたのは。

近付きたいと思う　。

あの頃のように、隔<sup>へだ</sup>たりを持たない関係に戻りたいと思う。

だが、彼女は私に壁を作った。そして、私はそれを越える事が出来ずにいる。

未だ、私には　。

この娘を受け止めてやるだけの、「ナニカ」が足りていない。それが　きつと、私達二人を別<sup>わか</sup>つ壁なのだろう。

「　エミヤ」

再び、思考は遮られた。

「ああ、すまないな。少し、考え事をしていたようだ　それで、君の言うお願いとは何だね」

「それ、貴方の悪い癖よ」



いい加減、直し方が良くてよ、と紫は噛んで含めるように言った。そして、ゆっくりと腰を上げた。

「それじゃあ、本題に入りましょうかしら」  
瞳を閉じて、紫は告げる。

「エミヤ 貴方には、私の友人を助けて欲しいの」

「君の友人を か。それはまた、どうして私なのだ」

「どうしてって、だって貴方 人間が好きでしょ？」

だから貴方をお願いしたのよ、と紫は言う。

質問の意図は分からない。だが、その表情は悲しげで、何処か寂しげだと感じられた。

きっと、思い出すのだろう。かつての友人 自分を置いて死んだ、雲雀うんすけの事を、思い出したのだろう。

互いに唾つばみ合い、そこから始まった関係だった。だから、二人は何度もぶつかり合いながら、親交を築き上げた。

喧嘩を繰り返し、掛け替えのない友へと到ったのだ。だから、今も そして、これから先も忘れる事はないのだろう。

「だから、八雲紫はこれから先も 唯一、雲雀が遺した、「博」の血を守り続けるのだろうか。」

「人間が好き、か では紫、君はどうなんだ。君は、人間が好きか？」

「人間は 嫌いよ。短命で、力も弱いです。何より、私欲に

生きますから」

「考えるそぶりもせず、紫は応えた。

「そうか　　なら、それもまた考え方だ」

否定も肯定も、私には出来ない。なら、何も言わない方が賢いだろう。

自分の答えすら得ていない私が、感情に任せて物を言っても仕方がない。

それを見付けてから　　得てからでないと、本当に伝えなければならぬ部分や意味が、きつと汚れる。

「それで、私はどうしたら良いのだね」

「明日の朝、現地付近まで送って差し上げますわ。それから多分、貴方が“探している娘も”、そこに　　」

居るかも知れないわね　　と紫は続ける。

意地の悪い言い方だ。私を釣っているのだろうか、あ敢えて足されたかのような言い草だ。

「ふむ　　ああ、承知した。明日の朝、君が来るのを待っている」

元より、私に断るつもりはなかった。だが、探し物が見つかるかも知れないのならば、よけいに飲まぬ訳がなかった。

いや、そうではない。

出来るだけ早く、関係を修復させたい。

探し物を求め里を出た私には、帰れない理由がある。里に暮らす紫と、共に居れない理由がある。

だから、出来るだけ早く 探し物を見付けたい。

また、傍に居てやりたい。

いや、傍に居たい。

「じゃあね、エミヤ」

思考が遮られるのは、これで三度目。

ハツとなり、別れの言葉に応えようとするが もう、そこに

紫の姿はない。

ほんと、貴方のそれは悪い癖よ。

既に、この部屋から姿を消した紫に、そう言われた気がした。

「ふう ああ、すまない。こんな父で、本当に申し訳ない」

もう居ない紫に向けて、私は謝罪をした。

「どうしたの、お父さん」

「ああ、幽香か」

声に振り返り、どうもしないさ、と私は幽香に応えた。

「風呂を出たばかりか なら、ちょうど良い。久しぶりに、髪を梳かしてやるう」

言って私は、片方の手で自らの膝上を指差す。

そして、もう片方の手で、髪を濡らした幽香においてと手招きを

した。

「え　　い、良いの？」

「ああ、これは私の気まぐれだからな。君が良ければ、悪くなどはないさ　　まあ、だからこそ君が嫌じゃなければ、なのだがね」

久しぶりに　　。

娘の髪に触れてみたいと、そう思ったただけだ。

幽香の髪に　　。

そして、また紫の髪に触れてみたいと　　ふと思っただけ。ただ、それだけ　　。

「え、えへへ　　じゃあ、久しぶりに、お願いするね」

照れ臭そうに笑い、幽香は私に背中を預けた。

「こちらこそ、久しぶり勤めさせただけさ」

髪を梳かしながら、明日の事を話そう。

明日の事を話しながら、髪を梳かそう。

再び、金の髪に触れる時を思いながら、明日の為にこの娘を愛す。怠慢が過ぎ、慢心していたのだ。だから私は、紫に距離を置かれてしまったのだろう。

きつと、今の私には　　大切な“ナニカ”が欠落している　　。

朝も早々に、私は紫の開けた道の前に立つ。宙に口を開けたそれは、空間をびりびりと引き裂いたかのような亀裂。そこから覗かせる底の見えない暗闇は、いつ見ても不気味だ。

犬猿の仲、か。

すぐ後ろでは、幽香が不機嫌な表情を作り、鋭い目付きで紫を睨んでいた。

そして、紫は紫で幽香の視線を何処吹く風と、涼しい顔でいなしていた。

この関係は、いつの頃から、こうなってしまったのだろうか。

「それじゃあ、エミヤ。私が向こうまで繋げてあげたから、精々（せいぜい）頑張ってちょうだいね」

「クッ　君からお願いをしてきたと言うのに、ずいぶん言い種ではないか」

「仕方ないじゃない」

言って　ふふふ、と紫は楽しそうに微笑んだ。

「きつと、素直じゃないのよ。貴方も　そして、私もね。だから、無事に帰ってきたら　また話しをしましょう。お互いに、腹を割って、話し合いましょう」

言いながら、紫は満足げに笑みを深めた。

微笑む。微笑み。微笑んだ。どの表現が正しいのだろうかは、私には良く分からない。

ただ、紫は確かに笑みを浮かべた。それだけが、とても嬉しかった。

「ああ、承知した。また、帰ってから話そう。これは、大事な約束だ。お互い、この約束を違えないように気を付けようではないか」

紫にそう応え、私は入り口へと歩みを進める。

途中、少しだけ立ち止まって振り返る。後に立つ幽香に、軽く手を振る為。

特別、交わす言葉などには必要ない。これで何度目になるのか、二百年も前から繰り返してきた事だ。今さら言葉などは不要だろうし、言わずも分かっていている事ばかりだろう。

だから、私が手を振れば、幽香は笑顔で返してくれる。

早く帰れば喜び。

遅く帰れば怒る。

それを忘れぬように、頭の隅にでも入れておけば、特に問題は無い。

行ってくる、と私は口にはせず胸の内で告げ、体を向き直す。

最初の妖怪は人を呪う。

何故なら、彼女は奪われたからだ。大切な稚児を、人間に奪われたからだ。

なら、探さなければなるまい。

知って知らぬ振りが出来たのなら、何とも気楽だったろうに思う。だが、知ってしまったては、後の祭りだった。

私は人が好きだ　。

かつて、八雲祭と言う女性が魅せた輝きが、今も胸に住み着いている。

最初は妖怪を嫌っていた、雲雀博と言う女性が導き出した答えが、今の幻想郷には残されている。

だから、私は人間が好きだ　。  
そして、妖怪も好きだ　。

そう。

私に取るべき道は、一つしかなかった。  
たった一つだけ、私に残された道　。

それが　。

/ 因子　　其<sup>そ</sup>れ、一つ暴き

其れ　　四つ。

幼き時分　　父、出家の際に娘を拒絶する。

四つの時分、衣を掴み泣き絶る我が身、縁から蹴落とされ背を向けられる。この時、佐藤が末子は、眼を泣き腫らす。

其れ　「七」つ。

父、娘と再会　　我が娘の七つの祝いを謳にしする。

その身が生を受けてから「七」つ年月が経ち、今に時は落ち着き佇む。ならば我が娘よ　願わくば、今より更に「七」つの年月が巡った時分に、薄紅に染まる桜の下で再び会わん事を。

死霊は何も語らない。ただ、黙する“モノ”だ。

ただ、黙って少女を見るだけ。受け入れられる時を、黙って待つだけ。

怯えた目で見られようと、震えた声で拒絶されようと、彼らには何ら関係がない。何故なら、既に感情が失われているから。

死した今も現世に漂う彼らは、生のある人とは違い、自我もなければ肉体もない。最早、唯一と残され気持ち、怨みを糧にした器なき魂。

それ故、彼らは死霊　　または怨霊と呼ばれるのだ。

そして、死霊たる彼らは只々（ただただ）、少女から語り掛けられる時を静かに待っている。

七つの時から、十三を迎えた今日まで、ずっと　　ずっと、彼らは少女を見ている　　見続けている。

何故なら死霊達は、少女の持つ異能の力に引かれ、その存在が霞み、命じられる事でしか、意味を持ってなくなってしまうから



。

「今日は　　もう、来ないのかな」

薄く雪が積もった丘に立ち、少女は白い花隠しを眺めた。

遙か頭上では日が傾きを見せ、僅かな茜色が白に薄い膜を作る。

嗚呼、刻限が近いのか　　。

そろそろ、屋敷に戻らなくてはならないと、少女はゆつくりと歩き出す。

さくり　　さくり　　と、薄く積もった雪を踏み締めながら歩む。だが、僅かに重く少し気落ちしたその足取りは、少女が胸に抱く少々の心残りから反映していた。

それは　　待ち人の存在だった。  
別に、毎日会う約束はしてはいない。だが、最近では毎日のように会っていたからか、今日のような会えない日がくると、偉く寂しく思える　　。

私は、どうしようもなく我が儘だ。

少女は歩みを止め、頭を擡げた。

花、数える。芸、嗜なめる。そのどちらも、自分の性には合わないだ。

いや　　だからと言って、嫌いな訳ではない。ただ、合わないのだ。求めていないのだ。

思い返してもみれば、屋敷に籠り華道や和歌を嗜む事など望んではいなかった。

幼少から今に到るまで、少女が本当にやりたかった事、また欲しかった物。それは　　共に笑い合える誰かと、日々を謳歌する事

だった。

例え誰かに、それでは刺激が足りない、生まれも育ちも放棄するよ様な生き様は陳腐ちんぷだと言われようと、少女は何一つ構わないと思っっている。

歌も、華も、家柄も　少女にとって、何一つとして特別ではない。

そう、少女にとって、芸とは嗜み。己を救い、昇華させる為の要素でしかない。

だから、いつか出逢うだろう大切な誰かと笑い合う為に使えば、それだけで良い。その他には、目立った理由など要らないのだ、と未だ出逢わぬ誰か　そして、未だ来ぬ待ち人の事を思い浮かべた。

他人からすれば、馬鹿馬鹿しくも当然の願望だろう。けれど、少女には求めて止まない究極の余生　これ、まさに生涯の華と呼べる理想の生き方だった。

そう言えば、あれは幾いくつの頃だったか　。

紀伊国きのくにはこの時期になると冷えるから、人肌が恋しくもなるのも仕方がない　などと、戯たわむれ染しみた考えを持った事もある。

あれは今より二年前か、または三年前の時分だったのか、当時の己が何を思っていたのかなど、今や自分自身ですら良く分からないいや、むしろ疑問としか思えない。

今になって思い返せば、改めて思う事がある。つくづく、気付かされた事がある。

だから、疑問を抱かずにはいけない。

やはり、あれは違う　“違う”のだと、実感をもする。

だから、これはきつと、戯れじゃない。これはそう　言わば確信なのだと、少女は唇の端を噛んだ。

私はきつと、寒さを訴えているのだ。その、紛れもない確信。そ

して、歎きなのだと、少女は自らの胸を強く押さえた。

抑が話し、戯れなど抱くはずがないのだ。

何故なら “あの日” からずっと、私は温もりを欲しているから。

「ねえ、妖怪さん」

少女は憂いを帯びた瞳で、白の花隠しで塗り潰された野を眺めた。そして 白の景色に問い掛ける。

「次は いえ。また、明日には会えるでしょう か」

それは、ただの独り言。

だったが、その言葉を途切らせ、少女は歩みを止める。そして、恐る恐る振り返った。

それは、言葉を詠む最中、背後から “ばさり”、と微かな物音が聞こえたからだった。

「誰 ですか？」

手の平で着物の袖を強く握り締め、少女はゆっくりと振り返る。

「すまない。脅かすつもりはなかったのだがな」

そこに居たのは、浅黒い肌に白い髪。そして 何処までも紅い形をした、一人の男だった。

バツの悪そうな表情で、少女と対する見知らぬ男。その身に、慣れぬ紅い羽織り いや、羽織りにしては大分丈の長い外套を纏った、白髪で背の高い男が立って居た。

「貴方様は、どなたですか　？」

複雑そうな表情をした男に、少女は落ち着いた口調で問い掛ける。しかし、その口調とは裏腹に、少女の表情は硬く　とてもぎこちない。

不意に背後から現れた男の存在を、無意識のうちに警戒しているのだろうか。

いや　警戒しているのだろう。この場合、それが普通だと言える。

「ああ、そうだったな。大変失礼した」

ゆっくりと、小さく一歩だけ少女へと歩み寄り、男は言う。

「それでは、先に名乗らせてもらう。私の名は、“エミヤ”」

ただのしがない旅の者だと思ってくれ、と苦笑して言った。

「エミヤ　様？」

「む　出来れば、様を付けるのは止してくれ」

自らの名前に様付けされるのが嫌なのか、ただ畏まられるのが苦手なのか、またはそれらの対応に不慣れなのか、眉を寄せて複雑そうな顔をした。

「いえ、初対面ですので」

会ったばかりの殿方にそのような無礼な行いは出来ませぬ、と言

つて少女は首を横に振るう。

「そうか」

ならば仕方がないと、男　　自らをエミヤと名乗った者は、改めて苦笑した。

「ああ　それから、先程は突然の事で、大変驚かせてしまったようだ。改めて、すまないと謝罪をさせてもらう」

申し訳なかった、と言ってエミヤは少女へと頭を下げる。

その、謝罪の言葉と深く下げられたエミヤの頭に、少女は目を見開き時を止めた。

警戒心の表れだったのだろう先程までは硬かった少女の表情は、今や僅かに解かれていた。

また、憂うれいを帯びていた瞳も大きく見開かれ、今では　ただ、キョトンとした表情を浮かべていた。

運命とは、時にほんの些ちひ細な要因で捻れる“モノ”だ　　。

これはいつだったか、誰かが告げた言葉だった。

起こるべきして起こるモノ。起こるはずもなく、起こらぬモノ。

起こらぬはずが、起きてしまったモノ。

それらは、実に様々なモノである。

だが　そんなモノがいつ生じるかなど、彼らには分かるはずもない。

それ故、少女は不思議そうに、頭を下げるエミヤの姿をただ見つめていた　　。

この出逢いが、己の運命を捻曲げる事など、知るよしもな

く。

黒が支配する。

白が介入する。

景色は一瞬で切り替わり、視界には白がその姿を現した。

森。

目を開けると、そこは花を隠すかのように白く染まった、森の中  
だった。

少し 肌寒く感じた。

僅かに肌を刺す外気が、私に寒さを教える。

南方に住居を構えて居たからか、気温の違いが良く分かる。ここ  
は、私が住んで居た場所よりも幾分か冷え込んでいるようだ。

しかし、極端な冷え込みと言う訳でもない。肌寒い程度。

だが、もう暦は卯月を終える頃だと言うのに、ここには未だ雪が  
積もっていた。

花隠し 季節外れの雪や霰が降るとすれば、今の時期は何処  
だろうか。

ただ、暦が卯月の今ではこの景色を花隠しと呼ぶのには、北国で  
はまだ早い時期だろう。なので、少なくとも関東よりは下った地域  
で 多分、山に面した土地の高い場所だろう。

それに。

ここには、僅かに“花の匂”いがする。だから、この場所にはもう花が咲いている。

きつと　　今も、白に埋もれながら咲いている。

それが故に、花隠しとなる。

これは、私の知る遙か先の時代として考えた場合、何もおかしくはない話だろう。

しかし、今はまだ平安時代。四季の回りが現代とは異なり

いや、違う。そもそも、暦の読み方が一つではない。なら、もっと簡単に、もっと単純に考えるべきだろう。

例えば　　ここは関東地方から下り、さらには中部地方からも下った場所。多分、近畿かそこいら辺だろうか。

そして、ここが盆地　　或いは海沿いともすれば、この肌寒さにも納得が出来る。

「まあ、何処でも構わんのだがな」

苦笑をこぼし、私は一面に敷き詰められた白を踏み締めながら、歩き出す。

一步、一步と足を運ぶ度に、ガリ、ガリ　　と歪な音が鳴る。

二・三日前から積もっていたのだろうか、表面から底の方までもがしっかりと凍っていた。

ここは森の中だ　　日中の間ですら日が当たらなかったのだろう。

だから雪は溶けず、今も白く存在する。

しかし、ここが本当に近畿なら、現在地は和歌山か京都のどちらかだろうか。

次期や土地から考え、気象・気候と言った大気の状態から推測すると、必然的にそうなる。

つとは言え、確証は何処にもなくただの当て推し量なのだが。そもそも、私は気象予報士ではない。だから、分かる訳がないのだ。

ただ、経験と勘からして今の時期ならば、と最もそうな場所に山をはっただけ。

それに、成るように成るだろう。深く考える必要はない。

「しかし、彼女はずいぶん中途半端な場所に送ってくれたものだ」

碌ろくに説明もされていないのに、安易に頷いたのが悔やまれる。

やはり、満足のいく説明は必要だった。それを聞いた上で、紫のお願いを聞き入れるべきであった。

しかし、“探し物が見付かるかも”と仄ほのめかす言葉に釣られ、安請け合いをしたのは私自身。

今さら文句を言っても後の祭り。しょうがない。

「やれやれ。まいった」

ああ、実にまいった。

やはり、これは自業自得になるのだろうか　いや、なるのだらう。

勿論、認めたくはない。

認めたくはないが　やはり、この場合はつくづく自業自得と、そうなるのだらう。

嫌だが、そうなる他にはないのだらう。

悲しい限りだが、そうとしか言いようがない。また、否定のしようもない。

ここは一つ、当たるも八卦当たらぬも八卦、と考えるてみるか。犬に例えるのは些ちか癪やくなのだが、歩けば何かしらの棒に当たるだらう。



それに、この場所でじっとしていても、何一つとして進展しないだろう。

取り敢えずは、この森を抜ける事を第一に、今後の方針はそれからでも構わない。

歩き出して数分。

鬱蒼と茂った木々の隙間から、僅かな日の光が見えた。

どうやら、開けた場所があるようだ。若しくは、森の出口かそのどちらか。

しかし、もう夕暮れ時なのだろうか、その光は少し赤みがかっていた。確か朝に出発したはずなのだがと、妙な気分になる。

まさか、紫が何かしたのだろうか。そうだとしたら、何とも地味な嫌がらせだ。

誰か、この先に居るのだろうか？

差し込む光に誘われ、そこに近付くと、微かな気配を感じ取った。存在が薄く、何処か曖昧な、とても弱々しい気配。

これは、人間の気配なのだろうか？

妖怪にしては、濁りや混じりがない。だが、人間にしてはあまりにも希薄だ。

そう、「ナニカ」が足りていない。人を人として構成する要素が乏しい。

故に、「希薄」さの目立つ気配だ。

何故だろうか、とても嫌な気分になる。

知りもしない いや、知るはずもない気配だ。

なのに　　なのに何故、こども嫌な気分になるのだろう。何故、こども苛立ちを覚えるのだろう。

分からない。何も分からない。そもそも、分かるはずがない。知らないのだから、分かりようがない。

なのに　　嫌だ。嫌で嫌で、嫌で仕方がない。

頭が痛くて、胸が苦しくて仕方がない。

理解の出来ない、理由のない苛立ちを　　行き場のない怒りを覚えてしまつ。

自分を許せなくなる　　。

自分を呪いたくなる　　。

自分を殺したくなる　　。

花隠しのように、純白無垢に覆われた表面ばかりを見ていたのか。蕾のまま、汚れてなどいない　　と勝手に決め付け、満足でもしていたのだろうか。

純白の下に隠された花びらが散る事に、どうして気付けなかった。どうして　　どうして、冷たい雪の底から掘り返し、薄紅色をした花が咲くように温めてやれなかった。

彼は私　　。

それ以上もなく、以下もない。

だが、彼であって私ではない。

そんな事は、ちゃんと分かっている。

私は彼　　。

それ以外になく、違いもない。

だが、私であって彼ではない。

そんな事は、言われずとも知っている。

それは　　所詮しよせんが、他人の生み出した最善の結果。

かつて存在したのだろう、可能性の一つにしか過ぎないモノだ。

だから、私はなくしていたのだ。

大切な、日常のカケラを、気付かぬうちになくしていた　　。

故に　　“憎い”。どうしようもなく憎くて、どうしようもなく苦しい。

なのに、何故だろうか。とても悔しくて、不思議と懐かしいと感じる。

誰かが私の思い出の中で、夏に揺らめく淡い陽炎かげろうのように、ゆらゆらと頼りなく揺れている。

これは、何だ　　？

これは　　そう、いつもの偏頭痛だ。

憎らしくも往々（おうおう）しい、いつもの“バグ”だ。

「チツ　　相変わらず、唐突に襲ってくれる」

いつの間にか、私は体を木に凭もたれ掛けていた。

どうやら、知らず知らずのうちに、意識を失っていたようだ。

実に危うい　　。

我ながら、何とも危うい精神だ。

しかし、これは今に始まった事ではない。遥か昔から続く最早、持病と呼んでも意味に差し支える事はないだろう。

勿論、認めたくはない。だが、ここまで長い付き合いとなると、

今や病のような物だと言える。

だと言つのに、前進もなければ後退もなく、ここまで進展がないとは　　偉ぶつた言い方だが、まことに遺憾いかんな限りだ。

ミシリ　　と、体を預けていた木が、鈍い音を立てて軋きしむ。

無意識のうちに、木の幹を強く握つていたようだ。

強引に、木の表面を引きちぎるかのように。または、力任せに樹皮ゆひを剝むしり取るかのように　　。

私は、いったい何を苛立っているのか　　。

なあ、何が許せない　　それは自分なのか、または誰かなのか。

なあ、何がここまで、私を苛立たせる。それは後悔か　　また  
は未練や無念だろうか。

いったい、何が私の中に　　。

その時　　。

“ばさり”と音が鳴り、一羽の鳥が羽ばたいた。

私の頭上で、空に向かい飛び立った　　。

「考え過ぎるのは、悪い癖だな　　全く、君の言う事はいつも正  
しい」

それは、今より昔　　互いの関係に隔へだたりを築くより少し前に、  
紫から良く言われた台詞だった。

悩み、考えに没頭ぼつとうするがあまり、些細な事で足元を掬すくわれる  
これは、私の悪い癖だ。

だから、簡単に立ち止まってはいけない。

立ち止まるのなら、目を凝こらさなくてはいけない。

見失わぬように　　また、手放さぬように。

悩みながらも、足掻あがきき続けなくてはいけない　　。

「ここが何処だか、聞かなくてはな」

気配の下へと、一步　足を踏み出す。

すると、一瞬にして視界は開けた。

そこは、一面を雪で隠され、白に覆われた丘。僅かな緑をも霞かすませる、白い景色が広がっていた。

しかし　そこには、小さな花が咲いていた。

白く、花隠しによって化粧をされた丘には一輪の花が　。

私に背中を向けて立つ、一人の少女が　景色の一部に溶け込むかのように、儂はかなげに咲いていた。

「誰ですか　？」

私に気付いたのだろう。少女はゆっくりと振り替える。

そして、私を見据え、落ち着いた声色で問い掛けてきた。

「すまない。脅かすつもりはなかったのだが　」

応えながらも、私は目の前に立つ少女に付いて考えた。

怯えているのだろうか、一連の動作にぎこちない物が感じられた。だからか、少し悪い気がした。

少女は多分　いや、多分ではない。きっと、怯えているのだろう。

年の頃は幾つだろうか、見て感じ取った印象からすれば、十五か十六ぐらいだろうか。

雰囲気や物腰からは、品格や落ち着きが感じられる。きっと、育ちも良いのだろう。

それに、綺麗な声だった　。  
弱々しく、力のない声。だが、美しく透き通っていた。儂くも小

さなくせに、確かに響き渡る声だった。

「貴方様は、どなたですか？」

少女の声。

露骨ヌグツさはないが、何処かぎこちない。

やはり、警戒しているのだろう。

「ああ、そうだったな。大変失礼した」

ゆっくりと、小さく一歩だけ少女へと歩み寄り、私は応える。

「それでは、先に名乗らせてもらう。私の名は、“エミヤ”」

ただのしがない旅の者だと思ってくれ、と付け足しては苦笑した。

「エミヤ　様？」

小首を傾げ、少女は言った。

「む　出来れば、様を付けるのは止してくれ」

「いえ、初対面ですので」

即答。

会ったばかりの殿方にそのような無礼な行いは出来ませぬ、と言って少女は首を横に振るった。

「そうか」

自分の名前に様を付けられるのは、いつ以来になるか　正直、私は畏まられるのが苦手だった。なので、そう呼ばせ続けた相手は、誰一人として居ない。あるとすれば、初対面の時ぐらいだろう。なので、出来れば止めて欲しいと思った。だが、現状は互いに初対面と言える。それ故、少女の言い分が正しく、礼を弁えれば当然の対応だろう。

なら仕方がないか　と私は苦笑した。

長い付き合いになるのならともかく、この場限りの付き合いに求める物でない。

出会いと別れが一期一会なら、名乗り親しみも一期一会へと。

「ああ　それから、先程は突然の事で、大変驚かせてしまったようだ。改めて、すまないと謝罪をさせてもらう」

謝罪と共に、私は深く頭を下げた。

誰に非があったと言う訳ではない。だが、少女を驚かせたのは私以外に居ない。

そもそも話をすれば、先客は少女なのだ。なら、後から来た者として、先客である少女に気を使うのもまた礼儀。

「どうかしたのかね」

頭を上げて少女を見遣れば　少女は目を見開き、私を不思議そうに眺めていた。

いったい、どうしたのだろう。私は何か、失言でも吐いてしまったのだろうか。

もし、そうだとしたら、無礼に無礼を重ねてしまった事になる。それは、まことに遺憾だと言える。

「いえ、何も御座おんざいませんので　お気にはなさらず」

大変お恥ずかしいところを、と言いたげに少女は俯き、頬を僅かに赤らめた。

何とも綺麗だ　。

私には少女の姿がとても綺麗だと、春に咲く桜のようだと思えた。理由は何であれ、薄紅に染まる頬は桜色　ならば、薄紅色に染まった頬のように咲き誇るのが桜。

これは　さすがに、誇張こぶかしが過ぎるのだろうか。

ああ　きっと、これは誇張こぶかしが過ぎたのかも知れない。

しかし、顔を俯かせ恥じらう少女の姿を綺麗だと思ったのは、ごまかしようのない事実。

何と例えれば、分かりやすいのだろうか。まるで、新しく芽吹いたばかりの若い新芽のようで、長く時を掛けて見守りたくなる美しさだと私は思ったのだ。

多分、これは親心に近い物なのかも知れない。

きっと、私はこの少女とあの二人の背格好が近いからと、無意識のうちに重ね合わせてしまったのだろうか。

だとすれば、何とも愚おろかかだ　。

「エミヤ様。どうかなさいましたか　？」

少女の声に、私は自分が考えに没頭していた事に気付いた。

「いや、何でもない。君は気にしないでくれ」

突然黙り込んで申し訳ない、と私は少女に苦笑して言った。

恥ずかしい限りだ。先程までのやり取りとは、完全に逆転してし



まった。

やはり、これは私の悪い癖だ。早急に直さねば。

「いけない 私、名乗るのを忘れておりました」

唐突に 大変な失礼をば致しました、と少女は謝罪の言葉を告げると共に、頭を深く下げた。

やはり、最初のやり取りとは、見事に逆転してしまったようだ。

「そう言えば、君の名前を聞いてなかったな。大変な失礼をした。私が聞き返すのを忘れていた」

「いえ、私がお答えするのが礼儀でした。申し訳ありません」

申し訳ないと、少女は再び頭を下げた。

しかし、先に名乗ったのが私ならば、私から名を問い返すのもまた礼儀だと言える。本来、会話のやり取りとは、そう言った配慮の上に行う物だ。

そう考えてみれば、どうやら私の方が先に礼を怠<sup>たが</sup>ってしまったようにも思える。

実際、先客である少女に気を使わせてしまったのだ。後から来た者が気を使うと考えるのなら、私が名を尋ねるのが正解だろう。

ただ。

「しかし このような場所で、知り合ったばかりの男に名を明かすのは、些か無用心と言えよう。名乗ってもらえるのなら嬉しいが、無理強いはしない。だから、気にする事は何も無い」

そう、無理強いするのは気が引ける。

先程、一期一会と言ったように、この場限りの付き合いだろうと相

手。

この場に居た事にせよ、私が知らないだけで、少女には何かしらの事情があるかも知れない。

勿論、それが何かは分からない。だが、もしかしたらと考えるとやはり気が引ける物だ。

そもそも、少女は人間。そして、私は妖怪だ。

この場限りの付き合いだろうとは思うが、互いの種族の違いを思えば、安易な深入りをするのは危険だろう。

「いえ、こうして出逢ったのも何かの縁。大層な名では御座いませんが、耳に留めていただければ幸いです」

私の考えとは裏腹に、少女は名を聞いて欲しいと微笑む。

「しかし、私のような者が聞いても、良いのかね」

「構いません。先程述べたように、これも何かの縁でしょう。なら

」

悪いようにはなりません、と言いながら少女は空を見上げ。

「私は “幽々子” と申します。訳あって姓は名乗れませんが、

どうかこの名をエミヤ様の耳に残していただければ」

儂げに微笑んだ。

因子は花隠しへ 吉（後書き）

携帯替えて色々な問題が出てる今現在、色々と試行錯誤中

。

次話、来週には更新予定。

因子は花隠しへ 式の上(前書き)

ちよつと、三連休明けから入院などをしておりまして、先日によつとの事退院致しました。

なので取り敢えずと、入院するまでに書いておいた部分を更新します。

中途半端ですが、あまり気にしないでください。

つまりはまあアレでして、トラックに負けて左手がポッキリ逝つるので、リハビリが終わるまでお待ちください。

とゆうか、一月以上前に書いた書きかけを今更書き足すのはなかなか難しいのであります、誠に勝手ながらご理解を戴ければ幸いです。

因子は花隠しへ 式の上

幽々子ゆゆこ、か。

失礼かも知れないが、とても変わった名前だと思った。

また、名付けた経験のある者として言わせてもらうと、意味の読めない不思議な名だとも思えた。

だが、悪い名ではないのだろう。いや、悪いはずがない。

他人からは容易に意味が読み取れないのは、それだけこの“幽々子”と言う名に深い情愛が込められているからだろうと、そう考え受け取る事も出来る。

つまり、他者には到底が計り知る事の出来ぬ親の情がこの名なのだろう。

そう言う風に考えてしまえば、不思議と違和感などは感じなくいや、これは違うのだろうな。

これにはきつと、不思議さや違和感など、何処にもないのだろう。仮に、何かあるうとしたところで、そんな物は関係ないのだろう。

親が子を想い授けた名なら、風変わりだろうが物珍しかろうが、真の意味を前にしては些細な物だ。

古来より子は授かり物と言うぐらいなのだから、当然と言えば当然の事。

なら、この“幽々子”と言う名には言葉にしきれぬ程の情が、子を持った親がその胸に抱き続けるだろう万感の想いが、この名には託されているはず。

だから、似合っていてとても良い名だと言えるだろうし か

つて、私が風見幽香かみゆうかと言う名を授けたように、陰かげになり日向ひなたになりその者を支えてくれるようにと　　そう、望まれたのだろう。一人の名付け親として、私は強く思う。そう言った清い願いが、強く込められていれば嬉しい。

いや　　そうであつて欲しい。

むしろ、そうであれ　　。

「ああ、承知した。君が言うように、これも何かの縁だろう。その名、確かに私が預いたからせて戴ただくとする」

「ありがとうございます」

微笑み、少女　　幽々子は頭を下げた。

やはり育ちが良いのだろうか、とても礼儀正しい娘だと感心する。だが、こう何度も頭を下げられては、感心とは逆に肩が凝こる。それだけは困り物だな、と私は胸のうちで呟いた。

「しかし、感銘かんめいを抱くとはこの事だろうか。君のような若い娘に、人の情と言う物を教わった気がする。やはり、年をただ重ねれば良いと言う訳ではないのだな　　」

何を今更いまさらな事を、と思いつつも、私は噛み締めるように頷いた。

「今日はとても勉強になった。ありがとうございます　　幽々子殿」

幽々子“殿”。

私には使い慣れない呼び方　　いや、初めて使ったと言う方が正しく、使おうと思つた事自体が初めてだ。

それも、初対面の人間を呼ぶにはこれがちょうど良いだろう、と

考えたからだった。

しかし、正直なところを言えば、私には似合わない呼び方だと思える。

何故なら、実際に“幽々子殿”と口にした瞬間、むず痒さとも悪寒とも良く似た違和感を覚えたからだ。

つまり、似合わない物は似合わないのだからと　やはり、そうなるのだろう。

「いえ　身分も明かさずに、このような小娘が口にした身勝手極まりない我が儘をお聞き入れ戴き、エミヤ様には何と感謝をすればよろしいのか」

「何、感謝など必要ないさ。私はただ、君の礼に最低限の礼で応えたまでだ。それに、自分を明かしてないのはお互い様。だから、そこまで大袈裟に受け取る程ではない」

「しかし」

言いかけては止め、幽々子は言葉を切る。  
そして、改めて口を開く。

「重ね重ねお心遣いを戴き、私としましては感謝に堪えません。ですが、このままでは堂々巡りと言う物です。なのでどうか、我が身の一礼にて」

平に御勘弁を、とでも言いたげな物言いで幽々子はお辞儀した。

この娘、確かに礼儀正しい。

だが　やはり、大袈裟だと言える。

ただ畏まるだけでなく、ここまで執拗に感謝をされても、反応に困るのだ。

「やれやれ。何と言えば良いのかな　何故、君はそこまでして頭を下げる。私と君は、言ってしまったえばその場限りの関係だ。例えこの先、何処か往來おうらいの場で会ったとしても、道ですれ違い会釈えしゃくをする程度が妥当たとうだと思うが」

「その場限り、ですか　ええ、そうですね。まさしく、その通りです。ですがこれは　」

私には少し違つのですよ　と幽々子は微笑んだ。

「エミヤ様がおっしゃる通り、確かに　確かに、私達は行きずりの関係で御座います。しかしながら、これは私と貴方様に与えられた、確かな出逢い。そして、出逢いとは天が与えたもうた巡り合わせだと思っております。ですから、些細な触れ合いにも確かな情を持って接したいのです。これ　人情と読み。なくしとうない馴れ合いと、私は思います」

それ故　“ありがとう”の言葉は尽きる事を知らない、と幽々子は微笑みながら言う。

人の持つ情か　確かに、それは忘れたくない物だ。  
今や人ではない私なのだが、その考え方には共感を覚えずにはいられない。

これは、かつては人であったとか今は妖怪だとかそう言ったどちらか一方に偏かたよった物を元にした考え方ではなくて、今この世界で生きる私自身として思う事だった。

「そうか　そこまでの気持ちとあらば、受け取らないのが失礼だろう」



「いえ、くだらぬ意地を張ったままでの話しです。こちらこそ、無礼を致しました」

言つて、幽々子は頭を下げた。

「待て待て、無礼など感じていないさ。だから、気にしないでくれ。止してくれ、と幽々子へと手の平を向け私は首を横に振る。

深々と頭を下げられるのは、今日一日だけで何度目になるのかいい加減、勘弁して欲しい。

「いけませんね。これも、くだらぬ意地でした」

言いながら、幽々子は自らの手の平で己の頬を撫でた。つまりは、癖とか性分（しやうぶん）の類いだと言いたいのだろうか、その表情は少し苦笑気味に思えた。

「して、付かぬ事をお聞きしますが、エミヤ様は 何故この場に？」

「ん、何故かね？」

何故、か そう言えば、すっかり忘れていた。

あまりにも自然に会話をしていたからだろうか、私は幽々子に近付いた目的を完全に忘れていたようだ。

何故、こんなにも重要な事を忘れてしまったのか、自分でも疑問だ。

まさか、純粋な人間と久しぶりに言葉を交わしたからと、いつの間にか浮かれていたのだろうか。

もしそうだとすれば、これは甚だ遺憾な事だ。

「ふむ、その疑問に答える前に幽々子殿よ。話しは少し変わるが、構わないだろうか」

「私は構いませぬが、何か込み入った訳が」

「いや、そうではないのだがな」

勘違いされては困るので、私は先に否定をする。

複雑な事情は確かにあるが、今は単に聞きづらいただけ。

ただ単に、下手な勘繰りをされたくないだけなのだ。

勿論、この少女が邪推をするとは思えない。

ただ、タイミングを逃しただけに、今更になって聞く事に少しだけ気が引ける。

しかし、だからと言って何も聞かぬと言う訳にもいかない。

何故なら、今聞かなければ後に自分が困るのは明白だからだ。

それに、これはいずれ誰かに聞く事になるのだろう内容だ。

それなら今聞くに越した事はなければ、今聞かないければ無駄な手間となる。

あまり気は進まないが、もっと早くから聞かなかった自分が悪いので、これはもう大失態ならぬ大うっかりである、と諦めた方が幾分か利口だろう。

なら、また同じ轍を踏まぬようと、今後の教訓にするのが賢くも正しい。

「君は、こんな事を聞かれても困るのと思うが、気にせず聞いてくれたら嬉しい」

自分自身、何を阿呆な事かと思いつつも、私は率直に聞く事に

した。

「付かぬ事をお訊ねするが、ここは いったい何処だろうか」

「え、と。何処だろうか とは、どう言つた意味で？」

「いや、そのままの意味なんだ。出来れば、あまり深く考えないでくれると嬉しい」

尚且つ、即答してくれたら非常に嬉しい、と私は思っていたりする。

ただ、あまりにも想像した通りの微妙な反応に、何とも言えない申し訳なさを覚えた。

因みに、私に残された唯一の救いは、未だ変な目で見られていない事だと言える。

つとは言え、こんな事は敢えて言うまでもないだろう。

だが、とても皮肉な事に、そのお陰でよけいに気まずいと感じる。

「そのままの意味、ですか」

きよとん、と幽々子は小首を傾げた。

そして、言葉の意味を考えているのだろうか、僅か数秒ばかりの沈黙をした後、それは と口を開いた。

「とどのつまり、エミヤ様は 今、自分の居る場所が何処なのか知りたい、とそう言う訳なのですか？」

「まあ、そうなるな」

「は、はあ それはそれは、左様で御座いますか」

成る程そうですね、と幽々子は呟く。

そして、再び考え込むように首を傾げ、両の目を細めた。

やはり、まずかったのかも知れない。

いや　やはり何もなく、明らかに駄目な質問だったと思える。

先ず、あのような出会い方をした上“ここは何処”では、相手側からしたら私は不審者極まりない。

普通ならおかしいと思い、最低限の警戒をするだろう。

そもそも、良く良く考えれば、私の身なりからおかしいのだ。このような、紅い外套にボディーアーマーを着た、白髪に浅黒い肌をした男　この時代の人間達からすれば、これまさに摩訶不思議なる格好だ。

はつきり言つて、奇天烈にも程が過ぎている。

少し前の自分に、どうして今になるまで気付かなかったのだ、と物申したいぐらいだ。

だが、これも偏に、私自身がずいぶんと長い年月を、人の目を避けて暮らしていたが為だろう。

思い返せば、それはほんの僅か　直接顔を見合せて言葉を交わした人は、今までにたったの五人しか居ない。

それも、自分を人と偽って会った訳ではなく、最初から“人に在らざる者”として知り合った。

なので、今回のような形の出会い方は初めてとなる。

その為か、私は　意図せず、ただ楽観的になつてたのかも知れない。

しかし、そう考えてみると、この少女は実にあつさりとしていた。何がどうと具体的には言えないが、例えば私の格好に違和感はないのだろうか、などの疑問を抱かずにはいられない。

まさかとは思うが、今の時代では奇抜以外には言い様のないこの

格好を、見馴れているのだろうか。  
それともこの娘子は。

「ここは 紀伊国きいのかくにです」

先日と同様、私の思考は少女の声によって遮さえぎられた。

「む あ、ああ。そうか、ここは紀伊国か」

相手の返答を待たずに、質問した本人が一人考え込んでいたと思わせては失礼なので、出来るだけ違和感のないように、と私は素早く頷いて応える。

それも、要らぬ気遣いをさせては、あまりにも申し訳がないから。

「態々（わざわざ）、教えてくれてありがとう。そして、突拍子とつぱしもない事を聞いてすまない。何も聞かなぬ心使い、改めて感謝する」

「いえ、何故は問いませぬ。お互い、行きずりの間柄あいだがら 深く立ち入るのは無礼と言う物です」

それもまた礼なのです、と幽々子は首を横に振るう。

本来なら無用心とも言えるそれが、今の私の立場からすればありがたい限りだと思える。

まあ、そのお陰で到らなさが目立つのだが、それは自分が悪いのだから仕方がない。

しかし。

自分はずくづく学習をしないな、と頭を抱えなくなった。  
つい先日、これは私の悪い癖だと紫に言われている。

それに、自分でもそうだと納得していたはずだ  
だと言つのに、早速のこれ 残念な話したが、欠片程の進歩  
もない。

つとは言え、紛いなりにも癖と言つぐらいなのだから、そう簡単  
に直るとは思っていない。

それに、簡単に直るようなら、誰もが苦労などしないだろう。

だから、今回は仕方がないと言える。

また、次の教訓にすべきだとも思える。

しかしながら、それを別に置いた個人的な部分が、気を付けると  
思つた矢先にこれではな、と少しの呆れを訴えている。

「どうかなされましたか、エミヤ様。先程から心ここにあらずと言  
つたご様子ですが、何か」

お悩み事でもおありでしょうか、と言って幽々子は私の顔を見上  
げた。

これは 私の気のせいだろうか。私を窺うようにして見上  
げられた幽々子の視線には、何処かこちらを探るような気配が感じ  
られる。

何かと混じっているような、絡まっているような色。

まるで、私の中の何かを見透かそうとするが如く、真つ直ぐな瞳  
は 黒く、深くも黒くありながら、僅かに濁っていた。そし

て、その瞳が今まさに映している物は、正面に立つ私の姿。

幽々子の瞳に映った自分と 黒く滲んだ景色。

その奥深くからは、底知れない何かが感じられた。

例えて言つなら、それは“魂の色”。

または、存在の“モチーフ”。

それが、深くも暗い背景の奥から、闇を纏った誰かがこちらを見  
ているような得体の知れない。

「エミヤ様　　？」

三度、幽々子の声が私の思考を遮った。

「ああ。いや、どうもしないさ　　」

気にしないでくれ、と不思議そうな顔でこちら見上げる幽々子に、私は苦笑をして言った。

きっと、先程までの薄気味悪い感覚は、私の気のせいだろう。

でなければ、いつもの決まり切った病気が何かだ。

現に今、私を見上げた幽々子の瞳に濁りはなく、とても澄んでい

る。それは　　純粋な人間の目だ。

そこには濁りなど欠片も存在せず、綺麗な黒真珠のような、そんな色をしている。

もしかしたら、口では何も聞かないと言ってはいるが、本心では怪しいと疑わしく思っているのかも知れない。

例え本人にそのつもりがなくとも、人である以上は好奇心なり何なりを持つ物だ。

つまり、その意図を無意識のうちに滲ませてしまった瞳に見つめられて、勘違いでもしたのである。

そもそもは、私が明白に怪しいのだから、例えそのような目で見られたとしても文句は言えない。

それに　　本来なら怪しまれるのが普通だろうから、直接聞かれないだけましなのだろう。

「強いて言うのなら、今晩は何処で宿を取ろうかと、個人的な事を

少し考えたぐらいだよ」

「そう、ですか。なら、良いのですが」

「気を使わせてしまい、申し訳ない。どうやら私には、何か一つを  
考え込むとすぐ周りが見えなくなる、困った癖があるようだ」

気を付けるようにしているのだが、これがなかなか上手くいかな  
いようだ、と私は苦笑した。

すると、幽々子は柔和にゅうわに微笑む。

「それは 誰しもが少なからずと、似たような性分を持ってい  
ると思いますから、私は気にしておりません。ですからエミヤ様も、  
どうかお気にはせず」

言いながら、幽々子は空を見上げた。

「ああ 気づけば早い物でして、空も陰ってまいりました。そ  
ろそろ、宵の口から夜へと変わりましょう」

「言われてみれば、もうそんな時間か」

幽々子に習い私も空を見上げる。

すると、いつの間にか日は完全に山並みの向こうへと沈み、空は  
薄暗く夕闇を帯びていた。

朝方に出発したはずが気付けばもう夜がやってくるのか、と少し  
ばかり時間の経過を速く感じる。

もしかしたら紫が何かしたのか、単純に時間が速く過ぎたのか

そのぐらいの事など、別にどちらであろうとも構わないが、不  
思議と僅かな引っ掛かりを覚えた。



それにしても、まさかここが“紀伊国”とはな。

「紀伊国」または「紀州」きしゅう かつて日本の地方行政区分だった令制国の一つで、南海道に位置する場所。

私の知る未来では、和歌山県と三重県の南部の一带に当たる地域。そして、げんこん 現今にて作成されたえんぎしき 延喜式での格は上国、また近国と謂いわれる。

それ元々は「木国」きのくに と呼ばれていたが、それを雅字（良い文字の意）二字で表す為、「きのくに」を紀伊国と表記するようになった。これが後に「きのくに」へと読み方を変えたとされる。

そして、「木国」の由来だが、そもそもは風土 雨が多く森林が生い茂っている様相から「木国」と命名された、と言う説がある。

しかし、これには当たり前のように異説いせいが存在するところが、歴史の面白くも困った面だろうか。

故に、どれが正しいなどとは言えず いや、どの歴史にも不明瞭な点があるように、当時の人間にしか分からない事ばかりだろう。

例えばその異説などがそうで、かつて“紀氏”きし と言う古代の有力豪族が支配していた地域であるから「紀の国」と言うようになった、と言う由来としては最もな物だ。

これ実際には、律令政以前の紀伊国は紀伊国造きいこくぞうの領土（和歌山県）のみで、熊野国造くまのこくぞうと言った和歌山県南部から三重南県部の領土を含まなかったと記されている。

つまり、もつとも同土 噛み合わないこれら二つに正解・不正解を付けたところで、結局が想像の域を出ずに終わるのだ。

こうして、歴史達は後世こうせいに様々な説を生み出し、謂れと共に大きな謎を残すのだが、それも結局は“その時代を生きた者達にしか分からないのだから仕方がない”とも言える。

このように何百、何千と長く世に語り継がれる事で、段々と面白可笑しく脚色をされながら、歴史の隙間に埋もれてしまったのだらう。

今になって思えば、再生された時にもっと世界を見て回れば良かった、と悔しく思う。

そうしていれば、この国の歴史を直に目にし、憶測に終わっていた全ての真実を知る事が出来たはずだ。

「やれやれ つくづく、知的欲求とはその時分を過ぎてから湧く物だ」

ああ 何と勿体ないのだろうか。

これはまるで、若い頃に疎かにした勉強 その基礎や応用を、改めて学びたくなる気分。

あの時、“ああ”していれば。

あの時、“こう”していれば。

きっと、これはその類いに近いのだらう。

だからなのか、考えれば考える程、実に勿体なかったのだと思えた。

「また、何か考え事でしょうか」

「ああ。また、悪い癖が出てしまったようだ」

幽々子の言葉に、私は苦笑して応える。

正確には苦笑するしかなかったのだが、それは一先ず置いておこう。

「悪い癖、ですか。それでは、おいおい直さなくてはいけませんね」

くすり、と幽々子は小さくも上品に笑った。

そして、唐突に咳払いを一つした後、深々と頭を下げた。

「大変お寂しゅう御座いますが、そろそろ刻限を迎えます。なので、唐突になりますが私は」

「分かっている。このような場所に、年頃の娘がいつまでも居る物ではない。それに、これから次第に冷え込むだろうから、風邪も引いてしまう。ああ　　そもそも、君一人で夜道に行くのは危ない」

「いえ、お気遣いは大変嬉しゅう御座いますが、半ば道楽と思いなから日課のようにこの場を訪れております。そうともなれば、最早通い慣れた散歩道のような物です」

因子は花隠しへ 弐の上(後書き)

皆も事故には気を付けようね。

因子は花隠しへ 弐の下(ぶっちゃけ前話の付け足し)(前書き)

事情により前回分の話しが中途半端だったので、今更ながら補足します。

……あ、お久しぶりです。

因子は花隠しへ 弐の下(ぶっちゃんけ前話の付け足し)

無理やら 　　または意地やらを通すと言う程ではないのだが、私は人間の少女を夜道の中に一人にすると言う事に不安を覚えた。だから私は元々の目的を含ませぬよう、然り気無く最もらしい理由を付けて幽々子に言った。

「これも何かの縁と言うのなら、この森を抜けるまで 　　ああ、念には念を押して民家が見えるまで、私が付き添っても？」

何に対し念を押すのかは不明だが、出来る限りの情報を得るが為にもと口にしたこの口実 　　なのだが、その実は心配が半分と、それイコール当初の目的も半分と化していた。

しかし 。

「いえ、失礼ながらそのお気持ちだけで」

私が口にした提案に幽々子は、ふるふると申し訳なさそうに頭を下げ断りを入れた。

「む、そうか。なら、無理強いをしても悪いな」

その様が私には半なかば拒絶をしているように見えてしまって、ただただ頷いて返したのだった。

これが私と彼女 　　幽々子との出会。

そして、私がこの世界の私として一つの岐路に立った瞬間だった。

良い者に出逢えた。

ざくり、ざくり、と幽々子は薄く積もった雪の上に、その敷き詰  
められた白の上に小さな歩幅で確かな足跡を残しながら、何処か微  
笑むように目を細めた。

笑顔はやはり良い物だ。

笑顔はやはり美しい物だ。

会釈のついでであれど、誰かが微笑み掛けてくれるだけで、自然  
と頬が持ち上がり口元が緩む。

そうして意識せずとも、自然と微笑み返す事が出来る。

そう、笑顔は　。

「とても　　温かい物です」

ひゅーひゅー、と吹く冷めたい風は肌を刺していた。

履き物を通して伝わる雪の冷たさは、体の芯までも冷やしてい  
た。

けれど　　けれども心は、その身に宿した形なき部分だけは久  
方の熱に当てられていた。

“温かい”と、小さくも確かに歓喜していた。

“人”が幽々子に笑い掛ける事はなかった。

それには“命”があるから　人が人として生きているが故に、彼らは形ある“不幸”に笑みを向ける事はなかった。

その生まれを厭う者、その不吉を憎む者、それぞれがそれぞれの不幸に見舞われ、それぞれがそれぞれの胸に毒を孕んだ。

片や現世を永久にさ迷い続ける魂とされ、片や時が来るまで呪い続ける鬼と生きる。

どちらにも一片の救いはなく、その結果　人々はただただ幽々子を忌むのだ。

つ　　。

「　　幽々子様」

不意に、物思いに耽る幽々子へと声が掛けられた。

「貴女様はこのような場所で、いったい何をしていたらっしゃるのかな？」

それは凜とした女の声だった。

「ただの散歩で御座いますよ、桃花様」

大変お久しゅう御座います、と言って幽々子は声の主に一礼をして返す。

その表情はとても柔らかく、深い親しみが込められていた。

「散歩と申されますが、それも健康な体が在ってこそその娯楽。止めるなどと出過ぎた事は申しませぬが、時期を考えた方がよろしいか



「と思いますぞ？」

「大丈夫です、などは流石に申しませんが、こんな物が私にとっては唯一の趣味で御座います」

それにです　　と幽々子は一面の白を見渡しては続けた。

「こうして、私は四季を愛でる事が出来ます。そもそも、暑い寒い  
は陽気の都合。夏季に照らす焼けるような日差しも、雨期に降り頻  
る五月雨も、そしてこの場を白く染め上げているこの雪も、その全  
てが等しくも平等にして天の恵みなのですから　　それを愛でる  
事が出来ないと言うのは、何とも無粋で御座いましょう？」

それが粋であるのだ、と何処か得意気に幽々子は語った。

「そうは言われましても、女の体は冷やして良い物では御座いませ  
ん。何時の日にか稚児を身籠る身なのですから、時節柄ご自愛くだ  
されよ」

「お気遣いは大変嬉しいのですが、残念な事に私には良き相手が居  
りません。ですので、桃花様のおっしゃる“それ”は杞憂となりま  
しょう」

「む、何を申されますか。欠片も杞憂になどなりませんぞッ」

「それで御座いましょうか　　？」

語尾を強くさせ、何を馬鹿な事を、とでも言いたげな桃花の物言  
いに、幽々子は首を傾げた。

「もしやとは思いますが、貴女様はご自分の容姿を理解していらつしやらないのでは？」

「はて、容姿で御座いますか？」

さようです、と桃花は大きく頷いた。

対して幽々子は、容姿、容姿、容姿ですか、と二・三繰り返すように呟き。

「容姿　とは所詮が見て呉れで御座いましょう。己にせよ他人にせよ、その者が持つ真とは呼べません。情理を持たずしての花など美しく見せるだけに止まり、魅せる事は到底叶いません」

そもそも興味が御座いません、とばかりにはつきりと言い切った。そして、言い切ると同時に幽々子は何か理解の行き届かぬ物を思ひ出したのか、眉間に皺を寄せ深い溜め息を吐いた。

当たり前の事だが、幽々子は歴とした女だ。

例えその齡が如何に未だ少女と呼ぶべき年とは言え、十を過ぎ幾年も経っているだけに十分に年頃だと言える。

だから何なのだと言つ訳ではないのだが、同じ女として興味を持たなかつた訳ではない。

チラリと遠目に窺う程度ではあつたが、美しいと評判の娘達を目にした事が何度かあつた。

やれ　彼の娘は引く手数多だ。

やれ　彼の娘は花がある。

やれ　やれやれ、と首を振るいたくなるような美談の数々。

それらを耳にする度に、誤魔化し切れぬ虚像と本質を目にした。

そして、その都度、幽々子は思う。

「ねえ、桃花様。人々が呼ぶ“美”とはいったい、何なので御座い  
ましようか？」

はて、と桃花は首を傾げた。

幽々子の唐突な問い掛けに、面食らいまごついたようだった。

「美とは何とは、まさか“美麗”<sup>びれい</sup>の“美”でよろしいのですかな？」

「ええ、その“美”で御座います。して

美とは如何なる物でしょうか、と繰り返される幽々子の問  
い。

その問い掛けに対し桃花は、“美”で御座いますか、と呟いては  
首を捻りながらも暫く無言で考え込んだ後、一度だけ大きく頷いて  
答えた。

「はてさて、美とはいったい何か ですか。いやはや、幽々子  
様は難しい事をお聞きになりますな。これは何とお答えしようとも、  
決して貴女様の求める答えには到らないでしょう。なので、私には  
恥ずかしながら分かりませんと、そうお答え致します」

誠にお恥ずかしい限りですが、と言つて桃花は苦笑し

「まあ、そもそも私のような輩が美を語るのも可笑しな話でした  
な。ハハハッ、いやこれは失敬」

何が愉快なのだろうか、自らの頭をぺしぺしと叩きながらも笑っ  
た。

「いえ、そんな事は御座いません。だって、桃花様は　　大変お綺麗では御座いませんか」

「む　　そ、そうですね？」

「ええ、そうで御座いますよ。眉も綺麗に通って居られますし、両の眼にも強い意思を感じられます」

女性にしては精悍と呼べる顔付きをしているが、だからと言って男らしい訳ではなく、女性としての美しさと共に凛々しさを持っている。

「お髪も長くてお綺麗で御座いますし　　」

薄くも淡い紫の色をした髪は長く美しい。

腰まであるだろうその美しい髪は、首の後ろで一つに結び纏められている。

それが風に揺れる様は、きっと絵になるだろう。

「ま、ま、ま、待ってくださいね。わ、私は別に綺麗などでは  
ッ」

誉め殺すかのような幽々子の言葉に照れたのか、桃花は激しく狼<sup>ろた</sup>狽<sup>た</sup>えた。

その慌て様に幽々子はくすくすと笑い、更に言葉を続けた。

「桃花様　　もし、何処かに深く想うお方がいらっしやるのであれば、自身に自信をお持ちください。素直な想いを、嘘偽りのない気持ちを伝える事が出来れば、きつと添い遂げる事が叶いますよ」

言つて幽々子は、最も根拠は何処にも御座いませんが、と付け足した。

人で在ろうが無かるうが、美しい者は美しいのである。

人で在ろうが無かるうが、醜い者は醜いのである。

例外とは種族によつて生まれるのではなく、思考によつて生まれるのである。

だから幽々子はこうして、この場で目の前の存在を美しいと称する。

人に在らずとも、美しいと。。。

因子は花隠しへ 弐の下(ぶっちゃんけ前話の付け足し)(後書き)

取り敢えず、文章のレベルはこの程度で固定です。

背伸びしても、無い物を値だっても、文章は早々には上手くなりません。

文学者とは何とも偉大です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5780j/>

---

万剣の王 / 幻想の王

2011年5月6日11時51分発行